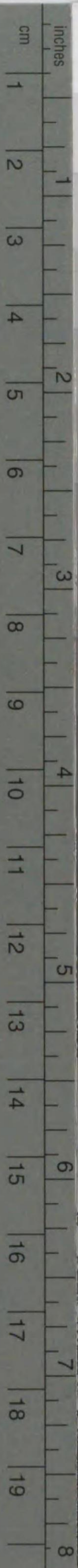


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]

563
81k

563-81イ
1200600033682

3.8.14

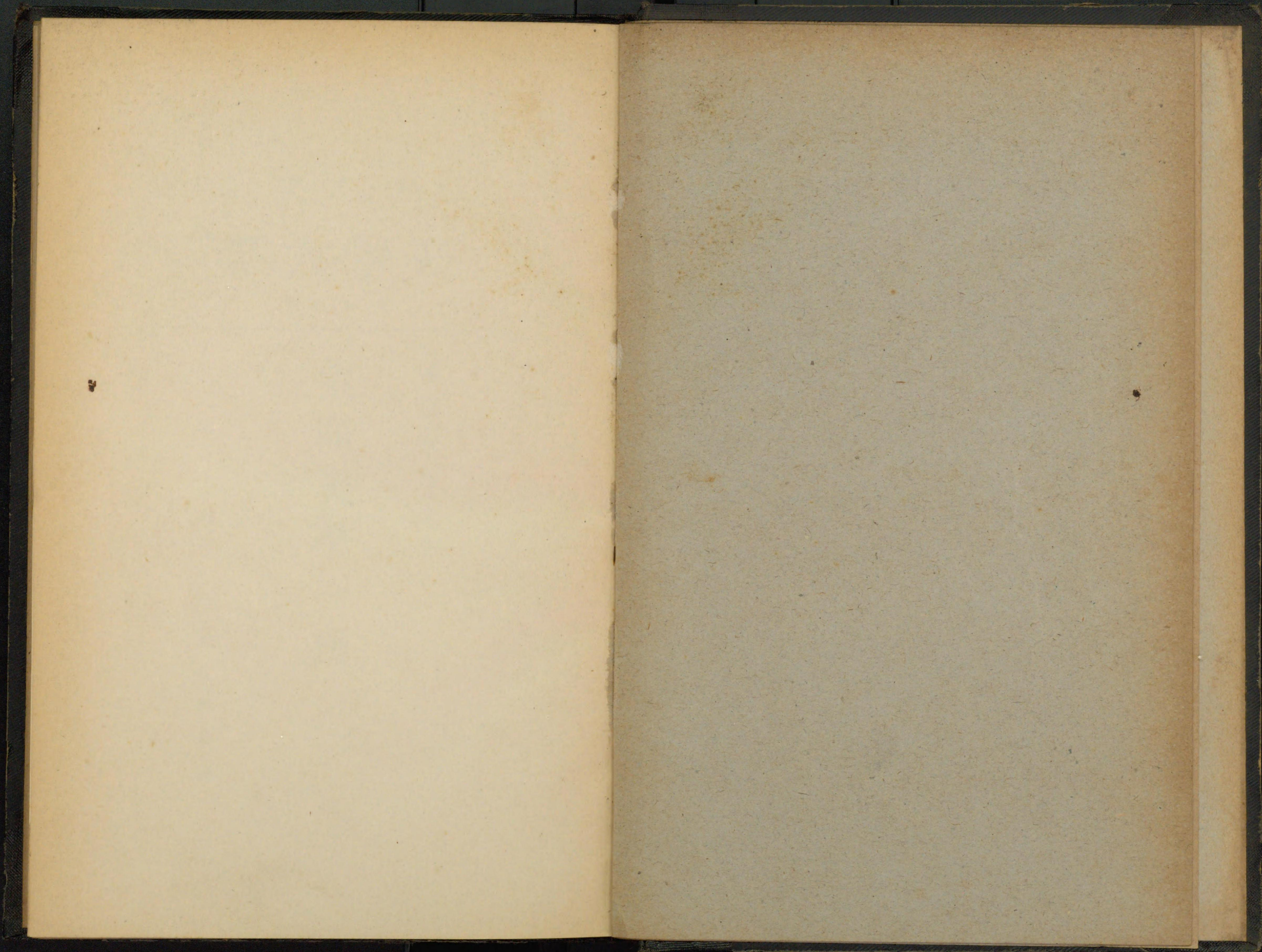
系大學美スプリ

册分九第

斑一學美間空

譯全松末垣稻

版藏館文同京東



スプリー
系大學美

冊分九第

稻垣末松全譯

空間美學一班

東京

株式會社

同文館藏版



563-8k

目次

第一章 一般の空間藝術の物體的の形……………一三三

- 一 その對象と出發點(一三三)
- 二 根本力と垂直の力(一四〇)
- 三 水平的の力、並に水平的の力と垂直的の力との交互的の働き(一四九)
- 四 曲線的側面(一五七)

第二章 波狀刳形の根本形……………一六〇

- 一 波狀刳形、正規波狀刳形、超正規波狀刳形、劣正規波狀刳形(一六〇)
- 二 正規波狀刳形、超正規波狀刳形、劣正規波狀刳形の以上より一步進みたる考案(一七〇)
- 三 正規波狀刳形、超正規波狀刳形、劣正規波狀刳形の利用法(一七九)
- 四 孤形波狀刳形、籃狀波狀刳形、膝狀波狀刳形(一八三)
- 五 正規の籃狀波狀刳形の細説(一九三)

第三章 自由直立形……………一九五

- 一 直線的減縮形と其の反對形(一九五)
- 二 彈力的の反動的狹縮と擴張との單一なる諸形(二〇〇)
- 三 彈力的の反動的狹縮及び擴張に對する特殊の注言(二〇九)
- 四 漸滅的の壓迫と漸滅的の閉込み(二二〇)
- 五 漸滅的の壓迫と漸滅的の閉込みを有する自由なる直立形(二三三)
- 六 下方の狹窄と擴張とに於ける漸滅的の壓迫と漸滅的の閉込み(二三〇)
- 七 自由直立形の利用法(二四〇)

第四章 波狀刳形の以上の外の變形……………二四三

目次

目次

一 狭窄された基底及び擴張された基底を有する波状刳形(二三三) 二 漸滅的壓迫及び漸滅的狹縮を有する波状刳形(二三〇) 三 右の特殊の、形「ドリツク」柱頭(二五〇) 四 漸滅的壓迫及び漸滅的狹縮を有する波状刳形に對する補説(二五七)

第五章 尖小形……………二六二

一 尖小形總説(二三三) 二 均齊的尖小形の變形(二三七) 三 不均齊的なる尖小形(二七二) 四 漸滅的閉込み及び漸滅的壓迫を有する尖小形(二七六) 五 尖小形の利用法(二八〇)

第六章 尖小形的の波状刳形と波状刳形的の尖小形……………二六三

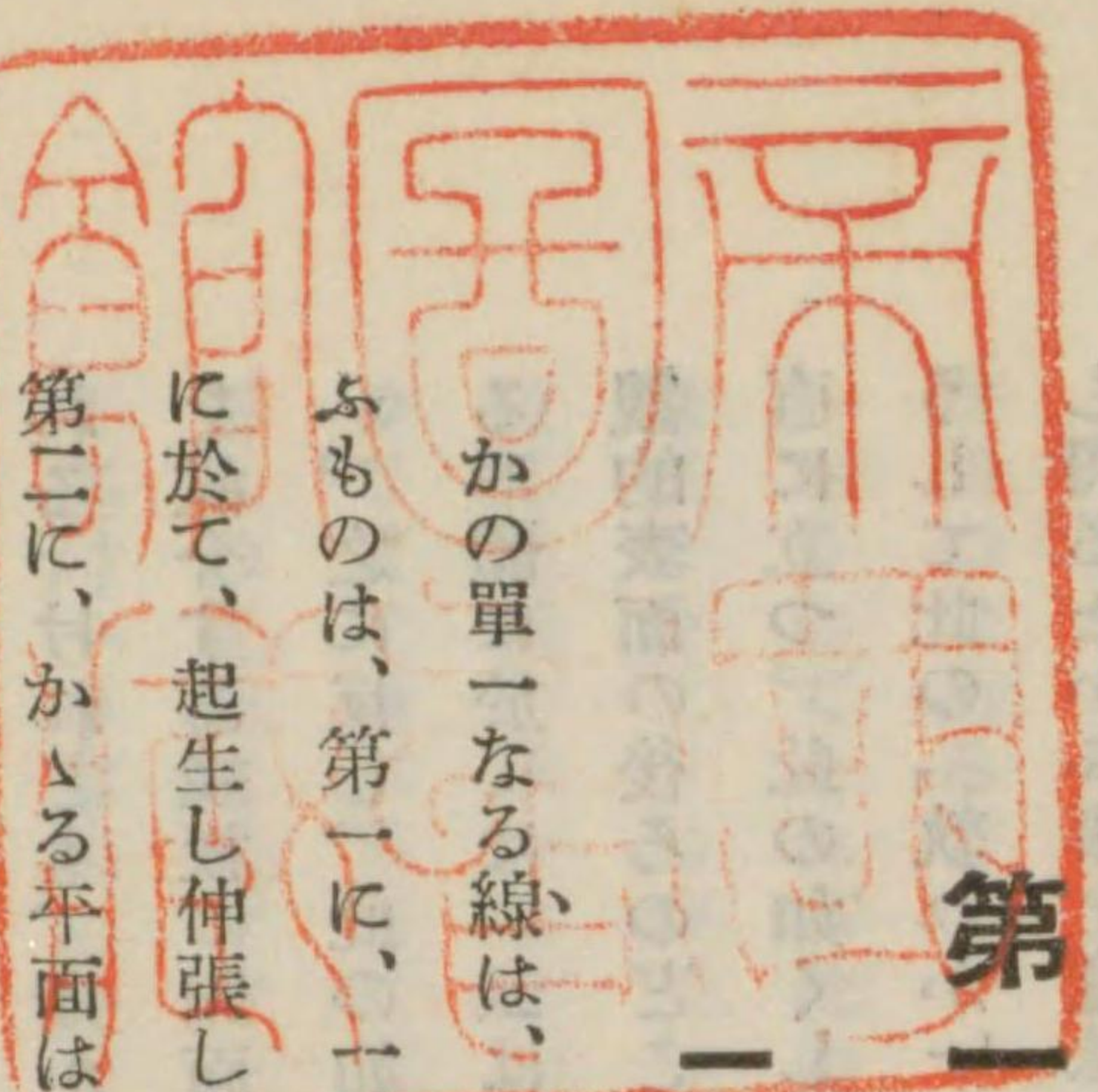
一 「結合された横面」に關する一般的説明(二六三) 移 尖小形的の波状刳形(二六七) 三 波状刳形的の尖小形(二七三) 四 「結合された横面線」の利用法、總括(二八〇)

第三篇 空間美學一斑

空間藝術の最も單一なる物體的の形、序説

第一章 一般の空間藝術の物體的の形

一 その對象と出發點



かの單一なる線は、一點から、而も唯一の發端方向に於て、起生し、伸張し、發展をなす。之に反し平面といふものは、第一に、一點から、半徑的に、隨つて無限に多くあつて、而も唯一の平面に迄附屬する所の發端方向に於て、起生し伸張し發展をなす。之は恰もかの圓といふ平面が、その中點から此の如く起生すると同様である。第二に、かゝる平面は 一の線から、唯一の發端方向に於て起生する。第三に、立體といふものは、均しく一點から半徑的に、されどあらゆる可能なる發端方向に於て起生し、伸張し、發展する。例へていふと、球が、その中點から半徑的に發生すると思念さるゝが如きである。或は又、之は一の直線軸から發生し、若くは一の平面から發生するが如きである。

茲では吾人は此中の立體に就いて語り、さうして之をばその側面に關して考察する。此の際、側面といふ語の

意義は前以て假定されてある。何人も、側面といふものが何であるかといふ事は、通常知得して居る。けれども吾人は、此の概念をば、二様の方法に於て定義する事が能きる。第一の場合には、純然たる外部的のもの、即ち幾何學的定義である。此の場合には、吾人は二つの可能を區別する。先第一に、かの圓い横斷面を有する一の容器の側面といふものは、その容器の軸を通して置かれたる平面が、容器の表面と交叉する所の線であると定義される。けれども、斯かる定義は、吾人にして、若しも一の壁の側面、又は、壁とその壁が立ち居る所の臺との間を媒介する縁板の側面を問題とするならば、維持されないやうになる。けだし壁及び縁板は、何等の軸を有しない。之に反し、此の如きもの、代りに、正しく一の平面が現出して居る。かくて右の容器の軸なるものは、かゝる形體に於ては、云はゞ平面に迄延長されて居る。此の種の平面は、壁に於ても縁板に於ても、壁又は縁板の可觀的表面の後ろのどこかに存し、さうして壁及び臺に迄並行して居る。随つて、壁及び臺の如く、床に對して垂直に立つ。此の如くして、吾人は右の如く、之は、壁又は縁板の可觀的表面の後ろの孰れかに存すると云ふ。さうして此の「孰れか」といふ語は、吾人が、吾人の思想に於て、茲にいふやうな平面をば、任意の深さに迄轉置し得るといふ事を意味する。そこで此の場合に於ては、「側面」といふものは、此の平面に迄垂直にして、而もかの床の上の壁及び臺がなすと同様に垂直に立つ所の平面と壁又は縁板の表面との交叉線となる。

之に反し、吾人にして、如何なる幾何學上の作圖によつて、側面といふものが右の如く「直觀的」に爲り得るかを問題としないで、かゝる「側面線」中に於て、何が吾人に「直觀的」になるかを問題とし、その側面線となつて居る所の形體の内部的本質に迄、之が如何に關係するかを問題とするならば、言明は異なつて來る。此の如

き問題に對しては、吾人は一の一般的の答を與へる事が能きる。さうして此の答は次の如くある。かゝる側面といふものは、直接に、形體の特異なる活躍性、その活躍性の發現の變化又は平等一樣、己れ自身から現出して己れ自身の中に復歸したり、又は或る内部的状态に於て存留したりする方法などを表現する所の線であると。そこで此の種の内部的活躍性は、前に區別した場合の甲に於ては、軸から發生し、乙の場合に於ては平面から發生する。されどその孰れの場合に於ても、之は同種類の内部的活躍性であり、さうして此の故に同一の法則の下に立つのである。

さうしてそれが此の如くあるといふ事は、側面線に於て直觀的になる所の内部的本質を目標とする所の吾人の考察に於て、かの二つの可能をば、唯一のものによつて代り得るやうにならしむる。吾人は此の如き變更をば、茲に考察を單一にする爲になす。そこで吾人は、之をば右兩者中の第一のものによつて代らしむる事にする。随つて又、軸が平面に迄延長して居る右の第二の場合に於ても、一の單一なる軸を假定し、云はゞ此の平面をば、吾人の思想に於て、一つの軸に迄收縮せしむる。之を他語を以て云ふと、吾人は唯、一つの軸から、凡ての方面に迄同一の方法に於て延長したり、集括したり、又一定の廣さに於て存留したりし居る所の形體、簡言すれば、その特異なる内部的活躍性を活動せしめて居る所の形體に關してのみ判然語り、さうしてかの軸が事實的に平面に迄延長して居る所の形體は、此の中に含蓄せしむる事にする。

かの軸なるものは一の線である。さうしてかゝる線に對し、吾人は吾人の思想に於て一の方向を與へねばならぬ。更に吾人は、之を觀照するに際しては、一の發端點といふものを要する。そこで吾人は、此の線をば、再び

考察を單一にする爲に、垂直と考へる。さうして之をば同時に、下から上に迄進み居ると思念する。之を他語を以て云ふと、吾人は、一の軸から總方面に均齊的に展開する所の形體が、一の水平の基底の上に立ち、若くは之から直立し居ると思念する。併しかく云へばとて、吾人は、此の種類の形體が、常に事實的に此の如き根本方向を有するといふ事を言明しない。寧ろかゝる根本方向は實際に於ては任意のものであり得る。されど之に連れて形體の内部的本質といふものは變化するに至らない。せいゝ吾人にして、若しも一の他の根本方向を假定するならば、之を叙述するに際し、他の名稱を用ふべき事になる。此の故に吾人は、茲では今いふやうな垂直といふ根本方向を假定せねばならぬ。

吾人は今、吾人の形體の活躍性といふものに就いて語つた。かゝる活躍性とは、形體を發生せしめ、それに形を與へ、特にその側面の形の存在を促すに至る所の活躍性である。但し此の如き發生を明示する爲には、吾人は一の根本形から出發せねばならぬ。そこで自然的なる根本形といふものは、圓形の基底の上に立つ所の直線の圓柱といふ形である。されどかゝる形、並に之から導出された形體をば、吾人は軸を通過する所の縦断面によつて代らする。さうして右に爲された假定からすると、形體が、軸から、總方面に均齊的に展開し居るからには、かゝる縦断面は、吾人に對し、全形體を代表するといふてよい。而も單一なる直線の圓柱の縦断面は、矩形として現出する。さうして之はその一邊の上に立つ所の矩形である。之は、之をより情密にいふと、吾人の考察の根柢に存する所のものである。

吾人が、直線圓柱、隨つて矩形から出發をする事により、一の自然的の出發點を選択するといふ事は、今事々しく説示する必要はない。けだし一切の空間的働作なるものは、何等かの空間的方向に於て起る。されど一切の空間的方向といふものは、三個の根本方向に迄歸着する。さうして吾人にして、立體をば、一の平面によつて置換ふるならば、此の三個の根本方向は、二個、即ち垂直と水平となる。凡ての他の方向といふものは、此等二つのものゝ結合と認むる事が能きる。而も此等二つの方向なるものは、矩形に於ては、直接且つ純粹に對立するさうして正しく此の如くある事により、矩形といふものは、吾人の空間的形體の考察の自然的出發點となるのである。

されど吾人は今、吾人が茲に語らうとする所の形體が、水平の基底の上に直立する。或は直立し居るものとして觀照するといふ事に留意して見よう。此の如き「直立」なるものは、美的觀照に對しては、垂直の方向に於ける發生、下から上に迄の創成、即ち運動する所の力に基く創成である。此の際、基底は出發點であり、形體の上部の終點は、かゝる發生或はかゝる運動の終點である。

ところが此の如き終點は、正しく發生或は運動の終點として、必然的に一の靜止の點である。之は、運動する所の力が、その中に於て靜止するに至る所の場所である。

假りに此の如き形體の上部の終點にして、かゝる自然の靜止狀態を表示しないとすれば、然る時には、形體中に於て實行せらるゝ所の運動といふものは、前進をせねばならぬ。即ち最後に、此の如き狀態に到達する迄前進をせねばならぬ。されど斯かる場合に於ては、かのやうな上部の終點は、その實終點ではない。かくて形體といふものは未だ完成されずにある。

但し斯く云へばとて、此のやうな静止状態は、形體の上部の終點に於て、各の見地から、此の如きものとして顯現せねばならぬといふ事は言明されない。此の如くある事の反對に、彼れが如き規則は、吾人が、形體をば、それ自身として觀照する限りに於て效力を有する。若しも形體にして、一のより大なる全體に迄附屬し居るとするならば、その場合には、その上部の状態は、此の如き全體に迄關して、或は全體の中に於ては、彼れが如き静止状態から任意の程度に隔り居るものとして、顯現する事が能きる。否若しも、かゝる全體中に於て運動が前進し居るならば、必然的に此の如くなるのである。

之を例へていふと、吾人は、今、立方體形の柱頭を有し、且つ柱頭の表面上に作出された穹窿を有する羅馬風の圓柱を想起して見よう。かゝる場合には、柱身の上部末端は、柱身に對しては、一の均衡状態、随つて一の静止の状態を意味する。併しながら右の如き全體中に於ては、此の種の上部末端は、集中の状態、即ち其の軸に反對しての、柱身の集塊と力との集中を表示する。さうして集塊や力の此の如き集中は、それが弛解して發生する所の前進的運動に對する一の傾向をその中に包有する。

次に此の如き集中からして、柱頭に於ける全體といふものが現出する。随つて此の全體は、その水平的存在法に關しては、柱身に對し、恰も弛緩と緊張との如き關係に立つ。さうして更に柱頭の上部の状態は、柱頭、切言すれば柱身と柱頭とから成る全體に關しては、一の均衡状態である。かゝる全體は、柱頭の上部末端に於ては、水平的緊張の状態から脱出し、さうして其の自然的均衡状態に迄復歸する。されど、柱身、柱頭及び穹窿から成る全體に對しては、此の末端は、常に一の水平的の集中點、並に前進的運動に對する傾向を包有するやうに見ゆ

る。かゝる全體中に於ては、均衡状態に迄の復歸は、穹窿の分散的發生によつて始めて遂行される。實に柱頭中に尙存在する水平的緊張なるものは、此の如き穹窿中に於て弛解せらるゝのである。

併し今此の所では、吾人は、孤立せる單一なる形體に就いて語つて居る。即ち羅馬風の圓柱の身若くは柱頭中に於て存在するが如き單一なる形體をば、それ自身として考察して居る。さうして斯かる假定の下には、上述したる事項は常に成立するのである。

そこで、下から上の方に發生する所の形體の上部限界線、即ち限界面は、孤立的觀照といふ假定の下に於ては自然的の静止状態を表現するといへ、而も下部の限界、即ち「基底」なるものは、此の如きものを表現するを要しない。されど他方に於ては、それが此の如き表現をなすに就いて少しも差支はない。けだし基底なるものは形體中に於て相互に働く所の力の自然的均衡の中止を表現したり、又はかゝる均衡そのものを表現したりする事が能きるのである。さうして此の第一の場合に於ては、形體の發生といふものは、均衡状態の直接又は間接の作出を來さしむるものとして現出する。然るに第二の場合に於ては、均衡状態といふものは、形體そのものの中に於て中止され得る。此の如くなる時には、形體の發展は、均衡状態の恢復といふものから成立するのである。

かりに此の第二の場合が存在し、矩形並に之によつて代表されたる物體的形體が、その抵抗して直立する所の重さの影響の下に己れの中に凹み、さうして側面的に己れ自身の外に脹れ出し、又それを續ける事により始めの均衡状態に迄復歸すると假定せよ。かゝる場合には、側面線といふものが屈曲する。されど此の如き際には、形體の總方面に於ける内部的可動性といふものが前提されてある。さうして斯かる可動性が存立し居るといふ事は

正しく曲線の發生する事によつて立證される。之に反し、直線形體といふものは、少しも此の如き可動性を表示しない。或はかゝる可動性は、之に於ては活用されないうやうに見ゆる。

二 根本力と垂直の力

以上の如く述べ來ると共に、種々の可能は告知せらるゝのであつて、吾人は今より、此等の可能を詳密に解明せねばならぬ。

吾人は、曾て述べたるやうに、單一にして一の基底の上に立つ所の矩形から、今出發しよう。吾人が之に就いて知得する第一のものは、それが起立する。即ち直立するといふ事である。

ところが斯かる直立は、是一の働作である。さうして各の働作なるものは、必然的に、それが反對して進行する所の一の力をば、己れに對して有する。

併し此の際、二種の根本可能が存立する。即ち第一には彼れが如き働作が、かゝる力に打勝つ。第二には、かゝる働作が之に抵抗するのである。之を例へていふと、直立する所の形體は、それが直立をなす事により、上からしてそれに對して働く所の重壓に抵抗するか。又はそれが己れ自らの重力の働きに抵抗するかである。

されど吾人は、今暫くの間、かゝる抵抗の事に就いて思念をしない。之に反し吾人は先第一に、最も簡單なる假定を作る。さうして斯かる假定とは、形體が自由不羈に直立するといふ事である。此の如き場合に於ても亦、直立といふ働作は、重さに反對して進行する。併しながら斯かる重さは、是上から働く所の重壓の重さでもな

れば、又自己の重さでもない。之に反し、全然、到る所の空間中に於て働く重さであつて、即ち直立をなす所の一切のものに打勝たうとする所の重さである。さうして吾人が茲に意味せしむる所の直立なるものは、容易く理解し得らるゝ如く、その上部の終點に於て自由に消散する所の單一なる垂直線の直立に均しくある。此の如き垂直線も亦、重さに反對して進行する。されど若しも之が自由不羈に直立する所のものであるならば、換言すれば上の方に於て自由不羈に終止するならば、然る時には、線が抵抗する所の重壓といふ思想の浮出すべき餘地もなければ、又かゝる線といふものが、自己の重さといふ思想をも喚起しないのである。

此の如き自由不羈なる直立は、自發的衝動の助によつて遂げられる。かゝる衝動は、吾人が茲に語り居るやうな單一なる形體に於ては、直立の出發點、隨つて下方の終點、即ち基底に於て起り、さうして唯此の如き所に於てのみ起る。之は多くの繼起する所の働作となつて次のやうな意義に於て起らない。それは即ち、形體が、その最初の衝動の助により、或る高さに迄直立し、次に一の新しい衝動がその上の直立を遂げしむるといふ意義である。之に反し此の衝動は、唯一回のものである。而もそれは此の如くあらねばならぬ。何となれば、吾人は今茲では、多くの直立する所の形體の繼起に就いて語らないで、單一なる一個の形體のみに就いて語り居るからである。若しも直立といふものが、多くの繼起する所の働作となつて起るならば、然る場合には、形體といふものは、重なり合つて直立する所の多くの形體に迄變するのである。

さうして此の種の事は、固より思念をするのに困難ではない。彼の可觀的に相互に重なり合ひ、さうして接所切斷によつて分割された圓筒より成る所の圓柱の身なるものは、之に對する實例である。實際之に於ては、直立

といふものは、繼起する所の働作によりて起生される。併し正しく此の如くあると共に、柱身なるものは、一の單一なる形體ではなく、之に反し、下から上の方向に進む圓筒から構成せらるゝ所の形體となるのである。

併し此の如き形體には、何等の終止や又新しい發端を表示しない所の他の柱身といふものが對立して存在する。此の如き柱身は、一氣呵成的に直立する。その直立は、唯一個の衝動の働きである。さうして正しく此の如くある事により、それは、一個の單一なる形體として特徴づけられる。吾人は今茲では、此の如き單一なる形體に就いて語らうとするのである。

そこで直立の彼れが如き衝動は、それが一度働くべく始めた後は、前進的に働き、その際重さに打勝つ。さうしてそれが之に打勝つ事により、それ自らは、消滅する。此の故に、運動の終點なるものは靜止状態である。かゝる運動は、一の石の運動に比較し得べくあるのであつて、此の石たるや、唯一回の衝擊によりて前進的に廻轉し、最後には、彼の、到る所存在しさうして到る所平等に反對して働く所の地面の摩擦に打勝つ事により、その活躍的力を失ふに至る。又之と共に、石は靜止状態に迄到達するのである。

吾人が茲に假定するが如き直立、即ち上から働く所の重壓に對する抵抗、又は己れ自らの中に働く所の重さに對する抵抗など、いふやうな思想なしの自由不羈なる直立は、是唯一、一回のみの衝動の働きであるのであつて、吾人は此の事をば、次のやうに發表する事が能きる。曰く、形體が、その直立をば、唯一回の衝動によつて仕遂ぐると、されど此の如き語句は、同時に又誤解を起さしむる。けだし形體の直立といふものは、その存在即ち直立遂了をば、右の外に、瞬間から瞬間に迄繰返さるゝ所の衝動の助けによつても仕遂ぐるからである。之を言ひ換

へると、形體なるものは、唯一回の衝動の爲に直立を仕遂ぐるのみならず、その存在の各の瞬間に於て、或は之をより正當にいふと、吾人の美的觀照の各の瞬間に於て、その度毎に此の如き直立を仕遂ぐるのである。若しも直立にして、或る瞬間に於て仕遂げられない事があると假定するならば、然る時には、形體は此の瞬間に於ては吾人の美的觀照に對して直立して居ない事になるのである。

否その實をいふと、形體的なるものは、恒久的に直立をなしつゝある。されど正しく此の如き單一なる存在は吾人の美的觀照に對しては、各瞬間毎に繰返さるゝ所の行爲に迄變じ、その度毎の形の存在を喚起する。簡言すれば、その度毎の直立をなすのである。さうして又、此の如くあるが故に、直立の自由不羈なる衝動といふものも亦、各瞬間毎に起るのである。

之を他語を以て發表すると、美的事物の直立といふものは、正しく吾人その人のなす直立といふものと、同様の事實關係をなす。吾人の直立なるものも亦、若しも吾人にして、或る瞬間に於て、吾人が直立を遂ぐる所の働作を止むるならば、終止して了ふ。此の故に、此の場合に於ても亦、直立といふものは恒久的の直立である。さうしてよしや上から吾人に對して働く所の物體の重壓であらうと、將た吾人自らの身體の重壓であらうと。兎に角一の重壓を揚げたり、又は此の如きものに對して抵抗をなしたりする必要がなく、且つかゝる必要のない限りに於ては、之は同時に自由不羈なる直立である。さうして既に述べたる如く、此の如き吾人自らの直立と同様なものは、吾人の美的觀照に對する空間的形體の直立である。隨つて又之に於ても、正しく此の種の觀照に對しては、此の如き恒久的の直立が起生しつゝある。實に形體の直立なるものは、此の如き恒久的の直立以外のもの

ではないのである。

之と同時に、若しも形體にして、單一のものであつて、複雑したるものではなく、随つて又、終止や新なる發端も有しない形體であるならば、右の如き直立は、いつでも、唯一個にして、而も直立の開始に於て與へられ、その進行中に於て働く所の、自發的衝動を基として仕遂げらるゝ所の、恒久的の直立たるのである。

但し吾人が茲に假定するが如き全然自由不羈なる直立といふものには、既に述べたる如く、直立せる形及び位置に於ける自己保持といふものが對立する。之に於ては、形體は直立せる形即ち存在法を所有する。之は、かゝる形をば、重さに打勝つ事に於て始めて之を取得しない。之は、それを威嚇する所の重さに迄反對して之を所有し、之を主張し、又之を確保する。吾人は此の事柄をば又、「形體が重さに對して抵抗をなす」といふ語句によりて表出する。

されど吾人は今、此の如き「抵抗」といふものゝ特殊なる點に留意して見よう。すべて抵抗といふ概念中には向つて抵抗をなすべくある所のものが働かぬ以上は、之が起生する事の能きないといふ意味が包含されてある。此の如くして、今語り居るやうな實例に於ては、重さの働きにして缺損する限りに於ては、それに對する抵抗といふものは起生しない。之に反し抵抗といふものは、重さが働く事によつて始めて喚起される。勿論抵抗の力或は能力なるものは、既にそこに存在して居る。之は形體そのものゝ性狀として前提されてある。かゝる性狀とは之を一般的にいふと、本來形體に固有なる所の垂直的延長の力である。されど斯かる力は、重さの働きによつて始めて實際の活動を促がさるゝやうになる。即ち重さなるものが働く事により、之はかゝる力の活動を促がし、

又之と共に、その働きを現存するに至らしむるのである。

さうして之が結果といふものは、直立の一の衝動が、重さを打破する事によつて消滅するといふ事ではない。重さ或はその働きのものは、此の際少しも打破されない。之に反し依然として存留する。さうして又かゝる實例に於て、かの衝動の代りに現出する所の力なるものも消滅せず、均しく依然として存留する。併し重さの働きといふものは、之が爲に中止されないで、垂直的延長の力の働きにより、保留せしめらるゝのである。而も又此の垂直的延長の力の働きなるものは、正しく重さの働きによつて存在するに至らしめられたのである。

吾人が今茲に對立せしめた所の二つの可能間の反對性といふものは、明瞭に理解され得る。第一の場合、即ち自由不羈なる直立に於ては、それに最緊要なるものは、直立の衝動である。さうして斯かる衝動が働く事により之が重さに對接して、之を打破する。然るに第二の場合に於ては、事實關係は此の逆である。之に於て最緊要なるものは、直立の衝動ではなくて、重さの働きである。さうして此の働きといふものは、垂直的延長といふ現存せる力を働くやうに喚醒し、次に此の働きにより、その力の上の働きの可能を奪はるゝやうにならしむる。斯くて彼れに於て終點たるものは、その上の何もかも發生しないと云ふ意味に於ての靜止である。然るに是に於ては、終點たるものは、同種類にして而も反對的に向注されたる力の相互活動より生ずる均衡といふものなのである。

吾人が右に於て先づ第一に語つた所のかの垂直的働きの衝動なるものが、全形體の垂直的延長といふものとなつて働く所の衝動であると同時に、吾人が茲に就いて語り居る所の垂直的延長の力なるものは、形體中に恒久的

に存在する所の唯一の力である。但し吾人は之に對して附言せねばならぬ。かゝる力が、恰もかのやうな衝動が毎瞬間に於て新に發生すると同様に、毎瞬間新に發生しつゝあると。此の如くある事の代りに、此の種の力なるものは、單に恒久的に存在して居るのである。

併しながら斯かる力の働きといふものになると、關係は異なつて來る。かゝる働きこそ、確に毎瞬間に於て新に發生する。蓋し力そのものが、毎瞬間新に活動を促され、かくてその働きに迄喚醒せらるゝからである。

さうして此の如き働きが、毎瞬間、存在を促がさるゝ事により、毎瞬間に於て又重さの働きが保留される。随つて毎瞬間に於て、その度毎に、二つの力のかのやうな均衡が發生する、此の場合に於ても亦、美的觀照といふものは、恒久的の存在をば、生活、即ち恒久的の轉成といふものに迄變ずる。更にかゝる觀照に於ては、空間的形體に對しても亦、吾人その人に對すると同様の關係が存立する。即ち吾人が、一の重壓に抵抗し居る場合にはかゝる抵抗は、吾人の抵抗力の各瞬間毎に起る連續的活動によつて遂げられる。さうして斯かる抵抗力が、各瞬間毎に活動すると同様に、各瞬間毎に、吾人が向つて抵抗をなす所のものゝ働きの、抵抗力の働きの間に、均衡が發生せしめられる。そこで之と同様に、吾人の空間的形體に於ても亦、若しもそれが、それに對し、又はその中に於て働く所の垂直的の壓力に對して、抵抗をなすならば、その壓力の働きと抵抗の働きの間の均衡といふものは、各瞬間毎に發生せしめらるゝのである。

形體が、その垂直的延長の力の助により、壓力の働きに對してなす所の抵抗といふものは、既に述べたる如くかゝる壓力の働きにより、存在を喚起される。されど此の際、二つの異なりたる可能が存立する。即ち一には、形體が硬固なる抵抗をなすか、又は二に、それが弾力ある抵抗をなすかである。前者は言明する。若しも壓力の働きによつて喚起された抵抗が、別に禁止をしないならば、壓力といふものは働いてさうして高さの變化を生ずるに至らしむると。随つて上記の場合に於ては、壓力は働くも、而も無効果に立止まる。一體此の壓力が働くとは、かのやうな硬固なる抵抗の存在を喚起するのをいひ、それが無効果に立止まるとは、詳言すれば、かの硬固なる抵抗がその壓力に對向するが故に、形體中に何等の變化を起生せしめないのをいふのである。今や形體は單にその存在をなす事により己れを主張する。

次に此の如き硬固的抵抗といふものゝ外に、右にいふが如く彈力的抵抗といふものが對立して存在する。彈力的抵抗なるものは言明する。壓力が「働いて」特に形體の高さを減少せしむる。換言すれば形體を屈服せしむる。けれどもその屈服する度毎に、形體は益々強くなる所の抵抗をなすと。壓力といふものは、形體に對し、壓縮をなさしむるやうに働く。されど之と共に、垂直的延長の現存せる力といふものは、活動を促される。さうして斯かる力は、漸次に、而も繼續的に益々多く活動を促される。之は此の故に、壓力の働きが前進し、高さの減少が遂行せらるゝに隨ひ、益々強く働く。此の種の過程といふものは、此の場合に於ては、次のやうな瞬間或は點に於て靜止に迄到達する。それは、垂直的に延長する所の力の働きの高さ、即ち「反對的傾向」である所の抵抗の大きさが、その抵抗を喚起した所の力の大きさ、即ち右の場合に於ては重さの大きさと同等になるといふ瞬間或は點である。かゝる瞬間をば、吾人は又、均衡發生の瞬間と呼ぶ。されど之は、彈力的の反對的働きに於ける均衡、簡言すれば彈力的の均衡といふものたるのである。

此の際假定せらるゝのは、抵抗の力、或はその能力を働くに至らしむる所のもの、即ち抵抗を「喚起」する所のものは重さである。而も又、打破せらるべき性質を有する所の重さではなくて、之に反し、常にそこに存在し、さうして各瞬間毎に働く所の重さたるのである。

かゝる重さは、一の集塊の必然的重さである。さうして此の種の集塊が、形體に對して働く所の集塊なるか、又は形體そのもの、集塊であるかなどは、措いて問はない。されど孰れの場合に於ても、此の重さは、上記の硬固的抵抗又は彈力的抵抗がなざるゝ所の力とは、區別さるべくある。此の如き抵抗の力の働きなるものは、既に言明されたる如くに、存在に迄新に喚起される。之は、その力の活動を促されたる結果として發生するものである。此の如きが故に、吾人は、「抵抗の力なるものは、反動的の力である」と簡言する事が能きる。之に反し、重さの中に存するとか、又は吾人が重力と稱する所の力なるものは、此の如き反動的の力ではなくて、かの直立の自發的衝動と同じやうに、自發的に働く所のものである。否之は、各瞬間毎に働く所の自發的衝動以外のものではないのである。

されど之と同時に、此の如き重さの力は、かのやうな直立の衝動とは、直接なる反對に立つ。即ちその働きの中には、形體の能働性といふやうなものは存在しない。之に反し、形體は、重さ、即ち重力の衝動に對しては受働的關係に立つ。之はその働きを甘受するのである。

此の如くして、重さの力なるものは、彼れが如き直立の衝動に對しては、一方に於ては同種類のものであり、他方に於ては之と確然區別さるべくある。此の如き直立の衝動は、均しく反動的のものではなくて、自發的のものである。さうして又、之は自發的にして且つ能働的のものたるのである。

三 水平的の力、並に水平的の力と垂直的の力との 交互的の働き

されど吾人は今進んで、吾人が就いて語り居る所の空間的形體なるものは、常に直立のみならず、即ちその直立せる形及び位置に於て存留するのみならず、同時に廣さの點に於ても延長をするといふ事に對して検討を試みて見よう。ところが此の廣さの點に於ける延長なるものは、一の發端點に於て開始されて、そこから形體を通して働く所の衝動によつて、遂成されない。何となれば、若し此の如くして遂成されるとすると、之は、形體が一の發端點からして、水平の方向に於て發生するといふ事を意味するからである。而も此の如きは吾人の爲した假定と相違する。吾人は今迄は、起立し居る所の形體、即ち垂直の方向に於て進展したり發生したりする所の形體に就いて語つて居つた。そこで右の如くある事の代りに、水平的延長の力なるものは、唯始めから形體中に存在し、而も唯一度、即ち到る所同一なる方法に於て存在する所の力としてのみ考察され得る。併し又、此の如き力が働くといふと、形體といふものは活動して能働的のものとなるのである。

さうして此のやうな水平的延長の力も亦、或るもの、即ち凝集或は狹縮の力に反對して働くのである。更に此の凝集或は狹縮の力に關しても亦、今水平的延長の力に關して言明したと同一の事柄が成立する。即ちかゝる力も亦、形體中に於て、恒久的に而も到る所同一なる方法に於て存在し、さうして此の力が働くといふと、形體も

亦活動して能働的のものとなる。

併しながら又、自發性並に能働性の性質に關しては、此の兩種の力は特異なる關係をなす。即ち兩者は反動的にして同時に自發的である。さうして第一には、此の如き相反對せる力の各は、それが他のものゝ反動的の働きによつて活動を促されて働きに迄喚醒せらるゝ事によつて働く。さうして斯かる働きは、右の反動的働きが進行する中に於て益々増進される。而もこれ丈の限りに於ては、兩種の力は反動的のものである。更に他方に於ては此の兩者は又自發的のものである。之は常に、始めから形體中に存在するのみならず、更に己れ自らよりして働くからである。かくて此の二つの事は、次のやうな一つの事實關係の中に於て結合され得る。曰く、兩種の力は先第一に、自發的に、相互に對して働き、さうしてそれが交互的に働きをなす事によりて均衡を保持すると。かかる均衡たるや、兩種の力の各が、その大きさに相當する所の働きをその中に於て爲しつゝある所のものである。

併し又、兩種の力の此の如き自然的均衡といふものは、消滅さるゝ事が能きる。之を例へていふと、形體が、その受くる所の何等かの影響によつて、此の如き自然的均衡を超越して水平的に擴張される事がある。かかる場合には、之と共に、第一には均衡状態を恢復しようとの一傾向が興へられる。されど之は、一の反動的の傾向であつて、之は右に爲された假定の下では、狹縮の傾向と呼ぶ事が能きる。かかる傾向に反對して、第二に、逆の方向に於ける水平的均衡の恢復の傾向、換言すれば、形體が、かの自然的均衡を超越して狹縮せらるゝ場合に生ずる所の延長といふ反動的の傾向が存在する。そこで第一の場合に於ては、凝集の力、第二の場合に於ては擴張の力といふものが、それ〴〵の反動的の傾向に逆變化する。或は此の如きものとして發露する。さうして此

の種の可能には、更に他の可能が對立する。それは即ち形體といふものが、何等かの理由からして、その始めに於て、かのやうな均衡状態に合當する所の、擴張又は狹縮の點に於て妨害されるといふ事である。かかる場合には、之と共に、均衡状態の取得といふ傾向が喚起せらるゝのであつて、此の如き傾向は、更にそれ〴〵擴張又は狹縮の傾向として表現するのである。

ところが右のやうな事が現出するといふ可能は、全形體に對して、内部的可動性といふ性質を附與する。詳しくいふと、形體は、一の水平的均衡状態の前後に動搖する。即ち此の状態の周圍に動搖する事が能きる。さうして一方への各の促進的推進は、相反對せる運動の傾向を發生せしむるのである。

併し吾人は、吾人の形體の考察に於て尙一步を進めて見よう。吾人はちやうど今、水平的均衡の消滅、即ち水平的可動性に關しては、恰もかかる可動性が、全然、形體の垂直的行動と無關係に發生するか如くに語つた。ところが事實は此の如くあるのではない。之に反し、今や、水平的行動と垂直的行動とが交互的依從關係に立つといふ事を説示すべくある。而も此の如き依從關係なるものは、物體的形體の本質に對しては、重要な意義を有するものたるのである。

抑も空間的形體の垂直的延長の減少、即ち己れ自身の中に、そのものゝ凹縮といふ各の思想は、直に、垂直的展開の一の傾向といふ思想をその中に包有する。之と同様に、此の逆に、水平的集括、即ち狹縮といふ各の思想は垂直的延長の増進の傾向といふ思想をその中に包有する。又之と共に、同時に言明せらるゝのは、垂直的延長の減少は、水平的集括の力の活動喚起といふものをば、その中に包有するといふ事である。

此の種の事實關係はかういふ思想によつて明瞭にする事が能きる。それは垂直的延長の各の減少は、一の形體の部分の垂直的方向に於ける、壓縮を意味すると。かゝる壓縮は、水平的方向に於ける轉轍の傾向をその中に包有する。之と同様に、此の逆に、水平的展開の減少は、水平的方向に於ける部分の壓縮を意味する。さうして之よりして、垂直的方向に於けるその轉轍の傾向が發生する。此の際、容易く理解せらるゝ如く、第一には、垂直並に水平の方向に於て、相互に對しての各部分の總方面的の内部的可動性が假定せられ、第二には、部分が近接すると同時に増加する所の、それに對する抵抗といふものが假定せらるゝのである。

此の如き部分が相互に近接せられ、それかというて同時にその近接に對して増加する所の一の抵抗を行ふ事により、部分が表現する所の状態をば、吾人は、一の緊張状態といふ通常の語を以て呼ぶ事が能きる。随つてかゝる場合には、緊張状態は、緊張方向に對し垂直なる所の方向に於ける轉轍の傾向をその中に包有する。換言すると、緊張といふものが、常に、緊張方向に迄垂直なる延長運動に變じようとの傾向を帶ぶるに至るのである。

されど、垂直的運動の傾向が、水平的狹縮、即ち部分の水平的相互壓縮と、水平的延長の力の反對的働きとの間の、緊張から發生する限りに於ては、垂直的運動なるものは、一の新なる光明に於て顯現するのである。即ち此の運動は、之丈の限りに於ては、吾人が前に第一に假定したやうに、垂直の延長を遂げようとする所の、原始なる第一次衝動の司る所ではなく、之に反し、第二次的性質のもの、即ち正しく彼のやうな水平的緊張の結果であるのである。さうして之と同様の光明に於て、今や水平的の延長運動も顯現する。即ち之は、垂直的緊張、否究極する所は、重さの結果たるものなのである。

さうして此の如くあると共に、運動の二つの種類が、特殊の方法に於て吾人に明瞭になる。吾人は、茲に爲した假定に従ふ限りに於ては、もはや彼の吾人が「如何にして」といふ事を知る事なしに起る所の衝動などいふものに就いて語るを要しない。之に反し、此の如きものゝ代りに、緊張から自然的に發生する所の内部的衝動といふものを語るべくある。前者は刺激的動機といふものを缺損し、單にそこにある。然るに後者は、内部刺激的の動機に基く。さうして此の如くある事により、空間的形體に於ける内部的現象の活躍性といふものは、より高度に理解せらるゝに至るのである。

但し此の際、右に用ゐた「假定に従ふ限り」といふ語を今高調せねばならぬ。けだし垂直的延長の傾向が、水平的緊張から發生するといふ事は、決して、之以外の垂直的延長の傾向が存在しないといふ事を言明しない。之と同様に、水平的延長の傾向が垂直的緊張から發生するといふ事は、之以外の水平的延長の傾向が存在しないといふ事を言明しない。此の如くある事の代りに、自由にして第一次的なる衝動から發し得る所の延長の二つの種類といふものは、右の外に存在する。更に他方に於ては、單にそこにあり、さうして垂直的延長に反對して働き、且つ其の存立を威嚇する所の重力に對し、硬固的か又は彈力的の抵抗をなす所の垂直的延長の可能といふものも存在するのである。

以上の如くあるが故に、吾人は、先第一に、吾人が前に出發點となした所の矩形をば、種々の光明の下に於て考察し得るのである。先第一には、之は彼の自由不羈に終止する所の垂直線と同様に、自由不羈に直立をする。第二に之は、その垂直的存立を威嚇する所の影響に遭逢し、さうして之に對して硬固なる抵抗をなす。第三には

己れに對して及ぼされたる垂直的壓力の影響の下に、己れ自らの中に凹縮する。併し之と共に、此の際、その上の重力の働きに抵抗するに必要である所の抵抗の力を己れの中に得取する。第四には己れ自身の中に、彈力的の均衡状態を發見する。併し此の外に、第五のものとして、吾人は今、矩形をば、その部分の水平的狹縮、即ち水平的相互壓縮の爲に、一の垂直的延長をば取得するものとして、考察する事が能きる。さうして吾人は、之に於て、最後の第六のものとして、かういふ形體を發見する。それは、それ自身としてより大なる垂直的延長を有し、それかというて其の高さの延長の減少を受け、その結果、己れを擴張せしめた所のものである。但し此の如く擴張したといふ事に對しては、次のやうな補説を加へ置かねばならぬ。曰く、水平的延長の此の如き増加は此の方向に於けるその上の延長に對して増加する所の抵抗を喚起し、最後には、各のその上の水平的延長、隨つて又それと共に各のその上の垂直的壓縮を禁止し得るといふ抵抗を喚起したと。而も斯かる最後のやうな抵抗を喚起する場合に於ては、水平的緊張といふものは、副貳的に垂直的の緊張、即ち垂直の彈力的抵抗といふものに逆變する。今や形體なるものは、それが水平的の凝集力を基として行ふ所の抵抗の爲に、その垂直的延長に於て己れを主張するやうになる。

此の如き考察法の孰れをば、矩形、並に之によつて代表されたる物體的形體が要求するかは、それ／＼の事情によつて定まる。第一に、若しも形體が上方に於て自由不羈に終止するが故に、その形體に對して上から働く所の壓力といふ思想が除却されており、尙その上に、自己の重さに對する抵抗といふ思想を起すべき理由も存在して居ないならば、然る時には、形體といふものは、單に多少の廣さに於て、自由不羈に直立をする所のものとなる。

第二に、若しも形體にして重壓せられ、それかというて、狹縮又は擴張を促された所の一の全體の部分として直接に顯現する事なしに、獨立的にそこに直立するならば、此の形體は始めから硬固なる垂直的抵抗をなし居る所のものといふ光明の下に顯現する。第三に、若しもそれが、狹縮せらるゝ所の一の全體の部分であるならば、その場合には、光明は又異なつてくる。今や之は、狹縮の爲にその垂直的延長を得るやうに見ゆる。之は自發的に己れを凝集し、かくて垂直的に延長し、さうして己れに繼起する所のものを高揚したり、又は己れに對し重壓を加ふる所のものに對し、抵抗の増進された動作を及ぼしたりするやうに思はれる。第四には、若しその形體がそれに於て擴張をなす所の一の全體の部分であるとすれば、然る時には、それは凹縮し、さうして凹縮する事により、上方に繼起する所のものに對し、確固たる基底として役立つに就いて必要である所の抵抗の能力を取得するやうに見ゆる。

此の最後のものゝ實例としては、彼の「ドリツク」圓柱の冠板といふものを擧ぐる事が能きる。之は圓柱に比しては擴張されており、さうして線盤の壓力に對して屈伏し、而も屈伏しながら擴張するやうに見ゆる。されど斯かる屈伏をなすと同時に、之は有力に凝集し、さうして壓力のその上の働きに反對して己れを主張する。此の如くして、此の冠板は、圓柱の上進的力と、軒縁に於て凝集せらるゝ所の線盤の重壓との間の、絶對的抵抗の能力ある中間物となるのである。

四 曲線的側面

吾人が右に語り居つた所の、壓力に對しての「ドリツク」冠板の屈伏といふものは、是唯一個の働作に基く屈伏である。さうして之と同様に、又、その上の屈伏を妨害する所の、側面からの凝集といふものも、唯一個の働作に基くのである。而も此の事は、次のやうなものを言明する。曰く、兩者は、吾人が吾人の眼前にその實行、目視する所の現象ではないと。けだし之に於て吾人が目視する所のものは、廣さの點に於ける延長状態、並に廣さの點に於ける凝集状態に外ならない。此等の状態は、美的觀照に對しては、各の瞬間毎に起る所の行為のため存在せしめらるゝやうになる。併しながら又、吾人は、形體が如何に屈伏し、さうして廣さの點に於て如何に延長したり、又、如何に凝集したりするかを目視しない。換言すると、吾人はかゝる行動の經過を目視しない。さうして形體にして、一の直線的に限制されたものである限りに於ては、常に此の如くある。されど斜線的に限制された形體、並に曲線的に限制された形體になると、關係は異なつてくる。兩者に於ては、右の直線的形體中に於て一舉瞬間的に遂行さるゝ所の内部的行動なるものは、一の活躍せる現象、即ち恒常的に繼起する瞬間毎の存在、(形體の)に迄變する。さうして後者、即ち曲線形體に於ては、之は同時に、内部的現象の引續いて發生したり、又相互から發生したりする所の方法といふものゝ、恒常的に移行する段階的形象に迄變する。して又、此の如き状態は、たゞ曲線的に限制された形體に於てのみ存在し、さうしてかゝる形體に於ては、いつでも斯うである。吾人は之に於ては、常に、形體が一の發端状態から發生し、さうして現象の無限に多くの段階並に變化する所の形象を經過する間、一の働きを受け、さうして他方に於ては其の反對的働作をなすのを目視するのである。之を簡言すると、斯かる形體は、吾人の眼前に於て、變化多き「内部的歴史」を體驗するのである。

吾人は茲では、單刀直入、直線形、即ち直線圓柱、又は之を代表する所の矩形といふものに曲線形、即ち波狀彫形といふものを對立せしむる。吾人がかゝる波狀彫形に於て目視する所のものは、先第一に水平の歴史、即ち水平的行動の歴史である。凡て波狀彫形なるものは、その發端に於ては、多少の下部の廣さを有する。此の廣さは、此の形體が、その上部の終點に於て有すると同一の廣さである。隨つて形體が、その自然的均衡状態に立ち、その自然的の靜止状態を取得する所の場所に於て有すると同一の廣さである。此の故に波狀彫形なるものは、その發端に於ては、自然の水平の均衡状態中に立つ。次に此の如き自然的の均衡状態からして、吾人は、基底からそれが隆起すべく始むる事により、その形體の現出するのを見る。即ち吾人は擴張を遂げようとする所の力の働きが、漸次に實現し前進されるのを見る。かゝる働きは、始めには急激に、次には漸次緩徐に遂了される。

吾人は此の際、外方への運動の始めの急激が、漸次に益々強く妨害されたり、より強い抵抗に逢うたりするといふ印象を得る。吾人は、此の事をば、増加する所の反對的傾向、即ち自然の水平的均衡状態に迄復歸しようとの傾向、若くは益々多く活動せしめらるゝ所の水平的凝集の力の増進といふものからして理解し得る。最後に吾人は、右の外方への擴張運動が、靜止状態に迄到着するのを見る。此の如くなるといふと、かの擴張を遂ぐる爲に均衡の打破を仕遂げた所の力の働きといふものは、正しく此の如き働きによつて喚起せられ、さうして漸次に増進せらるゝ所の、凝集といふ反動的傾向、即ち均衡恢復の傾向に均しくなる。ところが之から先は、吾人は、二つの力の働きの關係が、轉倒するのを見る。今や彼の擴張を仕遂げた所の力そのものでなく、それかというてその力の働きといふものが、彼の限制し凝集しようとする所の力の働きの、始めには急激にして後には緩徐とな

る抗拒に逢うて遂に消滅せしめられる。かくて外方への運動といふものは、漸次にその活躍の力を失ふ。さうして此の如くして、右の如き、働きの均衡の點なるものは、必然的に、一の分岐點となる。かゝる分岐點から先きは、形體といふものは、始めには徐々に、次には益々急激に、その自然の水平的均衡状態に迄復歸し、さうして最後には、再び始めの廣さを取戻すに至るのである。

されど此の如き水平的歴史と共に、右の如き形態の垂直的歴史といふものが、吾人の印象に對して、常に結合されてあるのみならず、更にかゝる垂直的歴史は直接に、前者たる水平的歴史から發生する。換言すると、形體の繼起的發出といふものは、同時に、その高さの繼起的減少となるのである。さうして外方へ現出の漸次に減少する急激、並に擴張運動の最後の静止状態といふものは、吾人の印象に對しては、次のやうな状態と同意義となる。波狀形が、その始めの高さから益々徐々に凹縮し、終に、此の形態がその上の凹縮の強制に逢はないといふ點に迄到達すると、屈伏の促進といふものは、此の點の所では、甘受といふものに迄變する。今や形體といふものは、その發出中に遭逢した所の抵抗の爲に、その始めに於て缺損せるもの、即ち抵抗力から生ずる所の高さ上の延長を取戻す。そこでその始めには單に存在して居つた所の高さ上の延長から、彼れが如き抵抗力から生じた所の、即ち壓力の働きに抵抗する所の垂直的延長運動の漸次の發生といふものは、是此の形體が體驗する所の内部垂直的の「歴史」である。さうして此の如き垂直的の歴史は、かのやうな水平的の歴史と並列して進行しない。之に反し之は彼れから發生する。更に吾人は、垂直的の歴史の遂行さるゝのを目視する事により、かゝる歴史がそれから發生するのを目視するのである。

又此の如く述ぶると共に、吾人は、垂直線的形體に反對する所の右の如き曲線的形體の内部的本質に關し、より明瞭なる表象を取戻するのである。垂直線的形體なるものも亦、吾人が前に述べたる如く、屈伏し、さうして屈伏する中に於て己れを主張する。けれども曲線的形體に於ては、かゝる事實關係は、活躍せる運動、並に變化する所の現象となる。吾人は今や、かゝる曲線的形體に於ては、特にそれに於て對立する所の二つの動力、即ち屈伏と抵抗、甘受と反動とが、相互に區別せらるゝといふ事を見る。さうして屈伏の單なる甘受といふものは、始めの廣さ、並に之と共に始めの高さの活躍の消失となり、さうして之より發生する所の、垂直的抵抗力並に水平的抵抗力の取得となる。前種の取得は、吾人の印象に對しては、直接に、水平的の外方現出中に存在し、後種の取得は、外方現出が到達した静止状態、並に水平的状態への復歸中に存する。さうして此の如く述ぶると共に波狀形の特種の美的官能なるものは説示せられ、且つ之と共に、隱黙に、曲線的に限劃された一般的の形の特種なる官能も暗示される。かゝる官能たるや、通常、曲線的形體に於て一瞬間に於て與へらるゝ所のものが、曲線的形體に於ては、屈服と抵抗といふ相反對せる働きの繼起、並にかゝる働きの交互的錯綜状態が、その前後的起生並に相互的發生といふものに變ずるといふ事から成立するのである。

第二章 波狀刳形の根本形

一 波狀刳形、正規波狀刳形、超正規波狀刳形、

劣正規波狀刳形

以上の如く述べ來るとはいふものゝ、吾人は尙一層判明に、曲線的に限畫された形體の發生に對する根本條件なるものを説示せねばならぬ。かゝる條件たるや、形體の各部分の總方面的可動性といふものから成立する。かの直線的形體なるものは、次のやうな純垂直的の線から成立するものと思念さるゝ事が能きる。その垂直線とはその形に於ては不變であつて、さうして其の各部分といふものは、成程相互の方に推進せしめられ、かくて當該の線を長くしたり短くしたりする事は能きる。けれども斯かる線は、側面的に轉轍するといふ事は、その性質上禁止されてあるのである。

ところが曲線的形體になるといふと、その成立法は之と異なりたるものであると思念されねばならぬ。由來曲線的形體なるものは、その全體の容積上からすると、次のやうな部分から成立する。それは即ち、各の方向に於て相互から離隔したり又近接したりする事が能き得るといふ部分である。さうして此の如き總方面的可動性といふものは、茲に語らうとする所の波狀刳形に於ては、一の壓迫によつて事實的の運動に迄變ぜられる。之に關しては、吾人は當分の間、かゝる壓迫が、上方から形體に對して働く所の重壓者から來るものであらうと、將た形

體自身の重量から來るものであらうと、そは無關心的の事柄であるとする。唯假定して置くのは、壓迫の働きといふものが、兩者中の孰れから發生し來るにもせよ、その働きは、恒久的に自發性を有する所の一の作因の、美的觀照に對し毎瞬間開始する所の働きであると認むるといふ事である。而も此の種の作因たるや、全體としての總方面的形體に對して壓迫を加へ、それを側面的に擴張せしむるやうに働き、それかというて同時に、それが此の如く働く事により、繼續的に、彈力的の反對的傾向を發生せしめ、此の反對的傾向は又、其の働きに對して均衡を保持し得る所のものなのである。

但し此の如く述べ來るといふと、吾人は既に本章の題目たる所の波狀刳形といふものに迄移り行くのである。そこで之から尙一層進んで、此の波狀刳形をより詳密に攻究して見よう。今茲に一の形體があつて、之が繼續的に壓迫を受くると假定する。さうすると、此の形體は、その不變的に定立せる下方の水平的限界、即ち基底、或は兩方面的終點から、繼續的に擴張をする。吾人は今述べたのであるが、之が此の如く擴張をなすと同時に、抵抗即ち彈力的の反對的傾向といふものが發生する。それから壓迫と、かゝる反對的傾向との間の均衡の點といふものが生じ、此の點から先は、反對的に働く所の力が繼續的に壓迫に打勝つ。さうして此の結極といふものは、最初の廣さの回復といふものである。

そこで之に對して先第一に附言されねばならぬ。曰く、右の如く最初の廣さに迄復歸するといふ事は、必然的に、前行する所の漸次の擴張を單に逆にしたる形に於て仕遂げられると。さうしてその此の如くあるのは、彈力的のものとしての形體の本性の然らしむる所である。即ち彈力的反動の產物としての復歸の性質の致さしむる所

である。更に之を他語を以て表出すると、形體なるものは、その最大の廣さの點から、上方と下方とに均齊的となる。吾人は既にかゝる形體をば波狀彫形と稱した。吾人は今之をより精密に言明せねばならぬ。曰く、基底が最初の廣さ、即ち自然の水平的均衡狀態を表現するといふ假定の下では、換言すれば、それが水平的に延長し且つ統括をなす所の力を表現するといふ假定、並に今いうたより以外の何等の新しい力が、形體中に於て、若くは形體の中に迄影響を及ぼさないといふ假定の下では、その形體は均齊的の波狀彫形である。此の如き波狀彫形の側面は、今説明を特に簡單にする爲に圓形であると思念する。併し此の如く思念すると共に、吾人はそれが圓形でなければならぬといふ事を言明しない。吾人はぢきに理解する事が能きる。何時それが實際に於て、此の如き形を有し、又何時それを有しないかといふ事を。兎に角今の所では、吾人は、之をば圓形、即ち圓形から切斷されたものと思念し置く。否之は、各の場合に於て、先第一に吾人の念頭に浮出し來る所の形たるものである。

但し茲にいふやうな、圓形又は非圓形の問題の説明をなす前に、吾人は、波狀彫形といふ形に於ける、尙他の要素に迄留意して見よう。それは即ち、如何なる方向をば、その側面線がその發端に於て有し、随つてその上部の終點に於ても有するか。換言すれば、側面線が基底に於て如何に開始し、又如何に最後に終止するかといふ事である。

之に關しては吾人は次の事に留意すべくある。波狀彫形様の形體に於て、壓迫の働きを阻止する所のものは、之を一般的に言明すると、その形體の中に於ける緊張、即ち一切の形體變化に迄反對して、到る所に起生する抵抗といふものである。されど此の種の形體變化には二種がある。その一は高さの變化であつて、他は、よしや之と關連を有しない事はないにもせよ、形體の擴張、即ち側面線の外方への屈曲といふものである。

それから形體變化の要素中に於ける此の種の差異に該當して、右の如き抵抗に於ても、二種の要素の同様なる差異が存在する。即ちかゝる抵抗にして、高さの減少の方に向注されてある限りは、換言すれば上方から下方への運動を阻止する限りに於ては、之は垂直的の抵抗である。それから之が眼アウスパクツング出に反對する限りに於ては、之は外方、即ち側面的の限界線から内方に向つて起る所の抵抗である。

さうして抵抗の此等二つの種類は、此の如く先第一にその方向に關して異なつて居る。されど之は同時に、その本質に於ても異なつて居る。けだし彼のやうな垂直的抵抗は、是垂直の方向に於ける、部分の無限なる壓縮に反對しての抵抗である。之はその積極的本質からすると、壓縮の前進と共に増加する所の垂直的延長の傾向、即ち部分の垂直的分離を仕遂けようとする所の傾向である。之に反し、外方から内方に迄働く所の抵抗は、右の逆、形體の分離に反對しての抵抗である。之は此の故に、その積極的本質からすると、部分が相互に近接しようとするの傾向たるのである。

此等の次第であるが故に、抵抗の茲にいふ二つの種類は、反對的に特徴づけられた種類として、判明に對峙する。勿論此の兩者は、結極する所、同一の事、即ち壓迫の働きの阻止といふものを仕遂ぐる。されどそれが此の如く同一の事を仕遂ぐるといふ事は、之がそれ自體として相反する種類のものであり、さうしてそれが故に、吾人の美的觀照、即ち形體中に存する所の力や働作の共同的體驗であり、隨つて又、此等の力や働作の毎回の特性の共同的體驗である所の美的觀照といふものに對しては、顯然區別せらるゝのである。

さうして此の如くあるが故に、抵抗の兩種類の各自、即ち二つの反動力の各自、詳言すれば垂直的延長の反動力と反動的に凝集する所の力といふものは、相互から獨立的に、より大若くはより小として顯現し得るのである。今吾人は、説明上此等の可能を利用する。さうして其の方法といふものは、吾人が先第一に垂直的延長の反動力をば、かの自發的に働く所の壓迫の力に均しいと思念する。併し此の事は、壓迫が、垂直的延長を減少せしむるやうに働くといふ事を意味しない。吾人が茲に語り居る所の反動力なるものは、垂直的の硬固スティールハイトといふものと同一ではない。之に反し之は、彈力的の反動力、即ち屈服をする中に於て活動し始むる所の力である。さうして此の事は又、壓迫によつて垂直的に壓縮された部分が、外方に迄少しも轉轍しないといふ事を意味しない。けだし此の如き轉轍といふものが無かつたなら、一般的に波狀列形といふものを語る事は能きないやうになる。此等の如くある事の代りに、吾人の意味せしめようとする所のものは次の如くある。壓迫といふものが、その本性上なす如く、繼續的に垂直的の壓縮をなし、隨つて形體の高さを減少せしめながら働く。併しながら此の如き垂直的の形體變化が発生する事により、彼のやうな彈力的の反動力の働きといふものは喚起される。即ち其の存在を促される。更に換言すると、壓迫と同一の量を有する所の垂直的の反對的傾向が発生する。さうして此の事は又次のやうな事を言明する。此の種の垂直的の反對的傾向といふものは、下述の如き結果を來さしむる程の量を有する。それは、若し壓迫が或る瞬間に於て消失するならば、此の反對的傾向の爲に、一の直垂直的の反對的運動即ち形體の再直立の運動といふものが發生し、かゝる運動により、形體は、唯方向のみを逆にする所の、前と同一の方法に於て、簡言すれば、壓迫が生ぜしめた所の下方運動に迄全然均齊的である所の一の運動によりて、さうして特に同一の活躍的の力からする運動によりて、再び、それが、壓迫の働きを受けない場合に有して居つた所の高さに迄導き歸されると。

ところが壓迫の働きと此の反對的傾向の働きとの間の緊張といふものは、側面的轉轍の傾向に迄變化する。此の故に、之が結果として、吾人が今の場合に壓迫に均しいと假定し置いた所の垂直的の反對的傾向といふものは一部分は側面的限界から及ぼす所の抵抗といふものとなる。さうして此の如くして、最後に至つて壓迫を停止せしむる所のものは、その實、右の如き垂直的の反對的傾向許りではなくなる。否此の如きそれ自身のみで働く所の垂直的の反對的傾向なるものは、一般の波狀列形中には存在しないのである。

されど其の此の如くあるといふ事は、吾人が、壓迫に對する抵抗をば、始めに轉轍から離れ、隨つて垂直的の抵抗の水平の抵抗に迄の變化を離れて、考察するといふ事を妨げない。さうして此の如き離れたる考察を吾人は今茲でなす。そこで既に言明したる如くに吾人は假定する。かゝる垂直的の抵抗、或は壓迫に對する此の如き垂直的の反對的傾向といふものは、量に於て壓迫そのものに均しくあると。之を換言すれば、壓迫の消失する所の瞬間に於て、之が、形體をば、前に壓迫されたと同一の活躍的の力を以て、再び、それが一切の壓迫を受けない場合に有して居つた所の高さに迄、導き歸すと。

されど吾人は今、壓迫と右の垂直的の反對的傾向との間の緊張、並に進んでは之より生ずる所の側面的運動に迄留意して見よう。吾人は確定し置く。此の如き側面的の運動が一の轉轍であるといふ事を。ところが此の如き轉轍といふものは、次のやうな場合に起る。それは、壓迫と垂直的の反對的傾向とが、相互に均しくある場合

である。随つて之は、下方への運動の傾向、並に他方に於ては、上方への運動の傾向が平衡する場合には、必然的に純然たる水平の方向に於て起る。此の如きが故に、吾人が今爲した假定の下では、形體といふものは、純然たる水平の方向に於て側面的に擴張する。即ち凡ての部分の側面的の轉轍運動といふものは此の方向に於て起る。かくて全體の轉轍運動は、吾人の思想上、並行せる水平線上を通過する所の純粹なる運動に迄分解される。

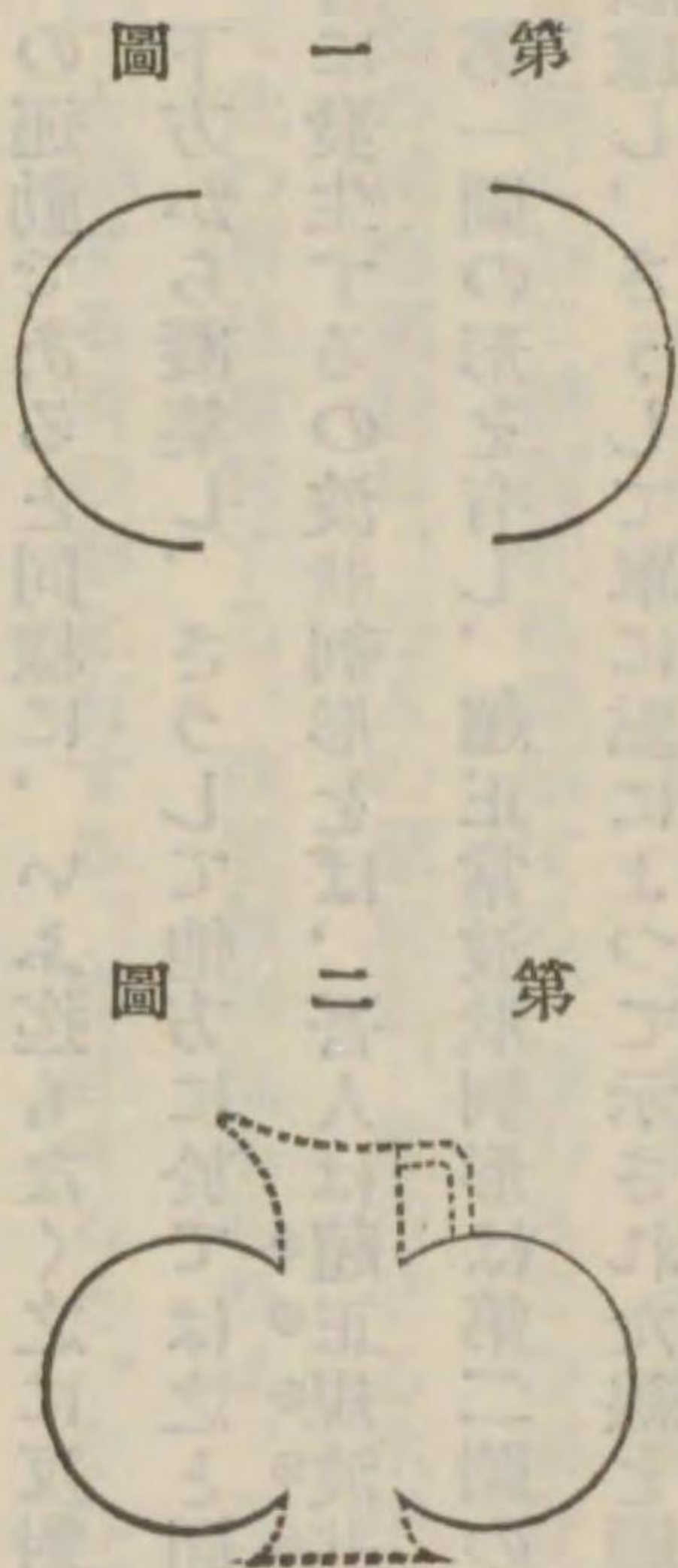
さうして此の事は意味する。波狀形なるものは、吾人が爲した假定の下では、吾人が説明を簡單にする爲に「正規形」と稱する所の形を有する。詳言すると、その側面線といふものは、その發端、即ち下方の開始場所に於ては、随つて形體の下方の水平的限界線の終點から先は、純粹水平的に外方に迄向注する。此の如き側面線の切線は、その下方の終點に於ては、一の水平的の直線である。さうして此の側面線は、之と同様に、その上方の終點に於て、波狀形が均齊的のものであるとすると、純然たる水平の方向に迄屈曲し戻る。此の如くあるが故に、本題目中にある正規波狀形とは、右の如き方法に於て、水平的に開始し、さうして再び水平的に終止する所のものである。更に吾人は以上に於て、かゝる正常波狀形の發生に對する條件といふものを、説示したのである。

此の反對に於て、壓迫に基く垂直的延長の彈力的反動力の活動から發生したる、形體の「自然的」高さの回復の傾向といふものが、壓迫よりもより僅少であると假定する。簡言すると此の如き活動から發生する所の、壓迫に對する垂直的の反動的傾向が、壓迫よりもより僅少であると假定する。さうすると、壓迫に對して、次のやうな屈服といふものが發生する。それは即ち反對的運動の同量なる彈力的傾を向誘起しないもの、随つて一部分無

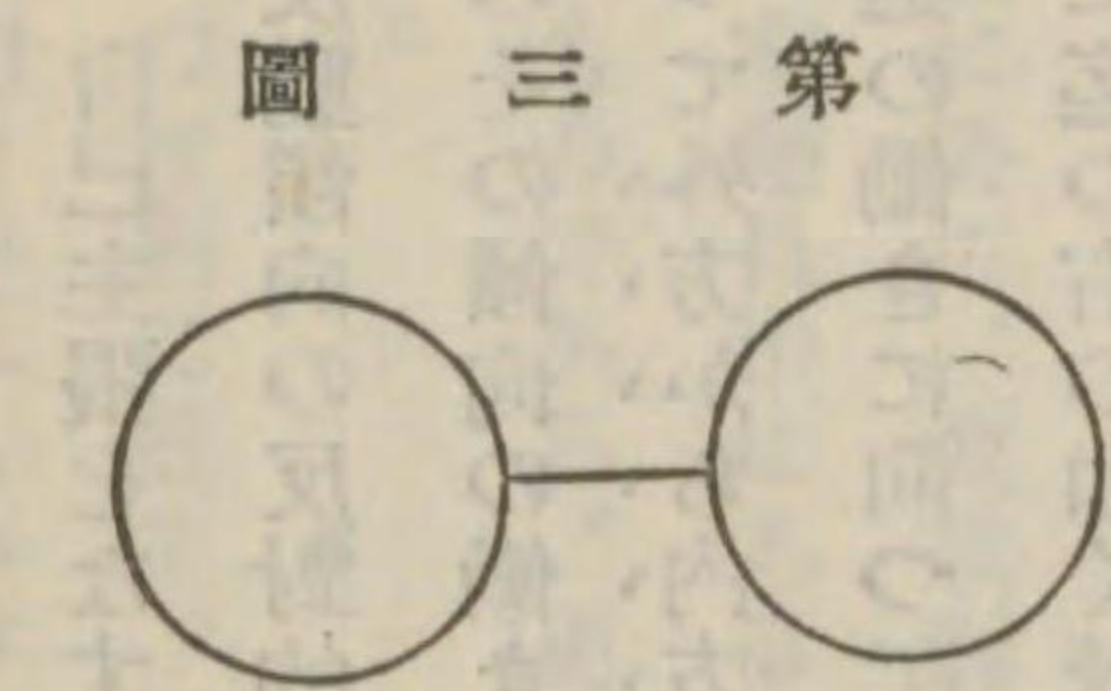
抵抗なる屈服といふものである。さうして此の事は意味する。形體といふものが、常に水平的に外方に迄驅逐せらるゝのみならず、更にその形體、若くは形體の部分が、同時に下方に迄驅逐されると。而も此の如く驅逐せらるゝのは無限ではない。何となれば、吾人は茲では、壓迫の影響の下に消滅する所の形體に就いて語り居らないで、自己主張をなす所の形體に就いて語り居るからである。併しながら此の如き自己主張が、垂直的延長の彈力的反動傾向の反動的働きによつて起生する事、換言すれば、彈力的の垂直なる反動的傾向の活動が發生せしめた所のその傾向の働きによつて起生する事が、より僅少であればある程、益々多く此の働きは、側面的限界線から随つて外方から内方に迄働く所の力の司る所として顯現する。けれどし垂直的延長の彈力的の反動力なるものが、壓迫の働きに向つて、その壓迫の量に均しくある所の反動的傾向を對抗せしむる事ができないから、外方から内方に迄の右の如く統括する所の力に對し、云はゞ損害を償ふべく保留されてあるのである。

されど又、吾人の爲した假定の下では、壓迫が喚起する所の、形體の部分の外方運動といふものは、同時に下方への一の運動であると同様に、いふ迄もなく之に反對的に働き、外方から内方に迄働く所の傾向といふものは同時に、下方から凝集し、さうして他方に於ては之と同様に上方から凝集するものとして顯現する。そこで此の場合に發生するの波狀形をば、吾人は超正規波狀形と稱する。之を例へていふと、正規波狀形といふものは、第一圖の形を有し、超正常波狀形は第二圖の形を有する。但し此等の圖に於ては、先第一に引かれたる線を顧慮し、さうして單に點によつて示された線を顧慮しないやうにすべくある。此の點線なるものは、全然吾人が茲に語る所の形體を完結せしめ、随つて技巧的藝術に於て吾人に現出し來る所の一の連絡或は一の全體中

に迄適入さるべきものなのである。

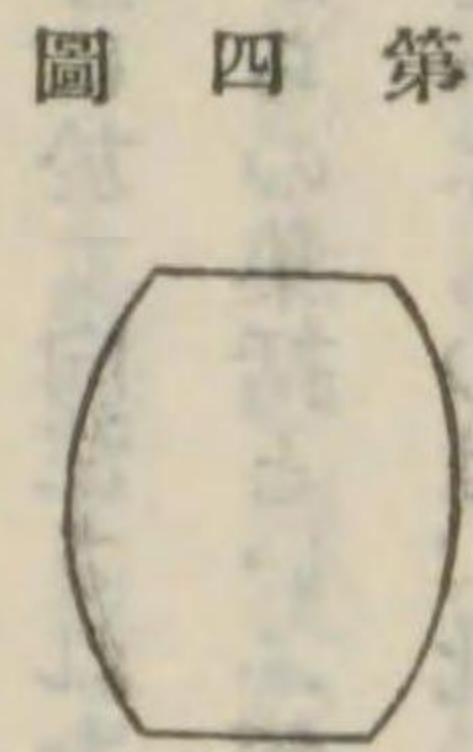


それから超正規波状彫形の極端なるものは、容易く理解し得らるゝ如く、第三圖によつて表示される。



最後に第三の可能が存在する。それは即ち垂直的延長の傾向が、壓迫よりもより大である場合である。之に關しては、吾人は慎重なる態度を取り、一般、垂直的延長の傾向に就いて語り、さうして垂直的延長の弾力ある反

動的力の活動によつて喚起された所の傾向に就いて語らない。けだし「反動的」の力なるものは、唯活動を促がさるゝ事によりて始めて働く所の力である。さうして弾力ある反動的垂直的力の活動は、壓迫に對しての壓迫的屈服によつて起る。此の如くあるよりして生じ來る結果といふものは、彼れが如き弾力ある反動的力の活動によつて喚起さるゝ所の、壓迫に對しての垂直なる反動的傾向といふものは、壓迫よりは決してより大でないといふ事である。而も之にも拘はらず、吾人が假定する如く、若しも壓迫に對する反動的傾向にして、壓迫よりもより大であるとするならば、然る時には此の事は意味する。垂直的延長の弾力ある反動力に迄、弾力的反動的のものでない所の直立の力といふものが附加されると、更に此の事は意味する。形體中には、その垂直的の弾力性と無關係に存立する所の第一次的運動、即ち屈服によつて喚起されない所の垂直的の延長運動が存すると。詳言すれば、此の中には、壓迫を受くるにも拘はらず垂直的延長に於て存留しようとの「第一次的」の傾向といふものが存



在する。かくて此の形體中に於ては、上方運動の自發的衝動から喚起された所の垂直的の上方運動が発生する。換言すると、形體中に於て、或る程度の硬固性といふものが存する。即ち壓迫の働きに追隨すべき自然的不能力の或る程度が存する。さうして此の如くして發生する所の波状彫形をば、吾人は劣正規波状彫形と稱する。第四圖は即ち之を示す。

此の如き減少された波状彫形の極端たるものは、何等の脹出が最早發生しない所の形である。換言すると、それは垂直の眞直なる側面的限界線を有する形體の形である。之は、吾人に對し、單一なる矩形によつて表現される。

二 正規波狀剖形、超正規波狀剖形、劣正規波狀剖形 の以上より一步進みたる考察

以上正規波狀剖形に關して言明した事項は、尙他様に説述する事が能きる。吾人は、壓迫の働きに對し同一の仕方に於て向注された彈力的の反動的の二つの傾向、即ち垂直的延長の傾向と側面的集括の傾向或は側面的限界線からの集括といふ傾向をば、考察の際相互から分離するべく正當であると思認した。蓋し兩者の全然たる差異性といふものは、此の如くなすべく吾人に對し權利を與へるからである。

然るにも拘はらず、吾人は、此の如き分離を全然行ふを要しない。之に反し、壓迫といふものには、之と同様に、唯單一に、一般的の形體によつて及ぼされた抵抗といふものを對立せしむる事が能きる。由來壓迫なるものは、結局する所、限界線に對して働きを及ぼす。此の故に、茲には、結局、壓迫の働きが阻止せらるゝ所の場所もある。隨つて若しも吾人にして壓迫に對しての反動的働きといふものに就き推究をなすならば、吾人はつまるところ此の限界線に迄指示をなさるゝを知る。さうして今や、此の如き反動的働きがどれ程大であるかといふ事が問題となる。ところが、之に關しては、先第一に次のやうな可能が存立する。曰く、此の反動的働きが、壓迫と同一の大きさを有する。即ち壓迫の働き或は働作といふものは、反動的のそれと同一である傾向を喚起すると。更に詳言すれば、反動的の傾向、或は、壓迫によつて變化された形體の形の回復の傾向といふものは、壓迫と同一なる活躍の力を表現し、かくて壓迫が若しも各の瞬間に於てその度毎に働かず、之に反し一瞬間働く事を止めるならば、形體は、全然同一なる仕方、而も唯反對せる方向及び繼續に於て、簡言すれば均齊的に、その「始め」の位置に迄復歸する。或は壓迫が、思想から見て、消滅せしめた所の形を回復するのである。

さうして吾人は今、壓迫に均しい反動的傾向が、實際吾人の直接的印象に對し究極する所その坐所を有するといふ場所、即ち側面的の限界線中に於て働くと思念する。併し若しも此の傾向にして斯かる限界線中にその坐所を有するとならば、然る時に之は、此の限界線からの集括、或は外方から内方に迄の集括の彈力的にして反動的なる傾向たるに外ならなくなる。隨つて斯かる傾向は、今や、吾人が壓迫に均しいと思念する所のものとなる。

されど吾人は、此の際、吾人の形體に於ける壓迫の働きの特性に留意して見よう。

かゝる特性は、之を一般的にいふと、形といふものゝ變化から成立する。併し此の變化とても、形體がその高さにて減少せられ、さうして正しく此の如くなると共に、之が脹出されるといふ事から成立する。換言すると、高さの減少なるものは、必然的結果として、側面的の脹出といふものをそれ自身の中に包有する。此の逆に、「始めの形」の回復の傾向は、脹出の消滅の傾向、さうして正しく之と共に、形體の始めの高さの回復の傾向である。之を他語を以てすると、之は、同一である所の傾向であつて、此の傾向は、脹出の消滅の傾向とも稱する事が能きれば、又「始めの」高さの回復の傾向とも稱する事が能きる。前種の傾向は、側面的集括或は狭縮の傾向であり、後種のは、垂直的延長の傾向である。此の故に、此等二つの傾向は、唯、異なりたる方面から考察せられ、その結果異なりたる名稱を以て呼ばるゝ所の同一の傾向であるのである。

さうして此の如くあるが故に、吾人は、次のやうな事をなすことによつて、事柄上少しも變化を生ずるに至ら

しめない。それは、吾人が「垂直的、延長の彈力的の反動的傾向といふものは、壓迫、或は壓迫によつて與へられた高さの減少の傾向に均しくある」といふ假定をば、「側面的集括、或は側面的限界線からの集括の反動的傾向といふものは、壓迫、或は壓迫中に存する所の擴張の傾向に均しくある」といふ假定によつて置換へるといふ事である。

同時に、此の事は、逆の意味する。吾人の今の假定は、上に爲した假定、即ち「壓迫に對しての彈力的の垂直的の反動的傾向といふものは、壓迫に均しくある」といふ事と同意義であるといふことを。又此の故に、吾人の今の假定からして、吾人が上に正規波狀形と稱した所の形が発生する。されど、上述したる如く、壓迫に對しての全反動的傾向なるものは側面的限界線中に總括せらるゝ限りに於ては、吾人は今、正規波狀形をば、次のやうな形と稱せねばならぬ。即ち外方から内方に迄働く所の彈力的の、壓迫に對する反動的傾向をば、壓迫に均しくなし居る所の形であると。

さうして此の事を尙一層判明になせば、次の如くなる。曰く、壓迫に對しての側面的限界線の反動的傾向といふものは、先第一に而も直接に、脹出の傾向に對して向注されてある。併し脹出の傾向なるものは、その本質からすると、壓迫から發生する所の、側面的轉轍の傾向である。隨つて「限界線からする集括の反動的傾向といふものは壓迫に均しくある」といふ事は、先第一に、「此の傾向が側面的轉轍の傾向に均しくある」といふ事を意味するのである。

されど此の後種の傾向、即ち側面的轉轍の傾向の大きさなるものは、壓迫そのものゝ大きさによつて確定されない。之に反し、壓迫に對する垂直的の反動的傾向から發生する所の緊張によつて確定される。之は、かゝる緊張に均しくある。さうして此の緊張とても、若しも此の垂直的の反動的傾向が壓迫に均しくある場合には、壓迫に均しくある。隨つて又、「側面的集括、或は側面的限界線からする集括の彼れが如き反動的の傾向が壓迫に均しくある」といふ假定は、「壓迫に對する垂直的の反動的働きが壓迫の大きさに均しくある」といふ假定と、同意義であるのである。

併しながら果して之が事實であるとするならば、吾人が知得せる如く、側面的の轉轍、隨つて又側面的限界線からする反動的働きなるものは、純然たる水平的方向、或は純粹なる水平線に於て起生する。隨つて、此の如き正規波狀形なるものは、吾人の印象に對し、側面的限界線中に結局坐所を有する所の、壓迫の働きに對しての彈力的の反動的働きが、壓迫に均しくある場合に、必然的に發生するのである。

されど、其の形を變化せらるゝ所の一の空間的の形體中に於て、其の形を變化する所の激動の強さに、正しく此の如き形變化によつて喚起された、始めの形の回復の彈力的の傾向が、一致するならば、然る場合には、形體が形の變化に對して及ぼす所の反動的働きといふものは、十全なる彈力的のものである。即ち形體は、形の變化に對し、十全に彈力的に行動する。さうして若しも、始めの形の回復の傾向にして、全然、形の變化、即ち形を變化する所の力によつて喚起せられ、隨つて純然たる反動的性質のものであり、又かゝる反動的傾向に對し、始めの形の取得又は保持を目的とする所の他の力が支持をしながら加はらないならば、然る時には、その始めの形を取得しようとの形體の傾向なるものは、純然たる彈力的のものである。即ち形體は、形を變化する所の力に對

し純然、彈力的に行動する。ところが、全然茲にいふ意義に於て受取らるゝ所の此のやうな語句を使用するといふと、吾人は又言明せねばならぬ。波狀刳形の正規形といふものは、十全且つ純粹に彈力的なる波狀刳形の形である。

此の如き正規波狀刳形と反對に立ちて、超正規波狀刳形、即ち過度の波狀刳形なるものは、次のやうな事によつて特徴づけられる。曰く、之に於ては、始めの形の回復の傾向の大きといふものは、壓迫の大きさよりもより僅少であると。けれども之に於ても、形體は壓迫に對し尙抵抗をする。然らずんば此の形體は全然存立する事は能きぬやうになる。又之に於ては、形の變化は無限的に進行しない。之に反しその一定の限界を有する。さうして此の變化がかかる限界を有する事の能きるのは、此の限界に於て一の力が之に對し均衡を保持するからである。されど斯かる力は、壓迫の働きによつて喚起された彈力的の反對的働きから成立しない。或は全然成立しない。又之に於て起生する所の均衡といふものは、全然、壓迫と此の如き反對的働きとの間の彈力的の緊張中に於ける均衡ではない。之に反し、之は、此の如き緊張から比較的に自由であつて、彈力的にして隨つて不活躍の均衡であるのである。

但し茲に存現する所の定確なる事實關係といふものは、二個の方面から考察する事ができるのであつて、此の種の方面たるや、吾人が判然區別しようとする所のものなのである。吾人は先始めに「屈服」といふものに留意して見よう。さうすると、事實關係は次の如くなる。曰く、「超正規的」の形體なるものは、其の形の變化を目的とする所の壓迫に對し、先第一に、比較的無抵抗に屈服をする。換言すれば、此の如き屈服がその大きと並行す

る所の、始めの形に迄復歸の傾向を喚起する事なしに、屈服をする。之は、一の柔軟なる枕の如く屈服し、次に勿論最後に、もはや其の上の屈服をなさない所の點に迄到達する。かくあると共に、超正規波狀刳形も、均しく比較的「柔軟」なるものとして顯現する。

されど斯く述ぶると共に、吾人は既に、今語り居る所の事實關係の他の方面を取上ぐるやうになる。即ち右の如き「その上の無屈服」といふものとても、其の根據を有せねばならぬ。但し之は、吾人の假定の下では、壓迫の働きによつて喚起された反對的傾向中に根據づけられて居ない以上は、根據といふものは、唯、形體に始めから附隨する所の特異性中のみ存在し得る。さうして斯かる特異性は、唯次のやうな點から成立する。それは、壓迫といふもの、形變化的の働きに對し第一の前提である所の、原子の内部的可動性或は變動性に對し、形體といふもの、性質により、壓迫の如何なる働きによつても超越されない限界が劃せられてあるといふ事である。ところが此の如き抵抗をば、吾人はもはや反動的の抵抗と呼ばず、之に反し受動的の抵抗、即ち惰性抵抗と呼ぶ。隨つて吾人は、超正規的即ち過度の波狀刳形に於ては、彈力的の抵抗の外に此の如き抵抗を假定せねばならぬ。或はかかる抵抗をば右の抵抗の代りに持出さねばならぬ。

吾人は確に、抵抗といふもの、此の如き二つの種類の差異に留意をせねばならぬ。吾人が茲に語る所の受動的の抵抗なるものは、かの彈力的の抵抗の如く、形の回復の傾向ではない。之に反し、之は全然、形變化のその上の進行に對しての抵抗である。前者は復歸の傾向であり、後者は、形をその上に變化する事の自然的の不可能といふものである。之は、形體の性質がその上の屈服を許さぬといふ單一なる事實である。此の如き受動的の抵抗

をば、かの比較的に無弾力的なる枕、或は「柔軟」なる枕が及ぼす。ところが之と同様の抵抗をば、超正規的の波状彫形は、その抵抗が反動即ち背進運動の弾力的の傾向と見えない程度に於て、及ぼさねばならぬ。此の故に、形體に關する吾人の印象に於ても此の如き受動的の抵抗が、弾力的に反動する抵抗の代りに現出する。かくて、超正規的の波状彫形が及ぼす所の總抵抗は二種類である。或は二部に迄分裂する。その一つは弾力的の抵抗であつて、他は惰性抵抗であるのである。

ところが、吾人が前に超正規波状彫形に關して言明した所の彼れが如き柔軟性なるものは、概念的に、かゝる惰性抵抗と同一のものではない。之に反し一は他によつて與へられる。即ち柔軟性、或は弾力的反動の能力の缺損といふものは、正しく、抵抗をば、部分的の全然受動的のものと顯現せしむる。さうして此の逆に、受動的抵抗の存在は、柔軟といふ印象、或は弾力的反動の能力の缺損といふ印象を、同時にその中に包有する。

吾人が此の種の抵抗を受動的の抵抗と呼ぶ所以は、既述せる如く、之が單に、或るものを起生せしめないといふ事、即ちその上の形變化を少しも起生せしめないといふ事を言明せしめたいが爲である。之は、その性質上、一の現象、即ち始めの形に迄の復歸といふものを志向する所の抵抗ではないのである。

併しながら、吾人は、受動的の抵抗を有する波状彫形といふものゝ代りに、單に受動的の波状彫形といふものを語り、さうして之に迄反對に立ちて、正規の波状彫形、或は「純粹且つ十全に弾力的」なる波状彫形をば、單に、「彈力的の波状彫形」と稱し得る。前種の受動的の波状彫形は、かくする時には、同時に、比較的柔軟なるものである。

然るに、比較的柔軟にしてさうして受動的に抵抗する所の波状彫形には、次のやうな波状彫形が對立する。即ちそれに於ては、壓迫の働きが管に彼れが如き弾力的の反對的働きを發見するのみならず、更にかゝる反動的働きに迄、彈力的の反動的働きをなす種類のものでないのみならず少しも反動的性質のものでなく、換言すれば形變化の進行中に於て始めて現出せず、之に反し始めからそこにあり、さうして形變化を妨害するといふ反動的働きが加はり居る所の波状彫形である。否、惰性抵抗なるものは、よし弾力的に反動的のものでないにもせよ、尙之が屈服により始めて働き出す限りに於ては、反動的のものであるのである。

ところが吾人は、此の如く反動的でない反對的働きをば、第一次的の反對的働きと稱する。此の種の反對的働きも、垂直的の延長運動の自發的衝動或は自己直立の自由なる衝動により、及ぼされ得る。或は之は、形體の比較的の硬固性中に根據づけられてある。随つて之は硬固性抵抗である。此の際、かゝる「硬固性抵抗」といふものは、次のやうな事を言明する。曰く、一の形變化が起生し而して之により形の回復の傾向が生ぜられなれど、之は、形體が或る限界迄屈服した後、そこから先にその上の形變化を禁止するといふ事を言明しない。之に反し、之は唯、此の如き形變化が始めから起生する事が能きないといふ事、即ち形變化なるものは、その形變化を受くる形體の性質中に於て一の妨害を發見するといふ事を言明する。此の故に、硬固性抵抗なるものは、惰性抵抗と同様に、絶對的なる可動性の否定である。唯、一に於ては、可動性が一般的により僅少であるといふ事を言明し、他に於ては、絶對的なる限界が存在して居て、かゝる限界迄は、分子の垂直的の反對的運動、随つて形變化が、それにより來さしめらるゝ程度に於て起生し得るといふ事を言明するのである。

併しながら同時に、此の場合に於ても、絶對的の硬固性抵抗、随つて可動性の絶對的の否定に迄思念されてゐない。之に反し唯、一定の程度、の否定に迄思念されてある。即ち茲には、比較的の硬固性抵抗に迄思念されてゐるのであつて、かゝる抵抗たるや、或る程度の弾力的の抵抗能力に迄加入し、さうして一般的の形體から及ぼされた抵抗が單なる弾力的のもの或は純然たる弾力的のものであるといふ事を防止するものである。又惰性抵抗といふものゝ下には、弾力的の抵抗に迄加入し、さうして總抵抗が一の十全なる弾力的の抵抗であるといふ事を防止する所の抵抗が理解される。

されど此の場合に於て、よしや絶對的の硬固性抵抗でなく、之に反し比較的の硬固性抵抗に迄思念されてあるとはいへ、尙此の比較的の硬固性抵抗なるものは若しも之が一の形體中に於て益々強くなると思念するならば、絶對的硬固性といふ假定の下に發生する所の形に近接する。換言すれば波狀刳形は、矩形又は之により代表された物體に近接する。その横面線は、垂直的の直線に近接する。ところが之は、吾人が前に減少的即ち劣正規的の波狀刳形と稱した所の波狀刳形である。吾人は又、之を比較的の硬固と呼び得る。此の際吾人は、「硬固」といふ概念中に於ては、二つの可能を結合せしむる。それは、一は、自己直立の自由なる衝動といふものであつて、一は、壓迫の働きに對抗する所の硬固性の多少の程度である。

比較的に柔軟にしてさうして受動的に抵抗する所の波狀刳形は、絶對的にしてさうして純然たる弾力的の波狀刳形よりも、より大なる形變化、随つて其の高さのより大なる減少及びより強い脹出を受くる。之に反し大なり小なりに「硬固」なる波狀刳形は、より僅少なる形變化を受くる。比較的に柔軟にして遲鈍なるものは、第二圖の形を有し、「硬固」なるものは、第四圖の形を有する。

三 正規波狀刳形、超正規波狀刳形、劣正規波狀刳形の利用法

吾人は今進んで以上三種の波狀刳形の利用法に留意して見よう。若しも一の集塊に對し、その集塊が靜穩確實に立つとか、又は靜穩にして無疑惑的に位置し得る所の、確固として抵抗力ある臺を作造し與へようと欲するならば、然る時に、此の如き臺としては、恐らくは柔軟にして且つ受動的に抵抗する所の波狀刳形といふ形が、適應して見ゆる。此の種の臺なるものは、その上沈縮する事の能きなくある所の、それ自身の中に於ける沈縮といふ念、随つて一種特異なる堅確性の念を起さしむる。併しながら此の如き臺が快感を起さしむるのは、此の上か或るものが立つとか位置するとかするが爲である。之は恰も、柔軟なる枕が起さしむるが如き快感である。さうして斯かる臺とその臺の使用者ととの間の能動的交互關係といふものは缺損する。此の臺は一の支持物を産出しない。或は之を作造しない。更に一言以て覆へば、何等の勞作をなさない。

さうして此の如くある限りに於ては、今いひ居る所の波狀刳形といふものは、上に與へた意義に於ける確實なる臺の自然的形たるのではない。

かの超正規波狀刳形といふ形なるものは、上に説示したるその性質の爲に、特に石材建築に適合せる形ではない。石材建築の特性といふものは、先第一に、一方に於ては、存留物の重さの爲、他方に於ては、その物がより

て以て存留を遂ぐる所のものの内部的勞作、即ち活動の爲に遂行せらるゝ所の確實なる存留といふものである。又石なるものは、その性質上、柔軟にして不活潑なる集塊ではない。之に反し之は能動的のものである。之は集塊、而も重さを有する集塊であり、他方に於ては同時に勞作をなすつゝある。此の如くある結果、柔軟なる屈服といふものは、此の如き屈服に於ける單なる受動的抵抗と同様に、その堅確性に矛盾する。

此の如くあるが故に、右の超正規波狀形に直接に反對せる形、即ち「伸張せる」波狀形といふ形は、内容上の石材建築に於ける臺として適當してあるやうに見ゆるかも知れぬ。されど此の場合に、石造物に於て此の如き臺によつて支持せらるゝ所の石材集塊の重さといふものは矛盾する。此の際には次の事に留意せねばならぬ。吾人は此の如き臺に關しては、嘗にそれがその上に立つたり位置したりする所のものが正しく有するといふ重さに抵抗する。即ちそれが正しく此の如き重さに抵抗するといふ事を要求する許りでない。更に吾人は、それが、同一の方法に於て且つ同等に確實に、より大なる重さに抵抗する事が能きるといふ事を要求する。されど減少された波狀形なるものは、一の減少されたものである限りに於ては、換言すれば垂直的延長の傾向が、一の反動的のものでなく、之に反し第一次的のものである限りに於ては、形體といふものは、正しくそれがそれ自身の中に沈縮されて居ないから、一のより大なる重壓の下には、己れ自身の中に沈縮し、了るべき危険が存する。試みに之に關しては第一次的の反動的働きの、彈力的の反動に迥反對に立ちて何を言明するかを思念すべきである。此の彈力的の反動なるものは、屈服に際し、隨つて今述べ居る實例に於ては、壓迫の働きを受けて繼續的に増進をするといふ一の働きである。之に反し、非反動的にして第一次的なる力といふものは、恒久的にその特定の量を有する所のものであつて、隨つて壓迫の量と共に増加せず、又その結果、若しも吾人にして思想上に於て壓迫を増長せしむるとするならば、それが果して此の如き壓迫に堪へ得るかといふ疑問を益々多く起さしむるものなのである。

そこで之と共に既に言明せらるゝのは、如何なる形のみが、一方に於ては全然能動的の臺として顯現し、他方に於ては、それが嘗に事實的に現存せる壓迫に正しく堪へ得るのみならず、更に一のより大なる壓迫に堪へ得るとの保證をその中に包有するかといふ事である。かゝる形は決して、始めには無力に屈服し、さうして次に單に受動的に抵抗をするといふ波狀形ではない。尙又之は、第一次的に能動的である所のものでもない。此等の如くある事の反對に、純粹にしてさうして全然彈力的に反動をするといふ形である。既に言明したる如く、より大なる壓迫といふものは、抵抗を増長せしむる。さうして抵抗が一の反動的のものであるといふ事は、形體をして同時に、内部的動作によつて、その上に立ちさうして位置する所のものに對し、一の確實なる場所を用意する所のもとして顯現せしむるに至るのである。

然かはいふものゝ、空間藝術に於ては、いつでも、壓迫に對しての確實なる臺の彼れが如き能動的の用意といふものが問題とならない。又かゝる空間藝術に於ては、何時でも、一の形體、又は一全體の部分的形體の上に立つたり位置したりする所のものは、一の重壓者たるのではない。それであるから、吾人は茲では特定の場合に就いて語つて居る。即ち吾人は石材建築の特性に就いて語つて居るのである。さうして此の事とても又、吾人が一般的の石材建築に就いて語り居るといふ事を意味しない。之に反し、吾人は石材といふものの特性を働かせ、又

自然的に働かしむるに相違ないといふ石材建築に就いて語り居るのである。して又、此の如き特性といふものは、既に言明したる如く、一方に於ては、自己の重さによつて確實なる静止状態に於て存留すべき能力であり、他方に於ては、石材といふものの強固堅確性中に存する所の活動性といふものである。此の兩者は直接に關聯する。そこで重さに基く存留といふものは、存留物が依りて以てその存留を遂ぐる所のもの、堅確性を要求する。されど此の場合に、要求せらるゝ所の堅確性なるものは、吾人に對しては、單なる受動的の屈服及び抵抗中に存在しない。之に反し反動的の反動的働作の中に存在する。さうして兩者が石材の中に於て結合されてあるといふ事は、石材に對し、その特殊の本質、その特異なる「紀念物性」といふものを與ふるに至るのである。

此の如くあるが故に、伸張せる波狀刳形と柔軟なる波狀刳形、換言すれば第一次的能動の波狀刳形と受動的に抵抗する所の波狀刳形といふものが、石材建築の特殊の形でないにした所が、之はそれ丈多く、内容上製陶的な形並に築造的なる形である。けだし前者たる製陶に於ては、柔軟にして、さうして柔軟なる屈伏中に於て、受動的にその上に屈服を停止せしむる所の形が適當する。さうして後者たる築造に於ては、その根本思想といふものは、重壓といふ思想ではなく、之に反し、上部のものからの下部のものからの發出、或は下部のものの上に於ける上部のもの浮泛状態といふ思想たるのである。

四 孤形波狀刳形、籃狀波狀刳形、膝狀波狀刳形

以上の如く述ぶるとはいふものゝ、正規波狀刳形、或は「彈力的」の波狀刳形なるものは、始めから、さうし

ていつでも、任意に増大する所の壓迫に對する抵抗能力の具備といふ性質を有しない。その此の如くあるといふ事は、吾人をして均齊的、波狀刳形の最終の考察をなすに至らしむる。

吾人にして今、正規的の波狀刳形に迄働く所の重壓が、漸次に而も結局無限的に増進するを思念するならば、然る時には、勿論吾人の印象に對し、波狀刳形の抵抗といふものは、恒常的に増大する。けれども此の抵抗力は唯、抵抗能力、即ち形體中に始めから存在する所の垂直的延長の力が働かしめらるゝ事によりてのみ増大する。さうして此の事は意味する、之は益々進む所の屈服中に於て増大するといふ事を。此の如き屈服は、益々僅少となる。されど壓迫の各のその上の増進といふものは、いつでも屈服といふことをば必然的結果として有する。さうして斯くあると共に、正規的の波狀刳形なるものは、勿論各の壓迫に堪へ得るやうに見ゆる。けれども之に於ても、或る意義に於ては、臺の絶對的確實性といふ印象は缺損する。之は次のやうな事を言明する。臺の上に立ち或は重壓をする所のものに對し、臺により、空間中に於けるその不可動なる存在、即ち最大の壓迫によつても奪ひ去らるゝ事の能きない存在が附與せられ、而も臺の内部的勞作によつて附與されてあるといふ事の影響が缺損するといふ事を。ところが其の此の如くあるといふ事は、吾人をして正規の波狀刳形の二三の變形に到達せしむるのであつて、斯かる變形には、減少された波狀刳形即ち劣正規波狀刳形と過度なる波狀刳形即ち超正規波狀刳形との同種的の變形が對應するのである。

之迄は、隱黙の間に、波狀刳形の集塊といふものはそれ自身の中に於て同質的のものであるといふ假定が爲されて居つた。此の如き同質性とは、波狀刳形なるものは壓迫に對し凡ての方向に於て同一の仕方に於て働くとい

ふ事を言明する。さうして此の事を再び吾人は、より精密に次のやうに規定せねばならぬ。曰く、壓迫の働きが上方から下方に迄起し、さうして之に對し垂直的に延長する所の力の反對的働きを受くる事により、緊張が發生し、此の緊張は轉轍といふものを來さしむると。更に此の轉轍は、緊張方向に迄垂直的に起生する。又轉轍のかゝる運動とても、限界から働く所の集括力、又はかゝる力の働きと接觸し、さうして此の如くして茲にも一の緊張が發生する。此の緊張も、かゝる緊張の方向に迄垂直である所の方向に於ける轉轍の傾向をそれ自身の中に包有する。右の第一の緊張は垂直である。之から發出する所の第二次的の緊張はとりわけ水平的のものである。されど水平的緊張と垂直的緊張の合體は、甲若くは乙の緊張を受くる所の内部的部分が同一のものであるからには、あらゆる可能なる方向に於ける緊張を發生せしむる。或は、總方面的であつて、緊張の強度により測定せらるゝ所の内部的堅確性及び抵抗能力といふものを發生せしむる。そこで上述の同質性なるものは言明するのである。此の如き内部的堅確性、或はかゝる「緊張」の程度は、どこでも而も凡ての方向に於て同一であるといふ事即ち形體の集塊の性質の結果、彼れが如き緊張が總方面的に平均されるといふ事を。

併し、吾人が、此の如き同質性をば、總方面的に同一なる比較的の可動性、と稱するも、事柄は同一である。本來緊張なるものは、その起源からすると、一の運動に對する反對的働きに外ならなくある以上は、可動性なるものは、一切の緊張を除くと、どこでも同一なる絶対的の可動性である。随つて、どこでも而も總方面的に同一なる緊張とは、彼のやうな原始の絶対的の可動性のどこでも而も總方面的に同一なる消滅と同一意義である。その結果といふものは、總方面的に同一なる可動性のどこでも同一なる殘餘である。或はどこでも而も總方面的に同一なる比較的の可動性であるのである。

然るに吾人にして、右のどこでも而も總方面的に同一なる緊張、或は此の如きどこでも而も總方面的に同一なる比較的の可動性を形體の中に於て假定する限りは、簡言すれば形體を絶対的同質のものと考えする限りは、波狀形形の横面線なるものは、全然、吾人が上に既に思想上自然に浮出するといふ事を語つた所のもの、即ち圓形、或は圓線から割斷されたものであり得る。

抑も圓線なるものは、到る所同一なる屈曲の線として、かういふ線である。即ちそれに於ては、各の點に於て、直線的進行が、線が此の點に於て有する所の方向に於て、同一の仕方に於て、妨害し轉向せらるゝ所の線である。ところが此の如き妨害は、緊張といふものをそれ自身の中に包有する。さうして轉向なるものは、緊張方向に迄垂直なる方向に於ける轉轍の多少の程度である。随つて、各の點に於て妨害及び屈折或は轉轍が同一であるといふ事は、一の運動の妨害によつて來さしめられた運動が、再び同一の轉轍を發生せしむるといふ事、一言を以てすれば、到る所同一なる結果を有する所の到る所同一なる緊張が存在するといふ事を言明するのである。

併しながら、圓形のみが總方面的に同一なる緊張の印象を起さしむるといふ事を證明する爲には、圓運動の右の如き分析をなすを要しない。若しも吾人にして、一の波狀形形の側面的限界線が始めに圓形であつて、さうして次に孰れかの場所に於て圓形が消滅せしめられると思念するならば、然る時に吾人は直接に次のやうな印象を得る。それは、圓形が減少せらるゝ所に於て、随つて扁平の場所に於て、形體の擴張的働作に對する一のより強い反對的働き、随つて一のより強い緊張が起生するといふ事の印象である。之に反し吾人は、外方屈曲が増加さ

れて見ゆる所のどこにでも、減少された緊張、或は緊張の緩和といふ印象を有する。ところが之と共に直に言明せらるゝのは、唯變化されない圓線、即ち純粹なる圓線のみが、どこまでも而も總方面的に同一なる緊張といふ印象を起さしめ得るといふ事である。

此の場合に於ても、圓線の極限場合として、眞直の垂直的の限界線が認めらるべくある。されど直線的の垂直的の制限の性質中には、加入して而して印象を變化する所の事情といふものを除くと、それが到る所同一なる強度を以て制限しながら働くといふ事が存在する。換言すれば、到る所被制限物の延長傾向と制限の傾向との間に同一なる緊張を生ずるべく見ゆるといふ事が存在するのである。

ところが圓形の波状剖形なるものは、吾人が、正規波状剖形、超正規波状剖形、劣正規波状剖形と稱する所の三個の上に説明した可能をその中に包有する所のものである。されど若しも圓形の波状剖形にして正規的のものであるならば、横面線は半圓である。若しも之が超正規的のものであるならば、横面線は、一の圓のより大なる部分として現出する。又之が超正規的のものであるならば、之は半圓に及ばない所の弓形である。

併しながら吾人は、此等の形の各に於て、次のやうな事をなすことにより、圓形を消滅せしむる事が能きる。それは吾人が右に爲した假定、即ち到る所同一なる緊張或は比較的の内部的堅確性^{内部的堅確性}或は到る所同一なる比較的の可動性といふものを廢棄し、さうして次のやうな假定をなすのである。總方面的に同一なる緊張の多少の程度に對し、總方面的に同一でなく之に反し單方面的なる緊張、或は總方面的に同一なる可動性を消滅せしめ、隨つて唯一定の方向に於て存立する所の堅確性^{堅確性}といふものが加入するといふ事である。

併し此の事とても、種々なるものを意味する事が能きる。先第一には、形體中に於て反^反、屈^屈、堅^堅、確^確性^性といふものが存在するといふ事である。

かゝる堅確性は、何を扱置いても、上に「硬固」なる波状剖形の形を語る際に述べた所の垂直的の硬固性^{硬固性}といふものから、確に區別さるべくある。本來硬固性とは、一般的に可動性の缺損である。さうして彼れが如き「硬固性」は、先第一に、垂直的方面に於ける部分相互の近接の減少された能力である。而も之は同時に、より多く第一次的のものである。隨つて此の如き近接に對しての反動的の抵抗ではない。或は之をより精密にいふと、之は、垂直的方面に於ける部分相互の近接の本原的の無能力である。

ところが此の如き硬固性から、反屈曲堅確性^{反屈曲堅確性}といふものは、各人に知得された方法に於て區別される。反屈曲堅確性なるものは、その名稱の示すが如く、屈曲に對しての抵抗の能力である。隨つて部分相互の近接そのものに對しての抵抗の能力ではない。之に反し、かゝる近接に對する抵抗によつて來さしめらるゝ、側面的の屈曲に對する抵抗の能力である。さうして此の能力は、之が働かしめらるゝ場合に始めて、換言すれば屈曲が遂行さるゝとか又は遂行されようとする場合に始めて、事實的の抵抗となる。之を他語を以てすると、之は形の變化に對し彈力的に反動する所の傾向である。隨つて彼れが如き硬固性と此の反屈曲堅確性とは、一方に於ては第一次的の傾向と彈力的に反動する所の傾向、他方に於ては、高さそのものと形によつて來さしめらるゝ高さとの如き事實關係をなす。然るに兩者は、次のやうな點に於て相互に均しくある。それは、それが垂直的堅確性の二つの種類、換言すれば高さの減少に對して向注された堅確性^{堅確性}であるといふ事である。さうして若しも吾人にして、反屈曲堅

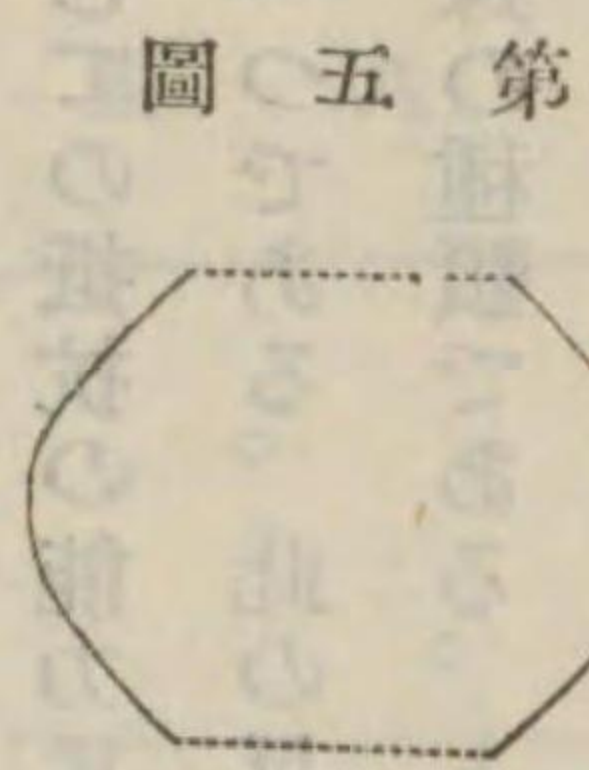
確性を絶對的のものと思念するならば、然る時には、之は確に、それ自體としてとなく之に反し結果に於て、絶對的の垂直的の硬固性も一つになるのである。

吾人は之を尙一層精密に語つて見よう。吾人は再び、吾人の波狀刳形、或は壓迫の影響の下に發生する所の矩形をば、純粹なる垂直線によつて置き代へよう。今や此の線は、矩形が波狀刳形の形を取得する事により屈曲する。さうして此の如き垂直線に關してのみ、それが波狀刳形中に於て屈曲されるといふ事が言明され得る。更に吾人は假定する、此の如き垂直線が、その性質上、或は形體の性質の結果、屈曲に對し抵抗をなすと。かくするといふと、吾人は、吾人が茲に反屈曲抵抗と稱する所のものを取得する。随つて此の抵抗は、その性質上、垂直的の反屈曲抵抗であるのである。

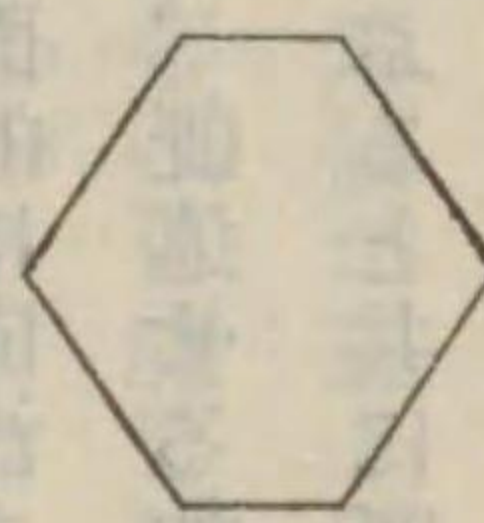
之よりして波狀刳形の如何なる特殊の形が發生するかは、吾人にして、始めて垂直的に伸張された形體が無限的に多數の垂直線からでなく之に反し垂直的の棒の集群から成立すると思念するならば、直接に直觀的になる。此の如く思念するといふと、吾人は、若しも此の如き垂直的の棒が、下方に確持せられ、さうして其の上端に於て垂直的の壓迫が働く場合に取得する所の形を想起する。ところが之と同様の形をば、吾人の波狀刳形の横面線が取得せねばならぬ。その形は例へていふと第五圖のそれである。

吾人は此の如き反屈曲堅確性をば、或は大或は小と思念する事が能きる。吾人にして之をば益々大になると思念するならば、吾人は硬固的の直線形に近接する。又吾人にして、絶對的の反屈曲堅確性といふ假定と、形體がその上に可動的でありさうして壓迫に屈服するといふ思想とを結合するならば、然る時には、第五圖によつて

表はされた形の最極端、即ち第六圖の形が發生する。此の如き形體は、かの硬固なる直線的の形體と同様に、もはや波狀刳形ではない。第六圖に於ける形體は、寧ろ二つの斜に直線的なる形體の重なり合ひである。



第五圖



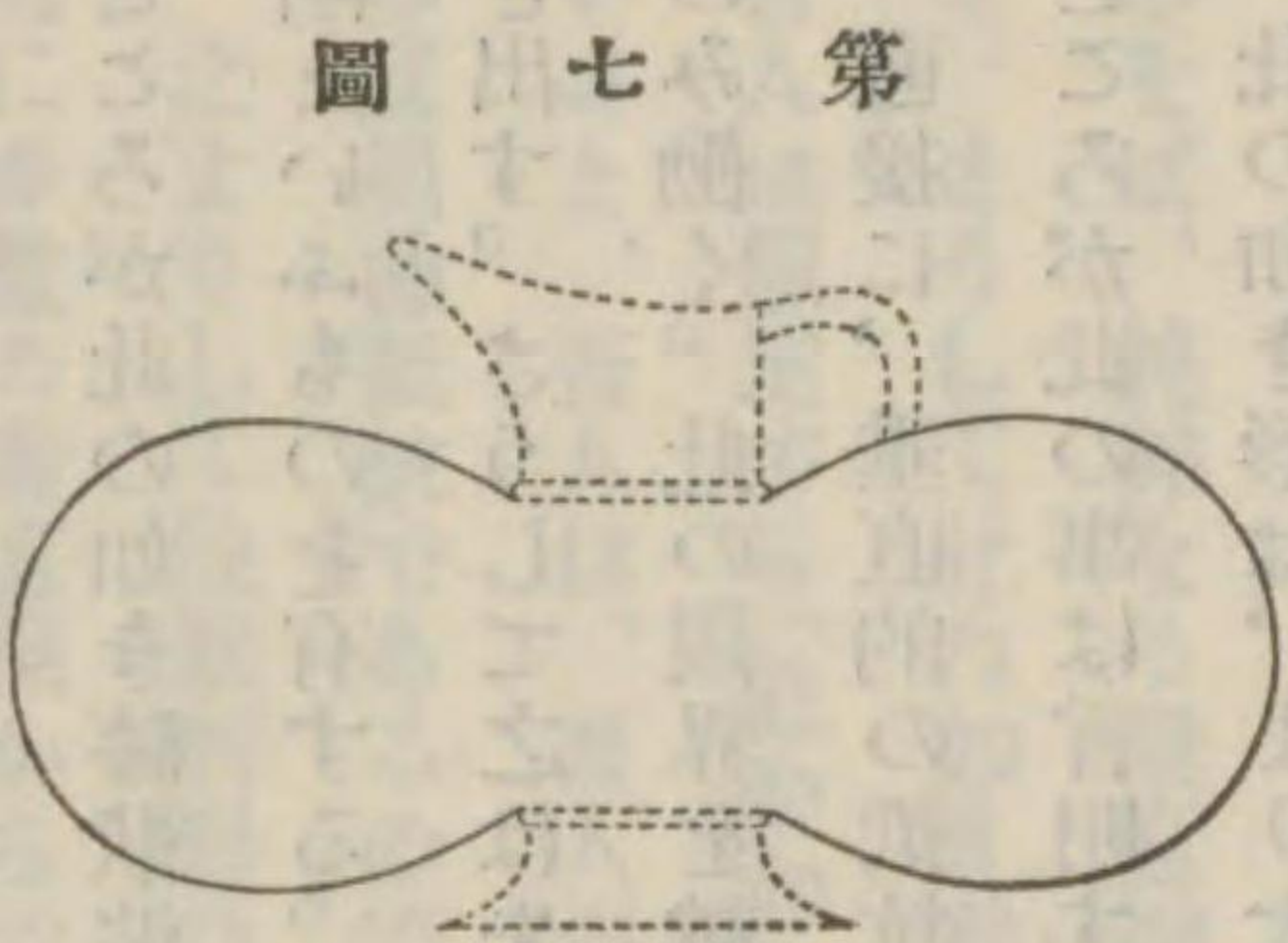
第六圖

されど此等の兩極端の間には、第五圖の形の種々の可能な變形が存在する。吾人は、以下に於ては、比較的の反屈曲堅確性といふ假定の下に發生する所の波狀刳形をば、膝狀波狀刳形と稱する事が能き、又かく稱しようと思ふ。かゝる波狀刳形の變形は、膝の大なり小なりの尖銳によつて區別される。

ところが此の如き膝狀波狀刳形も、特殊の程度に於て、吾人が上に圓形の波狀刳形に關して再三言明した所の缺陷といふものを有する。本來、反屈曲堅確性なるものは、勿論反動的の力である。即ち之は屈服する事により働き出す。さうして之は先第一に、屈服が起生すると同一の程度に於て働く、併しながら、唯、或る限界内に於てのみ働く。此の限界を越えては、垂直的の抵抗能力が減少する。餘りに多く屈曲された棒は破碎する。此の事は、直接に、垂直的の抵抗能力の彼れが如き減少を指示する。

ところが此の事は言明するのである。曰く、増大する所の壓迫は、膝狀波狀壓迫の存立を危くすると。此の故に、此の如き形は、より大にしてさうして結局任意に大なる壓迫に抵抗すべき能力が吾人によつて要求せらるゝ場合には——さうして之は主として、既述せる如く、内容上石材建築に於て事實である——許すべからずにある。之は、その性質上、自由に直立しさうして軽く支持する所の形體、而もかゝる形體に於てはそれが「支持」する

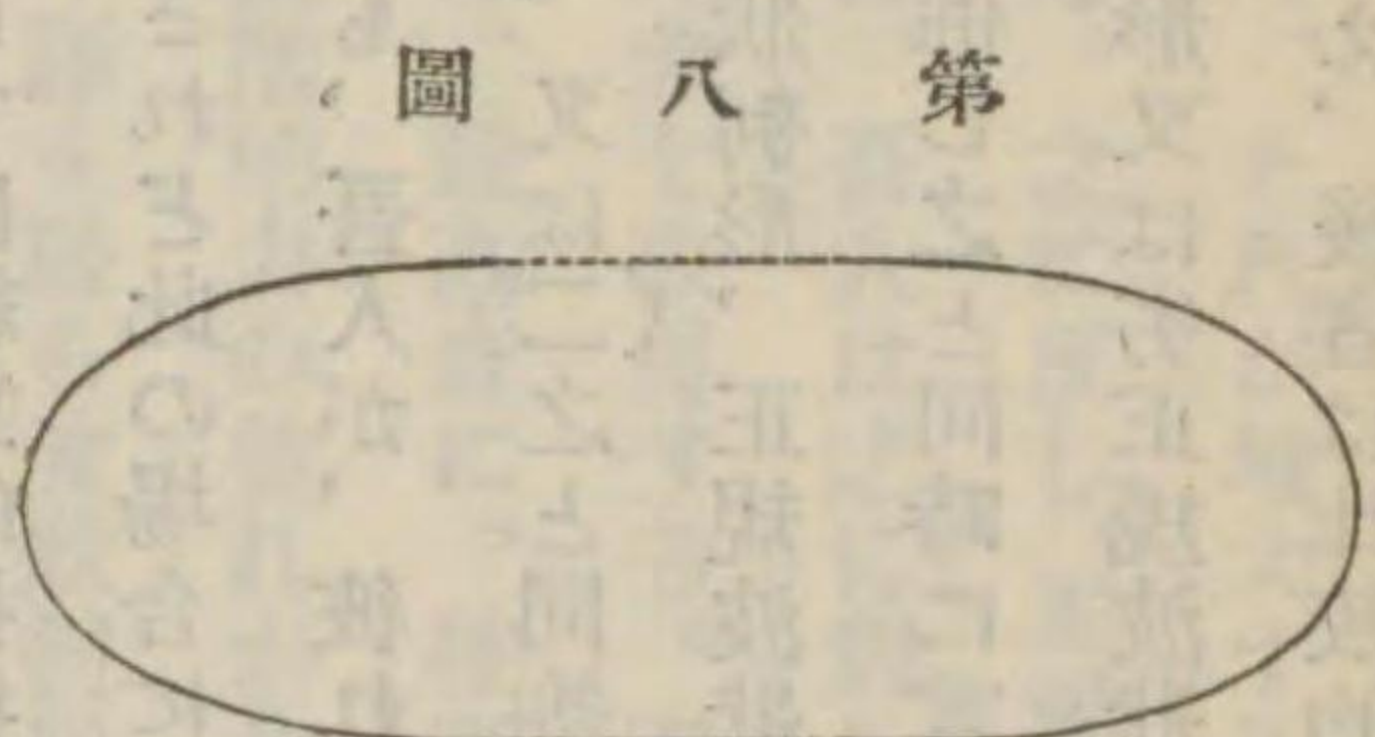
所のものは浮泛し居りさうして重壓をしないといふ形體の形である。随つて茲にいふ形は、先第一に、製陶土の意義を有し、進んでは造具上の意義を有するのである。



第七圖

尙その外に、此の場合に於ても、正規波狀刳形、超正規波狀刳形、劣正規波狀刳形の三種の可能が存する。若しも反屈曲堅確性にして十分大であるならば、勿論、唯、劣正規波狀刳形のみが可能である。併し吾人は、反屈曲堅確性をば、より僅少、即ち壓迫に比してより僅少と思念し、随つて絶對的反屈曲堅確性或は垂直的の硬固性と遙に隔り居ると思念する事が能きる。かゝる場合には、第七圖の形の形體が発生せねばならぬ。此の種の形は正規形、例へば第八圖の形を通して恒常的に第五圖の形に迄移行する。

ところが反屈曲堅確性なるものは、總方面的に同一なる堅確性、或は形變化に對しての抵抗の能力に迄、一の單方面的に向注された堅確性が如何に添加せらるゝかの二つの可能なる方法の中の一つである。此の反屈曲堅確性は、既述せる如く、垂直的の堅確性である。之は、垂直的方向に於ける凝集の特殊の種類である。ところが斯く述ぶると共に既に言明せらるゝのは、どれが二つの可能中の他の一となるかといふ事である。即ち形體なるものは、單方面的に唯水平的方向に於て働く所の堅確性、或は抵抗の能力によつて表示され得るのである。

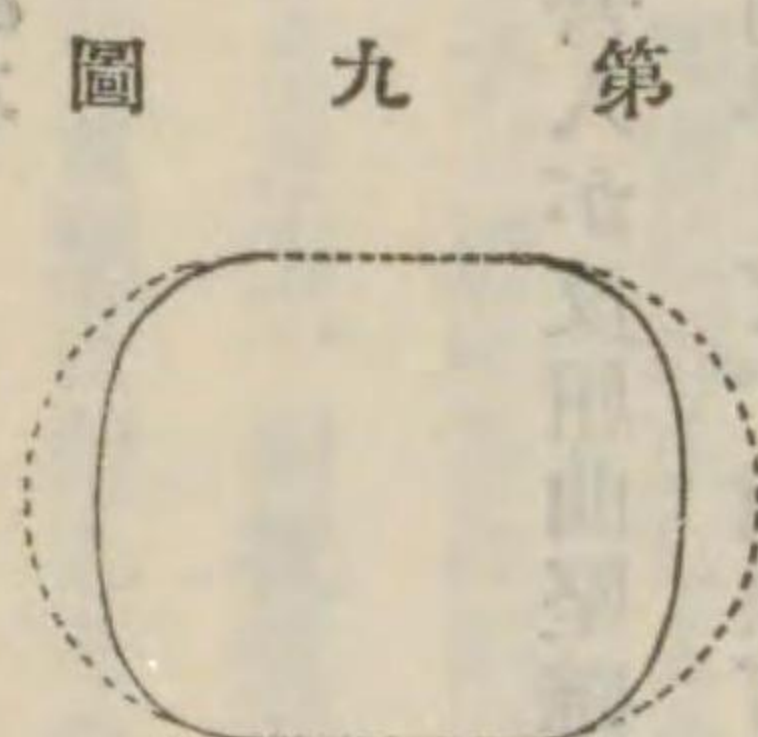


第八圖

然るに波狀刳形が水平的方向に於て受くる所の形變化は、水平的の擴張から成る。此の故に、茲に語り居る所の水平的の堅確性なるものは、水平的の擴張に對しての抵抗の能力から成立せねばならぬ。ところが此の如き抵抗は、各の波狀刳形の形に於て必然的に前提されてある。

此の如き形の各の形體は、彈力的の水平的抵抗を及ぼすのであつて、さうして斯かる抵抗は、形體が益々進んで水平的に擴張せらるゝ事により増大する。併し此のやうな水平的擴張の可能をば、之迄、吾人は此の擴張が正しく益々強い抵抗に逢ふ場合を除いては、無限と思念し居つた。けれども今吾人は、水平的擴張の可能が有限なる限界を有すると假定し得る。果して此の如くあるとすると、形體なるものは、増大する所の壓迫と共に、有限の限界に近接する。此の限界に於ては、思念し得べき最大の壓迫に對し絶對的の抵抗が及ぼされる。

今や判明するのは、此の如き事實關係が波狀刳形の形に於て如何に通告せらるゝかといふ事である。吾人は知得した、波狀刳形の横面が、始めは比較的急速に發出し、次に外方に迄の運動が、彼れが如き限界に近接すると共に、益々妨害せられ、かくてかの圓形の波狀刳形に於て起るが如く、斜の屈曲に於ける外方運動が垂直的の運動に迄移行し、さうして最大の擴張の場所に於ては、眞直なる垂直線に近接するといふ事を。一言を以てすると、波狀刳形の形が、例へば第九圖の如く、側面的に扁平にされた形となる。吾人は此の如き形の弓形をば籃狀と稱し、随つて斯かる形によつて特徴づけられた波狀刳形をば、籃狀の波狀刳形と稱し得るの



第九圖

である。

五 正規の籃狀波狀彫形の細説

吾人が反屈曲堅確性によつて特徴づけられた波狀彫形といふものに就いて語つた時には、吾人は、此の如き波狀彫形をば、純然可屈曲的であつてそれかというて同時に屈曲に抵抗する所の垂直的の棒に迄分解されたものと思念し居つた。此のやうな考察法に一致せしめて、吾人は今茲に語る所の波狀彫形をば、相互の上に重なる所の水平的の層の連続と考察し得るのであつて、而も此の種の層たるや、一方に於ては壓迫の働きによつて壓縮せられ、他方に於ては廣きに迄延長せられ、さうして前種の働きに對しては益々大なる抵抗を向け、後種の働きに對しては絶對的抵抗の點を追求する所の抵抗を向くるものなのである。

されど此の場合に於ても、吾人は彈力的の垂直的の抵抗に關し、再び種々の假定をなし得る。さうして此の際にも、吾人が、彼れが如き彈力的抵抗、或は彈力的反動的の抵抗の量をば、(一)壓迫の量よりもより小と思念したり、又は(二)之と同等にしたり、又は(三)垂直的延長の第二次的傾向の多少の量を附加したりするに隨つて、劣正規波狀彫形、正規波狀彫形、超正規波狀彫形が發生する。

併し之と同時に言明せらるゝのは、超正規の籃狀波狀彫形及び劣正規の籃狀波狀彫形は、上に一般の超正規波狀彫形又は劣正規波狀彫形に關し再三言明された所の弱點を分享するといふ事である。即ち前者は比較的柔軟に見え、後者は比較的硬固に見ゆる。換言すれば後者はそれが減少されたもの即ち劣正規のものである程度に於

て、それが増大する所の壓迫に對し該當的の増大する彈力的の反動的働きを提起し得ないといふ印象を喚起する。之に反し、正規の籃狀波狀彫形は、先第一に、一般の正規波狀彫形の有する利益を分享する。更に他方に於ては、吾人は之に對し、壓迫の擴張的の働きのよしそれが任意に増進されるとはいへ、無限的に進行しないといふ印象を取得する。吾人は、かゝる働きに對し絶對的抵抗の點を認める。さうして斯くあると共に、此の波狀彫形は、最高度に、確實にして同時に能動的なる^{ウンターラゲル}臺に迄適當してあるやうに見ゆる。壓迫の擴張的働きの對する集括的力の彼れが如き反對的勞作は、壓迫の働きのをば一定の絶對的の限界に迄驅逐するやうに見ゆる。此の故に今語り居る波狀彫形の形は、各の波狀彫形の形に特有である所の可動性と最大可能的の確實と記念碑性とを結合するのである。

之と共に、此の波狀彫形は、内容上建築的にしてさうして特に石材建築的の波狀彫形として特徴づけられる。此の際吾人は、依然、内容上石材建築的のものとして、正しく自己の重さによつて自己を主張する所の重壓と、能動的に抵抗する所の臺との間の反對性といふものを認める。吾人は云うた、吾人は、自己の重さによつて絶對的確實に靜止しようとする所の重壓に對し、臺が番に反對的に働くのみならず、即ち能動的に反對に働くのみならず、更にそれが、正しく此の重壓に抵抗し得るやうに見え、進んでは重壓が任意に増進されると吾人が思念しようとも、尙抵抗し得ると見ゆる所の力を以て此の事をなすといふことを要求すると、されど又、吾人は最後に臺が重壓に對しその場所を不可動的に指定し又は指定するべく見ゆるといふ事をも要求する。ところが此の後種の事は、籃狀の正規波狀彫形に於ては可能的に明白無疑惑であるのである。

實際に於て、此の種の波狀彫形の形は、此の如き抵抗が事柄の性質上適當する場合に使用せらるゝのを通常吾人が發見する所のものである。世人は確に思認した、一般建築の波狀彫形並に單一なる曲線的の横面をば、圓形から割斷する事ができると。ところが其の實の所、重壓された波狀彫形、特に柱身を立たしめ居る所のそれは、常に正規の籃狀波狀彫形であるのである。

されど此の場合に既に注言し置くべきは、正規の籃狀波狀彫形の種類に迄「高越された半圓」の形の横面線が屬するといふ事である。世人が此の横面線を此の如く呼ぶのは、之に於ては、自稱的に、一の半圓に對し、兩端に於て、直線的の一片が附加せらるゝからである。全く實行に於ては、此の如き方法に於て、一の建築的に可能なる横面線が作出され得る。されど其の實の所、凡て此の種の彫は、唯、圓線にも直線にも少しも關係を有しない所のものに迄の近接物である。即ち一言を以てすれば、籃狀波狀彫形であるのである。

之と同一の言明は、一緒に附加された圓片及び楕圓片によつて、籃狀波狀彫形として承認されある所の籃狀波狀彫形を通常作出する事に關しても成立する。此の如き作出からしても、唯、現實の籃狀波狀彫形に對する近接物が發生する。

正規の籃狀波狀彫形に迄反對に立ちて、劣正規の籃狀波狀彫形並に超正規の籃狀波狀彫形も、主として製陶的意義と造具的意義とを有する。超正規の籃狀波狀彫形に於ては、特に判明に、柔軟なる支持、並に、勿論絶對的確實にしてそれかというて動的なる抵抗に到達する所の無懸念なる屈服といふものが表現されてある。

第三章 自由直立形

一 直線的減縮形と其の反對形

波狀彫形の多くの變形といふものは、吾人にして、若しも一つの形體が興起し居る所の基底といふものを顧慮するならば、發生する。之に關しても、吾人は種々の假定をなす事ができる。されど吾人は、此の如き假定から發生する所のをば、先第一にそれ自身として考察する。隨つて波狀彫形の特性和いふものを暫らくの間除外して置かうと思ふ。本來波狀彫形なるものは、一方に於ては、總方面的の内部的可動性といふものを前提し、他方に於ては、全體としての形體の上に働く所の一の壓迫の働きといふものを前提する。更に之は、形體が壓迫に屈服し、それかというて、屈服する中に於て彈力的の抵抗をなすといふ事を前提する。但し今茲では、此の最後の二つの動力、即ち屈服と彈力的抵抗といふものを當分念頭に置かない事にする。さうして、此の如くするといふと、形體なるものは、垂直の方向に於て何等の抵抗を爲さない事になる。之を他語を以て表出すると、之は自由に直立するものとして顯現する。吾人は今次に、此の如き自由に直立する所の形體に就いて語つて見よう。

ところが此の如き形體も、甚だ種々なる條件の下に立ち得る。さうして吾人が茲に擧述すべくある所の第一の條件は、基底といふものに關係する。次に吾人はかゝる條件に對し、自由に直立をなす所の形に對する他の條件を附加しようと思ふ。而も此の種の條件は、吾人が後に至つて、波狀彫形に移植すべくある所のものである。

されど茲に述ぶるやうな新研究に於ては、吾人は、その基底の上に立つ所の矩形並に之によつて代表された單一なる直線的圓筒の形から出發しよう。此の種の形體の基底に關しては、先第一に言明さるべくある。曰く、若しも此の如き基底にして、現實に、矩形を興起せしむる所の基底であるならば、然る時には、之は、形體の發生に於ける一の動力でもなければ、又發端的動力でもない。之に反し、形體に對する前提であると。之は形體の中に於て發生したものでなければ、又將來發生もしない。之に反し、形體以前にそこに存在する。之は形體の發生を制約する所の力によつて遭逢されて、單に與へられたる、或るものとしてそこに存在する。之は最良の場合に於て、即ちせいふくの過去の歴史の產物である。

併しながら又、之は此の如くあるのを要しない。そこで、形體の全體的發生、隨つて形體を發生せしむる所の力の一切の働きは、そこから出發し得る。特に基底の廣さといふものは、形體の發生、隨つてその中に働く所の力に對しては、豫定的條件である。即ち之は、かゝる力によつて遭逢された状態であつて、此の力は、若しも此の發生に應當するやうに行動しようと欲するならば、單にかゝる状態を承認せねばならぬのである。

而も形體の發生に對し此の如く前提された發端状態といふものは、一の均衡状態であり得る。いふ迄もなく、之に關しては、水平的力の一の均衡が意味せらるべくある。さうして此の如くするといふと、基底なるものは、水平的の延長力と、水平的の限制力との間の、自然的均衡の状態を表示する。更に、若しもその廣さにして、形體の上部の廣さに均しくあるならば、その基底は必然的に此のやうな状態に於て顯現する。否此の場合には、形體はいつでも、而も自明的に、此の如き自然的の均衡状態中に存在するのである。

かくて今迄に於ては吾人は假定した、それは、形體が、その基底を以て、吾人が實際的可能と稱するやうな有様にあるといふ事を。

併しながら又、基底なるものは、より僅少なる廣さを有する事が能きる。即ち右の如き自然的の均衡状態といふものは、延長力に不利なるやうに、基底中に於て消滅せしめらるゝ事が能きる。此の場合には、基底に於て、一の狹窄作用が發生する。更に他方に於ては、基底といふものは、彼れが如き均衡状態の外に出づる所の廣さを有する事が能きる。之は延長されてあり得る。即ち伸張の状態中に存する事が能きるのである。

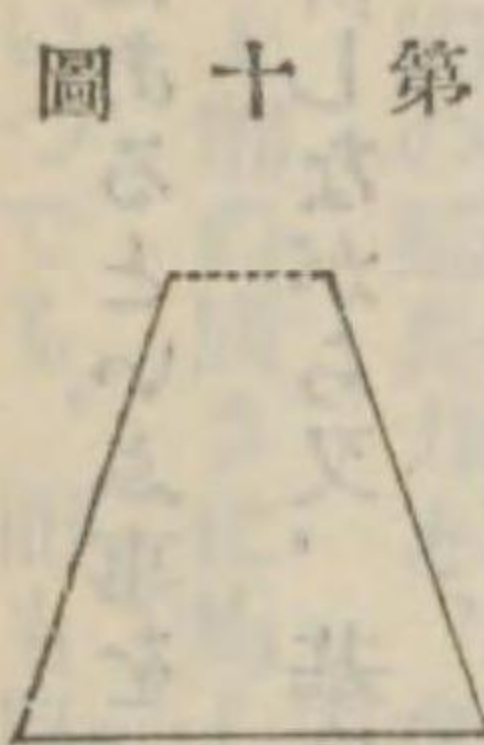
假りに、基底といふものが、それ自身の中に於て、自然の水平的均衡状態の消滅、而も吾人が右の如く狹窄作用と稱する所の消滅を表現すると假定する。かゝる場合には、形體といふものは、その經過中に於て、己れ自身から、水平的均衡の回復を遂げようとする。詳しくいふと、それは、その垂直的經過中に於て、繼續的に益々多く延長しようと努力する。而も始めには急激に、次にはそれが均衡状態に近接する程度に於て、隨つてその状態を己れ自身の中に於て實現しようとの傾向が満足せしめられ、斯くてそれがより弱くなる程度に於て、益々徐々に延長しようとする。

されど此の際二種の可能が存立する。その第一は、吾人が今就いて語り居る所の自由に直立する所の形體が、垂直的に硬固である。或は吾人が又茲に言明し得る如く、絶對的不屈曲的堅確性といふものによつて顯著になつて居る時である。かゝる場合には、均衡状態に迄の復歸は直線的に仕遂げられる。それから之に對立する第二の可能は、形體がそれ自身の中に於て可動的であるのであつて、かゝる場合には、その側面といふものは、曲線を

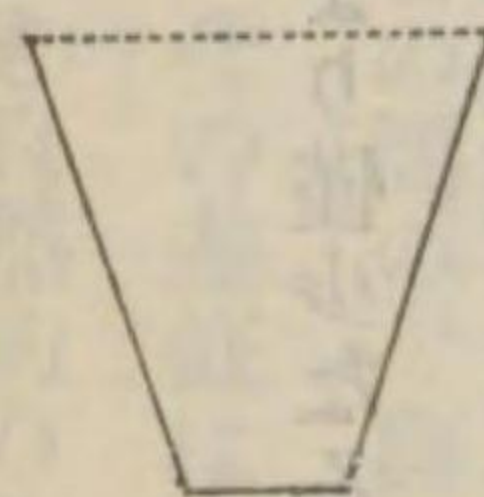
示す。

吾人は今、先第一に、右の第一の可能に立留つて攻究して見よう。此の場合に發生する所の形體といふものは、基底の延長し居る場合に於ては、一の直線的に限制せられ、それかというて下方には擴張し、上方には狹縮さるゝ所のものである。此の如き形に反對する形といふものは、若しも吾人にして、右と反對の假定をなすならば、發生する。それは即ち、基底が、均衡状態以下の廣さを有するといふ事であつて、此の際吾人は再び、形體をばそれ自身の中に於て垂直的に硬固であると思念する。此の場合に於ては、形體といふものは、その經過中に於てその自然的の廣さを取得するに至る迄、繼續的に擴張する。さうして此の種の擴張運動といふものも亦、彼れが如き硬固といふ假定の下では、直線的に仕遂げられる。

而も此の如く述べ來ると共に、吾人が出發點となし、さうして絶對的の根本形と稱し得る所の根本形即ち矩形の外に、吾人は二個の他の根本形を取得するのである。之は次の第十圖及び第十一圖によつて表示される。吾人は今彼れが如き絶對的の根本形をば、第一根本形と稱し、他をば第二及び第三根本形と稱する。凡て此の如き根本形は是硬固なる形である。



第十圖



此の第二及び第三の硬固なる根本形といふものは、今述べたる所に據ると、均衡状態に迄の復歸の單なる傾向の爲に發生する。さうして假令此等の形がその發生に對し、壓迫といふものゝ同時的働きを要しないにもせよ、尙之が重

壓さるゝといふ事を少しも妨げない。之はかゝる場合には、重壓に對し、相反對せる方法に於て行動するやうに見ゆる。

第二の根本形、即ち右の第十圖の形をば、吾人は又、直線的減縮形と稱する事が能きる。ところが此の中には既に根柢に於て、均衡状態に迄の單なる復歸以上のものが存在する。こゝに所謂減縮とは、形體が己れ自身の中に於て減縮するといふ事、換言すれば、繼續的に己れ自身の中に於て水平的に集括するといふ事を言明する。さうして各の此の如き集括といふものは、垂直的働作或は活動性の比較的の増進であり、之は恰も此の逆に、各の擴張が、かゝる働作の減少、隨つて垂直的方向に於ける一の屈服であるが如くある。此の如きが故に、直線的に減縮された形體なるものは、絶えず比較的の増進する所の垂直的働作といふものをその中に帶有する。

さうして此の如き働作は、一の重壓に都合よくならしむる事が能きる。されど此の如く述べると共に、減縮された形の意義に關する上述の言明は、消滅せしめらるゝには至らない。即ち此の形の發生は、依然として水平的均衡状態に迄の復歸の致す所なのである。たと若しも吾人にして、一の重壓が形體に對して働くと思念するならば、此の種の均衡状態が、基底の中に於て、正しくかゝる重壓によつて消滅せしめらるゝやうに見ゆる許りである。即ち重壓といふものは、形體をば、地面の方に驅逐する事により、之を下方に擴張せしむる。さうして之に反對して形體が反動する。即ち正しく此の如き擴張によつて活動を促された所の、集括といふ自然的傾向が反動をする。或は形體が、重壓によつて來さしめられた所の均衡状態に迄復歸しようとの傾向を取る。此の如くして形體の經過中に於て、重壓の擴張的働きといふものは、繼續的に打勝たれる。その結果といふものは、重壓の働

きが全然打勝たれるといふ事である。されど同時に、此の如き打勝ちが起ると共に、彼れが如き反動的傾向、換言すれば彼れが如き自然的狹隘に迄復歸の傾向といふものは、消盡される。随つて全體の過程の最終段階、即ちいふ迄もなく形體の上端によつて表示せらるゝ所の最終段階なるものは、是單なる水平的靜止の段階である。換言すれば、緊張の段階ではなく、之に反し各の水平的運動及び運動傾向の終止の段階、單一なる無緊張の水平的存在の段階たるのである。

さうして之と共に、形體の最初の擴張によつて比較的消滅せしめられた所の垂直的運動といふものは回復される。形體は、その上端の方に再び垂直的延長運動の急激を取得する。而もかゝる運動は、基底の擴張が無いとするならば、その本性中に存する所のものである。此の如き回復から「垂直的働きの彼れが如き比較的の増進」といふものは成立する。之に關しては、吾人は上に、それが減縮作用中に存在すると言明したのである。兎に角形體なるものは、その垂直的延長運動の爲に、重壓を上方に保持する。或は之をば特定の高さの位置に於て保持する。ところが此の種の垂直的働作といふものは、形體の發端に於ては、基底の擴張により、比較的消滅せしめられてある。吾人は一般的に知得した、水平的の擴大なるものは、吾人の印象に對しては、それ自身に垂直的延長運動の減少であるといふ事を。されど減縮作用により、此の運動が、下方から上方への進行中に於て回復せられ、随つて比較的増進する事により、重壓といふものは、始めには徐々に、次にはより急速且つより輕易に高上されて見ゆるのである。

或は之を他語を以て表出すると、重壓の基底に於て仕遂げた所の擴張中に於て、先第一に形體の沈下といふものが存在する。換言すれば、形體の内部中に於て此の如き沈下は發生しない。之に反し、形體といふものは、沈下状態、即ち己れ自身の中に於ける沈縮状態を有して高上する。さうして擴張的働きの打破といふものは、今や自然的に此の如き沈縮状態の消滅として顯現する。されど沈縮状態の消滅といふものは、是一の高上である。此の故に形體は、壓迫の擴張的働きに對して前進的効果を以て反動する事により、己れ自身、並にそれと共に重壓を高上する。之が結末といふものは、形體の被推進状態、並にそれと共に重壓の向上的被推進状態であつて、而も之は、彼れが如き高上する所の形體の内部的働作、即ち反動的水平方向の統括作用によつて來さしめられたものなのである。

之と同様に、此の逆の形、即ち吾人が前に、下方への縮小の形と稱した所の、上方への直線的擴張の形といふものも亦、重壓の帶所有者である事が能きる。されど之は全然異なりたる他の意義に於て此の如きものとなる。之に於ては、形體は始めに狹縮されてある。次に之は繼續的に重壓の働きを受くる。之に於ても亦、下方の狹縮といふものは、自然的均衡状態の消滅といふものであつて、それが前と異なるのは、唯逆の方向に於て然かあるといふ許りである。同時にかゝる狹縮は今、若しも形體がそれ自身として直立せず之に反し重壓されてあるとするならば、次のやうな均衡状態の消滅として顯現する。それは、形體が重壓の働きを受くるものとして自然的にそのやうに存在するといふ均衡状態である。換言すれば、一方に於ては、形體の力、他方に於ては重壓との間の均衡状態の消滅として顯現する。さうして今や形體といふものは、その進行中に於て、此の如き均衡状態の回復、換言すれば、形體の力と重壓との間の均衡状態の回復を遂げようとする。されど此の種の回復は、形體が繼

續的に重壓の下に立つ事により遂行される。此の際發生する所のものは次の如きものである。瞬間ごとに増進する所の重壓の働きといふものは、益々多く、形體の統括力の弾力ある反對的の働きを喚起し、最後には之が壓迫の働きに對して均衡を保持し得る程大になる。さうして其の最終状態といふものは、正しく斯かる均衡の状態である。此の状態は、前に語つた形體、即ち縮小形の最終状態と反對に立ちて、水平的緊張の状態たるのである。されど今の場合に於て重壓が仕遂ぐる所の繼續的の擴張なるものは、同時に、形體の繼續的沈下、即ち垂直的の屈服といふものをその中に包有する。此の故に、形體は益々進んで重壓に屈服し、さうして屈服する中に於て、その屈服に對する確實なる抵抗に迄必要である所の内部的緊張といふものを取得する。

そこで此の如き屈服、而もその屈服によつて得られたる高さ上の位置に於て、重壓を確實に固持するといふ目的或は結果を有しての、重さに對しての屈服といふものをば、吾人は簡単に、重壓の屈服受納と稱する事が能きる。此の如き屈服に對しては、容易く理解し得らるゝ如く、吾人が前に語つた所の彼れが如き高上といふものは直接なる反對に立つ。此の如き反對者をば、吾人は特殊の名稱によつて呼ばうと思ふ。そこで重壓者が、上方運動によつて達せられたる高さ上の位置に於て靜穩確實なる存在を取得するといふ結果を帯びての重壓の高上といふものをば、吾人は「ステッチ支、撐」と呼ぶ。之に反し退縮する所の受納及び固持といふものをば特に「ツライグン支持」と稱する。さうして此の如くするといふと、縮小形と上方に擴張する所の形といふものは、相互に對し、此の支持と支持との如き關係をなす。すべて支持者といふものは、その根本的性質からすると、能動的に己れ自身から發出する所のものである。然るに支持者といふものは、受動的であつて、垂直的に己れ自身の中に集括し、引き戻す所のものである。兩者は同一の事を爲し得る。即ち同様の方法に於て、重壓に對し、一の確實なる場所、特に確實なる高さ上の位置を與へる事が能きる。されど兩者は、此の事をば、今述べたやうな反對せる方向に於てなすのである。

二 彈力的の反動的狹縮と擴張との單一なる諸形

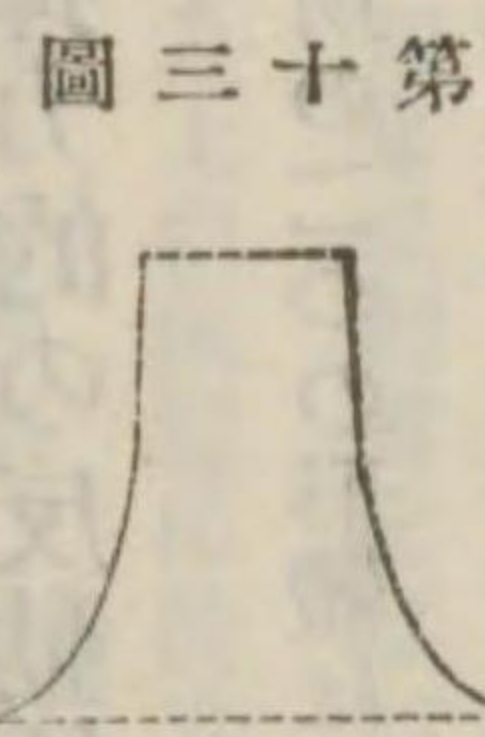
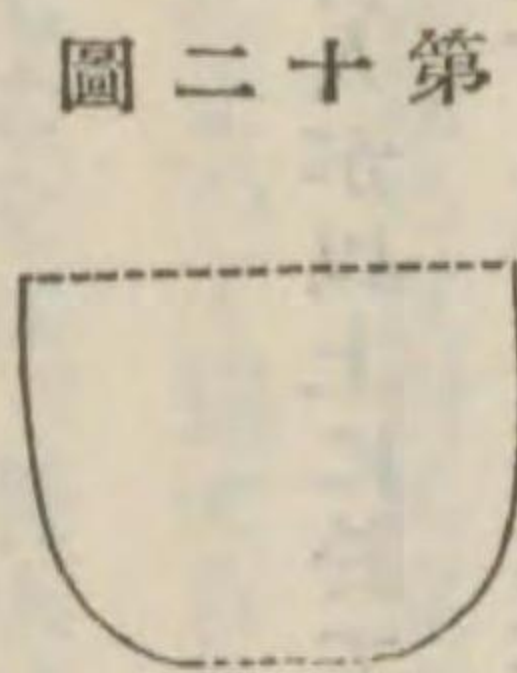
吾人が以上に於て語つた所の二つの形體は、垂直的に「硬固」である。即ち之は、總方面的の内部的可動性を缺如する。ところが吾人にして今、他方に於て、始めに直角的に限制せられその基底の下に立つ所の形體をば、内部的に總方面的可動にして而も先第一に總方面的に同一なる方法に於て可動的であると思念して見る。或は同一の言明となるのであるが、吾人にして、形體に對し、再び吾人の思想に於て、總方面的に同一なる比較的の堅確性を與へて見る。又此の如くすると共に、特に限界線といふものも可屈曲的にあると思念する。

然るに多少の水平的廣がり^に於て、此の如き形體は、その自然の水平的の均衡状態に於て存在する。若しも此のやうな均衡状態にして破壊せらるゝならば、或は之が孰れかの場所に於て破壊せらるゝならば、然る時には、かゝる均衡状態に迄復歸しようとの傾向が發生する。

そこで吾人は先第一に、再び、第十圖及び第十一圖に於ける如く、次の如き假定をなす。曰く、基底といふものは、自然の均衡状態を代表しない。之に反し、之は、かゝる均衡状態の外に出で、狹縮或は短減せられ、若くは擴張或は延長されてある。簡言すると、形體が、基底の狹窄又は展長を有する形體である。されど尙此の外

に、形體は自由に己れ自身に放任されてある。随つて此の形體に對し、或は此の形體の中に於て、自然の均衡状態の破壊を志向する所の他の何等の力が働かないと。

此の如くあると假定すると、形體なるものは、單に、基底の狹窄或は展長によつて破壊された水平的均衡状態の回復を計るべく追求する。而も形體は、此の事をば、吾人の今の假定の下では、曲線的になす。されど如何なる特殊の道程をかゝる曲線が通過するかは明瞭である。即ち基底にして狹窄されてあるか、或は之が一の狹窄を代表する場合には、均衡状態に迄復歸の傾向といふものは、擴張の傾向である。かゝる傾向は、いふ迄もなく、發端に於て最も強くある。随つて擴張は、之に於ては、先づ始めに、最も急速に仕遂げられる。次に均衡状態の回復の傾向が満足せられ、かくて形體が自然の廣さに近接する程度に於て、益々徐々となる。その終極は、均衡状態の十分なる回復である。今や形體といふものは、例へていふと、第十二圖の形を取得する。



吾人は、此の如き形をば、判然「彈力的の下方狹窄」の單なる形と稱する。吾人は又、之をば、彈力的擴張の形、或はより精密に云へば、單なる彈力的の反動的擴張の形と稱し得る。實際に於て、此の形は、彈力的の擴張によつて發生する。換言

すれば、狹窄から自然の廣さに迄の彈力的の復歸によつて發生する。否、彈力性なるものは、形變化を受けた所の形體が、始めの形に迄復歸しようとの傾向に外ならない限りに於ては、此の形は彈力的にある。此の如き傾向は、孰れのものに於ても、始めの形の消滅の程度と共に増大し、さうして斯かる形に迄の近接と共に減少する。

此のやうな形に對する相對物たるものは、右の第十三圖の形である。之に於ては、基底の展長或は伸擴が起生し、さうして形體といふものは、今や、かゝる展長から其の自然の狹縮をなすべく追求する。此の場合には、始めには急速にして次には益々緩徐になる所の内方運動が仕遂げられる。前に舉示した形の轉倒物として現出する所の此の如き形をば、吾人は簡單に、彈力的の下方擴張の單なる形と稱する。或は之をより精密に云ふと、單なる彈力的の閉込み又は狹縮の形と呼び得る。蓋し前の形に於て狹窄が彈力的のものでないと同様に、之に於ても實際擴張といふものは彈力的のものではない。之に反し、彼れに於ては狹窄、之に於ては擴張といふものが單に形體の形に對する假定としてそこに存在する。たゞ形體といふものが彈力的にある。或は一の彈力的の物體である。随つて吾人は、此の如き形をば彈力的擴張の單なる形と稱する事により、吾人は、形體の發生に就いて始めに假定された状態に關して斯く呼ぶのである、されど吾人は、此の形をば、前の形と同様に、次の如き方法に於て呼ぶ事も能きる。それは、基底の狹窄或は展長の始めの状態から結果する所のものを強調するといふ事である。ところが斯くするといふと、吾人は之をば單なる彈力的狹縮或は反動的狹縮の形と呼ぶのである。

茲に並列せしめられた二つの形體は、單に、それ自身に放任せらるゝ事により其の形を取得する。特に此の二つの形體に於ては、一の重壓の働き、随つて又、此の如き働きの内部的消化或はその打破などは、少しも存在しない。それが此の如くあり、さうして同時に形體は垂直的に硬固でなく、之に反し總方面的に可動的と思念されてあるから、二つの形體は又重壓さるゝやうに見ゆる事が能きない。第一の形は、勿論第十圖が表示する所の形體と同様に且つ同一の根據から現出する。詳言すれば、其の下方の擴張の爲に、先づ始めに、即ち下端に於て

垂直的に己れ自身の中に集縮しさうして地面に對し沈下されて見ゆる。次に漸次にそれが狹窄する事により、此の如き始めの状態から脱出する。随つてこれは高起する。さうしてそれが此の事をなすことにより、之は、その上に存在する所の形體、或は上方に繼續する所の形體を持上げるやうに見ゆる。併しかゝる形體は重壓をなさない「重壓」といふ説が示すやうな、下方への働きといふ各の思想は、之に於ては除却されてあらねばならぬ。此の如きが故に、持上げといふものは、輕易であつて各の骨折を伴はない持上げである。即ち、上方に繼續する所の形體が、重壓をする事なしに自己主張をなし、随つて浮泛し得る所の高さ上の位置の作出である。或はかゝる高さ上の位置から右の如き形體が己れを高め、随つて同様に上方に活動してあるといふ高さ上の位置の作出である。此の如き形體は又、支持をなす事が能きる。けれども之は、重壓をば下方に迄移植しない。之に反し之をば己れ自身の中に消化する。

されどもう一つ二つの形、即ち下方の狹窄を有する形、或は單一なる彈力的の反動的擴張の形に於ては、事實關係は全然同様でない。此の如き形は、彼れが如き輕易なる持上げといふ官能には適當して居ない。之が發表する所のものは、その場所に於ける自己の存留、上方に進む所の働作に對する各の指示なしに己れ自身の中に於ける靜止といふものである。寧ろかゝる形の中には、此の如き働作に直接に反對するものが存在する。

ところが此の如く述ぶると共に、特に言明せらるゝのは、二つの形といふものは、決して、石材建築といふ語の前に説示したる意義の特殊の形ではないといふ事である。それ丈之は、陶器の形として、大なる意義を有する。されど此の際に於ても假定されてあるのは、此等の形が何ものをも「遂成」しない、詳言すれば上方に進む所の勞作を少しも實行しないといふ事である。

三 彈力的の反動的狹縮及び擴張に對する特殊の注言

吾人は今以上二つの形を尙進んで推究して見よう。之に關しては尙多少の注言をなすべくある。先第一には、之に於て假定された所の基底の状態に關して注言すべくある。吾人は云うた、此の如き状態は既存のものである。之は最良の場合に於ても、履歴の產物である。ところが之に對して注言すべきは、右の如き状態といふものが、それを産出し得るやうに見ゆる所の履歴なしに、單にそこに存在するといふ事は、成程美的に快感を起さしむるに相違ない。吾人は一つの形體に對し、次のやうな場合には、美的に快感を起す。即ちその形が、その中に於て實現さるゝのを吾人が目視する所の條件から、或は吾人が正しく形の中から讀出す所の條件から、十分自由で發生するやうに見ゆる場合である。或は吾人が形體の中に於て働いて居るのを目視する所の力が、それをば自由に、即ち唯、力そのものゝ内部的合法性に従つて、存在するに至らしむるやうに見ゆる場合である。之に反し吾人は右の如き條件或は力の由來に關しては、彼是問題となさない。吾人は、此の問題が形體そのものにより吾人の中に喚起されない間は、之を取上げない。

併しながら其の此の如くあるといふ事は、條件の存在が、吾人に對し同時に可解的になさるゝとか、又は、上掲の語句を用ふるならば、一つの形の履歴が吾人に語らるゝ場合に、美的快感が増加するといふ事を妨げない。さうして此の事をば、特に、下方の狹窄を有する形に關しては、次のやうな事を意味する、成程吾人は、若しも

存在せる狹窄からして、形といふものが内部的必然性を以て發生する場合には、かゝる形に面して、眞に十分な美的快感を起すといふ事を。されど若しも此の如き狹窄の發生が吾人に對し直觀的になる場合には、美的快感は増加する。さうして之は次のやうな場合には事實である。吾人が例へていふと、右にいふ形體の下方に於て、「脚」が狹縮せらるゝとか、或は吾人が狹窄と呼ぶ所の狹さに迄集括さるゝのを目視するとか、又は一の輪が己れ自身の中に緊縮しながら、狹窄といふものを存在するに至らしむるとかの場合である。さうして今やその基底としての此の上に下方の狹窄を有する形が立ち、且つその經過に於て、此の如き方法に於て吾人の眼前に發生する所の狹隘から、脱出する場合である。之に對する一例は、例へていふと第十四圖の形である。或は第十五圖に於て表示せらるゝやうな、骰形柱頭を有する羅馬式柱である。

圖 四十 第

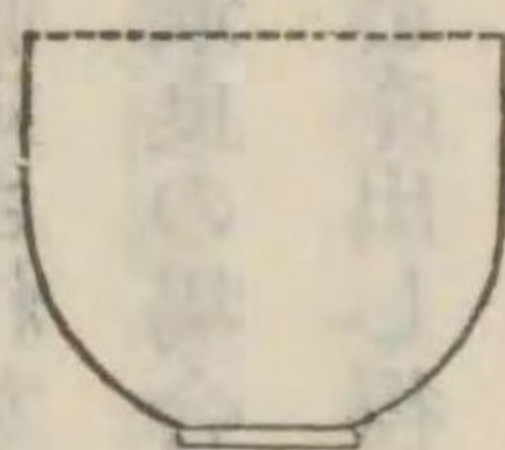
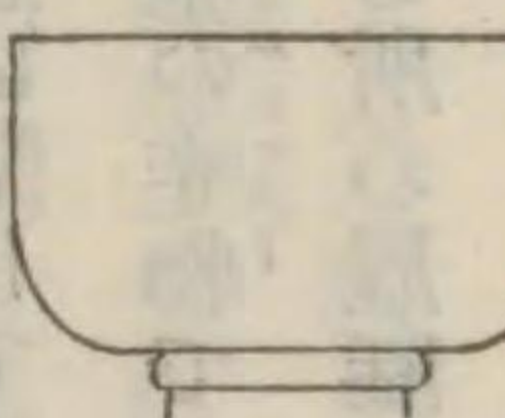


圖 五十 第



此の第二の場合に於ては、柱身といふものの、既に其の下端から始めてその全體の經過中、閉込み或は集中の状態に於てある。されど斯かる閉込み或は集中の存在といふものは、其の上端に於ては、隨つて柱頭に於て起生する所の反動的擴張の開始

場所に於ては、よしや此の場合に一の輪が作成せらるゝとはいへ、尙一層判明に表示される。尙その外に、下方の狹窄を有する形體、即ち今の場合に於ては骰形柱頭といふものゝ全體の履歴に迄は、柱の基底、即ち柱身中に到る所存在する集中作用を發生せしむる所の基底が、附屬する。換言すれば、柱身に於ては、基底に於て始めに廣く地面に迄密着されてある所の全體の柱が總括せられ、次に柱身に於ける斯かる總括の爲に、此の全體の柱は

それが爲す如く然く集中された力を以て、さうして其の結果彼れが如く急速確實に、垂直的に興起するのである。

ところが之と同様の方法に於て、下方の擴張を有する形といふものゝ履歴が、吾人に語られ得る。此の事は、若しも形體の下端に於て一の輪が作成せらるゝならば、最も簡単に遂成される。かゝる輪は、此の場合に於ては形體をば、その下端に於て相互から分離せしむるやうに見ゆるであらう。然るに前に擧げた場合に於ける如く、輪が之と反對の方法に於て働くといふ事は、決して矛盾でない。其の實をいふと、輪といふものに於ては、自己擴張と自己緊縮との両者が存在する。同時に、之は、それが存在する所の場所に應じて、甲若くは乙の印象を起さしむる。今の場合に於ては、之は正しく、後續する所の閉込みと反對に立つが爲に、自己擴張をなすやうに見ゆる。之は恰も、前の場合に於て、後續する所の擴張と反對に立つが爲に、狹窄するやうに見ゆるが如くある。兩場合に於ける共通點といふものは、存在せる狹隘又は廣潤といふものゝ固定或は確保である。即ち兩場合に於ては、輪といふものゝ堅確性の爲に、さうして同時に、形が此の如くそれ自身の中に於て堅確不可變なる狹隘又は廣潤から己れを解放せしむるといふ事情の爲に、かゝる解放の力の印象が増進せらるゝのである。

されど最後に、一の特殊の注言をなして見ると、茲に語り居る所の形に對しとりわけ特徴的である所の尙一の動力が要求される。吾人は前に云うた、始めにその基底に於て擴張又は狹窄された形體といふものは、その均衡状態に復歸するべく傾向すると。斯かる傾向は、均衡状態に迄近接すると共に益々減少し、終極といふものは均衡状態である。併し此の如き終極は、之を嚴密に云ふと、無限性の中に存在する。正しく斯かる近接が益々徐々に遂行さるゝが故に、此の如き終極に迄の近接は、唯漸次線的であり得る。此の事は意味する、横面線が、彼れ

が如き終極、随つて均衡状態に益々近接する、併し之を曾て遂了する事がないといふ事を。若しも横面線にして斯かる均衡状態を得達するならば、之は終極點に於ては、一の垂直の直線に迄變化するであらう。此の故に、吾人は又言明し得る、之が漸近線的に垂直線に近接すると。併しながら之は、正しく此の事をば、唯漸近線的、即ち無限的の近接に於てのみ爲し得る。

とはいふものゝ、二つの形態は正しく必然に有、限的なる形態である。此等は上方に無限的に進行する事は能きぬ。さうして若しも此の如く進行せぬとするならば、形態なるものは、その上端に於て、吾人の印象に對しても、「終極に到達し居る。」されど此の事は唯、その終極が、自然の靜止状態、或は十全なる均衡の状態と見ゆる場合に於てのみ、可能である。吾人は正しく事實的に、その上端の先きの方に進行しない所の形態を目視する。

ところが此の如き矛盾といふものは、少くとも、吾人が茲に假定するが如き形態が上方に自由に終止するならば、唯一つの方法に於て解決せられ得る。蓋し、その垂直的經過に於て有、限的に限制された所の、下方狹窄を有する形態が、未だ均衡状態を取得しないといふ事は、之が、よしや益々僅少なる程度に於てあるとはいへ、以後已れを擴張するべく追求するといふ事を言明する。ところが此の如き思想は、次のやうな場合は消滅せしめられる。それは、形態が狹窄即ちその自然の均衡状態の此の如き消滅から解放せらるゝ事により、同時に、反對の方向への斯かる均衡を消滅せしむる所の一の擴張的の力に屈服する場合である。此の如き擴張的力の働きといふものは、閉込みの反動的傾向を發生せしむる。さうして此の傾向により、今や、始めの狹窄に對して反動である所の彼れが如き進行的擴張の傾向は消滅されて均衡状態に達せしめられ得る。

之は又、第十二圖の種類の形の觀照からいつでも發生する所の印象である。されど彼れが如き擴張的力は、重さ、而も、形態が上方に自由に終止する場合には、必然的に、自己の重さとして現出する。随つて唯此の如き重さといふ假定に於てのみ、形態といふものは、その上端に於て完成的に見え得る。さうして此の逆に、若しも之が事實的に完成的のものと現出するならば、之はいつでも、形態の進行中に於て漸滅する所の自己の重さといふ右の如き性質を有する。而も之により、吾人が前にかゝる形態に就いて再三語つた所の、それ自身の中に靜止するものといふ性質は增高される。此の如き「漸滅する所の重さ」に就いては、以下に於て直に語らう。

さうと茲に語つた形の先端に於て尙一の擴張の傾向が存在すると同様に、下方の擴張を有する形態の上端に於ては、多少の閉込みの傾向が尙存在する。さうして再び、此の場合に於ても、斯かる傾向が存立し而も形態が完成的のものと現出するといふ事よりして、一の矛盾が發生する。けれども此の矛盾は、右の如き閉込みの傾向が消滅せしめられて見ゆる場合には、解決される。さうして之が此の如くなるのは、形態中に於て自發的に閉込みを追求しそれかというて他方に於て上方に消滅するといふ傾向が働き、かゝる傾向に對し形態がいふ迄もなく一の擴張の傾向を以て反動する場合である。かくなるといふと、此の如き反動的の擴張傾向といふものは、彼れが如き閉込み傾向の殘餘に對し均衡を保持し得る。されど此の場合にも再び此の逆が成立する。詳言すれば、若しも吾人にして形態をば上方に有、限的に限制されたものと認むるならば、閉込みの此の如き漸滅する所の自發的傾向は、吾人の印象上、形態中に事實的に存在せねばならぬのである。

閉込みの此の如き漸滅する所の自發的傾向に關しては、直にもう一步、進んで次に語らう。

四 漸滅的の壓迫と漸滅的の閉込み

フエムクリンゲン

アインエンゲン

吾人が此の題目に移り行く前に、吾人は先第一に、再びより一般的なる考慮をなすべくある。吾人はかゝる考慮をば、次の如き事をなすことによつて始める。それは、吾人が尙一度、判然、一方に於ては、右に語つた形、他方に於ては波狀形に於ける垂直的働作或はその方法と條件とに關する原理上の反對性を指示するといふ事である。彼れ即ち波狀形に於ては、形體の垂直的延長及びその形が假定されてある。簡言すれば、未だ波狀形、形なしの一の完成的形體が假定されてある。さうして之に對し壓迫といふものが、變化を及ぼしながら働きを及ぼす。更に之に對し再び形體が抵抗をなす。換言すれば、之は變化に對し、形及び高さの回復の一の傾向を提起する。さうして此の如くして、形體はその存在でなく波狀形を形取得する。ところが右に語つた形に於ては、全然異なりたるものが問題に取上げられる。即ち之に於ても、或るものは假定される。併し之は、形體の發生に先行しさうして形を確定する所の要素として形體の發生に關與する所の一の不可變的狀態である。

此の如き反對性は重要なものである。之が故に吾人は茲で尙暫らくの間立留つて考察する。吾人は言明する、形體の發生に對して假定された状態からして、右に語つた形に於ては、形體といふものが其の形を取得すると。同時に此の際に於ても再び、基底の閉込みを有する形と、その擴張を有する形との間に、十分なる反對性が存在する。由來「狹窄」なるものは、その發生の出發點に於て形體の部分が凝集せらるゝといふ状態である。此の事は部分が狹縮の外に出でさうして之と同時に上方に向ひ始めには徐々に、次にはそれが狹縮から解放せらるゝ事に

より益々徐々に追求するといふ事を來さしむる。此の故に、始めの狹窄からしては、一の漸次に遲緩する所の垂直的働作、或はそれ自身の中に微弱になる所の垂直的働作が發出する。之に反し、之と反對の場合、即ち擴張された基底を有する形體に於ては、擴張を離れて形體中に存在する所の一の垂直的働作が、擴張によつて束縛せられ、さうして擴張からの解放によつて再びその力を働かす。此の如き反對性をば、吾人は既に、第一の形を沈下する所の形、第二の形を高揚する所の形と稱すると共に、承認した。されど各の場合に於て、形體なるものはそれに強制された發端状態、隨つて閉込み又は擴張から發生し、さうして此等から解放せらるゝ事により其の垂直的存在を取得する。然るに、吾人は繰返して云ふが、波狀形に於ては、此の如き存在といふものは與へられたものとして假定されてあり、さうして今や全然、與へられたる垂直的延長の比較的主張といふものが問題となる。之を簡言すると、基底の閉込み或は擴張、又は之に對する反動といふものが、形體の發生、特に垂直的方向に於けるその發生に對しての一の動力である。之に反し波狀形を來さしむる所の壓迫といふものは、存立し居る所の形體に關係し、さうして既成的の形體が取得する所の形に對する條件である。此の如き反對性といふものは、最も判明に牢記さるべくある。

されど斯かる反對性といふものは、次述のやうな單一なる空間的形體の發生に對する尙他の條件に迄吾人を誘導する。その形體とは、下方の狹窄或は擴張と類似し、さうかというて他方に於ては之と原則上異なりたる意義を有するものなのである。吾人は之迄、重さといふものが既に種々なる方法に於て働くのを知得した。波狀形に於ては、之をば形體に迄働く所の重さとして知得した。此の如き重さに對し波狀形は抵抗をなす。之に反し

以前に吾人は、一の重さに就いて語つた。それは垂直的働作によつて打破せられ、而もその打破により垂直的働作を消耗せしむるものなのである。

ところが此の如き二つの考へ方には、第三の考へ方が對立する。

吾人は今、自由に直立する所の形體に於て、次のやうな重さが働くと思念する。即ち此の重さは働くが、併し之は、上方から形體を壓迫する所の一の重壓の重さとしてなく、又、到る所の空間中に於て働きさうして垂直的働作の一の衝動に對し進行の各の瞬間に於てかゝる働作に其の度毎に接觸しさうして其の度毎に此の働作により打破さるゝやうな重さとしても働かない。之に反し吾人は此の重さをば、かゝる衝動の類同物、詳言すれば一の形體の發生の發端瞬間に於て開始する所の一の衝動自體として思念する。ところが、此の如き重さの衝動、或は此の如き瞬間的壓迫といふものは、第一次的に垂直的、隨つて上方から下方に働く事は能きぬ。何となれば、若しも此の如きものであるとするならば、之は、一の重壓の壓迫、又は到る所の空間中に於て働く所の重さと同意義のものとなるからである。之に反し之は、第一次的には水平的に働き、さうして唯第二次的に垂直的方向に於ける一の働きを及ぼさねばならぬ。換言すると、之は第二次的には水平的方向を取り、形體を擴張せしむるやうに働く。さうして之と同時に、之は第二次的に、形體の垂直的緊縮を來さしむるやうに働く。併しながら斯かる重さの衝動が働く事により、之は、形體の内部的凝聚の力の反對的働きを喚起する。さうして此の兩者、即ち彼れが如き衝動の働きも此の反對的働きからして、一の垂直的の緊張が發生し、此の緊張は再び垂直的方向に於ける轉轍の傾向を己れ自身から發生せしめ、進んでは垂直的の運動を己れ自身から發生せしむる。此の如き運動に

より緊張といふものは弛緩される。隨つて瞬間的壓迫は、緊張を通して垂直的運動に迄移行せしめられる。

此の際特に、吾人のいふ重さの「衝動」と形體の垂直的行動との關係に留意すべくある。此の關係は兩方面的にしてさうして相反對せるものである。吾人は云うた、重さの衝動、或は之と同意義である所の壓迫といふものは擴張をなさしめさうして之と共に高さ上の延長を減少せしむるやうに働く。之は此の故に、先第一に垂直的働作を絶滅せしむる。形體は、垂直的の延長運動を斷念する。而も此の如き運動の單なる靜止といふ意義に於けるものでなく、之に反し反對的運動といふ意義に於けるものを斷念する。形體は垂直的に己れ自身の中に復歸する。即ち之は沈縮する。されど壓迫が、その擴張的の働きによつて彈力的の反對的働き、或は形體の總括的力の彈力的抵抗を喚起する事により、形體は再び垂直的の働作を取得する。隨つて壓迫は、それが否定した所のものを再び作出する。或はそれをば再び己れ自身から發生せしむる。かくて壓迫によつて來された沈下といふものは、彈力的の反動により、高揚といふものを發生せしむる所のものである。或は、沈下なるものは、己れ自身から彈力的の反動として上方への運動を發生せしむる。此の際留意すべきは、己れ自身から、即ち一の加入する所の刺衝なしに、沈下からして垂直的の運動が進出するといふ事、並に、此の事が内部的必然性を以て起生する。或は重さの衝動を受くる所の形體の内部的合法性からして起生するといふ事である。

されど吾人は、此の如き全體の進行を尙一層精密に叙述し得る。彼れが如き屈服或は沈縮は、始めには急速に次にはそれが喚起する所の反對的働きの爲に、益々徐々に起生する。之に反し、之から發生する所の高揚は、始めには徐々に次には急速に起生する。されど最後に、此の高揚は、恒常的に平等なる垂直的運動に迄移行する。

ところが、吾人は、此の如き重さの衝動、即ちそれが自ら喚起する所の總括的力の反對的働きの爲に、垂直的働きの産出或はかゝる働きの回復をなす事により離散する所の、かゝる重さの衝動をば、簡単に「漸滅的壓迫」と稱しようと思ふ。

此の如き漸滅的壓迫をば、吾人は上に、直立する所の形體に對し上方から働く所の壓迫、即ち一般的に第一次的に上方から下方に進む所の重さの働きに、對立せしめた。然るに斯くあるとすると、今や、之が形體そのものゝ中に於て働きさうして内部から形體を擴張せしむる所の壓迫であるといふ事のみが残存する。随つて此の如き壓迫といふものは、必然的に彼れが如き「重さの衝動」であるのである。

されど吾人は、此の如き衝動をば、二重の方法に於て惹起されると思念し得る。第一には、形體を成立せしめ居る所の集塊の重さとして思念し得る。吾人は暫くの間、形體の集塊が無限的に多くの重なり居る層に迄分割されあると思念する。斯くするといふと、形體自らの重さなるものは、斯かる層の重さとなる。各の上方の層の重さ、或はかゝる層から發出する所の壓迫は、その下に存する所の層に迄移送される。最後に、最下の層に於て、全集塊の壓迫が總括されて見ゆる。ところが之と共に、吾人は正しく、重さの「衝動」といふ語が言明する所のものを得る。吾人は實に、一般的の衝動といふものゝ下には、或る瞬間而も必然的に一の形體の發生の發端瞬間に於て起生する所の刺激といふものを理解する。かくて今や、吾人の重さの衝動も、形體の發生の發端瞬間に於て一度に起生する所の刺激となる。否彼れが如き最下の層なるものは、美的觀照に對しては、正しく形體の發生の發端瞬間に外ならない。之は恰も、一般の美的觀照に對し、垂直的方向に於て繼起する所の吾人の形體の部分が、不分割なる形體の發生に於ける諸瞬間に迄變化するが如くあるのである。

併しながらかの容器コンテナに於ては、吾人は、彼れが如き自己の重さをば、集塊の重さの代りに、それを充填する所の液體の重さとも解釋する事が能きる。否、かゝる液體に關しても、上になした考察法といふものは、效力を有する。即ち液體の重さの働き、或は之から容器の壁に對して及ぼす所の壓迫といふものは、形體の底に於て總括される。随つて均しく、形體の發生の第一瞬間に於て開始する所の重さの衝動の働きである。或は、かゝる瞬間に於て起生する所の壓迫である。されど各の場合に於て、此の如き重さの衝動に對して特徴的である所のもの、即ち水平的に擴張しさうして二次的に高さを減少せしむる所の働き、並に、正しく斯かる働きからの、或は右の擴張的働きによつて喚起さるゝ所の緊張からの、始めに比較的に消滅せしめられた垂直的働きの發生などは、依然として存立する。又緊張及び此の如く再び取得された働きの彼れが如き衝動の分散といふものも存立する。簡言すれば、吾人が茲に漸滅的壓迫といふ名稱の下に總括する所のものは依然存立するのである。

此の際吾人は尙特に次のやうな事に留意をする。曰く、若しも吾人にして壓迫をば漸滅的の壓迫と呼ぶならば、然る場合には、吾人は之により、常に事實的でなく、更に内部的必然性を以て漸滅する所の壓迫、換言すれば、緊張に迄、並に之を通して垂直的働きの迄、移行する所の壓迫を意味すると。併し此の如き必然性は、吾人が茲に語る所の壓迫の性質、或は單なる重さの「衝動」の本性中に存在する。さうして重さが此の如き單なる衝動であるといふ事とても、自然に、之が形體の内部的の重さ或は自己の重さであるといふ事と共に與へられる。詳言すれば、之が、形體の限界の間の空間を充實する所のものゝ重さ、或はかゝる空間の中に於て働く所の重さであ

つてさうして上方から形體の垂直的働作に反對的に働く所の重さでないといふ事と共に與へらるゝのである。されど最後に、吾人は次のやうな事を尙判然強調する。それは、自己の重さをば、集塊の重さ又は一の容器中にある液體の重さを解釋するといふ事は、先第一に合悟性的の解釋に外ならぬといふ事である。換言すると、吾人に對しては、決して、吾人が語る所の形の中に、彼れが如き、發端的の重さの衝動が存在するといふやうにあるのではない。何となれば、吾人は、形體の集塊の壓迫、又は形體中にある所の液體の壓迫は、形體の底に集括されてあるといふ事を知得するからである。之に反し吾人の美的印象に對しては、而も茲では唯かゝる美的印象のみを問題として居るのであるが、吾人が目視する所のものゝみが存立するからである。さうして吾人は、形體の形に於ては、その中にある液體に就いて何ものをも目視しない。吾人は、美的觀照の眼を以ては、たゞ形のみを目視し、さうして此の形に於ては、形體が始めに屈服し、次に、かゝる屈服の外に出で、直立するのを目視する。更に吾人は、此の如き行動を遂げしむる所の力をば之に於て目視する。さうして吾人は、かゝる力が、それ自らの内部的合法性に従つて働くのを「目視」する。又吾人は、かゝる力のあるのをば、再び美的に信ずる。何となれば吾人は之を目視し且つ此の力を信じ得るからである。されど吾人が斯かる力を信じ得るのは、斯かる力に關する思想が自然的にあり、且つ結局する所、吾人自身よりして吾人に全然熟知されてあるからである。吾人は實に吾人自身よりして、次の事が何を意味するかを最もよく知得する。それは即ち、始めに屈服しさうして己れ自身の中に復歸し、次に力を集聚しさうして力の此の如き集聚を根據として己れ自身から發出するといふ事であるのである。

唯一つの事が、後に述ぶる所のものを前以て取上げながら、茲に尙附加さるべくある。若しも形體にして特定の材料から形成せられ、さうして此の如き材料が、吾人に對し自己の重さといふ直接的の印象、隨つて屈服及び屈服しながらの沈縮並に自己擴張等に迄の用意といふ直接的の印象を與ふるならば、然る時には又、材料の此の如き直接的の印象からして、吾人が茲に語る所の形といふものは、可信的に見ゆるのであるのである。併しながら此の事は、形が之により始めて一般的に可信的になるといふ事を意味するのではない。之に反し今は唯、材料の内部的本質性或は性質の印象が、その材料の適入する所の形の印象と矛盾をしないといふ要求が充たさるゝ許りである。尙此の事に關しては、一般的に材料の性質と形との關係を論ずる場合に始めて語らるべくある。

ところが、重さの衝動といふ此の如き動機、詳言すれば此の衝動といふものは、「衝動」としては必然的に同時に一の漸減する所の重さの衝動、或は「漸減的壓迫」であるのであるが、此の如き重さの衝動といふ動機には、一の他の動機が直接に對立する。それは即ち「狹縮の漸減する所の衝動」といふ動機である。右の如き思想は、その必然的の反對相として此の如き思想を發生せしむる。吾人は、漸減する所の壓迫或は内部的重さの衝動が、擴張的に働く事により、形體の總括的力の働作を喚起するのを知得した。然るに此の如き働作は、それ自體として考察されるといふと、一の狹縮する所の働作である。之は、内部的重さの衝動により消滅せしめられた、形體の始めの狹縮の回復を仕遂げようとする。さうして此のやうな働作は、結果する所の二つの緊張の反對的働きから己れ自身を垂直的運動に變換したり或はかゝるものに分散したりする事により、内部的重さの彼れが如き衝動と同様に、漸減する。ところが狹縮の此の如き漸減する所の働作なるものは、勿論事實的には、一の純然たる反

動的のものである。之は、重さの衝動により存在を促される。けれどもそれ自體として考察されるといふと、之は正しく此の如き狭縮の漸減的働作たるに外ならぬ。さうして吾人は今之をば實際に於て全然それ自體として、或はそれがそれ自體としてある所のものと考察する事により、之は吾人に對しては、一の反動的のものでないやうになる。之は今や思想的に獨立化せられ、さうして斯くなると共に、一の自發的の衝動といふ見地の下に現出するのである。

而も此の如く述ぶると共に、吾人は今や狭縮の自發的に漸減する所の衝動といふ思想に到達する。此の衝動は隱黙の間に、漸減する所の壓迫を受くる形體中に、一緒に包有されてある。勿論之は、單に隱黙の間に存在する所のものとしては、一の「衝動」ではなく、之に反し反動的働作である。併し之は説明或は獨立化を要する。さうするといふと、吾人は該當する所の自發的の衝動といふ思想を取得する。

さうして此の如き思想を吾人は今浮出する。随つて吾人は、今、重さの一の衝動でなく、之に反し重さに對して向注された運動衝動が、始めの垂直的に眞直なる横面を有しそれかというて内部的には總方面的に可動なる形體中に於て働くと思念する。かゝる衝動は、彼れが如き「重さの衝動」の反對相であるからには、之は此の衝動と同様に、第一次的に働くものでなく、之に反し、之は、外部から内部に迄第一次的に向注されたもの、簡言すれば閉込みの衝動である。されど彼の衝動と同様に、此の衝動も、第二次的には垂直の方向に於て働く。之は、此の事をば、同種にしてそれかというて同時に他方に於て其の反對せる性質に該當するやうに、反對的方法に於て爲す。即ち此の衝動も亦、先第一に反對的働きを喚起する。けれども斯かる反對的働きたるや、形體の擴張

的力に對する反對的働きである。此の如き狭縮の衝動は、かくあると共に、水平的の緊張に迄變化する。併し此の緊張は、再び、垂直的働作に迄分散される。随つて閉込みは、緊張を通して垂直的働作に迄移行する。或は、閉込みの衝動なるものは、第二次的方法に於て、垂直的働作の衝動である。即ち垂直的の直立或は伸張の衝動である。此の種の働作は、彼のやうな衝動から發生する。併し之は直接的に、之から發生する。此の場合に於ける事實關係は、前の場合に於けるが如く、先始めに、高さの減少が發生せられ、さうして此の減少は、緊張を通して垂直的働作の回復に迄變化するといふことではない。之に反し此の場合には直接的に、漸減的衝動の働きが、垂直的の延長運動に迄移行行く。又此の場合に、垂直的働作が、漸減する所の壓迫に於ける如くに、屈服によつて回復さるゝのではない。之に反し此の際には一の新なる垂直的働作が作出される。形體なるものは、沈下して次に再び己れを高揚するのではない。之に反し之は直接に己れを高揚せしむる。或は自發的に上方に迄伸張する。さうして此の如き伸張的働作は、彼れが如き漸減的壓迫といふ動機から發生して、始めには比較的消滅せしめられ次に回復されたといふ垂直的働作の如く、始めには徐々にして次に急速であるのではない。之に反し之は、第一の瞬間に於て最も急速であり、次に徐々となる。併しながら全體の過程の終極といふものは、此の場合に於ても、漸減的壓迫に於けると同一である。即ち全體の内部的運動が平等に進行し上方に向注された運動に迄の移行といふ事であるのである。

此の如く述ぶると共に、茲に語つた二つの動機と同種性と反對性とは、十分明瞭する。その總本質からすると、漸減的壓迫を有する形體なるものは、沈下したり、垂直的に己れ自身の中に復歸したり、屈服したりする所の形

體である。之は、屈服する事により始めて、さうして屈服する事により取得された緊張を根據として、堅確性を取得し、此の堅確性の爲に一の垂直的働作を行ひ得る形體、即ち己れを高揚せしむる所の形體である。之は、一の静止状態を追求發見し、次にかゝる静止状態から己れを高むる。或は之から、若くは之と共に取得された確實なる位置から、己れを直立せしむる所の形體である。之に反し、漸滅的の閉込み働作を有する形體なるものは、寧ろ、此の如き豫備なしに、唯一度的にしてさうして次に漸滅するといふ急動を以て、己れ自身から發出して直立をなす所の形體である。前者は、全體に於て或はその差別的の根本本質上、受動的であり、後者はその根本的性質上、能動的である。

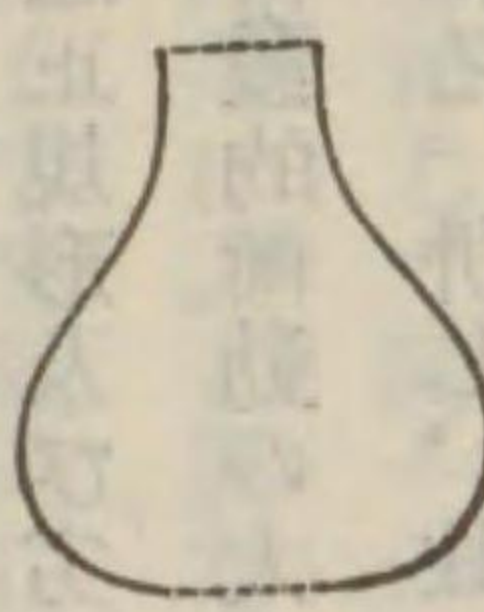
吾人は今、緊張を通して同時に垂直的働作に迄移行しさうして此の際己れ自らを漸滅せしむる所の右の如き閉込みの働作をば、判然、漸滅する所の閉込み働作、或はかゝる働作の漸滅的「衝動」と稱する。随つて斯くあるとすると、吾人は今や、二つの新奇なる形構成上の動力を取得する。それは即ち、上方に潰滅する所の壓迫と閉込みの漸滅的衝動である。二つの力は自發的性質のものであつて、反動的性質のものではない。されど兩者は、かゝる力をば、それが喚起する所の反動によつて潰滅せしむる。或は之をより精密に云へば、之が始めに存在を促がした所の緊張が垂直的働作に迄分散する事により、之を潰滅せしむる。

五 漸滅的壓迫と漸滅的閉込みを有する自由なる直立形

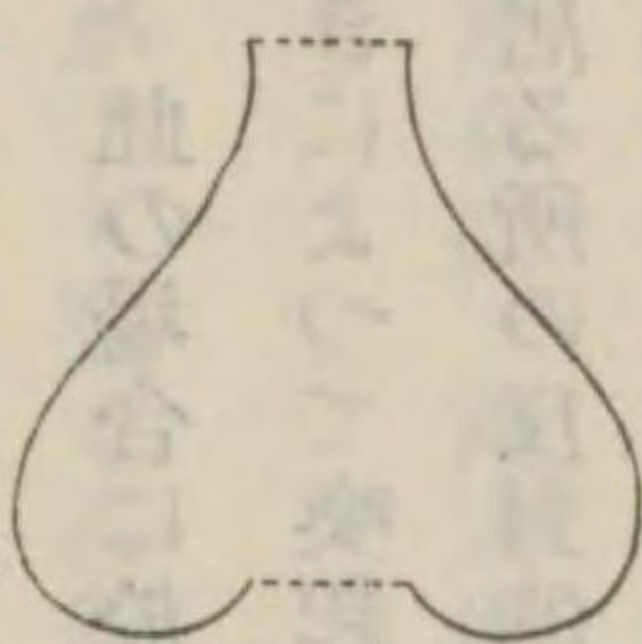
さて、二つの衝動、即ち吾人が漸滅的壓迫と稱する所の内部的重さの衝動と、閉込みの漸滅的衝動とは、先第一に、吾人が前に波状列形といふものに就いて語るべく始めた時に作つた假定、即ち直立する所の形體の基底が自然の均衡状態を代表するといふ假定の下に働く事が能きる。されど確に留意すべきは、吾人は茲には尙一度波状列形の形に就いて語るのではなく、之に反し「自由に直立する所の形體」といふものに就いて語るといふ事である。

そこで、若しも吾人にして先第一に、此の如き形體中に於て、漸滅的の壓迫といふものを働かしむるならば、第十六圖のやうな種類の形が發生する。茲に示した形は、一の正規形である。之は、壓迫の働きが喚起せしむる所の彈力的の反對的傾向が、壓迫に均しくあるといふ假定の下に發生する。之は次のやうな場合には、超正規形例へば第十七圖のやうな形となる。それは、壓迫がより大であり、随つて彼れが如き彈力的の反對的傾向に對し或る程度の惰力的抵抗が加はり、壓迫に對し均衡が保持せらるゝ場合である。他方に於て、若しも壓迫がより小である場合には、之からして第十八圖のやうな劣正規形が發生する。かくあると共に、形といふものは、直に、

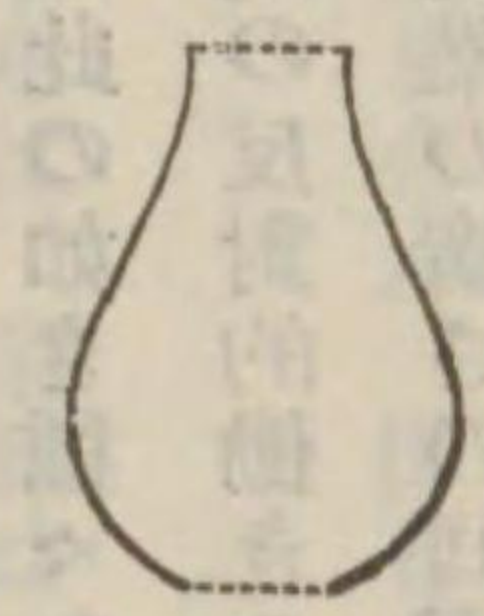
第六十圖



第七十圖



第八十圖



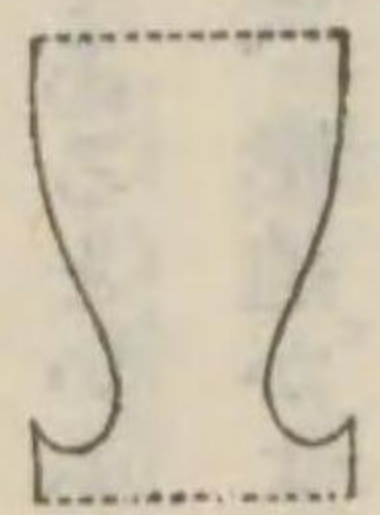
比較的に第一次的に存立する所の働作の産物であるやうに見えねばならぬ。

更に他方に於て、右と同一なる假定、即ち基底が自然の均衡状態を代表するといふ假定の下に狭縮の漸減的衝動が形體中に於て働くと思念する。今や第十九圖から二十一圖に至る迄の形が發生する。それは即ち漸減的狭縮の正規形、超正規形及び劣正規形である。此の場合に於ても、吾人が此の如き種々なる名稱を以て呼ぶ所の種々の性質は、自發的衝動の大きさと、その働きによつて喚起された彈力的反對的働きの大きさととの間の關係によつて來さしめられる。併し、茲に取上げられ居る所の反對的傾向、即ち自然の廣さの回復の傾向といふものは、内部的堅確性のかゝる特殊の種類のために、その部分の水平的壓縮に抵抗しようとの、形體の能力によつて來さしめらるゝのである。

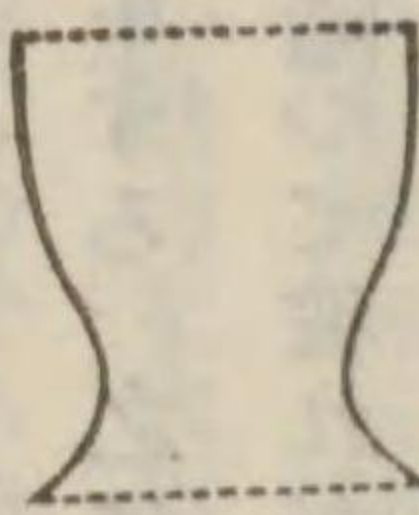
第二十圖



第二十一圖



第二十二圖



第二十圖及び十七圖の超基本形に於ける屈曲の特殊性に關しては、次の事に留意すべくある。曰く、吾人が茲に語る所の狭縮的働作といふものは、その性質上、外部から内部に迄働く。之は恰も、第十七圖に於て働くと思念された壓迫が内部から外部に迄働くが如くにある。此の事は兩者に於て意味する。此等は、側面的限界線の各の點に於て此の限界線が當該の點に於て有する所の方向に迄垂直的に働くといふ事を。ところが此の如き方向は水平的である。即ち働きといふものは、限界線が垂直的にある限りは、純然たる水平線に於て起生するのである。

併しながら此の限界線が、壓迫又は狭縮的働作の影響の下に益々多く屈曲する事により、此の線の方向といふものは變化される。即ち働きは、兩場合に於て、限界線の各個の點に對し、限界線が此の點に於て有する所の方向に迄垂直的に働くべく繼續する。けれども正しく之が故に、その働きの方向を示す所の線といふものは、益々多く變位する。さうして此の事は意味する、限界線の一の部分にして、此の如き連續的の屈曲に於て水平線に益々多く近接すればする程、此の部分に對する壓迫又は狭縮的働作の働きといふものは、益々多くはや水平的方向に於て起生せず、之に反し垂直的方向に於て起生する。さうして屈曲にして益々先きに進むならば、然る時は、一方に於て、壓迫の働きからして、下端に於ては吾人が超正規波状形といふ名稱の下に既に知得た所の形に類似する所の形、更に換言すれば限界線の外方屈曲が發端に於て下方屈曲として現出するといふ形が、發生し、かうして他方に於ては、漸減する所の狭縮的働作からして、之に類似せる形の内方屈曲といふものが發生するといふ事を。

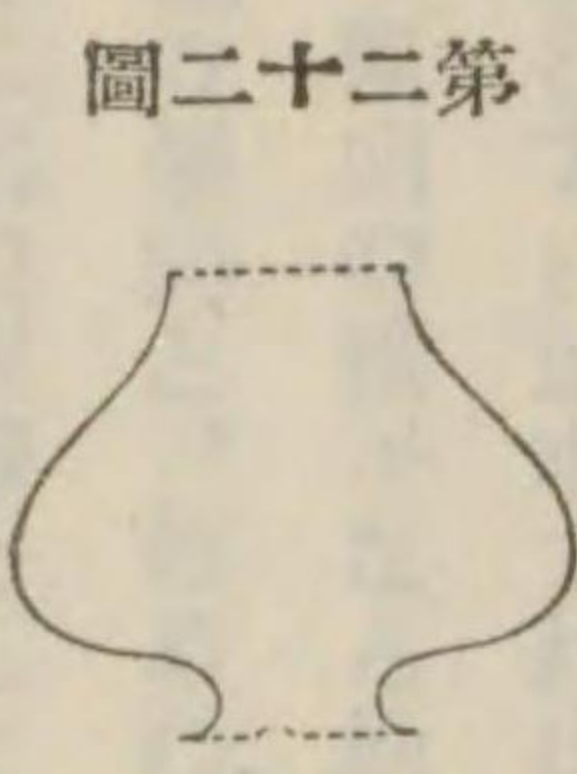
されど最後に、同一の形體に對し漸減的壓迫と狭縮の漸減的衝動との兩者が働くといふ事は除却されてあらぬ。勿論兩者にして同一の強さを有するならば、兩者は單に相互に消し合ふ。併し二つの力の強さが同一でない場合には、結果は之と異なる。

即ち吾人にして先始めに、狭縮的衝動がより強くあると假定するならば、形體は始めに狭縮される。之と同時に、之に對し、同時的に存在する壓迫が反對的に働く。之により、同時に、此の衝動は消耗される。之に反し自己の重さの働き、隨つて壓迫なるものは、狭縮的衝動の反對的働きによつて消耗されない。此の故に、之は、彼

れが如き衝動が消耗した後に、或はそれが消耗する程度に於て、その働きを及ぼさねばならぬ。次に若しも吾人にして壓迫をより強くあると思念するならば、事實關係は之と同様でない。かゝる場合には、狹縮的働作が一の絶對的の狹縮を發生せしむるといふ事は除却されてある。之に反し其の働きといふものは、唯それが壓迫の可觀的働きを減少せしめ、さうして次に進んで、壓迫が漸滅するべく始むる所に於て、均衡状態に迄の形體の近接を促進するといふ事から、成立する。之を他語を以てすると、形體の發端に於ては、脹出が狹縮的衝動の反對的働きによつて阻止されねばならぬ。併し兩者の反對性といふものは、一の緊張を發生せしめ、此の緊張は横面を此の場所に於て伸張せしむる。即ち直線に近接せしむる。次に、横面のより急速なる内方屈曲が繼起する。此の故に脹出の形といふものは次の如くある。始めには側面のより伸張された發出、次にはより急速にしてそれかというて漸次に、即ち狹縮的衝動の漸滅と共に、再び緩漫になる所の狹縮といふものであるのである。

茲に説示した形の反對性といふものは、恐らくは尙特殊の明瞭化を要する。抑もかゝる反對性は、二つの衝動の反對性から發生する。形體なるものは、壓迫に對して堪忍的態度に出づる。狹縮する事に於ては、之は能動的である。ところが此の働作なるものは、打破をなす事により、或は各の反對的働きに對して抵抗をなす事により消耗される。之に反し此の逆に、壓迫といふものは、それが狹縮的働作を阻止する事により、消耗されない。否茲に語り居る所の壓迫なるものは、内部的の重さから發出するのであつて、かゝる重さたるや、吾人が茲では再び單一化する爲に、液體の重さと思念し得るものなのである。さうして此の如き重さは、その働きが或る場所に於て消滅せしめらるゝ場合に、消失もしなければ又減少もしない。之に反し之が結果といふものは、唯、かゝる働きが阻止せられ、さうしてそれを妨害する所のものもはやそこに無いやうになるや否や突進する。此の際吾人にして、若しも重さをば液體の重さと依然として思念するならば、然る時に吾人は表象し得る。曰く、狹縮的働作により、液體が高められ、さうして之と共に先第一に、即ち形體の下端に於て、その働きが妨害されると。併しながら斯くなると共に、液體は除去もされなければ、又その重さをも喪失しない。之に反し、之は今やその働きをば、より高い位置の場所に於て及ぼす。さうして此の如き働きは、それが現した所の尖小的働作にしてより急速に潰滅すればする程、益々急速、或は益々突然たらざるを得ない。

ところが人によりては思認するかも知れぬ、重さといふものがたとひ働かないにもせよ尙その働きは存留しさうして唯その働きが變動すると同様に、尖小的働作も、たとひ働かないにもせよ尙その衝動といふものは存留しさうして附加的に働き得ると。けれども此の如き思認は奇怪なる誤謬である。狹縮的「働作」なるものは、かゝる働作の衝動とは、かの重い集塊が、それが及ぼす所の壓迫と異なつて居るが如く、異なつて居ない。此の場合に衝動といふ語は、働作が少しも反動的のものでないといふ事以外の何ものをも言明しない。此の故に、此の語は全然その性質を表示する。此の語は、働作そのものから異なるその源泉を表示しない事、恰も集塊の重さが確にその働きと異なる所の源泉であるといふ事を表示するが如くあるのである。



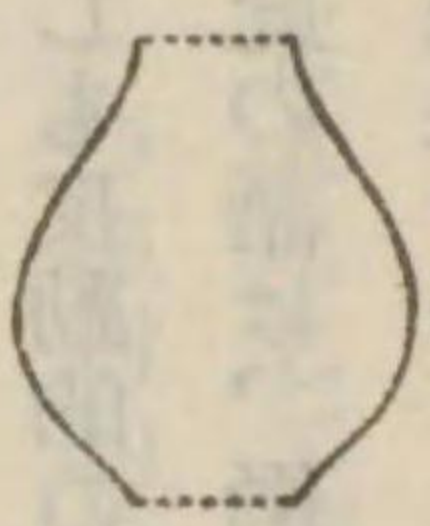
圖二十二第



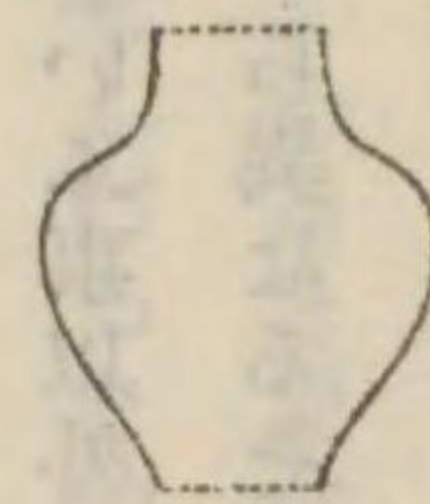
圖三十二第

ところが人によりては思認するかも知れぬ、重さといふものがたとひ働かないにもせよ尙その働きは存留しさうして唯その働きが變動すると同様に、尖小的働作も、たとひ働かないにもせよ尙その衝動といふものは存留しさうして附加的に働き得ると。けれども此の如き思認は奇怪なる誤謬である。狹縮的「働作」なるものは、かゝる働作の衝動とは、かの重い集塊が、それが及ぼす所の壓迫と異なつて居るが如く、異なつて居ない。此の場合に衝動といふ語は、働作が少しも反動的のものでないといふ事以外の何ものをも言明しない。此の故に、此の語は全然その性質を表示する。此の語は、働作そのものから異なるその源泉を表示しない事、恰も集塊の重さが確にその働きと異なる所の源泉であるといふ事を表示するが如くあるのである。

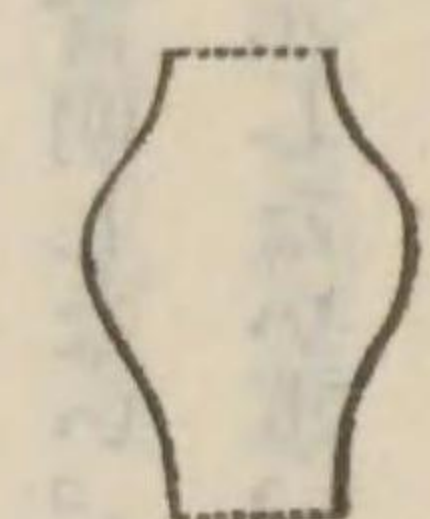
圖四十二第



圖五十二第



圖六十二第



ちやうど今右に於て擧示した場合の第一に於て發生する所の形をば、第二十二圖と二十三圖とが解説する。次に第二の場合に於て發生する所の形は、第二十四圖から二十六圖に至る圖により表現される。

六 下方の狹窄と擴張とに於ける漸滅的壓迫と

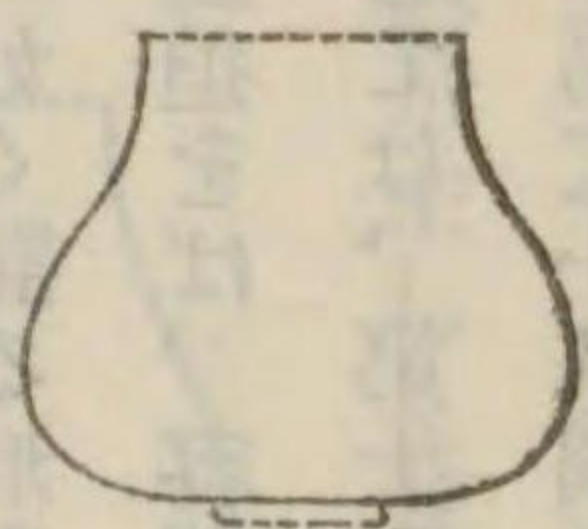
漸滅的閉込み

漸滅的壓迫と漸滅的閉込みとの二つの力、或は同一の言明となるのであるが、形體の垂直的發生の發端に於て開始する所の、それ自らの重さの働きと、一の垂直的働作を發生せしめ此の働作中に於て分散せらるゝ所の閉込み或は集中といふ二つの力は、上述したと同様に又、基底の狹窄或は擴張といふ假定の下に働くと思念する事ができる。かゝる場合には、彼れが如き二つの力の働きといふものは、吾人が上に既に知得したる如く、基底に於て消滅せしめられた均衡状態に迄復歸といふ反動的傾向を遂行する所の働きと結合される。

吾人は先第一に、狹窄された基底を有する形體中に於て、特定の量の内部的壓迫が存するとの假定をなす。詳言すれば、發端に於て與へられそれかというて次に漸滅しながら側面的に擴張し而して之と共に壓伏をなし且つ

形體の進行中に於て己れ自身の中に潰滅する所の力が存するとの假定をなす。此の如き場合には、第二十七圖の種類の形が發生する。

圖七十二第



併し此の如き圖に對しては、尙二種の事が注言せらるべくある。それは、第一にはそれ自身の中に漸滅、擴張、壓伏する所の力が此の圖に於て比較的に大であると思念される。此の故に、此の力は、形體をば、その自然の均衡状態以上に擴張せしむる。かくある結果、此の場合に、水平的の均衡状態に迄復歸の傾向といふものは、狹窄の

傾向として可觀的になる。かゝる傾向は、形體がその基底に於て狹窄せられさうして此の狹窄の外に、随つて擴張の方に追求すればする程、益々急速に減少される。此の場合には、横面線の此の上の進行といふものは、二つの傾向の徐々なる均衡状態の取得として現出する。二つの傾向とは、擴張的力の働きによつて來さしめられた狹窄の傾向と、始めの狹窄から脱出の傾向とであつて、更に換言すれば二つの傾向が相殺されてあるといふ均衡状態に迄の復歸として現出する。此の如き相殺が遂行さるゝ所の點といふものは、形體の自然的上端である。

されど第二に、吾人は今、壓迫が僅少になり、かくて最後に、壓迫の働きが孰れの點に於ても自然の均衡状態の外に出でしめず、随つて、形體が、壓迫の働きを別にして、即ち下方の狹窄から脱出の單なる傾向の爲に志向する所の擴張よりもより大である所の何等の擴張を發生せしめない程僅少になると假定する。此の場合には、第二十八圖の形が發生する。即ち吾人が下方、狹窄の、純粹なる、形に於て目撃する所の、益々緩徐に遂行さるゝが故に無限的に進行する擴張の傾向が、漸滅する所の内部的壓迫に對し、孰れかの場所に於て平均されてあるといふ形

が発生する。

圖八十二第



併しながら此の形體の横面線といふものは、既に第十二圖に於て示したものの以外のものではない。茲に語り居る所の形なるものは、他語を以て云ふと、上に既に「單一なる下方狹縮」の可能なる有、限的の形と稱した所のものである。此の形は、狹縮から外方に迄向注し、それから、恒常的に而も何等の狹縮をも経過せず、垂直的の直線

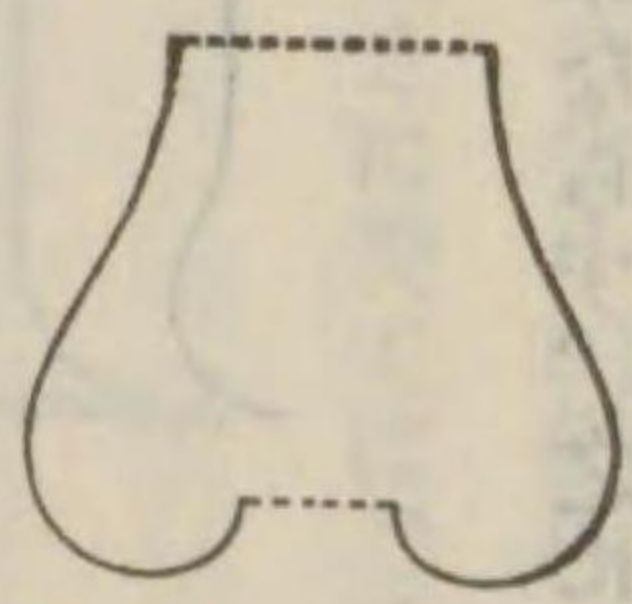
に迄移行する。ところが此の種の形體、隨つて詳言すれば、下方に狹縮せられ次に順次に始めは急速に後には徐々に擴張しさうして其の横面に於て上方に迄益々多く眞直なる垂直線に近接し且つ最後に斯かる線に迄移行するといふ形體なるものは、吾人が實際に於て見聞しさうして快感的の印象を起す所のものであつて、而も之ぞ實に第二十八圖の内部的本質性の形體であるのである。併し此の事は言明する、此の如き形體に於ては、いつでも、狹縮に對する單一なる弾力的の反動を別にして、尙一の漸減する所の内部的の壓迫が假定されてあるといふ事を。此の如く語る形なるものは、吾人に對し特に内容形として現出する限りに於ては、吾人は此の場合に特に、内部的壓迫をば、容器中にあるとか、又は此の中にあると思念された所の液體の壓迫と解釋する事が能きる。尙之に關しては、第十二章の第三項に於て述べたものを比較せよ。

同時に第二十八圖に於ける形體、並に之と同様に第二十七圖の形體は、正規の形體、詳言すれば直立の力が壓迫の垂直的働きと均衡を保持し居る所の形體として現出する。かゝる均衡の爲に、形體をばその發端から下方に迄追ひやるべき壓迫から、防禦される。さうして之と同様に、其の横面線は、正しく發端に於て横に上昇する所

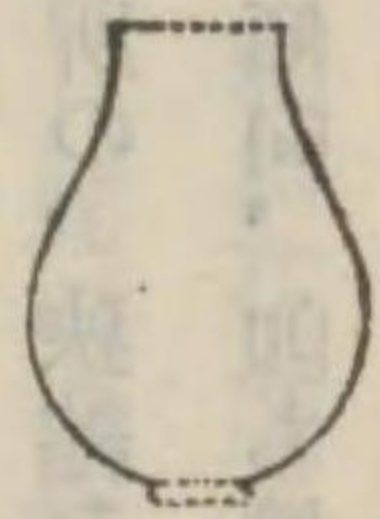
のものである事が能きぬ。之に反し之は水平的方向に於て開始する。

但し此の如く述べると共に既に言明せらるゝのは、此の場合に於ても、規範形には、超正規形と劣正規形とが該當するといふ事である。此等二つの形は、第十七圖及十八圖の形に該當する。それが此等の形と異なる點は、此等の形が正しく波狀削形であつてさうして「自由直立形」ではないといふ事情である。

圖九十二第



圖十三第



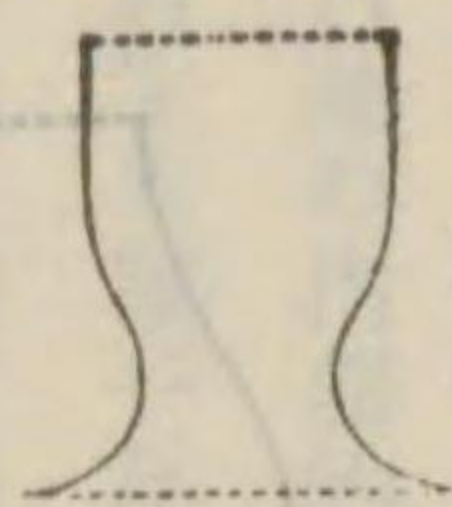
ところが吾人は、前に、自發的にしてさうしてそれ自身の中に漸減する所の、側面的の擴張且つ之と共に壓伏をなす傾向、或は下方から上方に迄減少しさうして最後に「漸減」する所の壓迫といふものには、反對相として、自發的

にしてさうして右と同様に漸次に漸減する所の集中或は閉込みといふものを對立せしめた。之は、形體の水平的の凝集である。されど正しく此の如き凝集からして、一の該當する所の垂直的働作又はかゝる働作の増進といふものが發源する。さうして凝集或はその衝動が漸次にそれ自身の中に潰滅する事により、之より發源する所の垂直的働作に對しても、之と同一の事が起生する。

然るに此の場合に於ては、吾人は先始めに、前のやうに、下方の狹窄といふものを假定しない、之に反し基底の擴張或は伸展といふものを假定する。かゝる伸展からして形體は發出追求し、隨つて基底の伸展によりそれが喪失せしめられた所の自然の均衡状態を取得するに至る迄、狹縮に向つて追求する。さうして之が爲に、形體の發端に於て、隨つて右の復歸が仕遂げらるべく始まる所の場所に於て、狹縮の一の自發的働作が現出する。若し

も斯かる働作にして十分強くあるならば、之よりして自然の均衡状態以上に狭縮が発生する。さうして今や、狭縮の反働的傾向と形體に對して加へられた此の如き狭縮に對する反働的傾向とが、相互に對立する。此の第二の傾向といふものは、それ自身に於て一の脹出の傾向である。さうして此等二つの傾向は今や均衡状態に入るやうになる。形體といふものは、正しく此の事が起生した所に於て終極に到達する。茲に爲された假定の下に發生する所の形は、第三十一圖の形である。此の形の特質といふものは、下方の廣さが上方の廣さより大であるといふ事、及び發端に於て上方の廣さ或は終結の廣さ以上に出づる所の狭縮が行はれるといふ事である。横面線は、斯る閉込みの最大の狭縮の場所から先に、彼れが如き均衡傾向の爲に、垂直なる直線に近接する。

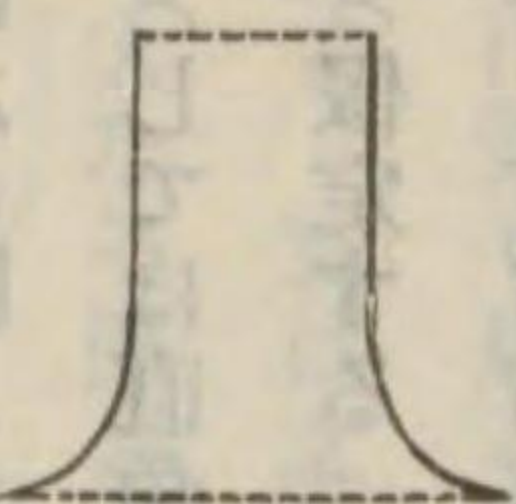
圖一十三第



併し此の場合に於ても、吾人は漸減する所の狭縮的働作を益々僅少になると思念する事が能きる。最後には之が甚だ僅少になつて、爲に、之が形體の自然均衡状態以上に出づる所の、狭縮を行はず、且つ之により解發せられさうして該當する所の僅少なる反働的傾向、即ち擴張の傾向がその働きの進行中に於て益々多く狭縮を消滅せしめないのみならず、之に反し全然、次のやうな傾向と均衡を保持すると思念する事が能きる。その傾向とは、基底の伸展により喚起せられて、よしや益々多く減少するとはいへ尙、無限的に進行する所の、狭縮の反働的傾向である。かゝる場合には、伸展された基底を有する一の形が発生するのであつて、此の種の形たるや、第十三圖の下方擴張を有するそれ自身に放任されたといふ形に近接し、それかというて同時に一の完成的の形體、即ちそれ自らの内部的本質上有限的に限制されてある所の形體であるのである。此の際、横面線は、常に純然たる垂直線に漸近的に近接するのみならず、更に最後には之は斯かる垂直線に迄移行し、それかというて正しく之と同時に、その終極に到達する。此の逆に、それ自身に於て完成的なる第十三圖の形體は、いつも、それ自身に放任された形體が伸展された基底から自然の均衡状態に迄單に復歸するの實例として、隨つて單一なる彈力的の反働的狭縮の形として考察さるべくあらぬ。之に反し常に實際に於て、同時に一の自發的にしてそれかというて漸減する所の尖小的働作を働かせ居る所の形である。之に就いては第十二章の第三項を比較せよ。此の如き働作の中等の強さに於ては、第三十二圖の「純然たる走出」の形が発生する。

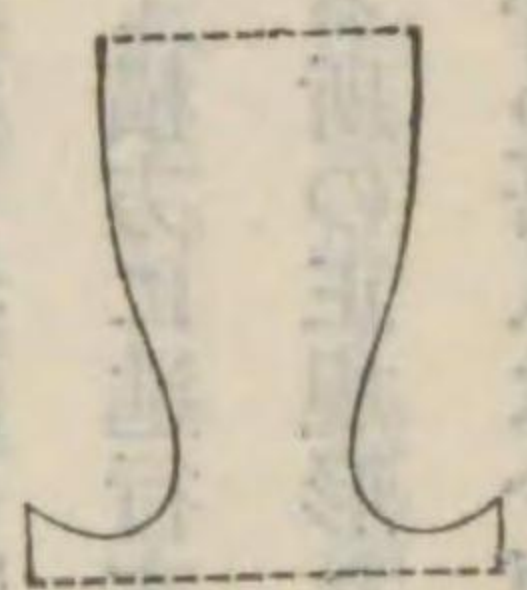
尙その外に、此の場合に於ても亦、正規形の外に、超正規形と劣正規形とがある。超正規形の特性は第三十三圖により表示するのであるが、之が発生を理解する爲には吾人は再び、前の第二十圖に關し注言した事項を顧慮せねばならぬ。されど此の如き超正規形は、擴張の反働的傾向にしてそれを喚起せしめた所の閉込衝動の以下に強度に於て立止まれば止まる程、或は形體が益々多く「柔軟」であればある程、益々確實に發生する。此の逆に、若しも彼れが如き反働的傾向と並にそれと閉込み衝動との間の緊張から發生する所の垂直的働作とに對し、「第一次的の」垂直的働作が加はるならば、然る場合には、右と反對したる形、即ち横面線がちやうど發端に於て横方に進行する所の第三十四圖の形、即ち劣正規形といふものが發生する。此等二つの形に吾人が對立せしむる所の正規形なるものは、いふ迄もなく、横面線が主として水平的に經過する所の形であるのである。

圖二十三第

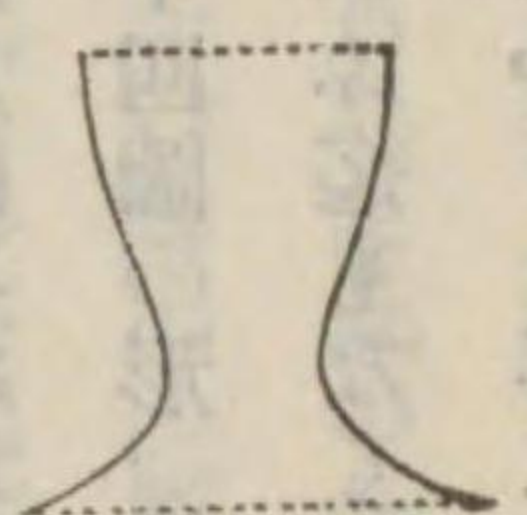


併しながら吾人は今更に進んで次のやうな事に留意せねばならぬ。曰く、吾に下方の狭縮を有する、或は狭縮

圖三十三第



圖四十三第



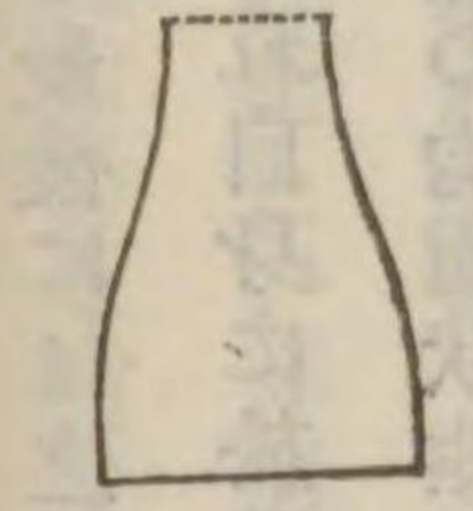
する形のみならず更に狭縮された基底を有する形も、一の自發的にしてそれかというてそれ自身の中に漸滅する所の狭縮的力の働きを受け得るといふ事にも留意せねばならぬ。

吾人は之に關し先始めに此の第一の可能を眼中に置いて見よう。單一なる矩形によつて代表さるゝ所の一のそれ自體としては直角なる形體が、それ自身に於て總方面的に可動的であり、さうして一の擴張された基底から高起すると假定する。さうして此の如き形體中に於て、その性質上それ自身の中に麻痺する一の内部的壓迫が、形體中に於て下方擴張の爲に働く所の、狭縮の反動的傾向に反對的に働くを假定する。かゝる場合には、第三十五圖から三十七圖に至る種類の形が発生する。此等の形も亦正規形から劣正規形及び超正規形かである。此等は基底の擴張の消失に於て、隨つて閉込みの反動的傾向の消失に於て、第十六圖より十八圖に至る圖が示す所の正規形、劣正規形、或は超正規形に迄それゝ變化せらるゝに應じて甲若くは乙のものとなる。

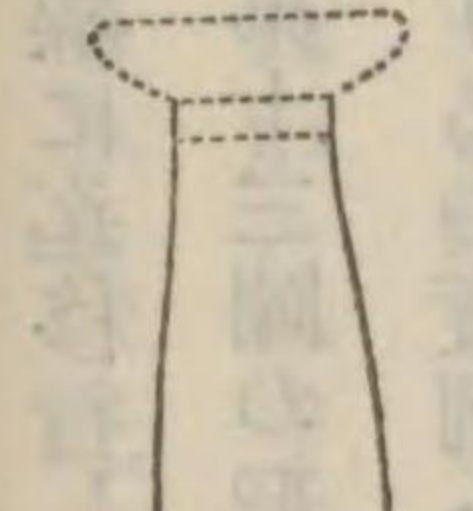
圖五十三第



圖六十三第



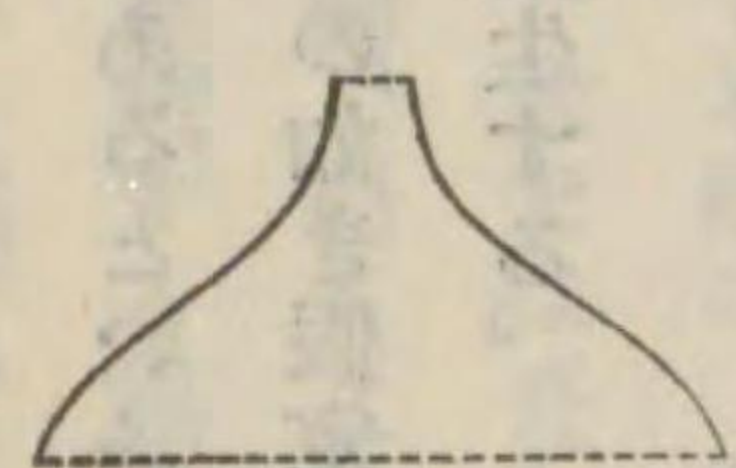
圖七十三第



此の第三十六圖と三十七圖とは、劣正規性の特殊の實例を代表する。此等は劣正規的である。詳言すれば、此等に於ては、反動的傾向から獨立的に、一の自發的の垂直的に伸長する力が働く。同時に、内部的壓迫と狭縮の反動的傾向とは、發端から先きに、次のやうな具合に均衡を保持する。それは横面が始めに垂直的に上昇し、垂直的運動から直接に均衡状態に向注するべく始め、さうして恒常的前進に於てかゝる状態にまで移行するといふ事である。此の如きは、壘の形の或る種類に對して特徴的にある。されど尙此の外に、「腹脹」を有する「ドリック」柱身の形に對しても特徴的にある。尙此の事に關しては、吾人は後になり立返つて數語を費す事にする。併し茲に語り居る所の凡ての形の外觀に對して決定的である所ものは、いつでも先第一に、内部的壓迫と、基底の廣さ、或は之より結果する所の、基底の伸展から均衡状態に迄復歸の傾向の量との強さの關係である。基底のより大なる廣さと餘りに大ならざる壓迫に於て發生する所の形といふものは、例へていふと第三十八圖の形である。

尙その外に、之に迄は、特に指示さるべくある所の二三の他の形が屬する。一體、一の形體の水平的均衡状態

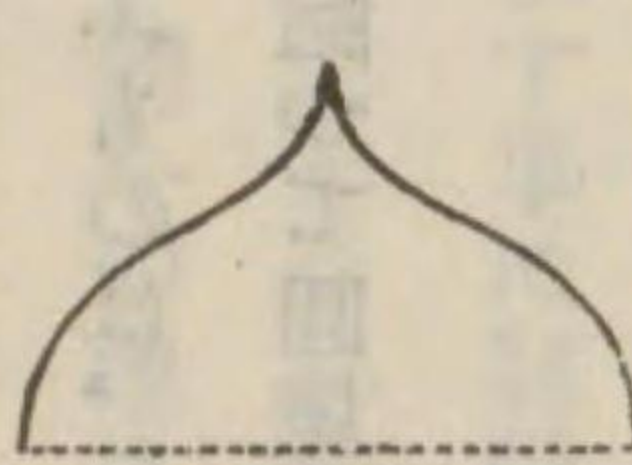
圖八十三第



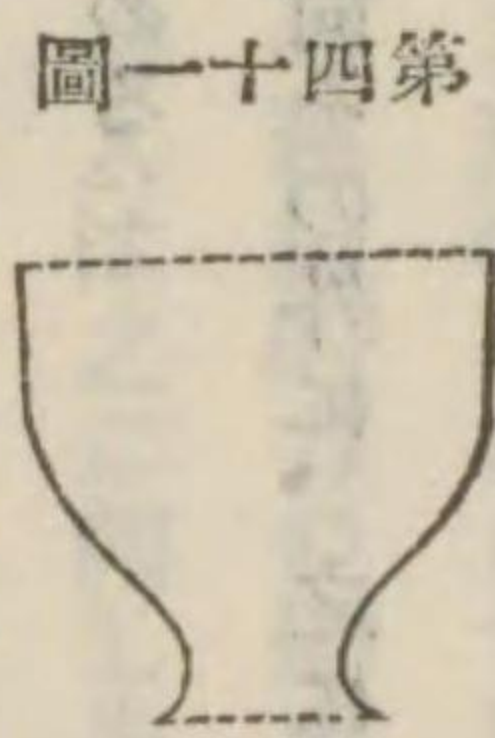
圖九十三第



圖十四第



といふものは、より長いか又はより短い上部の限界線によつて表現せられ得る。その極端の場合、此の線の長さが \parallel であるといふ事である。かゝる場合には、形體といふものは、その経過に於て一の點に迄變化するべく志向する。此の如き假定の下に、第三十九圖及び四十圖の形、隨つて圓屋頂の形として熟知されある所の葉形及び鱗莖形が発生する。



圖一十四第

右に擧述或は表示した形には、再び次のやうな場合に發生する所の形が對立する。

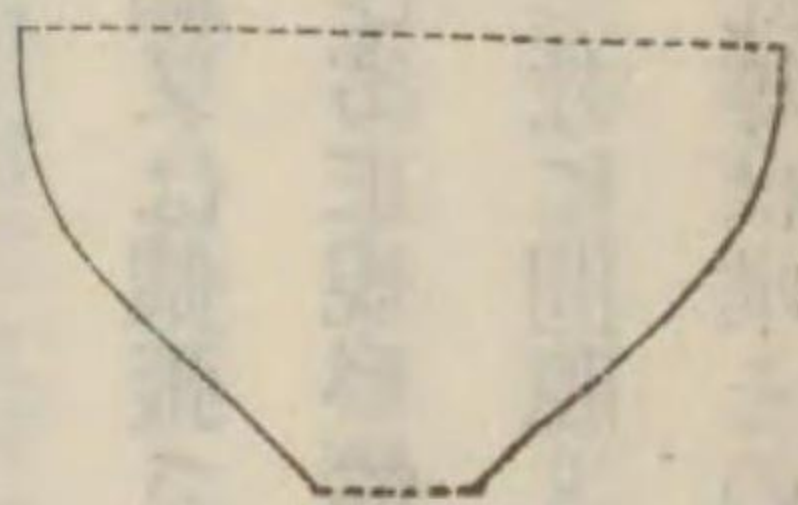
それは、吾人が基底の始めの閉込み或は狹縮、即ち一の狹窄といふものを假定し、さうして今や形體中に於て一の自發的にしてさうして其の働きの進行中に於て漸減的に狹縮しさうして之と同時に直立するといふ働作を働かしむる場合である。かゝる場合には、例へていふと第四十一圖の形が発生する。之に對する條件は、閉込みの力の十分なる大さである。詳言すれば、擴張或は基底の狹縮から解放の自然の傾向に對し、正しく次のやうな具合に均衡を保持する所の閉込みの力である。それは、自發的に閉込む所の力が麻痺する時に始めて彼れが如き反動的傾向が働き出すといふ事である。自發的に閉込む所の力にして減少するか又は比較的減少するならば、右の如き形は、第四十二圖の形、進んでは第四十三圖の形に迄變化する。

此等の形に關して注言すべきは、此等の形に於ては、脹出と尖小とが唯比較的の脹出及び尖小であるといふ事である。此の事は言明する、此等は、今の圖に於ては、唯全體といふものゝ擴張の、或は全體といふものが始めの閉込みから自然の均衡状態に迄復歸の進行的過程の遅緩又は促進であるといふ事を。

圖二十四第



圖三十四第



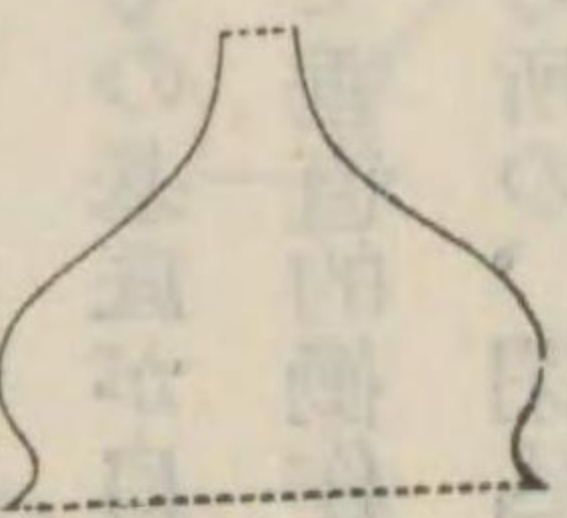
此の如き言明は、例へていふと、第四十三圖に關して次の事を意味する。下方の閉込に於ける最大の狹縮の場所といふものは、形體の下方の廣さよりもより廣くあり、さうして纏起する所の比較的脹出の最大の廣さの場所は、形體の上方の廣さよりもより少く廣くあると。此の事に留意する

るといふことは、吾人が次に直に擧述すべくある所の形も、比較をなす爲に重要である。此の形は、茲に語つたものに類似して居る。けれども今説示した點に於て、同時に之と性質的に異なつて居るのである。

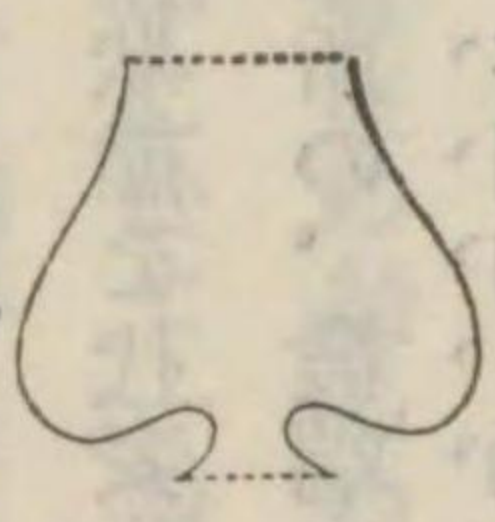
茲に思惟し居る所の形は、次のやうな場合に發生する。吾人が前に下方狹縮又は擴張を有する形に於ける漸減的壓迫又は漸減的閉込みの働きの關し言明したものに對して次の事を附加する場合である。即ち此等二つの形に於ても、その基底が自然の水平的均衡状態を代表し居る所の形體に於けると同様、二つの動力、即ち形體の進行中に於て垂直的働作を發生せしむる所の、發端に於て開始する壓迫と、垂直的働作に迄分散しさうして之により漸減する所の、閉込みの衝動とが、共同的に働くといふ事である。此の事が如何に思念され得るか、前に言明した。茲では吾人は、之から發生する所の二三の形を示す事に制限する。上に述べたる如く閉込みの one より強い衝動、而も之により one のより弱い壓迫が敢へて消滅せしめられず之に反し單に彼れが如き衝動が潰滅するや否、又潰滅する程度に於て、隨つて此の潰滅が起生すると同一の速さを以て働き出すといふ意義に於て排逐せらるゝといふ、閉込の one のより強い衝動なるものは、第四十四圖及び四十五圖が示すが如き形を發生せしむる。

壓迫が開始する力の優越、或は形體の自己の内部的重さが働く所の力の優越は、第四十六圖から五十九圖に至る種類の形を發生せしむる。基底の狹縮又は擴張の働きが此等の形に於て如何に可觀的になるかは、第二十二圖より第二十六圖に至るものとの比較が示す。吾人は茲では、正規形、超正規形及び劣正規形の反對性に關し立戻つて説明をなさない。

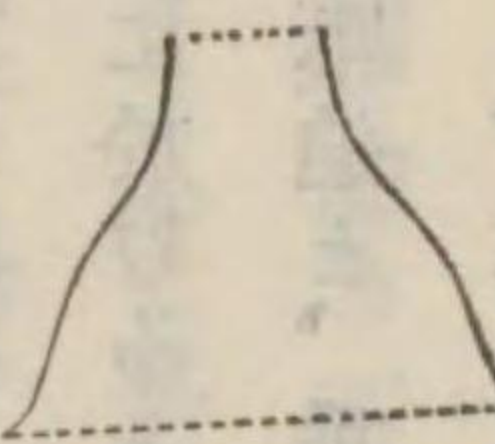
圖四十四第



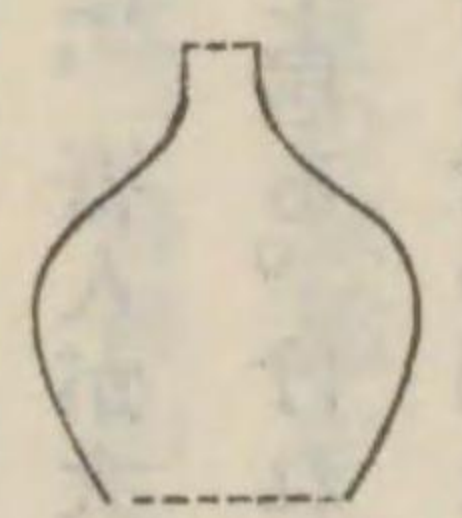
圖五十四第



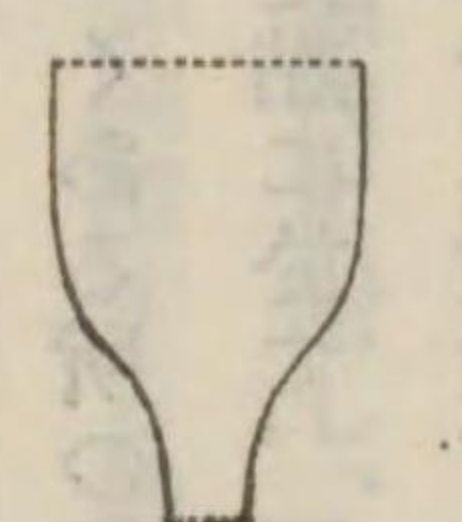
圖六十四第



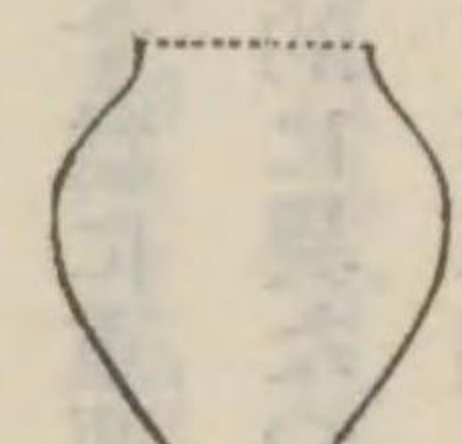
圖七十四第



圖八十四第



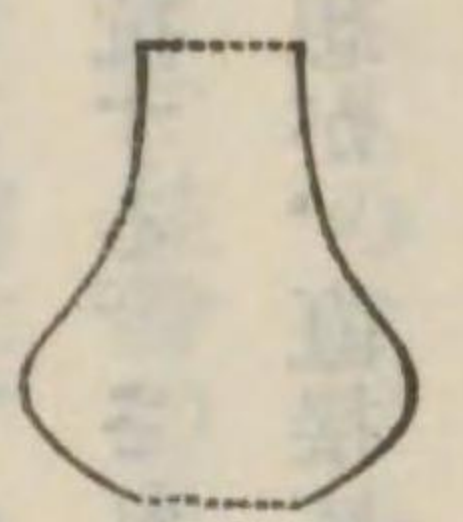
圖九十四第



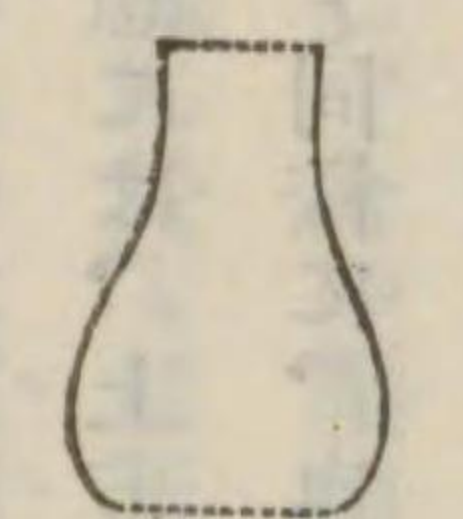
最後に、以上に於て舉示した、狹縮又は擴張された基底を有する形に關して注意し置くべきは、此等の形に於て、常に、正規形體、超正規形體及び劣正規形體の差異が存立するのみならず、更に圓形、膝狀形、籃形狀の形體の差異が存立するといふ事である。茲に問題となし居る圓形の形體は、勿論圓形ではない。換言すればその横面線が圓線から切斷されてあらぬ。此等は唯その下方の開始に於て圓形である。而も之とて唯、圓形が此の場合

に既に、一方に於ては下方の狹縮又は擴張と、他方に於ては、漸減的壓迫又は狹窄の漸減的の自發的衝動との交互的働きによつて受くる所の變化を別にした上の事である、吾人は言明する事が能きる。此等は、圓形に開始する所の形體から導出されてあると。されど正しく之が故に、吾人は此等をば、均しく圓形と呼ぶ。以上説述した三種の可能的差異を明瞭にする爲に、吾人は茲に三つの形を並列せしめる。第五十圖は、例へていふと膝狀形の形體である。換言すれば之に於ては反屈曲抵抗が假定されてある。第五十一圖は、之に該當する所の籃形狀の形體である。最後に此の中間に、基底の擴張を別にしての「圓形」のものとして、第十六圖の形體が立つ。此の外に吾人は尙第五十二圖から五十五圖迄の形を並列せしむる。

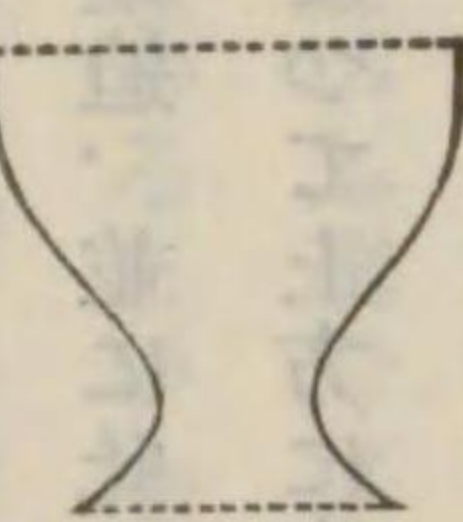
圖十五第



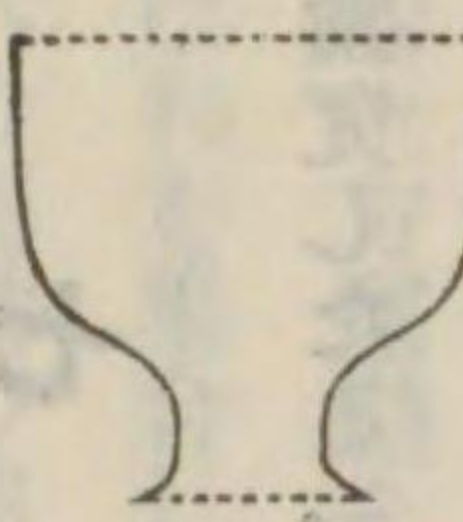
圖一十五第



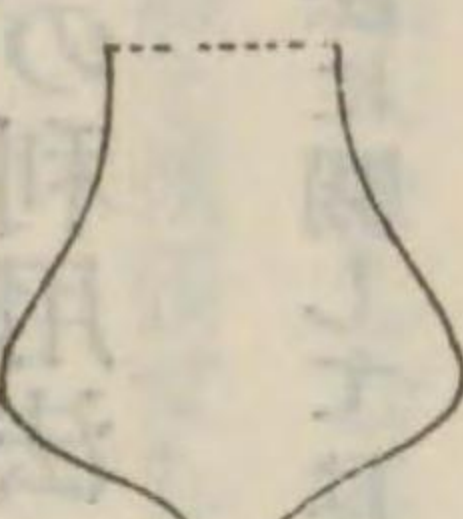
圖二十五第



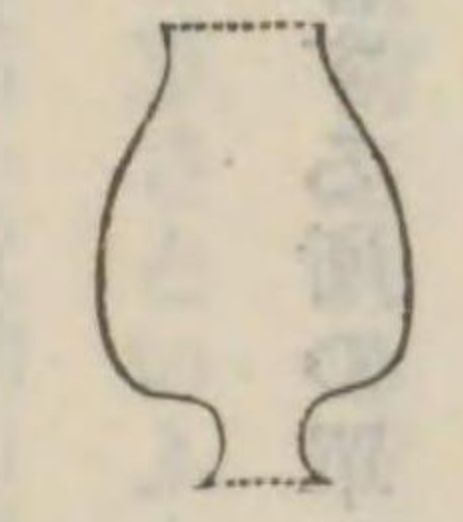
圖三十五第



圖四十五第



圖五十五第



尙此の外に、茲に論述した形といふものは、吾人が波狀剝形を進んで攻究する際に知得する所の多少の變化を

受くる。

七 自由直立形の利用法

本篇に於て論究したる一切の形の利用法に關しては、その根抵に存する所の單一なる形に就いて言明された所のものが、孰れの形に對しても必然的に成立する。換言すれば、此等凡てはその性質上重壓の支持者ではないのである。形にして、上方に迄餘響的に進行する所の壓迫によつて發生する限りに於ては、之は勿論、かゝる壓迫に彈力的に抵抗する。されど此の如き思想には、上方から働く所の壓迫、並に此の壓迫に對する彈力的の反對的働きといふ思想が、直接に對立する。之と同様に、自發的に尖小となつて上方に迄餘響的に進行をなす所の狹縮の衝動といふものは、よしやその性質上垂直的働作を發生せしめ得るとはいへ、吾人の形體をして、重壓の支持者とならしむるといふ事は能きない。何となれば、かゝる衝動なるものは、形體を透して働かない。之に反し正しく重壓が支持せらるべくある場所に於て消滅するからである。尙此の外に、此の如き狹縮的働作といふものは、自發的のものであつて、さうして一般的の反動的のものでないから、何等の抵抗をなす所の力ではない。之は高上しながら働く。併しながら之が高上せしむる所のものは、重壓をなし得ない。此の點に於ては、曾て劣正規波狀形の場合に於て、自發的に直立する所の力に就いて言明された所のものが成立する。

此の如くあるが故に、茲に語りたる形なるものは、如何なる場合に於ても、上に述べたる意義に於ての内容上の石材建築の形ではない。之に反し、此等は、内部的重さ、即ち内部的壓迫といふものが、それを制約する限りに於ては、内容上製陶的の形である。此の如きものとしては、此等は重壓を支持する必要はない。一の容器の蓋といふものは、浮泛して居る。即ちそれ自身の中に一の顯著なる垂直的運動を帶有する。されど附加された垂直に向上的努力をなす所の此の如き部分といふものは、直接に、向上的努力といふ此の如き形の爲に、それが重壓をなすといふ思想に矛盾する。

「本篇に於て論究した形といふものは重壓の支持者ではない」といふ言明と反對して、人によりては、時とすると、好んで、吾人が上に、「餘響的進行をなす壓迫」隨つて形體の進行中に於て己れ自らの内部的に打勝たれたる重さを有する。伸張せる反動的狹縮の實例として表示した所の「ドリック」の柱身を引用する。ところが之に對して抗論すべきは、一の柱頭を以て冠せられた柱身なるものは、決して重壓の支持者ではない。換言すれば、その官能といふものは、一の重壓を受納し、その壓迫に抵抗をなすといふ事ではない。之に反し、柱身の官能、特に「ドリック」柱身のそれは、或る意義に於ては正しく之が反對であるといふ事である。一體重壓を受納し、之をその中に於て消化する所の成員といふものは柱頭である。之に反し「ドリック」柱身に對しては、その柱頭に於て三堅筋繪様の壓迫に對して、己れを等一にし、或は之と均衡を得る爲に、それが固持し直立し、尙その外に、その垂直的上方運動をば柱頭の中に進入せしむるといふ任務が負荷される。さうして柱身の固持には、下端の方に云はゞ己れを集合し、さうして形體を擴張せしむる所の自己の重さといふものが役立つ。されど此の如き重さが、上方への運動の進行中に於て消失し、かくて形體中に存する第一次的の働作、即ち形體に根源的であつて、隨つてそれに對して起る所の一切のものよりも第一に、それ自らの垂直的働作——之は一の狹縮衝動から第

二次的に發生する所の垂直的働作と判然區別されねばならぬ——が働き、さうして自由に柱頭中に流入し得るといふ事は、「腹張」といふものゝ上部が語るものであつて、之に於ては、均衡状態に迄復歸の自然的傾向、換言すれば下方の廣さの外への傾向といふものが實現せられ居るのである。

之に對し次の如く反對してはならぬ、曰く、柱身なるものは此の如くあるにも拘はらず、事實的に重壓をせられ、さうして重壓を支持すると。けだし此の場合に主眼とすべきは、事實的にある所のものではなく、之に反し吾人の印象に對して存する所のものである。吾人の印象に對しては、重壓と反對的に働く所の力との間の衝突といふものは柱頭中に集中されてある。柱頭に於ては重壓といふものは働き、さうして茲で消化される。換言すれば、此の所に於て、その働きといふものは、反對的に働く所の垂直的働作によつて阻止される。されど正しく此の如くなると共に、柱身に對し、一の他の任務が負荷せしめられる。それは、柱の全體の任務を構成する所の任務中の第一のものである。之は、重く且つ確かなる存在、並に之より發生する所の確實なる直立といふ任務である。世に支持をなす所の柱身がないと同様に、支持をなす所の柱頭といふものは確かに存する。されど支持をなす所の形體といふものは、一般的に、吾人が既に知得せる如く、柱身と反對する觀を呈する。之は上方には廣く終止し下方には狭縮する。その根本形といふものは右の第六圖であつて、決して第五圖ではない。更に又、上方に縮小もされず又下方にも狭縮されない支持物といふものは、支持をなさない。之に反し此の如きものは單に垂直的に廣がり居る。或は上方と下方との間に延長する。之は垂直的運動に對しての經過であり、決して垂直的に働く所の力の間の一の反對を己れ自身の中に於て消化する所の成員ではない。今吾人にして之に關する一例を擧ぐるならば、吾人は二三の縮小されない羅馬式柱身に迄想到するのである。

第四章 波狀刳形の以上の外の變形

一 狭窄された基底及び擴張された基底を有する波狀刳形

吾人は今波狀刳形に迄立返つて考察する。之に於ても亦、吾人が右の自由直立形に於て働くのを知得した所の條件といふものは、働く事が能きる。たゞ之迄は、均齊的の波狀刳形に就いて考察されて居つた。之に於ては、基底は、自然の水平的の均衡状態を代表する。此の均衡状態は、壓迫により消滅せしめられ、さうして再び回復される。ところが此の如き可能の外に、尙他の可能が存立する。それは、波狀刳形の基底が狭縮されたり又は擴張されたりするといふ可能である。かゝる場合に於ては、波狀刳形に於ても、反動的閉込み又は反動的脹出といふ動機が加はり入る。吾人は先づ始めに、第二の可能に迄留意する。隨つて吾人は、波狀刳形の基底が伸展されてあると假定する。然る時には、壓迫が來さしむる所の擴張に對し、一の反對的に働きそれかというて反動的な傾向、即ち自然の狭縮に迄復歸といふ傾向といふものが加はる。さうして之よりして、多くの種類のものは均齊的でなくて不均齊的なる波狀刳形の形が發生する。

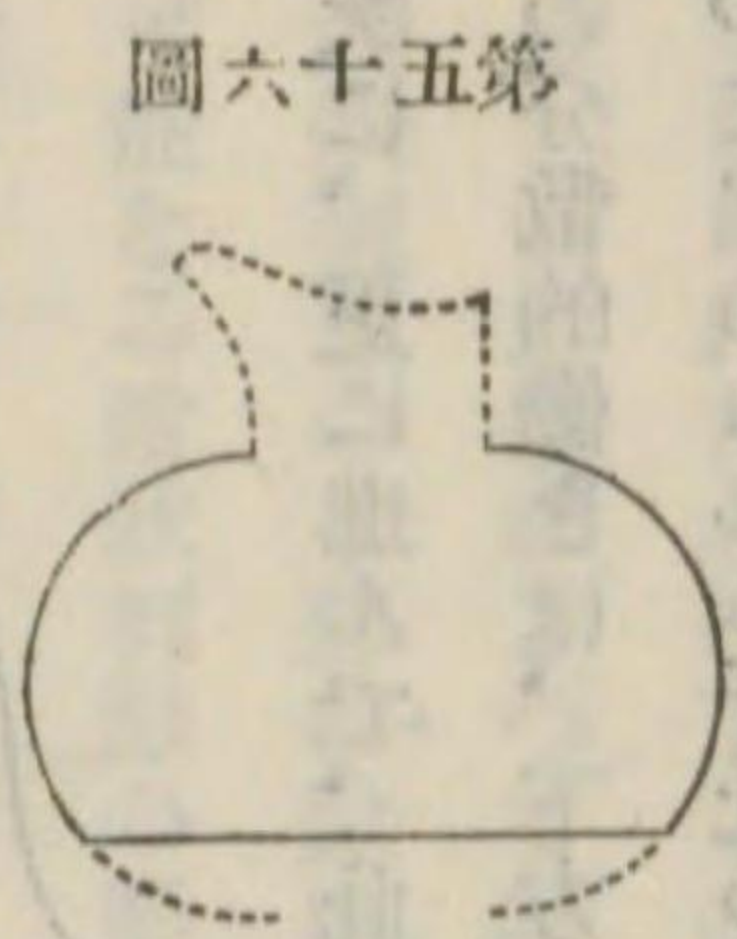
されど此の場合には、二つの群が區別さるべくある。その第一群の形は、次の如き考慮からして發生する。吾人にして一の均齊的の波狀刳形に於て、上方の片が水平的の切斷によつて分離されるところを思念する。かゝる場

合には、此の分離された上部は、その下端に於て、特定の廣さ、即ち、到る所に於ける如く、上部の廣さによつて示された形體の、水平的の均衡状態以上に出づる所の廣さを有する。ところが此の如き廣さは、割斷線により上片と下片とに迄分割された所の、全波狀剖形中に於ては、壓迫の働きによつて發生した。されど斯かる廣さが如何にして發生したにもせよ、各の場合に於て、波狀剖形なるものは、此の場所に於て特定の廣さを有する。さうして壓迫は、此の場所から先きは、その大さ及び此の場所の廣さがそれに指定する如く、全然此の廣さの履歴から十分獨立的に働く。

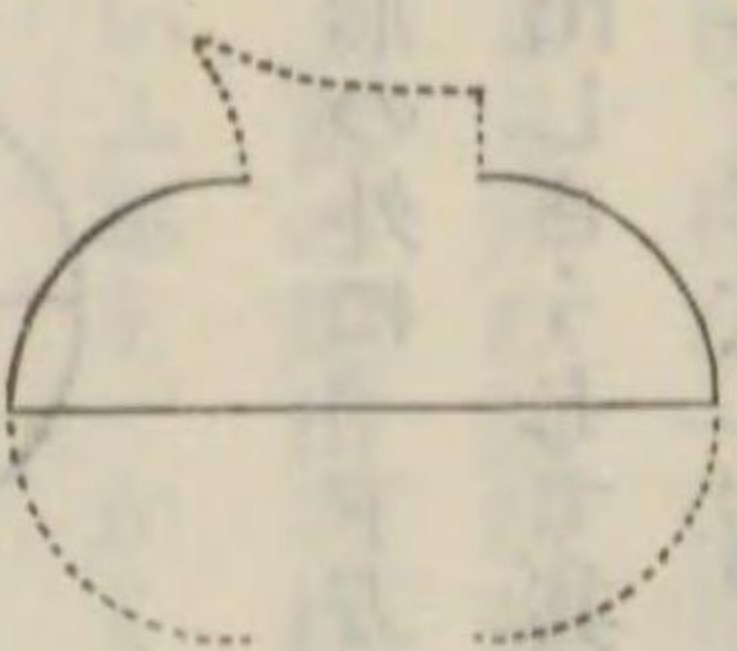
さうして今吾人は、此の場所をば、壓迫の働きの發端點と思念する。されど此の壓迫をば、それが均齊的波狀剖形の此のやうな場所に於てあると同様の大きさであると思念する。さうするといふと、壓迫の働きといふものは、よしやそれの彼れが如き前行する所の働き、即ち之が彼の均齊的の波狀剖形に於て此の場所に先立つ場所に於て及ぼす所の働きの欠損するとはいへ、尙それが均齊的の波狀剖形に於てあると、正しく同一である。實際に於て、壓迫が切斷線から上方に及ぼす所の働きの對しては、吾人が、波狀剖形が切斷線に於て有する所の廣さをば單に存在するものとして思念し、さうして此の廣さを均齊的波狀剖形に於て發生せしめた所の前行的運動を思念の中に入れてない事により、何もかも變化されない。併し此の事は、他説を以てすると次の事を意味する。吾人にして一の波狀剖形の發端に於て發端的擴張を與へられたるものと思念し、さうして此の如き擴張は、一の均齊的の波狀剖形、隨つて斯かる擴張なしの波狀剖形がその他に於ては全然同一なる條件の下に孰れかの場所に於て取得する所の擴張に均しくあると思念するならば、然る時には、彼れが如き下方に擴張された波狀剖形は、均齊的波狀

剖形の片、即ち吾人が此の如き場所の下にあるその部分を思念の中に入れてないとか、又は思想に於て之を除去り時に殘存するといふ片と一致合體すると。

さうして此の事は、同時に逆に意味する。水平的の切斷により分割された一の波狀剖形の各の上部も亦、一の可能なる波狀剖形の形である。波狀剖形なるものは、正しく斯かる場合には、唯、その基底の擴張によつて來さしめられた特殊性を有するものと見ゆる許りであると、吾人は此の如き波狀剖形の形をば、上述したる理由からして、下方に一片だけ短縮された均齊的波狀剖形の形と稱する事が能きる。之に就いて例へば第五十六圖及び五十七圖を見るべきである。



圖六十五第



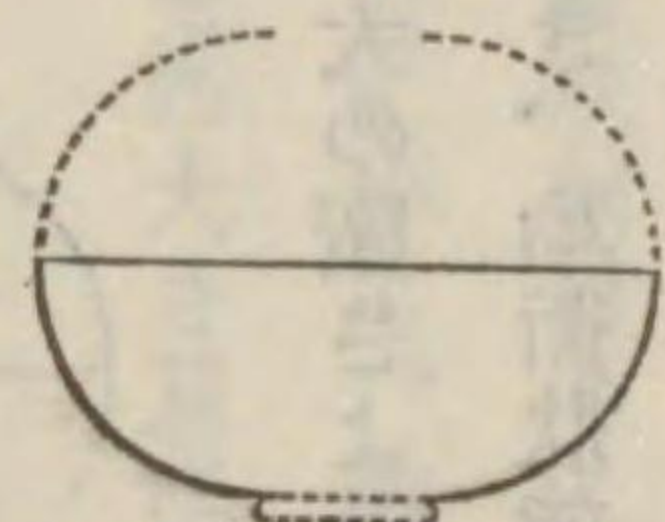
圖七十五第

併し此の如き可能の外に、尙他の可能がある。即ち、擴張された基底を有する一の波狀剖形の下方の擴張が、該當的の波狀剖形、詳言すればその他に於ては同一なる條件の下に立つ所の均齊的の波狀剖形が、その中に於て働く所の壓迫の影響の下にその經過の孰れかの場所に於て取得する所の最大の廣さよりも、より大であると假定する。かゝる場合には必然的に前の基本形の第二に於て與へられたるが如き、均衡状態に迄復歸の傾向といふものは、可觀的方法に於て働く。かくなる時には、波狀剖形は例へば第五十八圖の形を取得する。詳言すれば下方の走出を有する鐘形の波狀剖形が發生する。此の際、均齊的の波狀剖形と異なつて、中央に存せず之に反し上方に迄移動されてある所の脹出と

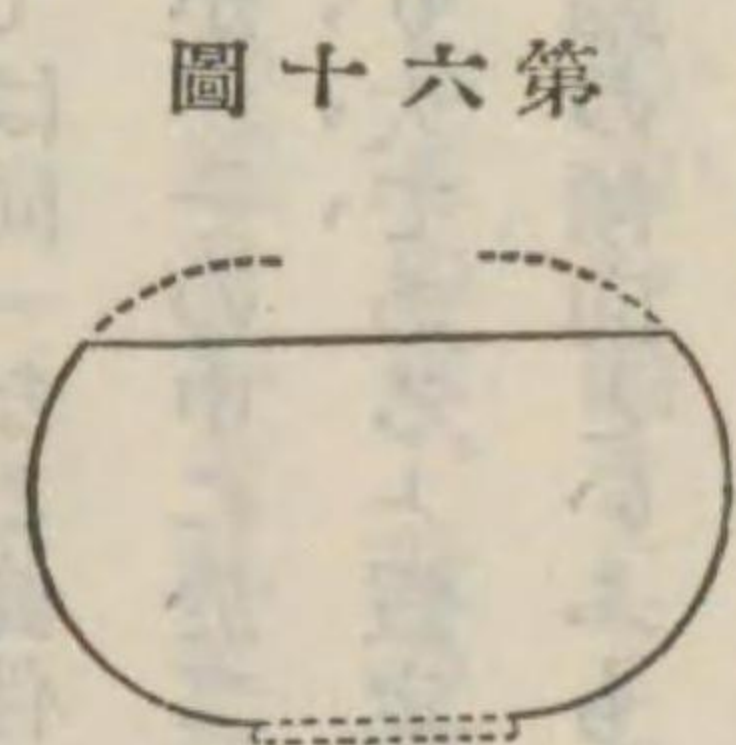
いふものが、下方の廣さ以上に出づる所の廣さを有する事ができないといふことに留意すべきである。



圖八十五第



圖九十五第



圖十六第

次に、更に進んで、此の如き波狀剝形の外に、下方の狹窄を有する波狀剝形の形がある。之に於ては、波狀剝形の分散的働きは、下方の狹窄から脱出しさうして其の自然の均衡状態を取得しようとの、形體の自然形傾向によつて強められる。此の種の形は、例へば第五十九圖及び六十圖の形、又は第六十一圖及び六十二圖の形である。

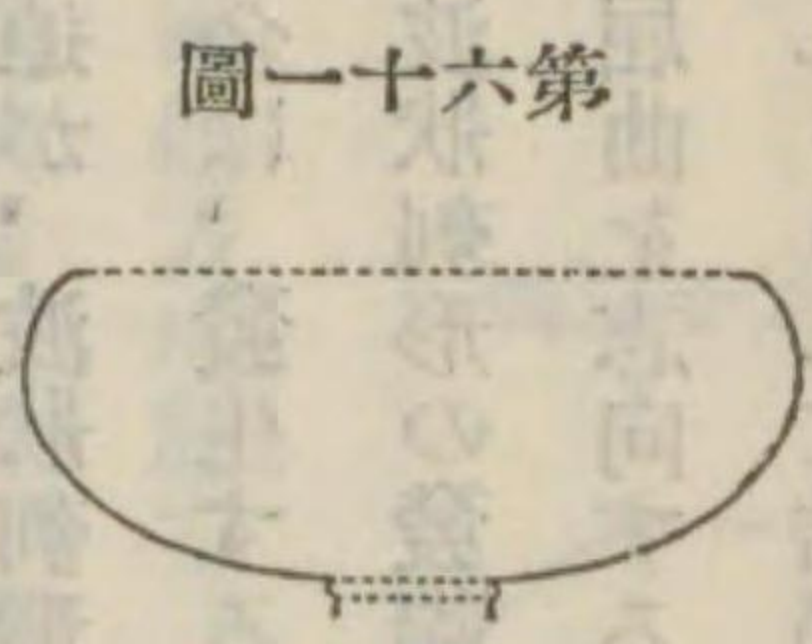
併し之に於ても再び二種の可能が區別さるべくある。

今吾人が、一の均齊形の波狀剝形、即ちその下端に於ても均衡状態を表現する所の一つ波狀剝形から、基底に迄並行する切斷線により、前の如く下方の片でなく之に反し上方の片を切り取ると假定する。斯かる場合には、均齊的波狀剝形の殘存する下部の先端に於て、此の形體の水平的均衡状態は未だ取得されない。併し吾人は、茲に取得された廣さをば、常に波狀剝形様形體の水平的均衡状態と認むる事が能きる。唯此の如き場合に於てのみ此の形體の下方の廣さ、或はその基底といふものが、縮窄といふ見地の下に現出するのであつて、而もかゝる縮窄からして、形體は、一方に於ては均衡状態の回復の傾向の爲、他方に於ては波狀剝形に對して重壓する所の

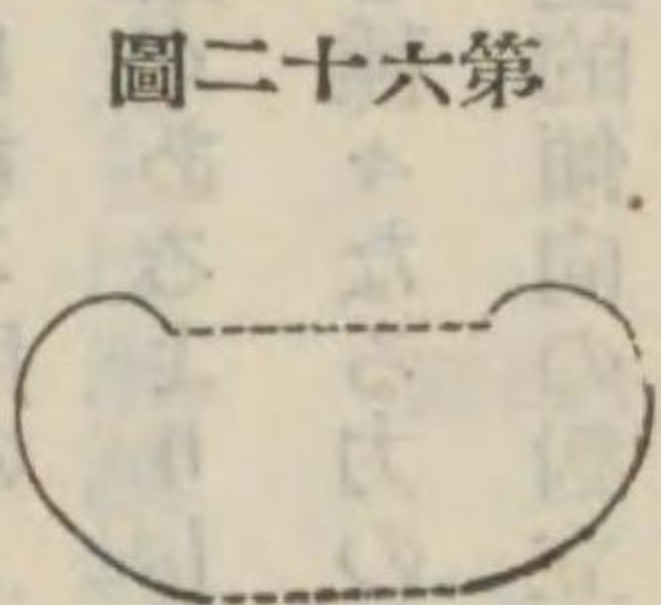
壓迫の爲に、發出し、次に上方に於て均衡状態に迄復歸するのである。

斯く述べると同時に、此の波狀剝形の形が説示される。之は、

吾人が均齊的の波狀剝形から水平的の切斷により上片を切去る場合の、均齊的波狀剝形の形である。容易く認知せらるゝ如く、此の如くして發生する所の波狀剝形の形は、第五十六圖の上下轉倒された波狀剝形の形である。



圖一十六第



圖二十六第

併し此の場合に於ても、吾人は逆に言明し得る。白く、一の均齊的波狀剝形の、基底に迄並行せる切斷によつて切取られた各の下方の片といふものは、再び一の可能なる波狀剝形の形である。唯之に於て下方の狹窄が存在するといふ事によつて特徴づけられてある所の波狀剝形である。されど最後に吾人は容易く認知する、一の均齊的波狀剝形の下部の脱出されたものと上部の脱出されたものとを結合せしむる事が能き、さうして之よりして再び可能なる波狀剝形の形が發生するといふ事を。かくて吾人は結局言明せねばならぬ、一の波狀剝形の、水平的切斷によつて切去り或は切出された各の片といふものは、それ自ら再び一のそれ自身に於て完成的なる波狀剝形である。

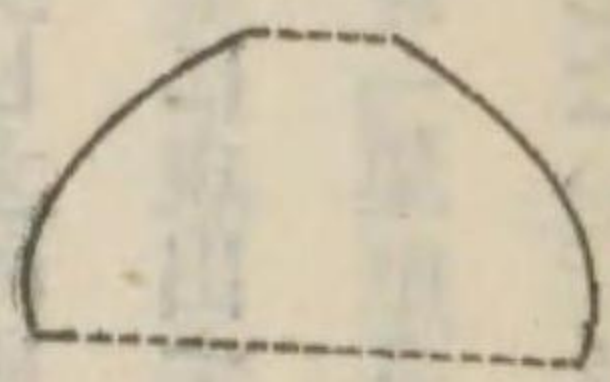
併しながら各の狹窄が上方に短縮された均齊的波狀剝形の自然の均衡状態として思念さるゝ事は能きぬ。否狹窄なるものは何等の限界をも受けない。之は最後に一の形體の基底をば0に迄減少する事が能きる。そこで、狹窄が上に説示した限界以上に出づる所の大きさを有するとの假定の下には、新なる形が發生する。之を特色づける

所のものは、形體が下端に於ては上端に比較して伸長されてあるといふ事であればならぬ。第六十一圖及び六十二圖の形は此の如き種類のものである。容易く理解さるゝ如く、此の如き形も亦、正規形、超正規形及び劣正規形であり得る。再び、超正規形は、柔軟、遲鈍、受働性の印象、劣正規形は、密實、能動性の印象を起さしむる。

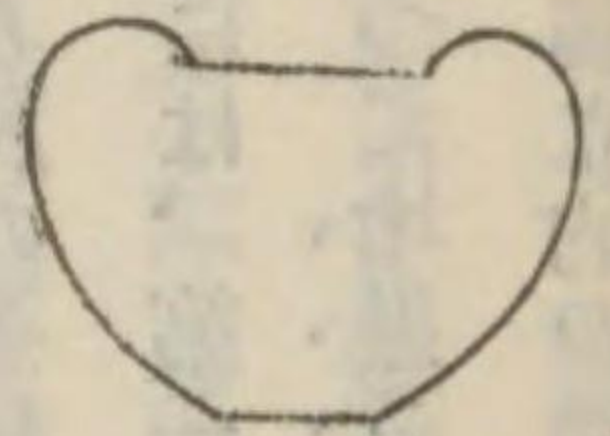
二 漸減的壓迫及び漸減的狹縮を有する波狀剝形

吾人は今進んで、右に爲した假定に對し、漸減する所の内部的剝形といふ動機、又は自發的に閉込みさうして之と同時に垂直的働きの増進を志向しそれかというて他方に於て漸減する所の自發的衝動といふ動機を附加する。此の第一の場合に於ては、下方の擴張を有する波狀剝形、或は反動的の尖小傾向を有する波狀剝形は、第六十三、六十四及び六十五圖の形を取得する。此等二つの形の中の第一の形の變種は、上方に迄漸減する所の内部的壓迫が、波狀剝形を發生せしむる所の上方から働く壓迫と合體して、反動的の閉込み傾向に對し均衡を保持する場合に、發生する。此の如くあるよりして、横面線は、發端に於て、垂直的上昇の形を取得する。併し一般の場合に、波狀剝形の發端に於ける種々なる力の反對的働き、特に下方の外方屈曲を志向する漸減的壓迫、並に下方の内方屈曲を志向する所の反動的傾向の對立は、横面線に對し、時としては多く時としては少く、その下端に於て伸長しさうして結局外方に彎曲する所の形を附與せねばならぬ。併しその中でも、脹出の中央が下方に移動されるといふ事は、凡ての此等の形に對して特徴的にあるのである。

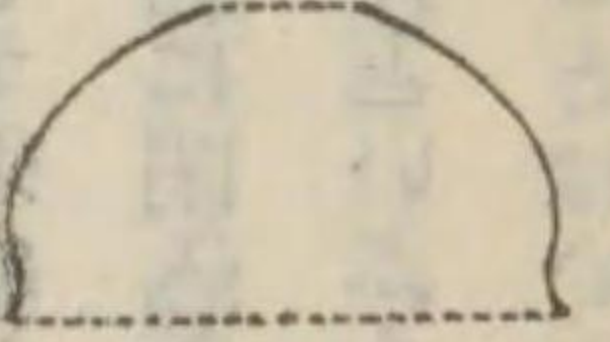
圖三十六第



圖四十六第

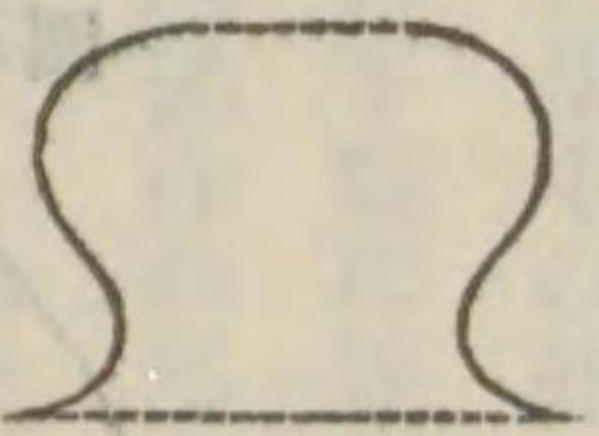


圖五十六第

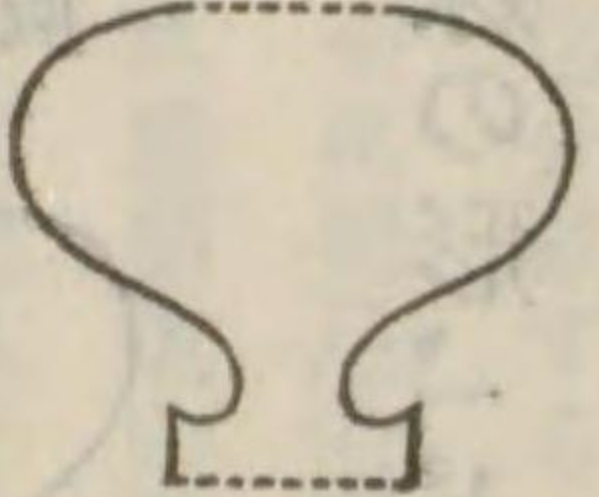


更に他方に於て、漸減的壓迫をば漸減的閉込みによつて置き換ふるならば、然る時には、下方の廣さから解放の傾向によつて、漸減的の閉込み働きの増進される。之は恰も此の逆に、内部的壓迫の働きが之により上方に減少せらるゝが如くある。此の故に、例へていふと、第六十五圖の形から第六十六圖の形、第六十四圖の形から第六十七圖の形が發生する。此等二つの場合の各に於て、基底の擴張が横面線の下端に對し伸張的に働き、さうして之と同時に、脹出をば上方に迄移動せしむる。第二の場合に於ては、同時に、下方の絶對的狹縮と上方の之と同様に絶對的なる脹出との間の反對性が増進される。

圖六十六第



圖七十六第

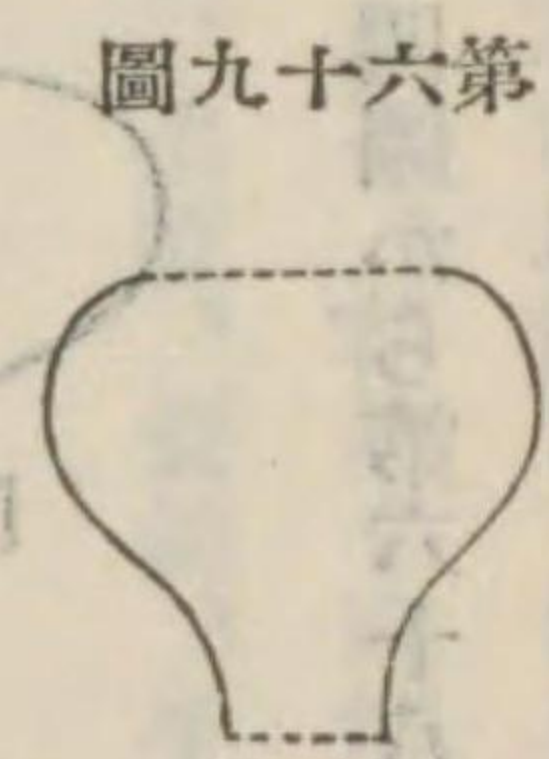


吾人にして今最後に、右に爲した假定に迄反對して、形體の基底が狹縮されると思念する。かゝる場合には、此の如き狹縮から解放の傾向が、上方に迄漸減する所の壓迫の働きを増進する。之に反し漸減的の閉込み働きの反對的

に働く。今や例へていふと、第六十四圖から第六十八圖が發展し、第六十七圖から六十九圖が發展する。後者は若しも基底の伸長が0に迄減少せらるゝ場合には、轉倒せる鱗莖或は葉形に迄變化する。



圖八十六第



圖九十六第

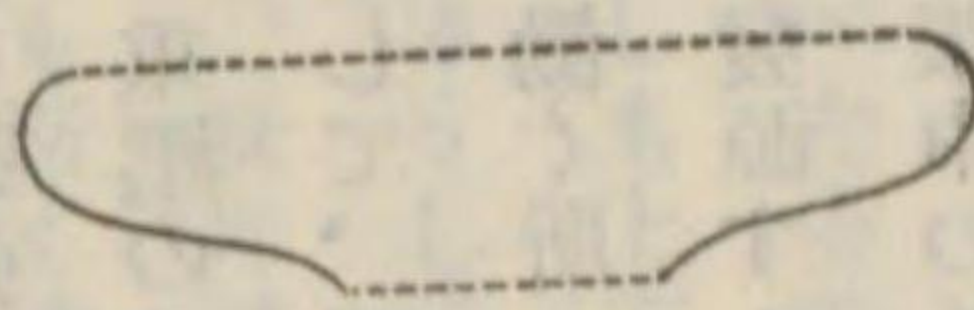
三 右の特殊の形、「ドリック」柱頭

以上述べたる如き關係に屬する所の形の中で、その二三のものは、その建築上の意義の爲に特に力説すべくある。若しも上方に漸減する所の總括的働作、或は閉込みさうして之と共に垂直的に伸長する所の働作にして、増進し、さうして同時に、強くあつて上方から來る所の壓迫により、波狀形の高さが減少せらるゝならば、然る時には、世に熟知された容器形たる第七十圖の形は、第七十一圖が示す所の「ドリック」式の圓狀形^{エキメス}の形となる。而も斯く述ぶると共に、かゝる圓狀形が何を言明するかは明瞭になり、さうして同時に如何にして此の事を言明し得るかは明瞭になる。吾人は今、「ドリック」の柱身をば、もはや前になした如く、それ自體として考察せず、之に反し之に比較して擴大し居る所の全建築物の部分として考察して見よう。斯くするといふと、之は新なる見地の下に現出する。今や柱身中には、「第一次的に」、水平的に閉込む所の働作、或は總括しさうして之から發源する所の「集中された」働作、隨つて増進された垂直的働作といふものがある。ところが圓狀形は此の柱身の上に坐しない。之に反し、よしや獨立的の形體としてあるとはいへ、尙之を繼續する。圓狀形の頸な

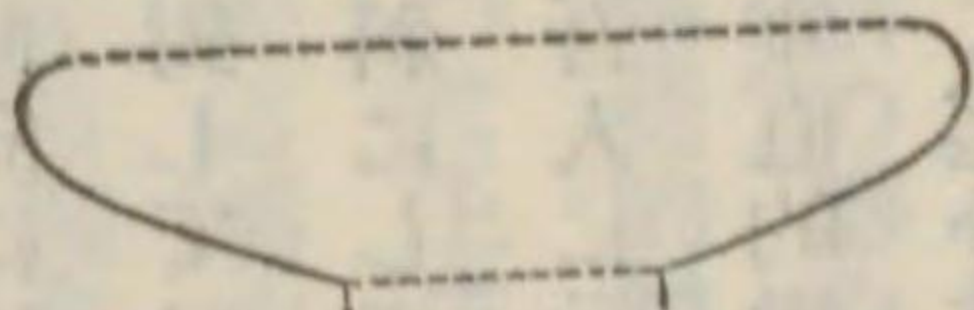
るものは、先第一にその形からすれば、柱身の繼續であり、それかというて頸としては、圓狀形に迄附屬する。されど、集中された働作、或はそれ自身の中に總括された垂直的働作は、之を通して進む。換言すれば、柱身中に働く所の彼れが如き閉込みの働作、並に之から發源する所の垂直的の直立或は伸長といふものは、圓狀形の中に入り込み、さうして茲で先第一に、此の如き閉込み且つ伸張をなす所の働作として、かの圓狀形自體中に存して居てその強い下方の狹窄から——かゝる狹窄そのものは、彼れが如き閉込み働作から存在を促がされる。——自己を擴張せしめようとする傾向に反對して、己れを主張する。又之と同時に、上方から圓狀形に對して働く所の重壓の分散的働きにも反對して己れを主張する。かくて、彼れが如き働作を此のやうな傾向との相互的働きからして、圓狀形の横面の斜にして殆んど眞直なる發端線が發生する。此の線は、可能的明瞭に、彼れが如く強く働く所の力の間の緊張を吾人に示す。けれども、柱身から圓狀形の中に流入する所の閉込み働作、並に之から發源する所の集中された垂直的働作といふものは、圓狀形の中に漸減する。此の故に、圓狀形は、恒常的に集中の外に發出し、廣さに迄分散する。然るに同時に、上方への其の運動は潰滅する。次述の如き形體即ちその下端に於て彼れが如くその中に鳴込む所の水平的の閉込み或は總括、並に之から發生する所の集中された垂直的働作の爲に、己れ自身の外に垂直的の脱出の緊張された傾向といふ性質を有する所の形體といふものは恒常的に、一の比較的^{比較}にそれ自身の中に己れを主張する所の形體に迄移行する。詳言すれば、壓迫の分散力が彈力的の反對的傾向、或は壓迫によつて消滅せしめられた形の、即ち比較的の狹縮と高さとの回復の傾向によつて阻止されてある所の形體に迄移行する。此の如き彈力的の反對的傾向といふものは、各の反動的力と同様に、

己れ自身の外に發出の力ではなくて、己れ自身の中に於てする自己主張の力である。之に反し、彼れが如き漸減する所の發端的閉込み及び垂直的働作といふものは、一の自發的にしてさうして上方に迄伸張する所の力、随つて重壓を、持上げる所の力である。されど此の如き力が漸減する事により、持上げ或は重壓に對しての自己伸張といふものは、靜止に迄到達する。形體といふものは、純粹に受納し、随つて屈服し、さうして屈服する事により彈力的に抵抗する所の形體となる。

圖十七第



圖一十七第



圓狀列形、並に之に類似せる柱頭形の右の如き「内部的の歴史特に持上げといふものが屈服する所の彈力的存留に迄移行する「内部的の歴史」が如何に意義深く且つ自然的にあるかは、今事々しく指示する必要があるまい。同時に明瞭になるのは、之が柱身に對し何を意味するかといふ事である。吾人は、之に關しては、前既に留意を促がして置いた所の事實、即ち柱身なるものは何等の重壓を消化しない。之に反し唯確固と屹立しさうして確固たる屹立から己れを持上げるべく要するといふ事である。既に述べたる如く、その垂直的働作なるものは、純然たる働作としては、頸を通して圓狀列形の中に進みさうして茲で始めて壓迫に對して差引勘定をなす。ところが此の如き差引勘定、或は壓迫の内部的消化といふものは、特に圓狀列形の上部に於て起生する。茲には吾人は特に、屈服及び力強く抵抗し得る所の存留を認める。されど之が斯かる高さに於ける存留となるのは、之が伸張及び持上げる所の働作から發生するからである。即ち

吾人は、存留が持上げる所の働作から發生すると言明し得る。實際に於て、事實關係といふものは、存留が單に持上げに繼起するといふ事、随つて、一の伸張的働作が消失した後、右の高さに於ける存留が起生するといふ事ではない。之に反し、持上げ或は自己伸張が圓狀列形の中に鳴込む事により、之は、己れ自らの内部的必然性を以て、高さに於ける存留に迄恒常的に移行する。兩者は、一つである。詳言すれば、柱頭自體が上昇し、同時に之により取得された高さの所に於て、靜穩確實に存留する。柱頭の存留する所の部分は、持上げらるゝのではない。之に反し此の部分は持上げられた部分と一つであるが故に、之は當該の高さに於て存留するといふ目的自體の爲に己れを持上げるのである。

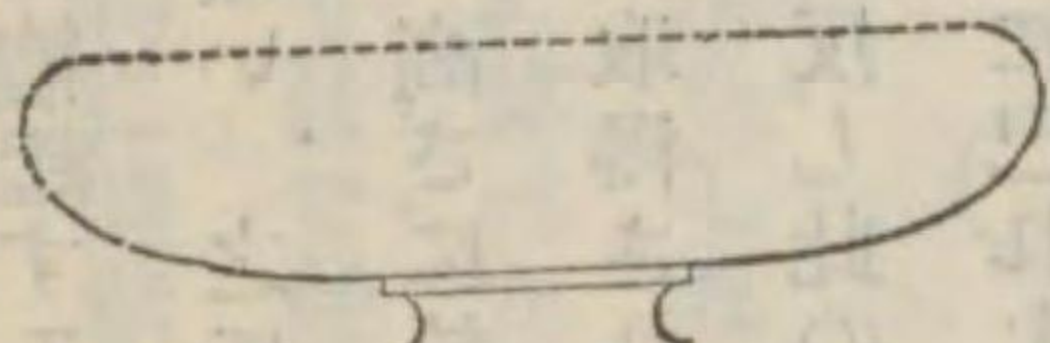
結局、「ドリック」圓狀列形の内部的の歴史、その右の如き内部的の本質性、右の如き内部的の生活といふものは、尙逆の方向に於ても、即ち上方から下方に迄考察する、事が能きる。かゝる場合には圓狀列形は、先づ始めに重壓を受納し、さうして此の重壓により脹出し壓伏せしめられる。併し之により、此の中に於て、彈力的の反動的働きが喚起せられ、此の働きは、之に反し存留の能力を附與する。さうして今や、此の如くなるよりして、或は屈服の促進も之に反して及ぼされた彈力的の反動的働きの間の緊張よりして、一の集中された垂直的の運動が發生する。されど此の運動は、吾人が形體を上方から下方に迄考察する今の場合には、上方から下方に迄の運動として現出する。此の運動は、それが壓迫の働きを全然支配した後は、頸に於て、純粹にして同時に集中された垂直的の下方運動となる。さうして此の如きものとしては、之は今や柱身の中に迄進み、さうして柱身を通して地面に迄進む。併し之が此の如き事を爲す事により、且つ地面に近接する程度に於て之は再び、その運動の集

中性及び急速性の外に益々多く出で、さうして其の度毎に一の靜穩に抵抗する所の存留、即ち柱身が立居る所の地面の上に於ける確固として重々しい存留に迄、移り行く。

されど吾人は再び、とりわけ自然的のものである所の彼れが如き第一の考察法に迄復歸して見よう。かゝる場合には明瞭になる、曰く、圓狀列形に於ける二つの動力、即ち一方に於ては一の集中された垂直的働作によつての持上げと、他方に於ては抵抗能力ある反動的の存留といふものは、甚だよく相互から區別され得ると。否此のことは、實際に於ては既に、比較的、第七十圖の形、並に或る意義に於ては第十七圖に於て、事實である。既に此等に於て、吾人は、始めに集中された垂直的の働作を認め、次に存留を認める。吾人は此の故に、兩者が或る方法に於て區別せらるゝのを見る。併し此の如き區別は、此の場合に於ては、比較的に獨立せる成員に於ける區別ではない。吾人が認むる所のものは、寧ろ二つの動力の相互的移行であるのである。

併しながら獨立的成員に於ける此の如き區別も可能である。さうして吾人は、かゝる區別に、均しく、「ドリック」圓狀列形の形と確に稱せらるゝ所の形、即ち第七十二圖の形に於て遭遇する。此の場合には、吾人は下端に於て、常に柱身の集中された垂直的働作の繼續のみならず、更に獨立的の溝を認める。之は、己れ自らの獨立的に開始する所の「尖小體」を表現するのであつて、此の種の尖小體たるや、吾人が後になつて尙特別に叙述する所の一の動機なのである。かゝる尖小體により後續的に脹出された部分は、柱身から分離される。此の場所に於て、柱身と持上げとの鬭爭離脱といふ一の獨立的働作が起生する。さうして今や、再び獨立的部分として、屈服及び重壓に反對しての存留を獨立的に刻印づける所の脹出といふものが繼起する。之と共に、柱身といふものは、最も印象深き方法に於て、解擔トラスされる。換言すれば重壓を己れ自身の中に於て消化すべき任務から解放される。特に、重壓の受納、並に之に反對しての屈服的固持といふ任務は、顯著なる方法に於て、柱頭の上、自體のみに負荷せしめられる。此の如きより明瞭なる分化といふものは、活躍性或は可動性のより高い程度、即ち力の交互的活動の明瞭なる直觀化の「より多く」を發生せしむる。けれども斯くなると共に前に語つた所の「ドリック」圓狀列形の緊肅性と密實性は喪失される。今や圓狀列形の上部は、もはや同時に能動的にそれ自身から發出するやうに見えぬ。之に反し唯屈服しながら彈力的に存留するやうに見ゆる。此の如き上部は、その圓狀にされた形を有すると同時に、前に語つた形の緊肅性と密實性に比較して見ると、一種の柔軟といふ性質を取得する。

圖二十七第



「ドリック」圓狀列形の茲に擧示した形といふものは、確に第七十圖の形から區別さるべくある。蓋し此の七十圖の形に於ては、横面線の發端に於て、斜の直線は、屈曲したる線、詳言すれば始めには比較的に内方に進みさうして次に外方に迄屈折する所の線によつて、代らるゝのである。併し此の七十圖の形からは、第七十一圖が示すやうな「正規」の「ドリック」圓狀列形の形は、全然次のやうな點によりて區別さるべくある。それは、此の七十圖の形に於ては、一方に於ては、壓迫の力、他方に於ては、反對的に働く所の働作、即ち形體中に鳴込みさうして此の中に於て漸減しながら總括さるゝとか又は總括する所の垂直的働作、並に壓迫により來さしめられた擴張の傾向との間の緊張といふものが、一のより大なるものであるからである。若しも吾人にして、第七十圖の形

體に於て、壓迫並に同時に又形體中に流入する所の水平的閉込み及び垂直的伸張の働作にして増進さるゝと思念するならば、「ドリック」圓狀彫形の正規の形、即ち第七十一圖のそれが、自然に發生する。

されど最後に、一の柱身の集中された垂直的働作は變化されず、且つ單に輕易なる中止を以て、その柱頭の頸の中に流入し、さうして之が上に、それかというて他方に於ては全然獨立的に、溝といふ中間的成員なしに、壓迫に對し單に彈力的に抵抗する所の柱頭が坐する事が能きる。併しながら、柱頭が單に垂直的に上昇する所の頸の上に凭り、掛らず或は之が上に坐しない事の爲に、かゝる場合に於ては、兩者の場合に於て、一の異なりたる種類であつて、即ち固有の意義に於て媒介をなす所の成員といふものが、加入される。之は、媒介的の成員としては、媒介すべくある所の兩者をば統一體に迄總括する。之と共に、頸は、かの「正規」の圓狀彫形の形が大仕掛けに有する所の官能をば、正しく小仕掛けに取上げる。かくて又、此の如き圓狀彫形の形を小仕掛けに繰返すのも、怪むに足らない。

いふ迄もなく、吾人は、此の場合に於ては、その垂直の直線的に立居る頸、並に之から渦形に迄移渡する所の小縁を有する「イオニック」渦形柱頭を思念し居る。渦形柱頭なるものは、その性質上能動的であらぬ。之は高揚をなさない。之に反し存留し、さうして其の中に存する所の彈力的の抵抗力の爲に、抵抗をなす。

以上に於ては、吾人は「ドリック」柱頭の「内部的歴史」に迄稍詳細に立入つた。斯く立入ると共に、吾人は、一の實例により、此の如き形を單に外部的に叙述する丈では十分しないといふ事を理解せしめようと意圖した。此の如き形、或はその變形の時間的繼起を記載すると、十分しない。此等の如くある事の反對に、外部的の形

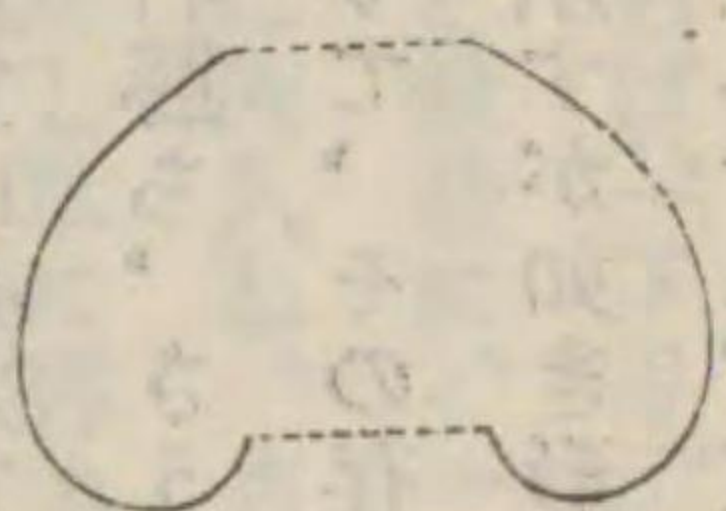
の知識に對し、内部的本質性の理解といふものが加はらねばならぬ。換言すれば、單なる外部的の形態學に對し生理學が加はり、さうして同一なる基本的の順次に起生する所の變形の計上に對し、生物學のものである所の内部的發達歴史に對する理解、即ち形の中に存在する所の生活といふもの、發達の内部的合法性に對する理解が加はらねばならぬ。若しも藝術學にして斯かる任務を取上げるならば、之は單なる博學であるのを免れ、さうして藝術科學となるであらう。

四 漸滅的壓迫及び漸滅的狹縮を有する波狀彫形に對する補説

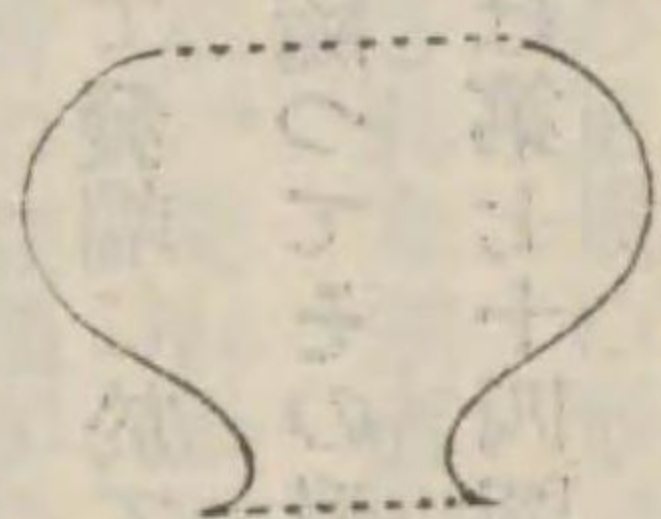
以上に於て言説したる事項は、吾人をして、最後に、上に波狀彫形に就いて言説したる事項の多少の補成をなすに至らしむる。吾人は上に於て直に假定した、漸滅的壓迫を有する波狀彫形、並に之と同様に漸滅的閉込みを有する波狀彫形なるものは、その基底に於て狹窄されたとか又は擴張されたとはいふ事を。ところが此の如き假定は必要ではない。之に反し、之と同様に、均齊的の波狀彫形は、一方に於て發端に於て開始する所の壓迫に打勝ち、さうして他方に於て發端に於て開始しさうして更に進んで垂直的運動に迄分散する所の閉込み衝動によりて、その存在を取得し、隨つてその形に於て同時的に規定をなされ得るのである。之よりして、第七十三圖の示す如き形、他方に於ては第七十四圖の示す如き形が發生する。

又、進んでは、波狀彫形に於て、よしや之が均齊的のものであらうと、將た狹窄又は擴張された基底を有する

圖三十七第



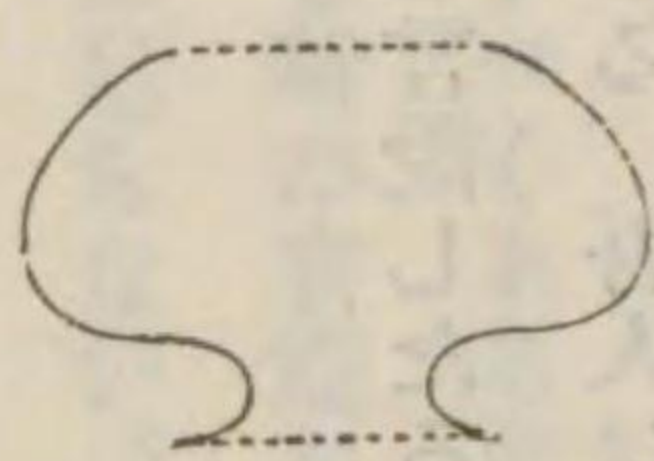
圖四十七第



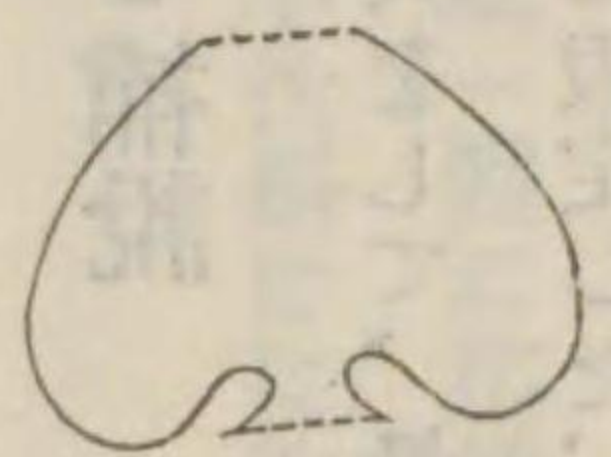
波狀剝形であらうと、兎に角、二つの動機、即ち發端に於て開始する所の壓迫と發端に於て起生する所の閉込みとは、結合する事が能きる。之に對する條件、並に此の際留意すべき特殊性といふものは、上の第十二章第六項に於て述べたものと同一である。此の場合に考察すべき形は、第七十五圖、七

十六圖及び七十七圖の示すが如きものである。

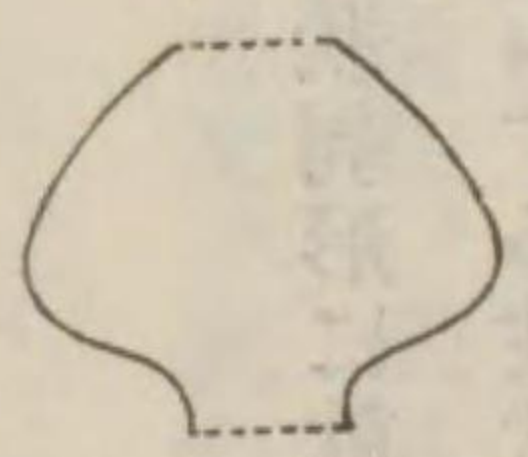
圖五十七第



圖六十七第



圖七十七第



終りに臨み、以上に於て説述された所の凡ての形の性質に關し、一般的の言明を附加して見よう。吾人は先始めに、類同せる自由直立形に於て上に言説された所のものを繰返す。曰く、漸滅的の壓迫を有する凡ての形は、その重さに屈服するものであるが故に、それ自身の中に靜止し定立する所の形である、之は自發的に己れ自身から發出しさうして上方に迄働く所のものでもなく、又彈力的に抵抗する所のものでもない。之は次の語の特有の意義に於て「受動的」なる形である。之は、その特異なる性質を構成する所のものの中に於て、單一なる存在とそ

の場所に於ける靜穩なる自己存留を表現する。

之に反し、漸滅的尖小を有する形は、自發的に己れを高揚し持上げ而も輕易に持上げる所の形である。換言すれば、右の形と同様に、此等の形は、上方から來る所の壓迫に對し確固たる抵抗をなす形ではないのである。

併しながら、若しも此等の形にして波狀剝形の形であるならば、その内部の本質性は變つてくる。此等は、かかる場合には、先第一に、波狀剝形の形として、右の第二の性質を有する。詳言すれば、此等は支持者となる。

即ち屈服しさうして彈力的に抵抗する所の支持者となる。隨つて此の語が前により精密に規定された所の意義に於ける支持者である。尙その外に、之に於ても、再び、漸滅的の壓迫を有する形と漸滅的の尖小を有する形との間に區別されねばならぬ。前者に於ては、支持者といふ性質に對し、それ自身の中に靜止するもの、その場所に於て單一靜穩なる存在、自己定立といふ動力が加はる。形體は、始めには己れ自身に放任し、己れ自身の重さたる壓迫に懸念せず、それがあつた所に確固と存在し、さうしてそれが其の確固たる存在を己れ自身の中に取得した後に始めて、或はかかる「受動性」から始めて、壓迫の働きを受け、さうして屈服から彈力的の反對的働きに迄移行行く。而もかくなると共に、支持といふ官能は、無懸念、放任、無顧慮、適意といふ性質を受取る。之と同様に、漸滅的閉込みを有する波狀剝形の形に於ては、波狀剝形といふ性質と共に、かかる閉込みといふ性質が結合される。兩者は合體して、より輕易又はより密實、より遊戯的又はより決斷的、各の場合に於て能動的の自己直立、活動的の發出、といふ性質を發生せしめ、次にかゝる自己直立及び自己發出に於て、重壓を己れ自身の中に受納し、之に屈服し、さうして之を彈力的に抵抗をなすのである。

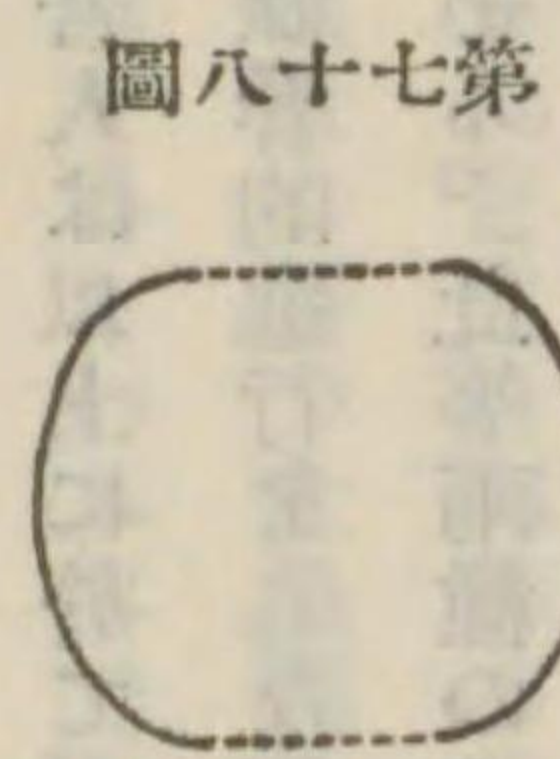
特に斷乎且つ密實なる支持の一例をば、前に舉示した圓狀列形の形が供與する。

ところが此の如く述ぶると共に、未だ、波狀列形の形のあらゆる可能なる變形といふものを、説述されない。勿論波狀列形の形そのもの、中に於て働きさうして其の形成に於て一緒に働くといふ力から發生する所の凡ての形は、説述された。けれども波狀列形の形なるものは、一般的の各個の形と同様に、通常一の形上の連絡體中に於て現出する。或はより正當に云へば、形が協力的に働いて直觀化をなす所の生活連絡體の中に於て現出する。さうして全體としての斯かる連絡體中には、かういふ運動、即ちその運動に適入しさうして既にそれ自身の中に於て既成的なる形といふものを同時的に捕捉し、變形せしむる所の運動といふものが、存在する事が能きる。此の如き方法に於てかの楕圓の形が發生する。何等の楕圓も、それ自體の中に働く所の力の單なる合法的活動によつて、發生する事は能きぬ。けれども吾人は今假定する、確に此の如き方法に於て發生し得る所の圓が、一の全體といふもの、中に存すると。さうして全體としての、斯かる全體の中に於て、特定の方向に於て、伸張的の力が働くとする。斯く假定するといふと、既成の圓は、此の伸張的力によつて同時的捕捉をなされ同時的影響を受くるやうになる。さうして全體が伸張或は延長せらるゝ事により、圓といふものは、かゝる結果を分享する。さうして今や之は楕圓となるのである。

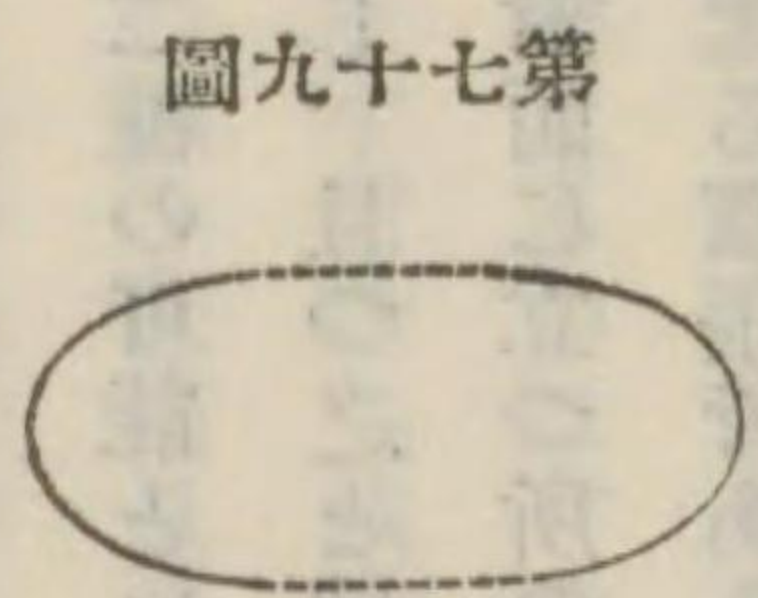
して又、此の如くして、特に、その横面線を凡て變形された圓線となし居る所の一切の波狀列形の形は、一の伸展的の運動に迄適入する事が能きる。かゝる場合には、楕圓の波狀列形の形が發生する。此の際、かゝる楕圓の波狀列形といふ形の下には、常にその横面線が直接に一の楕圓の部分として現出するといふ形が理解せらるる。

のみならず、更に、それが、圓形の代りに圓形の變化した形を基礎として有するが故に、随つて斯かる變化された圓形の伸張として現出するが故に、一の該當的の變化された楕圓形を示す所の形も、理解される。

されど斯く述ぶると共に、吾人は再び波狀列形の形の新奇なる分類を取得する。此の分類も亦、三個分類である。即ち波狀列形の形なるものは、其の基本形上(一)單一なる圓形のものであるか、(二)又は垂直的に楕圓形であるか、(三)若くは水平的に楕圓かであるのである。吾人にして、若しも圓形を變化せしむる所の力或は條件をば、思念の外に置くならば、随つて純粹なる圓形から出發するならば、然る時には、第一圖の形の外に、第七十八圖及び七十九圖の形が現出する。而も此の兩方に於ては、いつでも、半圓が、甲の場合には直立し、乙の場合には横在する所の半楕圓によつて代らるゝのである。



圖八十七第



圖九十七第

併しながら彼れが如き圓形の變形には、例へば擴張又は狹縮された基底、反屈曲堅確性、上方に漸減する所の壓迫、又は之と同様に漸減的に閉込みさうして垂直的に伸張する所の衝動等の附加により、かゝる楕圓形の該當する所の變形が並立する。

此の場合に於ては、吾人は再び特に波狀列形の形に就いて語り居る。けれども前に考察された、何等の重壓から發源せず之に反し「自由に直立する所」の形に對しても、三個の茲に區別した可能が存立する。即ち此等は、(一)圓形か、(二)直立的の楕圓形か、(三)横在的の楕圓形かであるのである。

第五章 尖小形

一 尖小形總說

吾人は以上に於て、狹縮の二種の可能といふものを知得した。それは、一は反動的狹縮なるものであつて、一は餘響的進行をしながら狹縮し、且つ之と同時に垂直的に延長をなす自發的の衝動によつて起る狹縮といふものである。此等兩種の可能の反對面に立つ所のものは、一は反動的擴張であつて、一は内部的にして上方に餘響的進行をなす所の壓迫によつて起る擴張である。

されどかの波狀形を發生せしむる所の、自發的にして全形體に對して働く所の壓迫には、同種なる「尖小せしむる所」の力といふものが、對立する。さうして此の如き力といふ思想は、波狀形といふものゝ内部の本質から自然に發生する。之は、之からして、必然的なる「反對的形相」として發生する。けだし波狀形に於ては、壓迫といふものに對して、彈力的の反對的傾向といふものが存立する。かゝる反對的傾向は、先第一に、外方から内方への統括といふ反動的傾向である。されど吾人は今、此の如き傾向をば、それ自身として考察する事が能きる。かゝる場合には、壓迫と正しく反對的に働き、換言すれば自發的に狹縮を遂げようとする所の一の力又は働作といふ思想が發生する。ところが此の種の力或は働作をば、吾人は、尖小の自發的働作と稱するのである。

さうして此の如き力或は働作の働きからして、波狀形に反對する所の尖小形といふものが發生する。更に茲では、容易く理解し得らるゝ如く、尖小といふ語は、全然特定なる意義に解釋される。さうして斯かる意義は確に記憶さるべくある。即ち吾人が茲に語る所の「尖小的」といふものは、先第一に、次のやうな反動的狹縮形と區別さるべくある、それは、その基底に於て擴張された形體が、自然的水平の均衡状態に迄復歸しようとの傾向から發生する所の狹縮形といふものである。此の種の狹縮形に對しては、茲にいふ尖小形、即ち何等の附説なしの尖小形といふものは、恰も、波狀形、或は之を特徴づける所の擴張が、次の如き反動的擴張に對するが如き關係をなす。その擴張たるや、下方の狹窄から自然的の廣さに迄復歸しようとの、形體の傾向に基くものなのである。或は之を換言すると、吾人が茲に述ぶる所の尖小の自發的働作なるものは、狹縮の反動的傾向に對し、恰も波狀形中に於て自發的に働く所の壓迫が、反動的の擴張傾向に對するが如き關係をなすのである。

されど之と同等の程度に重要なものは、一方に於ては吾人の「尖小形」即ち尖小をなす所の働作と、他方に於ては上に語つた餘響的進行をなす所の「狹縮」即ち餘響的進行をなす所の此の如き衝動との間の反對性を確かに記憶するといふ事である。此の種の狹縮及び衝動に迄反對して、今語り居る所の尖小的働作なるものは、形體發生の間に於て開始し、さうして其の進行中に於て終止する所のものではない。之に反し全體の形體に迄附加せられ、さうして全體中の凡ての部分に於て別個に働き、一の形體、隨つてその各の部分に對し同様の方法に於て恒久的に存在するものである。

されど、かゝる働作が、全體の形體中に於て働くといふ事を言明する代りに、吾人は又言明する事が能きる。

曰く、之が、既に存在せるものと假定された形體中に於て働く事、恰もかの波状形を發生せしむる所の壓迫が既に存在せるものと假定された形體に對して働くが如くあると。さうして此の「既に存在せる」といふ語は、波状形の場合に於ては言明するのである。一の直立する所の形體が、よしや先第一に、波状形がなくともそこに存在する。さうして斯かる形體は、その廣さと高さとを有する。簡言すれば之は特定の形を有すると。さうして今や壓迫が來り、形を變化する。されど此の形の變化といふものは、その最初の形に於て己れを保持せしめようといふ、形の變化を受けた其の形體の能力を活動に迄喚起する。言ひ換へると、之は、繼續的に増長する所の彈力的反對的傾向といふものを發生せしむるのである。

ところが之と同様に、吾人の今取り居る實例に於ても事實關係はある。換言すると、吾人の尖小形といふ概念の根柢には、右と同様の思想が存在する。即ち茲でも、形體がそこに存在し、さうして一の形を有する。されど斯かる形體に對し、尖小化といふ動作が形を變化する。さうして又、之により、一の彈力的反對的傾向、即ち形の回復を計らうとする所の傾向といふものが喚起される。以上如くであるが故に、「尖小の自發的動作」と吾人が上に語つた「餘響的進行をなす所の狹縮の衝動」との間の反對性といふものは、二重的のものである。即ち二個の方面から考察され得る。第一の點としては、此の中間の後者即ち狹縮の衝動は、一の現存せる形體に對し、形の變化を加へながら働かない。換言すると、先第一に、餘響的進行をなす所の狹縮の衝動なるものが、特定の垂直的延長を發見し、さうして此のものゝ上に働かない。即ち此の如く延長された形體の上に働かない。之に反し、之は始めに垂直的の延長を作造し、之をして、上に説

示したる方法に於て、己れ自身から發出せしむる。之に反し、前者即ち尖小の自發的動作に於ては、特に垂直的の延長がそこに存在する。又それが存在する事により、それは己れ自らを主張すべく努力する。

さうして之と共に、既に第二の點が説示せらるゝのである。即ち右兩者中の後者に於て、狹縮の衝動によつて喚起された反對的傾向といふものは、水平的均衡状態の回復といふ單一なる傾向である。然るに前者に於ては、かかる傾向は、全體の「最初」の形、換言すれば尖小作用により變化せられ、隨つてそれに於て既に假定された形の回復の傾向である。さうして此の如き形といふものは、同時に、彼れが如き垂直的延長をその中に包有する。

此の如く述ぶるといふと、容易く理解され得る如く、吾人は一の全然新しい力といふものを引用したのである。上述せる、形の回復の傾向といふものは、一方に於ては、自然の水平的均衡状態の回復の傾向、或は尖小作用によつて減少された廣さ上の延長の傾向である。されど他方に於ては、此の中に、直に第二の要素といふものが存在する。それは最初の高さの回復の傾向である。そこで尖小形といふものは、それが水平的に狹縮する事により、同時に垂直的に延長しながら働く。換言すると、之は一般的に形體の垂直的延長を發生せしめない。之に反し、之は、よしや第二次的であるとはいへ、之を増加するやうに努力する。此の如きが故に、尖小作用より仕遂げらるゝが如き、高さの變化に對しての彈力的反對的傾向といふものは、垂直的統括の傾向である。隨つて此の如き統括の傾向といふものは、かの餘響的進行をなす所の狹縮の形の中に於て働き居る所の、自然の水平的均衡状態の回復といふ反動的傾向に迄、添加せらるゝのである。

同時に、尖小の動作なるものは、吾人が波状形中に於て働き居ると思念せねばならぬ所の、外方から内方へ

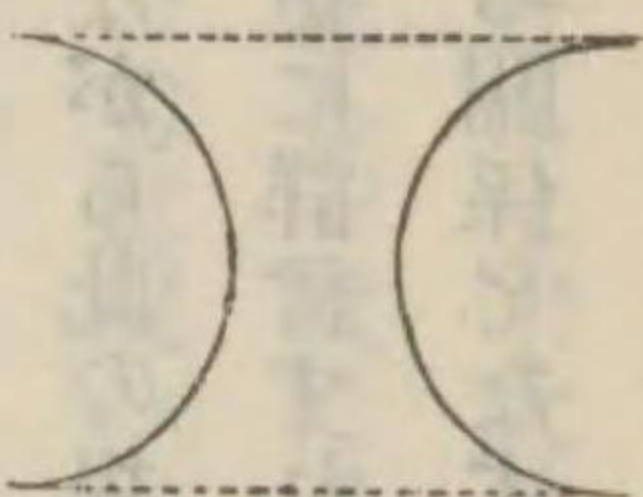
の統括の反動的傾向の反動的形相たるものである。さうして之は同時に、吾人が、波状形に於て、壓迫の垂直的働きによつて先第一に存在を促がされたと思念せねばならぬ所の、垂直的延長の弾力ある反動傾向と同質なるもの、即ち之が瞻本たるものである。

されど尖小作用により變化された所の彼れが如き回復の傾向といふものは、必然的に、かの壓迫によつて變化された所の回復の傾向と、同一の合法性を以て働く。尙之を他語を以て表出すると形體が、尖小の働作並に彼れが如き反動的傾向の爲に、己れ自身の中に於て遭逢する所の「歴史」といふものは、全然、波状形に於て、壓迫、並に此の壓迫によつて變化された所の回復の傾向から發生する所の過程と、全然類似するものたるのである。

さうして此の如くあるが故に、尖小形といふものは、全然波状形といふ形に該當する。特に彈力的反動といふ事實は、波状形に於けると同様に、尖小形に於ても、他に何等の變更を加ふる動力が加入しない限りに於ては、一の均齊なる形を發生せしむる。此の如きが故に、茲では先第一に、かの均齊的の波状形に該當して、吾人は均齊的の尖小形といふものを取上ぐべくある。さうして吾人にして、若しも、他の變更を加ふる動力を除くならば、先第一に、最も單一なる尖小形といふものが發生する。此の如きものは左の第八十圖によつて表示される。

吾人は、之に於ては、尖小作用の力が、その働きをば、形體の發端に於て開始し、さうして益々強く狭縮をなしながら働くのを見る。されど此の働きが前進すればする程、その形、即ち高さ及び廣さの回復の傾向といふも

第十八圖



のは、益々強くなる。又かれが如き尖小の衝動に對し、一面に於ては内方から外方へ他面に於ては垂直的方向に於て、益々強くなる所の彈力性の内部的の反動的働きといふものが現出する。それから漸次に、二つの力、即ち尖小運動の活躍の力と彈力的の反動的傾向といふものが、相互に均しくなるといふ所の點が生ずる。此の如き點は是形體の最大狭縮をなす點である。されど同時に、此の點は、必然的に一の轉回點となる。

即ち之から先は、彈力的の「反動」、換言すれば反對運動といふものが仕遂げられる。形體といふものは、運動の以前と同一の形に於て最初の廣さに迄復歸する。唯運動といふ動力の逆の方向及び繼續といふ事が異なる許りである。同時に、形體は、右の轉回點以前に於て、始めには急激、後には緩徐に興起したと同一の方法に於て、始めには緩徐、後には急激に己れ自身の中に沈縮する。さうして此の如くあるが故に、全體の運動といふものは、一の狭縮の運動として顯現する。唯正しく發端、中央及び終止を有する狭縮運動、並に他方に於ては、形體をば延長しながら現出せしむる所の狭縮運動として顯現する。さうして此の兩者をば、それは、それ自らの自由即ち自發的なる働作、換言すれば自發的の内部的勞作の爲に仕遂ぐるのである。

二 均齊的尖小形の變形

以上の如く解説するといふものゝ、吾人は今、尖小形といふ形の變形を稍精密に考察して見よう。吾人が茲

に語る尖小といふ自發的働作なるものは、既に述べたる如く、同時に一の垂直的の伸張である。併し之は、それ自體として此の如きものではなく、之に反し唯それが發見する所の抵抗といふ假定の下に於てのみ、此の如くある。之は、外方から、或は側面的の限界から内方へといふ方向に於てする狹縮又は相互に迄形體の内部的部分の任意なる近接に反對して、形體といふものゝ内部的部分の總方面的の抵抗である。之は、かの波狀彫形に於て、壓迫によつて二次的に仕遂げられた擴張に反對しての抵抗に該當する。併しながら、尖小的働作とかゝる抵抗との間の緊張なるものは、此の場合に於ては、形體の内部的部分の一の「轉轍」の傾向を起さしむる。さうして此の傾向は、究極する所、上方に轉轍の傾向、随つて形體といふものゝ垂直的方向に於ける伸張或は分散的展長の傾向である。併し此の如き分散展長も、形體の範圍内に於て一の抵抗に遭逢する。之は恰も此の逆に、波狀彫形に於て、上方から來る所の壓迫が第一、次的に志向する所の、相互にまで部分といふものゝ垂直的の近接が一の抵抗に遭逢するが如くあるのである。さうして外方から内方への部分の近接に反對しての彼れが如き水平的の抵抗と、垂直的展長に反對しての此の抵抗とは、合體して、既に吾人が上に立證した所の、尖小作用によつて來さしめられた所の變化に反對しての彈力的の抵抗に外ならぬのである。

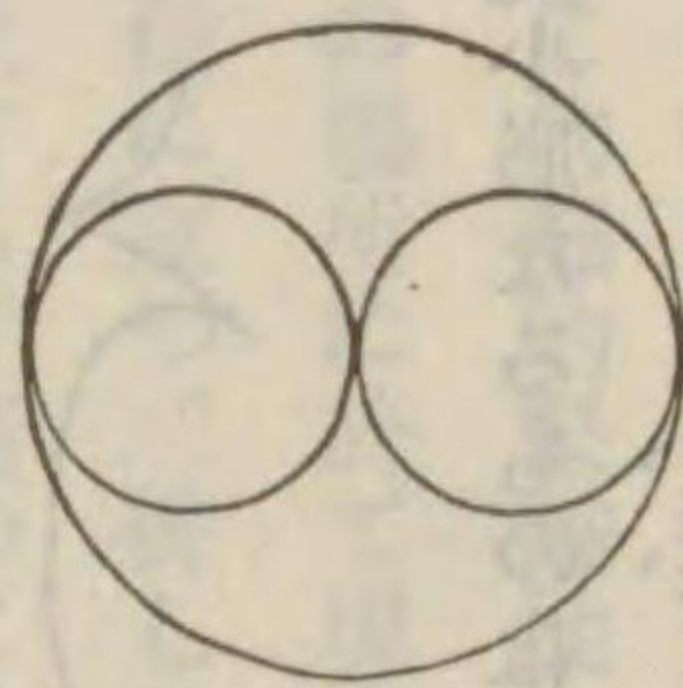
併しながら此の場合に於ても再び問題となるのは、此の如き總體の彈力的の抵抗、或はかゝる彈力的の反對的傾向、更に詳言すれば、その大きさに關し尖小作用により變化された所の回復の傾向が、尖小的働作の大きさに對し如何なる關係をなすかといふ事である。若しも彼れが如き彈力的の反對的傾向、或は彈力的に反動する所の反對的傾向にして、尖小的働作に對し、強さに於て同一であるならば、然る場合には、再び、全然かの「正規の波狀

彫形」に該當する所の「正規」の尖小形が發生する。之は、若しも彼れが如き彈力的の反動がより小なる強さを有する場合には、大なり小なりの柔軟並にそれに該當する所の抵抗の受動性といふ性質を有する所の「超正規」の尖小形となる。次に、此の正規の尖小形に對し、若しも自發的の、或は第一、次的の、形體の垂直的の伸張が加はるならば、劣正規の尖小形となる。減少された波狀彫形、或は劣正規の波狀彫形の最極端は、再び方形、隨つて基本形の第一である。過度なる尖小の形或は超正規の尖小形の最極端は、明に、第八十一圖によつて表現される

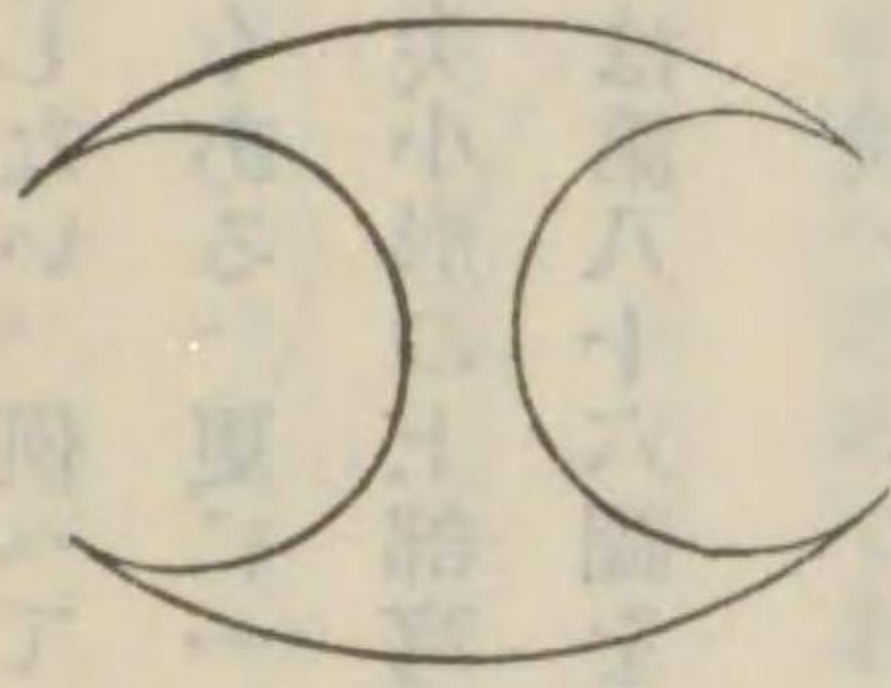
尙此の外に、第八十二圖及び八十三圖は、順次に、超正規性又は正規性の中等程度の尖小形を表現する。

超正規の尖小形に關して云へば、容易く認知せらるゝ如く、之に於ては、一の假定、即ち上に波狀彫形に於て隱默の間に爲された所の假定、換言すれば上部と下部との水平的制限の始めに假定された直線性或は平等性なるものは、尖小的働作の働きに於て變化されず存立するといふ假定が、維持されないとはいふ事である。過度即ち超正規の尖小作用

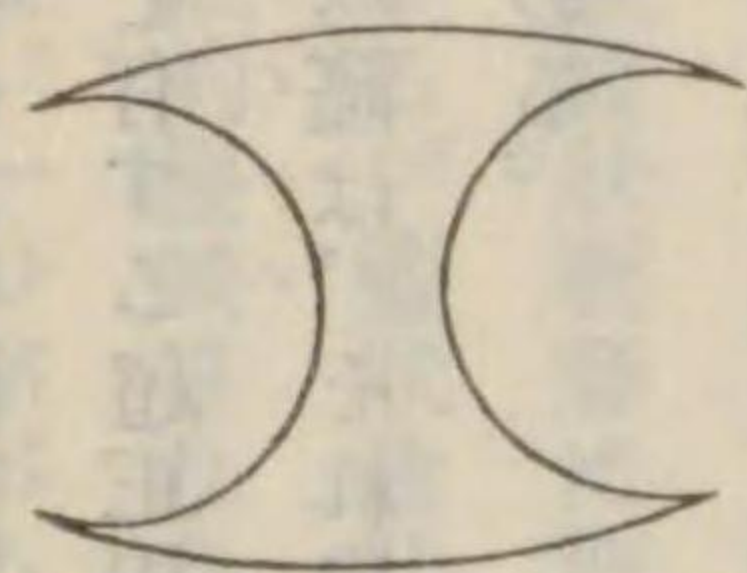
圖一十八第



圖二十八第



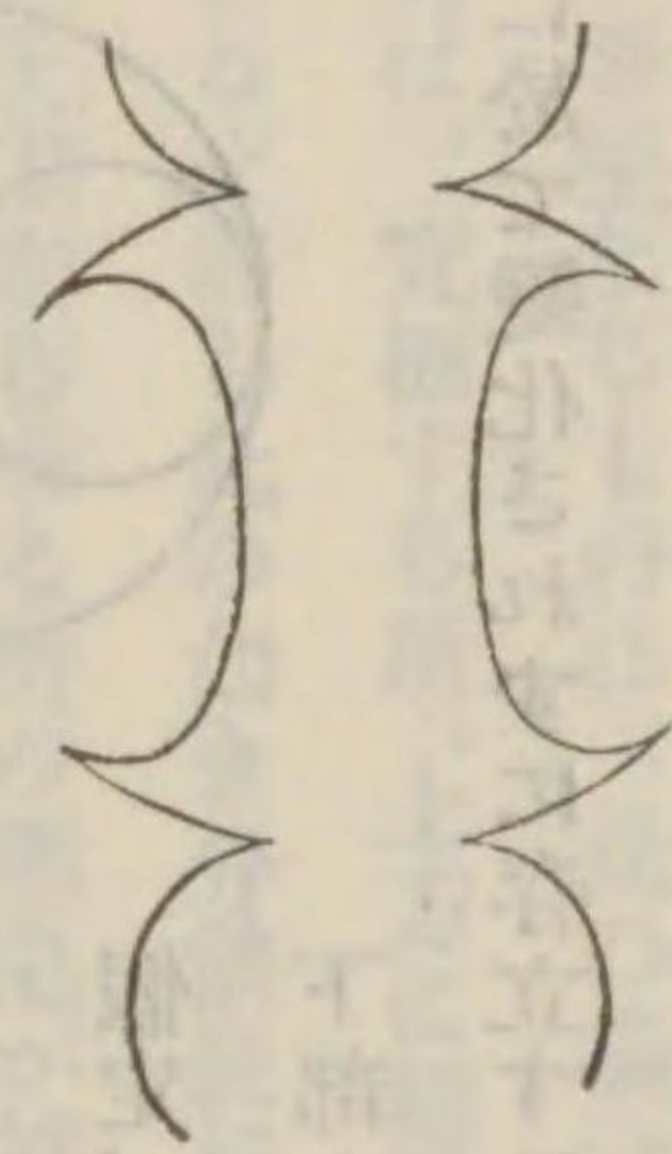
圖三十八第



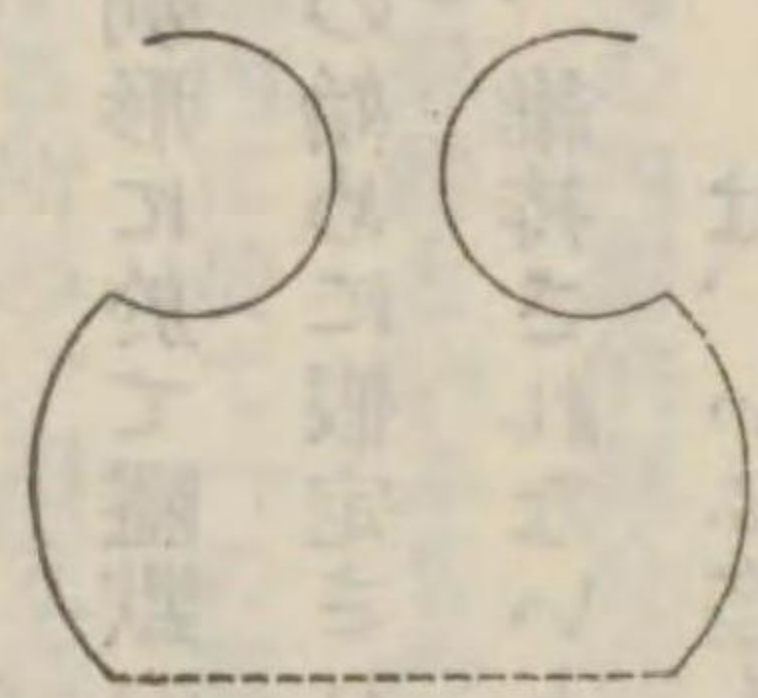
は、いふ迄もなく、中央即ち軸に迄、益々多く形體を上方及び下方に向けて己れ自身の外に驅逐し、隨つてそれが全形體を垂直的方向に於て伸張する事により、同時に上部及び下部の限界線を外方に迄穹窿せしむる。されど其の此の如くあるといふ事は、かゝる形の利用

性を妨害しない。例へていふと、造具學上の關係に於ては、第八十四圖の形の、成員の結合といふものは、思念され得べくある。更に一の波狀列形を有する超正規の尖小形は、第八十五圖の方法に於て結合され得る。最後に超正規の尖小形の上部穹窿及び下部穹窿は、それ自體として直角なる形體の集塊中に進入するべく見え得る。之に就いては第八十六圖を見るべきである。

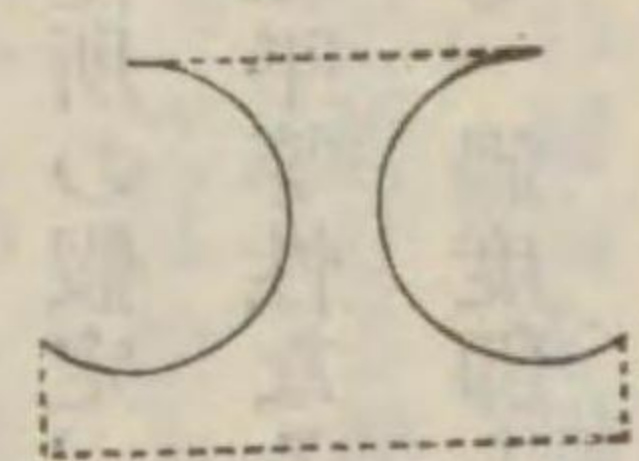
圖四十八第



圖五十八第



圖六十八第



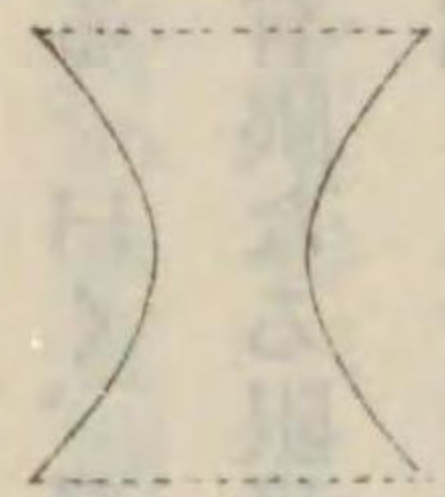
由來尖小形なるものは、自發的働作の產物であつて、反動的働作の產物ではない。随つて又、その正規性の場合に於ては、一の重壓に反對して抵抗をなすやうにされた形體ではない。否之に就て顯著である所のは、單なる抵抗の反對、即ち自由なる能動性、自發的の側面的凝集及び垂直的の自己以外への發出である。波狀列形及び尖小形に於ては、技術的官能の此等二つの方面、即ち一方に於ては抵抗作業、他方に於ては自由なる自己以外への發出といふものは、それ自體として具體化されてある。

此等の反對性を考慮の中に置くと共に、尖小形の右に區別された形といふものは、波狀列形の該當する所の形に全然比較し得べくある。

併し此の如き可比較性は、之迄説述されたよりも、尙一層多く進み得る。即ち之は、波狀列形の他の變形、並に之に該當する所の、尖小形の變形にも、推し及ぼされる。波狀列形の横面なるものは、總方面に同一なる内部的可動性といふ假定の下には、或は同一の言明となるのであるが、總方面的に同一なる内部的緊張といふ假定の下には、先第一に圓形である。ところが之と同一なる假定の下には、尖小形の横面も、必然的に圓形である。之に於ても、總方面的に同一なる緊張といふ思想に對しては、唯、圓形といふ表象が、結合され得べくある。

併しながら吾人は、尖小形に於ても、總方面的に同一なる緊張、或は差引勘定する所の均衡、若くは總方面的に同一なる内部的堅確性といふ假定を棄却し、さうして特定の方に働く所の堅確性を、附加したり、或は比較的にその場所に於て現出せしめたりする事が能きる。さうして此の場合には、とりわけ反屈曲堅確性といふものが第一位に立つ。併しかゝる反屈曲堅確性に對しては、今の場合に於ては、波狀列形に於けると正しく同一の事柄が存立する。随つて吾人は、これ以上に詳細なる立入りをなす必要はない。今茲に云うた假定の下には、膝狀尖小形といふものが發生するのであつて、かゝる尖小形は、膝狀波狀列形に精密に該當する。之が一例をば第八十七圖が與へるのであつて、吾人は之をば第五圖と比せん事を希望し置く。

圖七十八第



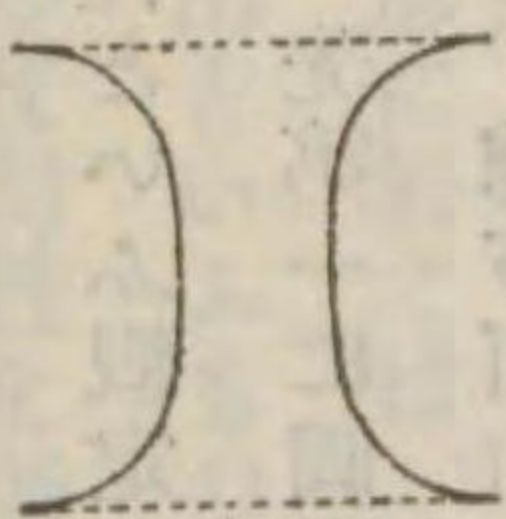
かの膝狀波狀列形に籃狀波狀列形が對立すると同様に、膝狀の尖小形に、籃狀尖小形が對立する。籃狀波狀列形なるものは、次の如き假定から發生する。曰く、形體が水平に分散的展長されるといふ可能に對しては、一の絶對的に有限なる限界が存する。詳言すれば、一の點があつて、此の點から先は、その上の水平的の延長が最大なる壓

迫といふ假定の下に於てすら、之に均しくあると。ところが此の如き假定には、尖小形に於ては、次の如き假定が該當する。曰く、形體といふもの、水平的の壓縮性に對しては、隨つて尖小作用の水平的の働きに對しては、絶對的に有限なる限界が存する。即ち一の點があつて、此の點に於ては、尖小作用の最も強い力と雖も形體の上の狹縮をはや仕遂げる事ができない。或は、此の點に於ては、擴張の反動的傾向が無限的に大であるとして、此の如き事實關係をなすといふ假定の下に、該當する波狀形形の精密なる轉換と見ゆる所の尖小形の形即ち第八十八圖の種類の形が発生する。何人も、第八十圖の形と比較して此の如き形を觀照するといふと、一の特異なる密實性といふ印象、即ち之より發生する垂直的伸張の内方運動に際して使用さるゝ特殊の力、而もその力に該當する所の可觀的の働きをばはや及ぼす事のできないといふ特殊の力の印象を取得する。

三 不均齊的なる尖小形

更に進んで、吾人は、尖小形に於ても、之迄爲した假定、即ち基底がその廣さに於て自然の水平的の均衡状態を表現するといふ假定を棄却する事が能きる。かゝる假定の下に、不均齊なる尖小形が発生する。然るに之迄吾人が思念して居つた尖小形なるものは、是均齊的のものである。斯かる不均齊なる尖小形に於ても、再び二つの可能が存立する。それは、一には、基底が狹縮の状態を表現するといふ事である。二には之が擴張されてあるといふ事である。再び、形體といふものは、いつでもそれに強制された狹縮又は擴張の外に發出する。此の如くして、

第八十八圖



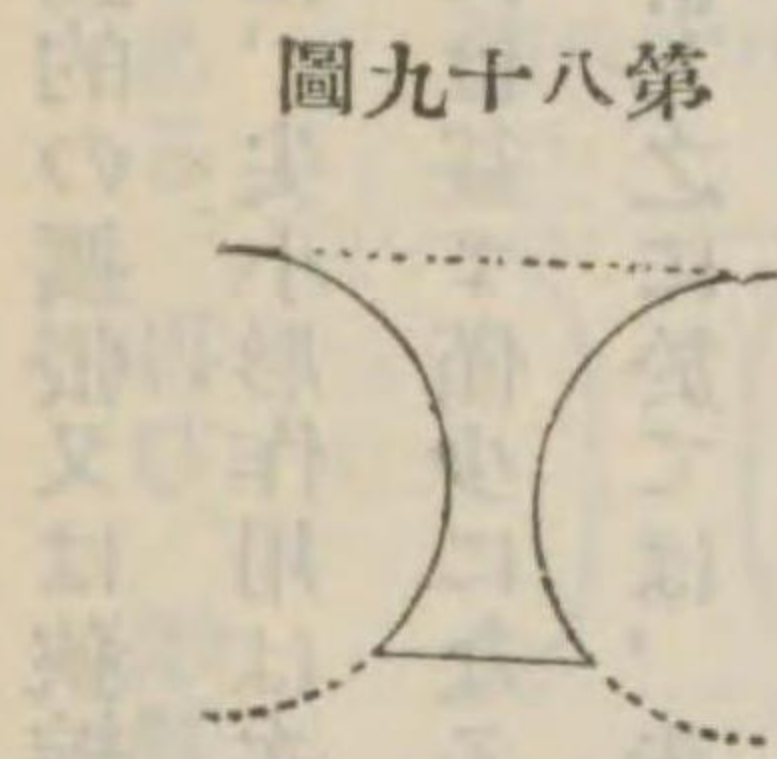
反動的の擴張又は狹縮を有する尖小形が発生する。若しも基底にして「狹窄」の状態を表現するならば、然る時には、尖小形作用は次のやうな方法に於て變化される。それは、その發端に於て一の始めにはより大にして、次には益々僅少になる擴張の傾向が附加しさうして之に反動的に働く場合に起生するが如き方法なのである。併し之に於ては、先第一に二つの種類の場合が區別さるべくある。假りに、例へていふと第八十圖の如き一の均齊的の尖小形が與へられてあるとする。かゝる尖小形に於ては、その經過の各の點に於て、尖小作用に對する自然の反動が多少の大きさを有し、さうして他方に於ては、尖小の力が多少の強さを有する。前者と後者との大さは、かゝる點に先行する所の尖小の經過の產物である。かゝる產物の爲に、尖小作用に對する反動的傾向は、或る程度迄満足される。さうして尖小の働或は尖小運動といふものは、此の様な抵抗に打勝つ勞作の爲に、その活躍の力の一部分を喪失する。

ところが此の場合に於ては、必要な變化を加ふる事により、前に下方の狹縮された均齊的波狀形形に關して言明した所のものと、同一の事項が成立する。換言すれば、吾人は今云ひ居る點に關して存在する所の事實關係の履歴を確定せしに置き、隨つて事實關係といふものを單に與へられたるものと認むる事が能きる。此の事は次のやうな事を妨げない。それは之に於て尙存在する尖小運動の活躍の力が、かれが如き反動的傾向の満足によりて以て測定し得べき所の、其の點に於て取得された廣さと合體して、同一なる方法に於てその上働くといふ事、即ちいふ所の事實關係が彼れが如き履歴によつて喚起された場合と同一なる其の上の形を發生せしむるといふ事を。ところが尖小形なるものは、彼れが如き點から先きは、或は形體の彼れが如き點と上方の終點との間の尖小

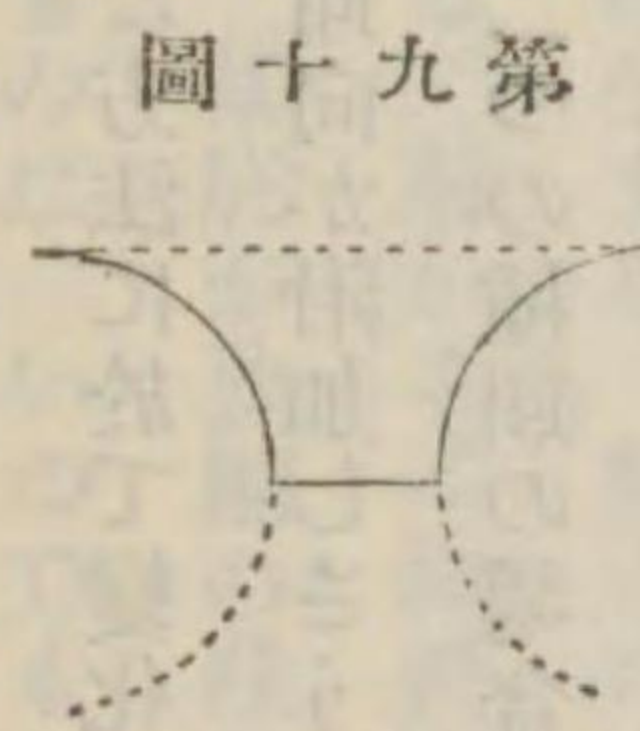
形の片は、それ自體として考察されるといふと、一の不均齊な尖る小形、特に閉込められた基底を有する尖小形であるのである。

此の如くあるが故に、閉込められた基底、並に之により來さしめられた擴張の傾向を有する不均齊なる尖小形が存在するのであつて、而も此の種の尖小形は、一の均齊的尖小形の垂直的の切斷によつて分割された上部の片と同様に考察さるゝ事が能きる。同時に吾人は認知する、右の逆に、一の均齊的尖小形の右の如き方法に於て分割された各の上部の片は、たゞ正しく、大なり小なり閉込められた基底を有する一の可能なる尖小形を發生せしむるといふ事を。

ところが斯くあると共に、吾人は閉込められた基底を有する尖小形の第一種類を得る。之は正しく、均齊的尖小形の孰れかの上片と重なり合ふ所の尖小形である。或は、之は、下方に迄繼續する事により、完成されて、一の内部的に可能なる均齊的尖小形となるやうに作出されたものである。此の如き尖小形は、例へていふと、第八十九圖及び九十圖のそれであつて、之に於ては、孰れも彼れが如き補成は、點線によりて示されてある。



第九十八圖



第九十九圖

併しながら、閉込められた基底を有する各の尖小形が、均齊的尖小形の上片の形を有するのではない。之に反し、かゝる言明は、唯、上になした假定が充實されてある所のものに關してのみ、成立する。されど斯かる假定は又、次のやうに説述する事が能きる。曰く、基底の狹縮、並に之より生ずる

所の反動的の擴張傾向が、次のやうな狹縮並に之により來さしめられた擴張傾向と一致する。それは、その他の點に於て同一なる種類、特に同一なる上部の廣さの均齊的尖小形、隨つて同一なる水平的均衡状態の均齊的尖小形に於て、孰れかの場所に於て、尖小働作の働きによつて發生せしめられた狹縮及び擴張傾向なのであると。

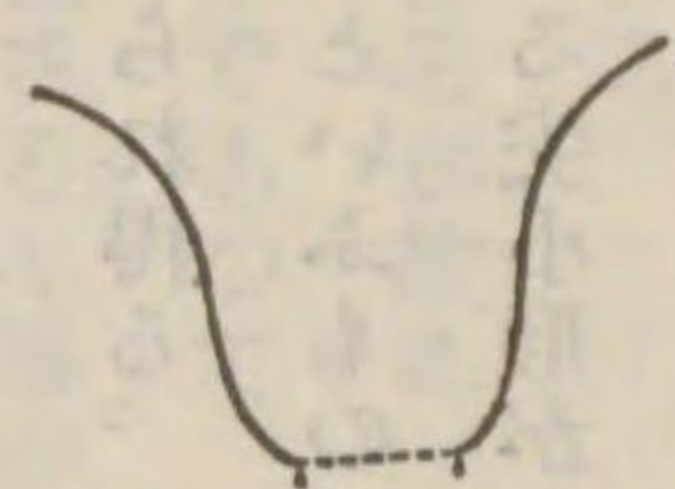
之に反し吾人にして、此の如き假定が充實されず、反對に、擴張の反動的傾向、或は同一の言明となるのであるが、下方の閉込みが茲に假定されてあるよりもより大であると思念するならば、其の場合には、第九十一圖の示すが如き形が發生する。

今や逆に、一の尖小形の基底が、自然の均衡状態以上に、而も此の場合にも此の均衡状態はいつでも上部の廣さによつて表現されてあるのであるが、兎に角かゝる均衡状態以上に展長されると假定する。

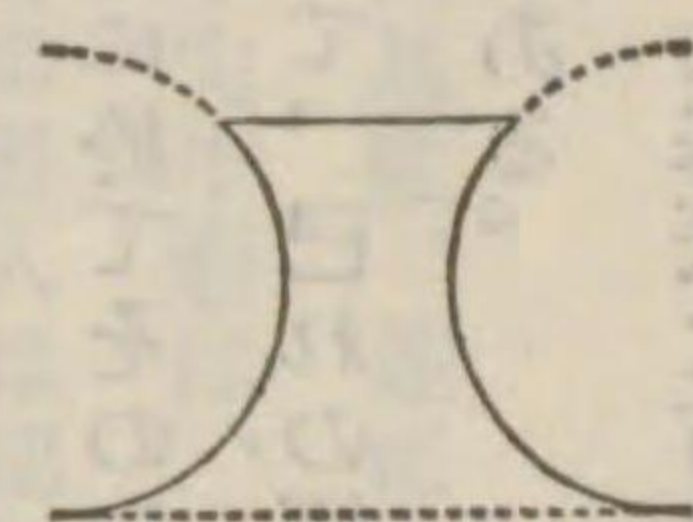
此の如き場合に於ても、二つの根本的可能が成立する。或は、尖小形の形の二つの根本の種類間の差別が存在する。此の種の差別は、右に述べた所の、狹縮せる基底を有する尖小形の二つの種類間の差別に類同して居る。吾人は假定する、均齊的の尖小形、例へば正規の尖小形又は圓形の尖小形から、水平的の切斷によつて、前の如く下方の片でなく之に反し上方の片が切り去されると。かゝる場合には、殘存する所の下方の片は、次のやうな尖小形と認められ得る。それは、上方に於てその自然の垂直的の均衡状態にあり、それかというて其の基底は擴張されてあるといふものである。隨つて、己れの經過に於て一の均齊的尖小形の下部と一致する所の、擴張された基底を有する尖小形が存在するのである。

併しながら斯かる言明は、擴張された基底を有する凡ての尖小形に關して成立するのではない。之に反し之は

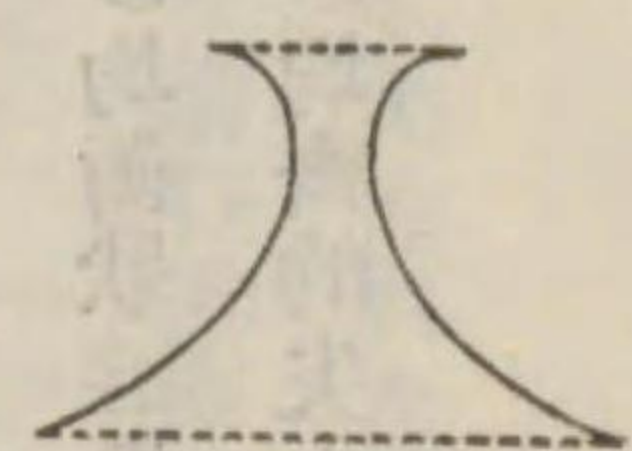
圖一十九第



圖二十九第



圖三十九第



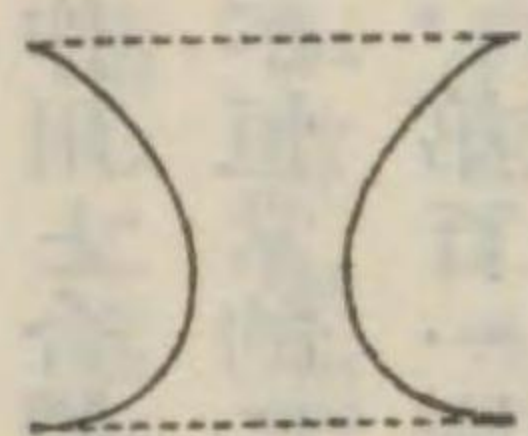
唯次のやうなものに關して成立する。即ちそこに於ては、下方の擴張が大であつて、爲に之から復歸の傾向は、形體の開始に於ける尖小の自發的働作と合體して、その他に於て同一なる種類の、特に基底の同一の廣さを有する。均齊的波狀形に於ける尖小的働作の發端的強さと均しくあるものなのである。
若しも之が事實でなく、之に反し下方の擴張がかゝる程度を超ゆるならば、第九十三圖の種類のやうな形が發生する。

四 漸滅的閉込み及び漸滅的壓迫を有する尖小形

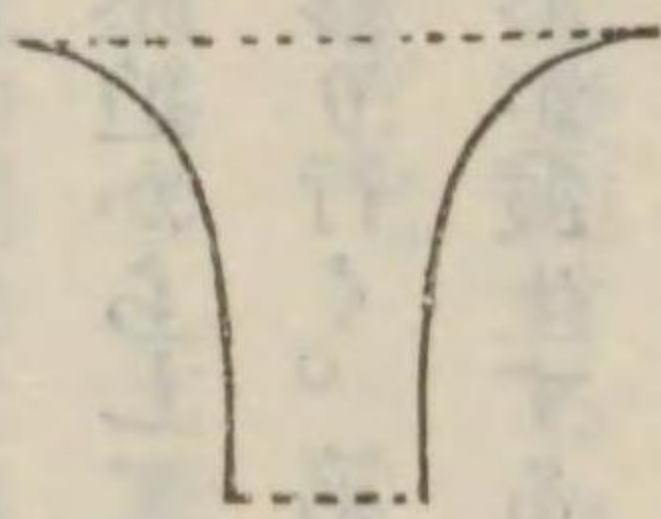
吾人は今、尖小形といふ形に於ても、吾人が漸滅的閉込みといふ名稱を以て説示した所の假定をなす。此の場合に於ても、吾人は再び、均齊的の基本形から出發する。換言すれば基底が自然の水平的の均衡状態を表現すると假定する。斯くするといふと、漸滅的の狹縮は、第九十四圖によつて寫出さるゝが如き尖小形の形を發生せしむる。之に對して若し狹縮された基底が添加さるゝならば、適當なる條件の下に、第九十五圖の示すが如き「純

然たる走出」といふ形が發生する。之に於ては、横面線は、發端に於ては垂直的の眞直に經過し、次に尖小形の上端に迄移行する。右にいふ「適當なる條件」とは、一方に於ては發端に於て、擴張の反動的の傾向が有する所の強さと、他方に於ては、尖小働作の強さ丈増加された、水平的閉込みのそれ自身の中に麻痺する所の強さとの間の均衡といふものである。

圖四十九第

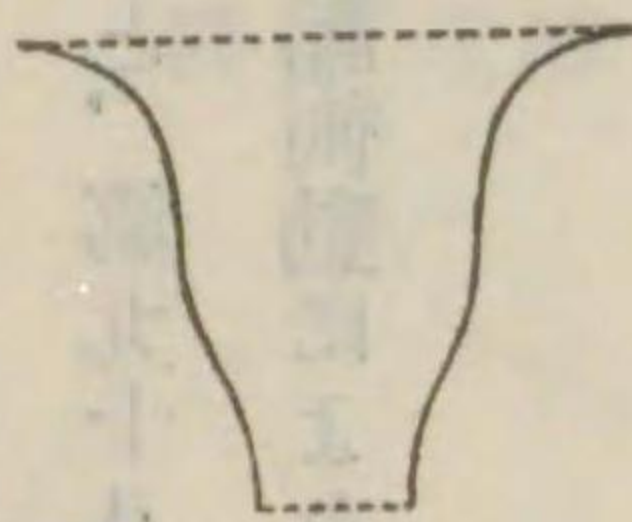


圖五十九第

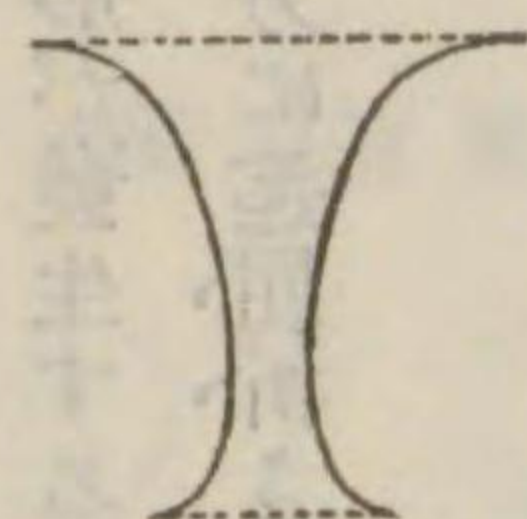


併しかく述ぶると同時に、二つの他の可能が概示される。それは、第一には、擴張の反動的傾向が右に假定されたよりもより大であるといふ事である。かくある時には、形體は第九十六圖の形を取得するのであつて、此の種の形たるや、より僅少なる脹出と、横面の下端が前行的に直線或は横面線の

圖六十九第



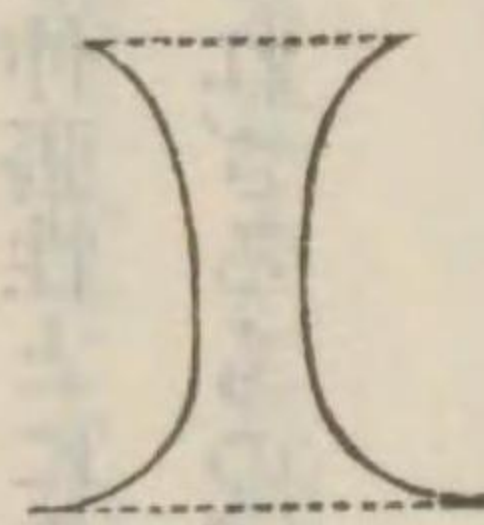
圖七十九第



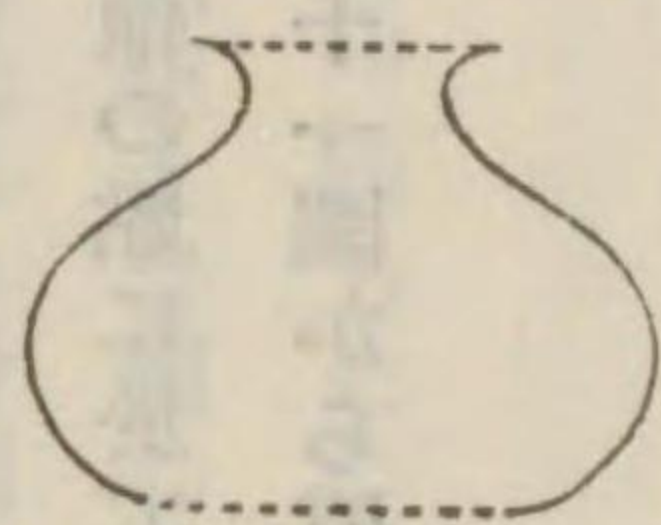
擴張の反動的傾向がより僅少であり、かくて狹縮衝動が之に反抗して可觀的に働き得ると。此の場合には、第九十七圖の種類の形が發生する。
以上に於ては、吾人は基底の狹縮といふものを、假定する。之に對立して、基底の擴張といふ假定がある。吾人にして今

擴張された基底を有する尖小形中に於て、再び、狹縮の一の漸滅的の衝動を働かしむるならば、然る時には、例へていふと、第九十八圖の種類の形が発生する。かゝる形に於ては、第九十三圖と比較して、横面線の下端が漸滅的の狹縮衝動により、高度に内方に迄屈折されてある。

圖八十九第



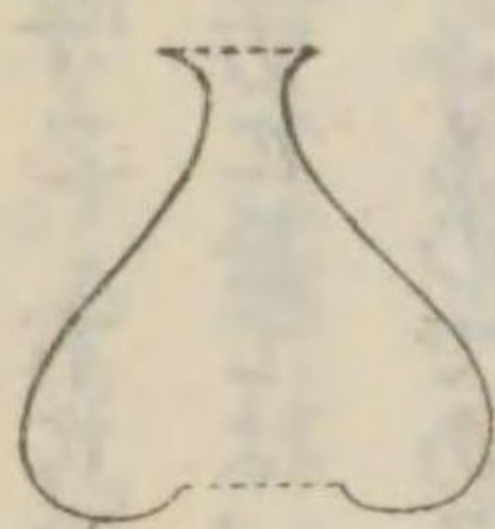
圖九十九第



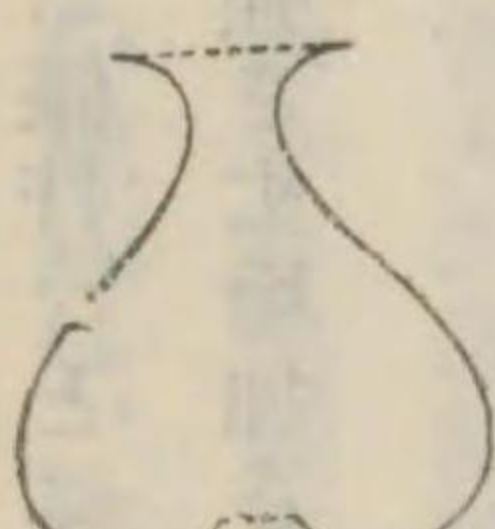
更に進んで、吾人は尖小形に關しても、一の漸滅的の内部的壓迫といふ假定をなして見る。再び此の如き假定も、次の事から無關係にある。それは、尖小形が、狹縮もされなければ又擴張もされない基底から興起するか、又は基底が擴張或は閉込みを受くるかといふ事である。此の第一の場合に於て

は、尖小作用と合體された漸滅的壓迫からして、第九十九圖又は百圖の種類の形が発生する。此の際には、絶對的の脹出が恒常的に尖小作用に迄移行行く。第二の場合、即ち狹縮された基底の場合に於ては、漸滅的壓迫の影響の下に、第一百圖の示すが如き形が発生する。第三の場合に於ては、第一百二圖の示すが如き形が発生する。

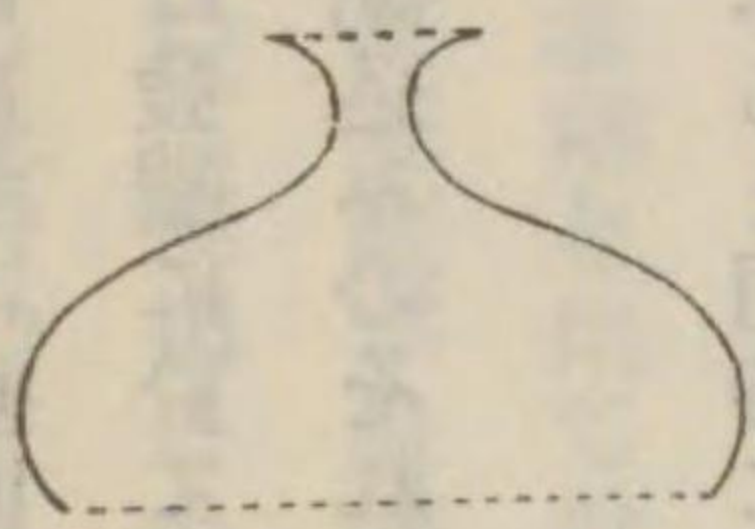
圖百第



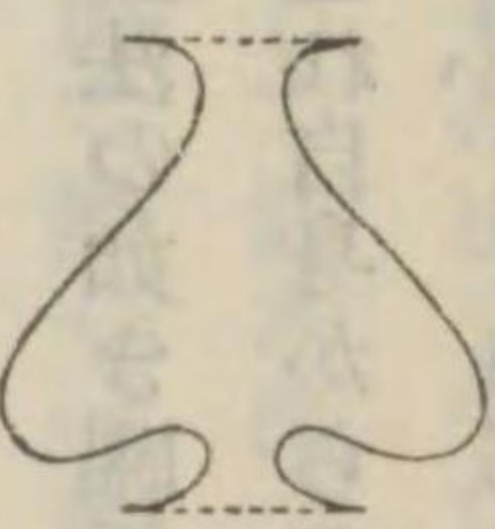
圖一百第



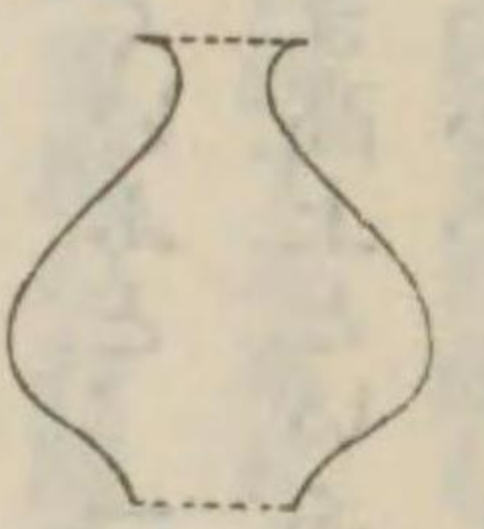
圖二百第



圖三百第



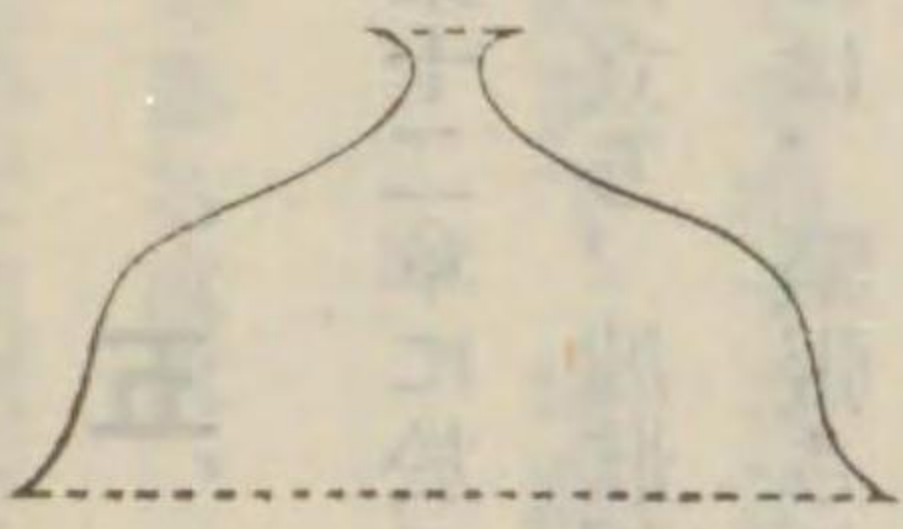
圖四百第



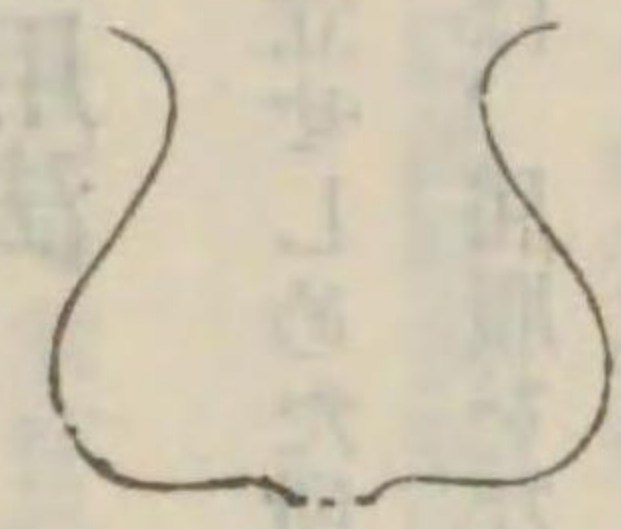
最後に、尖小形に於ては、かの波狀剝形、並に波狀剝形的でもなければ又尖小形的でもない形、即ち第十二章に於て語つた所の自由或は少しも重壓されずに直立する形に於けると同様に、漸滅的壓迫と漸滅的狹縮といふ二つの動力は共同的に働く事が能きる。而も再び、基底が狹縮されたものであるか又は擴張されたものであるか、若くは第三に之が自然の水平的の均衡状態を表現するかは、無關心的にある。随つて尖小形が均齊的であるか又は不均齊的にあるかは、無關心的にあるのである。

吾人は始めに第一の假定をなし、さうして此の際漸滅的狹縮が先第一に強さに於て優勝し、随つて漸滅的壓迫よりもより強くあると思念する。此の場合には、第一百三圖の示すが如き形が発生する。此の逆に、吾人にして、壓迫に對しより大なる強さを與ふるならば、此の形は、第一百四圖の形に迄變化する。更に若しも基底が狹縮又は擴張されてある場合に發生する所の變形は、第一百五圖及び百六圖が之を直觀的になす。

圖五百第



圖六百第



五 尖小形の利用法

吾人は、第十二章に於て波狀列形に對立せしめた所の形體をば、「自由直立」の形と稱した。かゝる自由直立の形に迄反對に立ち、波狀列形といふものは、屈服をなしさうして彈力的に抵抗する所の形である。之に反し尖小形といふものは、緊張された内部的働作、延長及び高上の一の勞作が、内部的抵抗と尖突するのを表現する所の形である。之は特に、能動的に己れ自身から發出する所の形である。之に於ては、一の遭逢された影響に對しての抵抗といふものは少しも存在しない。寧ろ此の如き抵抗の代りに、内部垂直的にして己れ自身から發出せしめらるゝ所の働作、即ち積極的の垂直的勞作を仕遂げしむる所の一の働作が現出する。

之は常に、此の如き勞作が要求されるといふ事、即ち或るものが垂直的方向に於て爲さるべくあるといふ事を前提する。此の故に、此の如き形には、重壓といふ思想は決して矛盾しない。されど之は重壓に對し、かの波狀列形のやうに、之を支持消化するといふ態度に出でない。之に反し内部的緊張に於て之を高上せしむるといふ態度に出づる。

此の如きが故に、波狀列形と尖小形とは、相互に對し一般的の重壓といふものに可能である所の二つの相反對せる行動法の如き關係をなす。詳しくいふと、一に於ては屈服、並に屈服する中に於てなす彈力的抵抗、他に於ては、己れ自身からの出發並に力強き高上といふものである。さうしてそれが正しく此の如くあるが故に、若しも一の重壓をば内部的の力によつて打勝つ、といふ事が問題となる場合には、兩者は相關連する。一體重壓の打勝

ちといふものは、若しも吾人がその重壓を目視しないならば、吾人の印象に對しては、一の重壓の打勝ちではない。さうして吾人は、之が働くのを目視する事によりてのみ之を目視する事が能きる。ところが吾人は、之が波狀列形に於て働くのを見る。更に此の重壓の打勝ちなるものは、若しも之が、自發性の反對的勞作なしの單なる固持であるならば、その語の十分なる意義に於ける重壓の打勝ちではない。然るに此の如き打勝ちをば、吾人は尖小形に於て目視するのである。

之と共に同時に言明せらるゝのは、此等の相互に關連する形の結合の自然的方法は如何にあるかといふ事である。先第一に重壓といふものが上から働く。さうして之が始めに働く所に於ては、それは自然的方法で受納せられ、さうして内部的に經驗される。隨つて此の所に於ては、之は又可觀的に働く事になる。さうして之から先下方には、一の反對的働きが缺損しないといふ事を假定して、吾人は自然的にかゝる反對的働きの有力なるもの、現出するのを見る。此の種の事實關係をば二三の「イオニク」の柱の礎石が指示する。かゝる礎石の中には、實に全建築の重壓といふものが、柱身中を透して働き込むのである。之に於ては、吾人は、若しも今事實關係を逆の方向に於て考察するならば、形體が、一の尖小形、否恐らくは二重化された尖小形に於て、隨つて集中の繰返された開始に於て、地面から分離し、次に波狀列形に於て重壓を受納し、之を彈力的抵抗によつて消化するのを見る。

勿論此の如くある事が、柱の礎石といふものゝ本旨であるのを要しない。都合によると、此の礎石は唯、波狀列形といふ形に於て重壓を受納し、之を固持する。

更に他方に於ては、礎石のより豊、富なる構成の可能といふものも存立する。此の際、一の建築物の重壓が、先第一に而も直接に、上方から礎石に對して働くといふ事が依然として存在する。されど礎石といふものは又、反對の方面から一の働きを受くる。即ち重壓が礎石を透して地面の上に働き、さうして地面の反對的壓迫といふものを發生せしむる。して又斯かる反對的壓迫も、形體によつて受納せられ、且つ内部的に消化され得る。次に上部の波狀刳形に一の下部の波狀刳形が對應する。さうして之に於ては、礎石が地面の廣さに對して壓迫されてあるが故に、又全體の礎石が、下方の地面の廣さに迄密着すべき任務を有するが故に、之が唯より廣くなるのである。更に此等二つの波狀刳形の中に、自然的に尖小形が加入し、さうして重壓をば地面から向上せしむる所で、上方と下方との二つの方向に迄働く。此の種の動機をば、吾人は「アチック」礎石に於て見る。之に於ては、地面からの自由なる分離と、地面に迄密着との兩者が現出する。此の如くして、下方からの一の壓迫といふものが、一の形體中に於て受納せらるゝやうに見え、さうして下方の波狀刳形を正當化するのである。

されど此の如く述ぶると共に、先第一に尖小形といふものに對し、その特殊の位置が指定せられたのである。同時に又、容易く理解せらるゝ如く、此の如き尖小形は、建築的全體、若くは何等かの全體が終結する場所に於ては、その位置を占むるといふ事は能きない。更に他方に於ては、純粹の尖小形なるものは、之迄語つた形の中では、かの製陶的形體に對して最も僅少なる意義を有するといふ事も判明する。此の種の形體に於ては、尖小形が爲すやうな嚴肅なる勞作は行はれない。或は最も僅少なる程度に於て行はるのである。

尙此の外に、建築的連絡中に利用せらるゝに際しては、尖小形の特殊の性質といふものは、他の範圍に於ける

と同様に、無意義であるのではない。一例を挙げると、籃狀弓形的尖小形といふものは、特に、内部的緊張といふものを其の中に包有する形の所である。此の故に此の如き形は、尖小形が建築的連絡中に於て仕遂ぐべくある所の勞作に對し、最も自然的のものとなる。

終りに臨んで尖小形に關して留意すべきは、それが他の點に於て如何なる性狀のものであるにもせよ、各の場合に於て、尖小形なるものは、その根本形からすると、圓形、又は起立存在的の楕圓形であるといふ事である。

第五章 尖小形的の波狀刳形と波狀刳形的の尖小形

一 「結合された横面」に關する一般的説明

波狀刳形と尖小形といふ形、並に自由直立形に對し、單一なる物體的形の第四及び第五の根本種類として、尙次のやうな形がある。それは、外部的に考察すると、波狀刳形及び尖小形といふ形の結合として表現し、それかというて實際に於ては、一の全然特異なる内部の本質性を有するものである。されど吾人は、名稱を簡單にする爲に、此の如き形の横面をば「結合された横面」と稱しようと思ふ。

本來波狀刳形といふ形に於ける固有の動員たるものは、重さである。特に、形體に對し上方から働く所の重壓としての重さである。此の重壓は、その性質上垂直的に働く。されど次に同時に、垂直的に相互に對し壓服され

た部分の傾向の爲に、側面的に轉轍し、隨つて第二次的方法に於て、内方から外方に對して働く。之に反し、尖小形に於ける固有の動因たるものは、自發的に狹縮する所の働作である。此の働作は、第一次的に外方から内方に閉込みながら働く、さうして第二次的に、垂直的に伸張しながら働く。

そこで、若しも吾人にして、一の形體中に於て、波狀列形と尖小形との此の如き根本的力が結合されてあると假定するならば、然る時に、之よりしては、此の如き力の全然たる消滅、又は部分的の交互的消滅以外の何ものも發生しないやうになる。波狀列形に對し、又は此の中に於て、働く所の尖小作用なるものは、唯、波狀列形を消滅せしめたり又は減少せしめたりし得る。さうして此の逆に、一の尖小形に對して、波狀列形の發生に對し前提さるゝが如き一の壓迫が働くならば、然る場合には、尖小形は、始めには扁平にせられ、次に全然潰滅せしめられる。

されど吾人は今、特別に、此等二つの形體中に於ける力及び運動傾向の方向に留意して見よう。吾人は云うた。波狀列形に於ては、壓迫が上方から下方に迄働く。されど之より發生する所の擴張的の働き、即ち内方から外方への働きは、側面的の限界線が屈曲する事により、益々多く凡ての可能なる方向に於て起生する。之と同一の言明は、尖小形に於ける尖小的働作に關しても、成立する。斯くある事に該當して、兩場合に於て、彼れが如き擴張的働作と之が如き尖小的働作によつて喚起せらるゝ所の彈力的の反對的働きといふものも、あらゆる可能なる方向を有する。

ところが、此の如き事實關係は確實であるとはいへ、隨つて特に、壓迫に於けるも將た尖小作用に於けるも、垂直的方向と水平的方向とは、純粹に相互對立をなさないとはいへ、而も茲にいふ形體の全體中に於ては、此等の方向は、相互から區別されて存する。即ち右の如くあるにも拘はらず、波狀列形と尖小形とは、一の基底の上に於て直立しさうして垂直的延長に於て己れを主張する所の形體である。此等は、基底からその發端を取り、さうして上方の水平的の限界線に於て終止する。此等は、前者をば不可變的前提として有し、後者をば必然的目的として有する。さうして斯くあると共に又、他の根本方向、即ち水平的の方向は獨立化される。隨つて、吾人の印象に對しては、垂直的の行動と水平的の行動とは、相互に對立する。即ち、總方面的に向注された働作からして、再び、垂直的方向及び水平的方向といふものは、吾人の總印象自體に於て、相互對立をなす所の根本方向として離出する。

而も此の状態は、尙之より以上である。即ち二つの形體は、その完成的の總存立状態に於ては、垂直的の方向に於て存留するものとして顯現する。之に反し、外方から内方への方向に於ては、吾人は、此等が活躍的の運動をなすのを認める。さうして此の如き運動は、正しく活躍的の運動としては、此等に對し特徴的のものとして現出する。同時に、かゝる運動は、彼れが如き垂直的の存留に反對に立ちて、その根本容狀上、水平的の運動として顯現するのである。

ところが斯かる言明は、波狀列形に就いても、將た尖小形に就いても、同一の方法に於て成立する。されど同時に、兩者は再び、次のやうな事によつて相互から區別される。曰く、完成的の波狀列形は、全體に於て、一の外方に迄擴張されたもの、尖小形は一の内方からそれ自身の中に閉込められたものとして顯現すると。併し此の

如き反對性は、その根本容狀上からすると、再び水平的行動の反對性と見ゆる。即ち彼れに於ては、形體に對し固有の特徴たるものは、水平的の擴張であるやうに見え、之に對しては、同一の方法に於て、水平的の閉込みが特徴であるやうに見ゆる。前種の形體は、その特徴的の根本容狀上、水平的に擴張するものであり、後種の形體は、その特徴的の根本容狀上、水平的に閉込みをなすものである。

ところが同時に、波狀形なるものは、水平的に無限に擴張をしない。又尖小形は水平的に無限に收縮をしない。之に反し、前種の運動も後種の運動も、限制されてある。兩種の働作、即ち波狀形に對して「特徴的なる働作」と尖小形に對して「特徴的なる働作」とは、その必然的の補成者をば、相反對せる方向を有する働作、隨つて均しく水平的なる働作中に於て發見する。さうして前種の働作が思想的に獨立化さるゝ事により、之は又後種の働作となる。

然るに此の第一の働作は、波狀形に於ても尖小形に於ても、反動的性質のものである。されど吾人は今、思想に於て、此の種の働作をば、此等を波狀形及び尖小形に於て喚起せしめた所の働作から、分離し得る。或は此等をば、又かゝる意義に於て思想的に「獨立化」する事が能きる。

併し斯くすると共に、吾人は、自發的にしてさうして内容上水平的なる働作といふ表象に到達するのであつて、而も此の種の働作たるや、波狀形及び尖小形に對して特徴的なる働作、即ち波狀形に於ては水平的擴張の働作、尖小形に於ては水平的閉込みの働作に、反對的に働くものなのである。

但し、此の如く思想の發生の右のやうな自然の道程が如何にあるにもせよ、各の場合に於て、次のやうな表象

法は自然的のものである。曰く、波狀形の水平的擴張には、或はそれが水平的である程度に於て、此の如き擴張には、一の該當的にして隨つて水平的に閉込みをなす所の働作が、對立的に現出しさうして反對的に働く。又之と同様に、尖小形の形に於ける水平的の尖小作用には、或はそれが一の水平的のものである程度に於て、かゝる尖小作用には、該當的にして隨つて水平的に擴張する所の働作が、對立的に現出しさうして反對的に働く。而も吾人は、此の如き自然的の表象法をば眞面目に受取る。隨つて吾人は、波狀形をばそれがある如くに思念する。特に、それがある如く擴張されたと思念し、且つその擴張には、一の水平的にしてさうして水平的の閉込みを志向する所の働作が反對的に働くと思念する。して又、尖小的に於ても、之に一致する所の反對的の假定をなす。然る場合には新奇なる形が發生する。

此等の形は、吾人が、右の如き水平的働作、即ち水平的の擴張又は閉込みに對立的に現出しさうして反對的に働く所の水平的働作に對し、思想に於て與へる所のそれ／＼の量に應じ、それ／＼異なりたるものとなる。否、一度かゝる働作を獨立的に思念した後は、吾人は自由に、之に對し任意の量を與へ得る。

二 尖小形的の波狀形

之を述ぶるに就いても、吾人は再び、波狀形と尖小形との間に區別を立てねばならぬ。さうして吾人は、此の場合に於ても、始めに波狀形を取上げようと思ふ。此の波狀形なるものは、その特定の下方の廣さを有し、さうして之は、此の如き特定の完成的に與へられたる波狀形としては、その特定の自然の水平的の均衡状態、

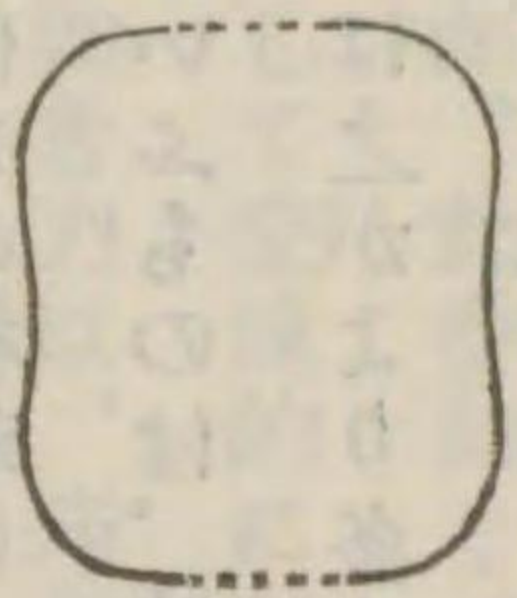
随つて其の特定の上方の廣さを有する。尙その外に、之に於ては、それをして此の如き特定の形を有するに至らしむる所の力といふものが働く。

ところが、此の如く、その下方及び上方の廣さに關して確立して居り、又その形、又はかゝる形の根柢に存する力に關して完成的に與へられてあるといふ波狀彫形に對しては、一の水平的に收縮する所の力が働くこと假定する。此の如き力は、現存せる運動が一の水平的のものである限りに於ては、内方から外方への斯かる存在せる運動に對して向注されてある。之に反し、此の運動が水平的のものでなくて垂直的に向注されてある限に於ては、右の力は此の運動に對して何物をも爲す事は能きぬ。されど此の事は意味する。吾人が今假定する所の狹縮的の力なるものは、波狀彫形をば、各の場所に於て狹縮し、而もかゝる場所に於て限劃的働作が水平的に向注されてある程度に於て狹縮する事が能きるといふ事を、併し限劃的働作なるものは、限界線が垂直的に經過する程度に於て、水平的に向注されてある。此の如きが故に、茲に新に假定された、波狀彫形に對して働く所の働作といふもの、働きのなるものは、唯次の如き事から成立する。即ち波狀彫形の横面線が、それが水平的に經過する程度に於て、水平的に内方に迄變動されると。同時に右の働作は、此の事をば、いふ迄もなく、吾人が水平的に擴張する働作に比較して水平的に狹縮する所の働作に對して附與する所の力の程度に應じて爲す。さうして斯くあると共に、再び此の逆が成立する。曰く、内方に向つての垂直的に經過する所の横面線の各の水平的の變動といふものは、必然的に、水平的に内方に向注せられ、随つて水平的に擴張する所の働作に對して向注せられさうして此の働作の働きを減少したり又は比較的消滅せしめたりするといふ力の印象を喚起すると。

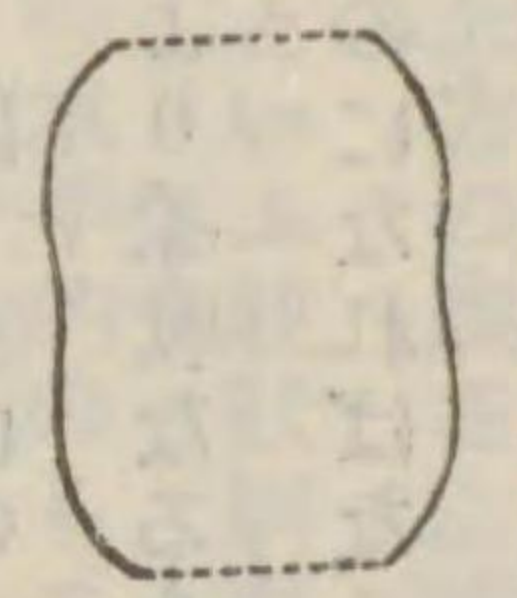
吾人が茲に眼中に有し居る所の形は、第七圖の種類の形である。此の如き形をば、吾人は判然、水平的に尖こされた波狀彫形と稱する。此の第七圖に於ては、一の均齊的の波狀彫形が假定されてある。ところが斯かる波狀彫形なるものは、吾人が知得せる如く、第一には純然たる彈力的のものか二には密實なるものか三には比較的柔軟なるものであり得る。勿論此のやうな諸種の波狀彫形の各の形は、水平的に閉込む所の力によつて働かれさうして變形さるゝ事が能きる。随つて又、(一)純粹にして十分彈力的なる尖小的の波狀彫形、(二)密實なる尖小形的の波狀彫形、(三)柔軟なる尖小形的の波狀彫形といふ可能が存立する。之よりして發生する所の區別をば、吾人は第八圖及び第九圖からして認知する。凡て此等の形に於ては、水平的の閉込みが狹隘なる限劃を受くるといふ事に留意すべきである。一の形、例へば第十圖の形の如きものは、美的には不可能なるものである。否明かに、一の尖小的働作なるものは、それがより強くあり、隨つて狹縮がより深くなればなる程、益々多く、上方及び下方に影響しさうして横面線をばその全延長に於て左右せねばならぬ。されど斯くたると共に、内方屈曲といふものは、いつでも扁平になる。そこで第十圖からして、第七圖又は第八圖が發展する。水平的に閉込む力の働きの極端は、十分なる扁平、即ち垂直の直線的の横面線である。同時に吾人は認知する、可能なる内方屈曲といふものは、波狀彫形にしてより柔軟なるものであればある程、益々斷乎たるもの或はより深いものとなる。或は之がより多く超正規的のものになればなる程、益々僅少に斷乎たるもの、即ち益々多く密實なる波狀彫形の性質を有するといふ事を。更に他方に於ては、波狀彫形の横面にして、益々多くその中央に於て直線に近接すればする程、可能なる内方屈曲は益々多く擴がる。此の故に、内方屈曲といふものは、超正規的の籃狀波狀

剝形に於て、最も深く且つ同時に最も廣いものである。之に關しては第百十一圖を見るべきである。

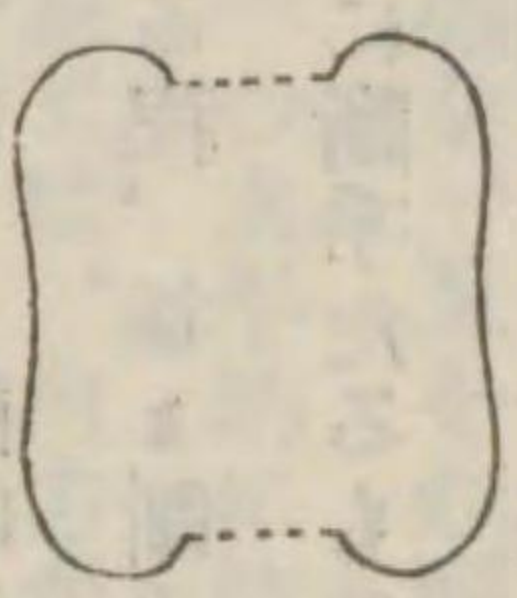
圖七百第



圖八百第



圖九百第

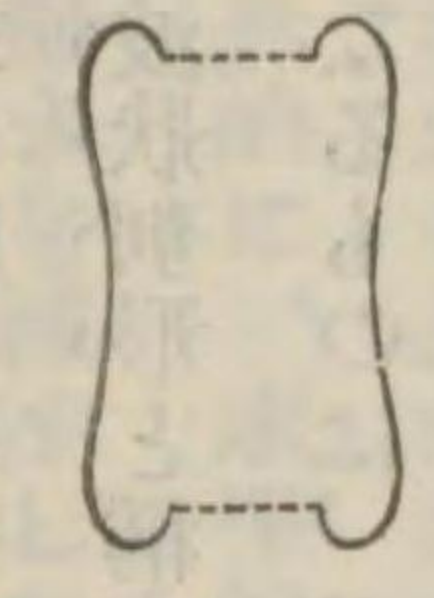


圖十百第



此の如く述ぶると共に既に言明せらるゝのは、水平的閉込みの力によつて變化された波狀剝形といふものは、一には總方面的に同一なる緊張を有する波狀剝形であり、二には反屈曲堅確性を有する此の如きものであり、三には有限的に限制された水平的の延長能力を有する此の如きものであり得るといふ事である。或は之を他語を以てすると、之は、一には圓形、二には膝狀形、三には籃狀形であり得るのである。さうして之よりして再び水平的に尖小された波狀剝形の該當的の形が發生する。之に關しては、第百十二圖をば百十一圖と比較すべきである。

圖一十百第



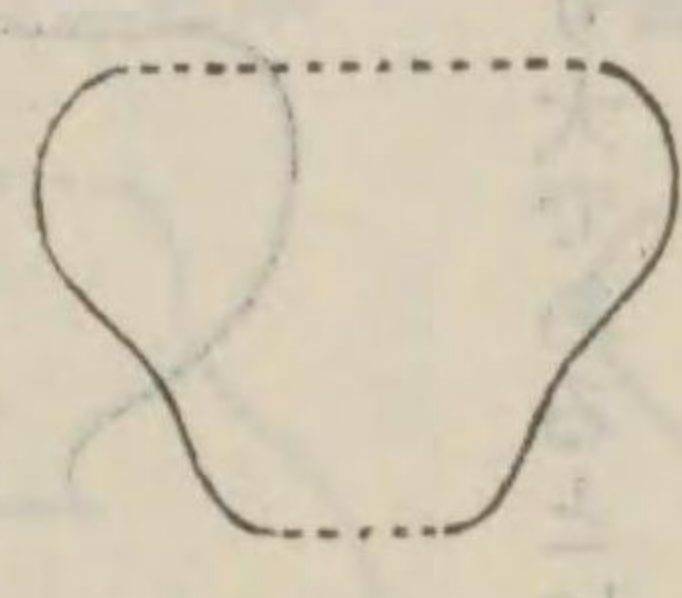
圖二十百第



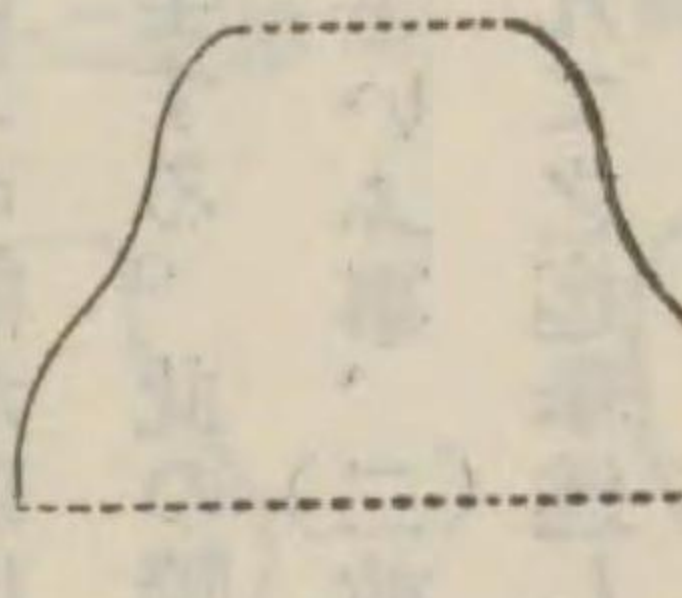
されど吾人は進んで、此の場合に、「變形された波狀剝形が一の均齊的のものである」といふ假定を棄却し、さうして「基底が閉込められてあるか又は擴張されてある」と假定する。さうすると、擴張又は閉込みの反動的傾向

を有す尖る小された波狀剝形が發生する。此の第一の可能を第百十三圖が示し、第二の可能、即ち之の變形された轉換をば第百十四圖が示す。前者は飲料容器の熟知された形であり、後者は熟知された罐或は壺形である。

圖三十百第

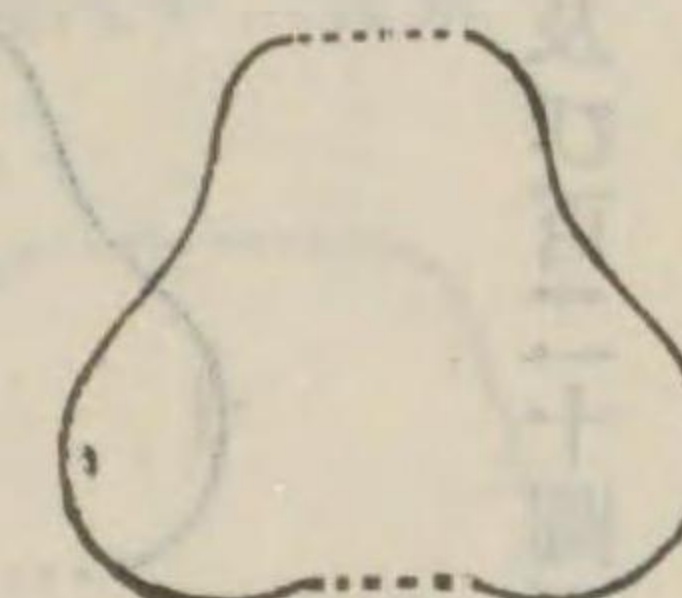


圖四十百第

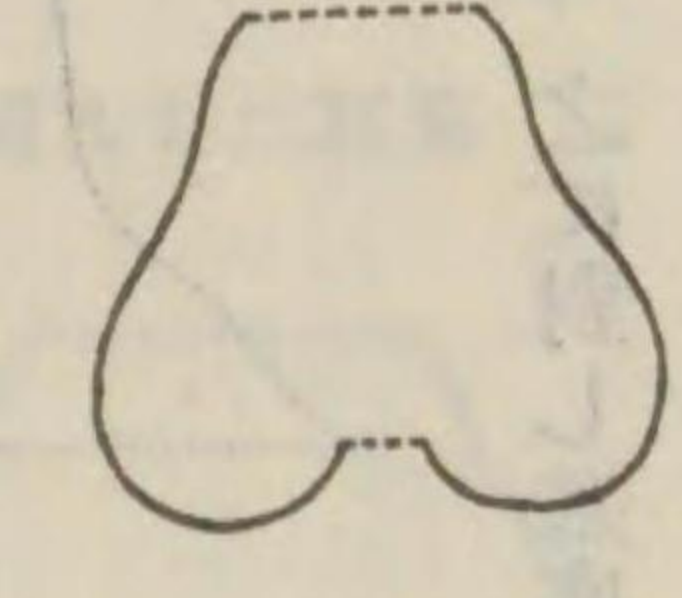


らぬ」といふ可能が對立し、さうして「此の中に於て兩者が同時に働く」といふ第四の可能が對立する。

圖五十百第



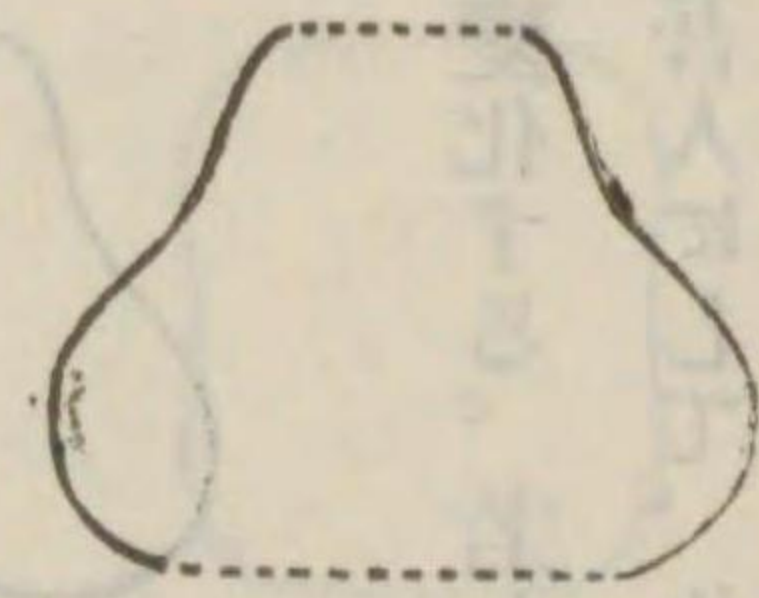
圖六十百第



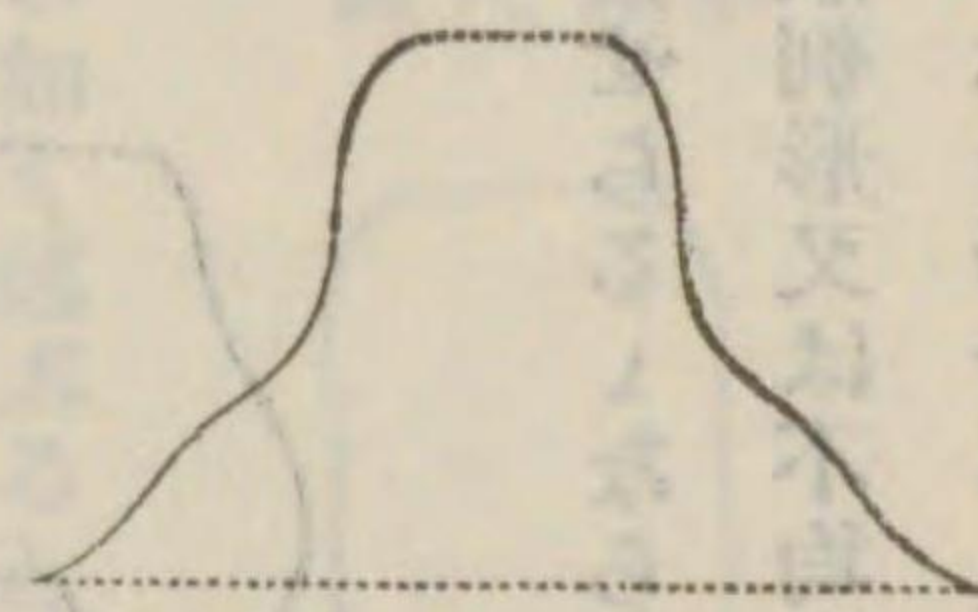
此の際再び吾人は、均齊的の波狀剝形から出發する。假りに、此の如き種類の尖小された波狀剝形中に於て、右の如き二つの傾向中の第一の傾向が存在するとする。さうすると、第百十五圖の形が發生する。之に反し波狀剝形の基底が狹縮さるゝならば、此の形は、第百十六圖の形に逆變化する。若しも之が擴張せらるゝならば、第百十七圖及び百十八圖の示すが如き形が發生する。

若しも吾人にして、均齊的の波狀剝形又は不均齊的の波狀剝形が狹縮の漸減的衝動の下に立つ」と假定するならば、右と反對せる形が發生する。此の場合に、若しも波狀剝形が均齊的のものであるならば、例へていふと第

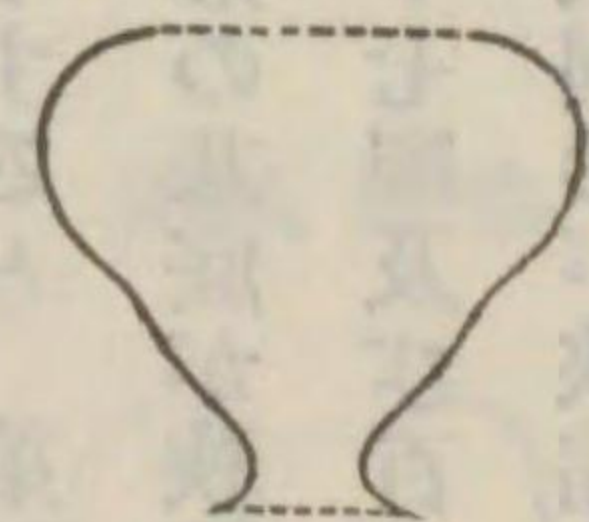
圖七十百第



圖八十百第



圖九十百第

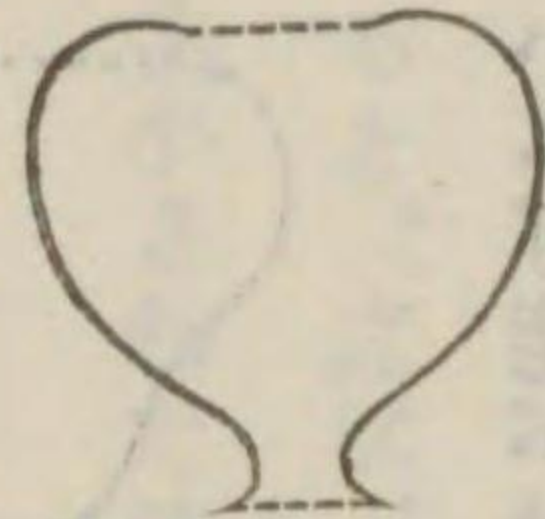


圖三十二百第



百十九圖及び百二十圖の形が発生する。之に對し基底の狹縮が加はるならば、之よりして第二百二十一圖又は百二十二圖の形が發展する。此の代りに基底の擴張が加はるならば、例へば第二百二十三圖の如き形が発生する。

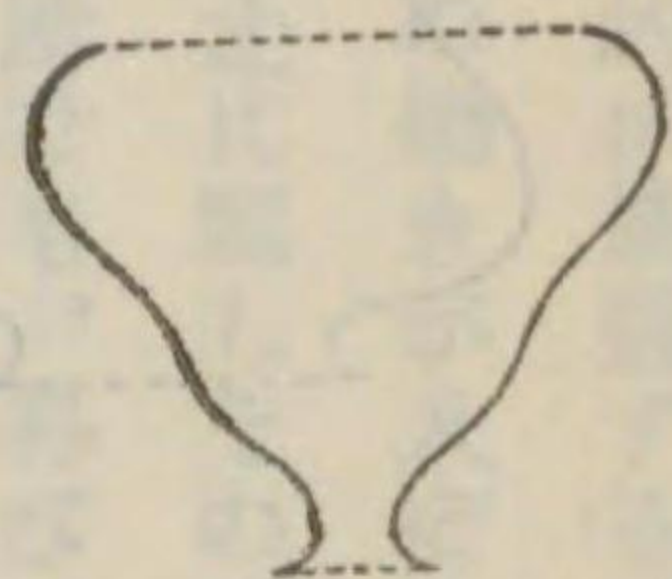
圖十二百第



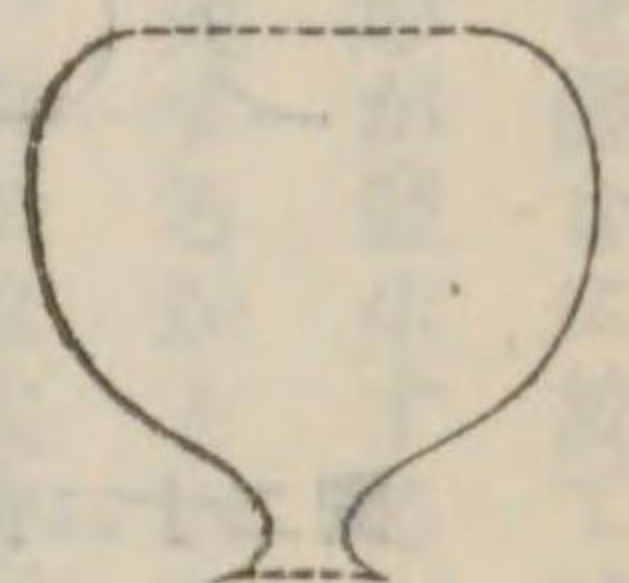
最後に、右の外に、漸減的の閉込みといふ動機と漸減的の内部的壓迫といふ動機が結合するといふ可能が現出する。此の場合には、第二百二十四圖から百三十圖の示す如き形が発生する。此の際順次に假定されてゐるのは、(一)下方の廣さが上方の廣さに均しくあるといふ事、(二)前者が上方の廣さより僅少であるといふ事、(三)之が上方の廣さよりより大であるといふ事である。凡て之迄擧述した形に比較しての此等の形の特質といふものは、何等の詳細なる叙述又は基礎づけを要しないであらう。

此の場合に於ても附言し置くべきは、凡ての表示した形といふものは、垂直の楕圓形又は水平の楕圓形に伸張され得るといふ事である。若しも例へば第七百七圖の形の中に、垂直又は水平の楕圓形伸張が入るならば、器械的

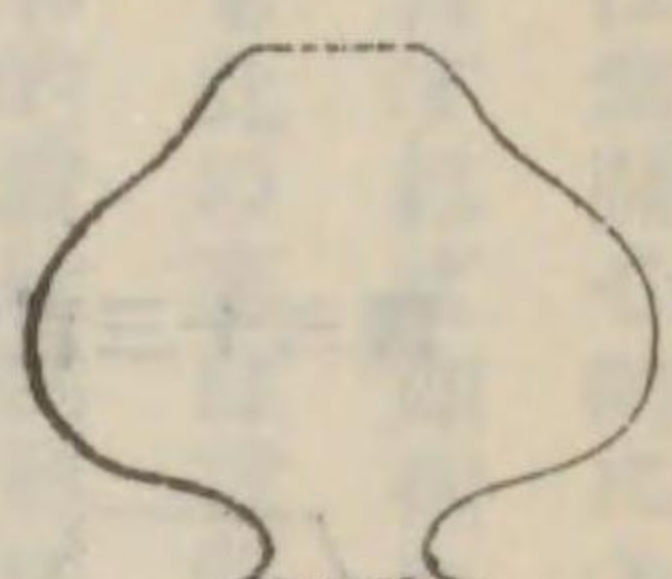
圖一十二百第



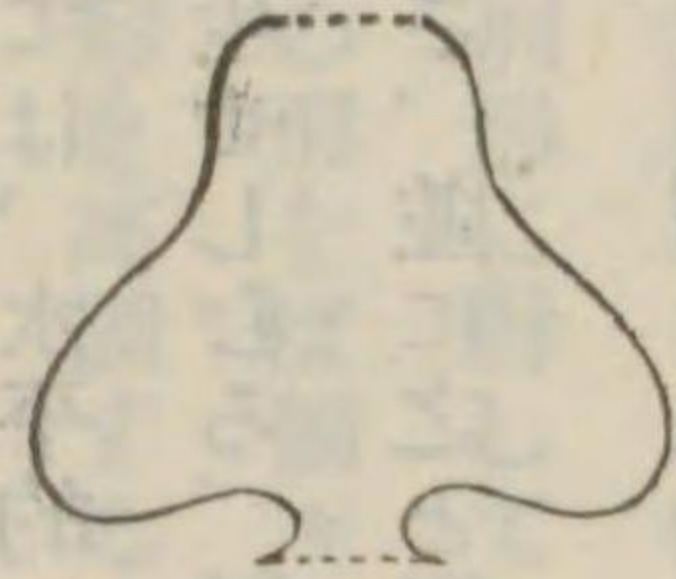
圖二十二百第



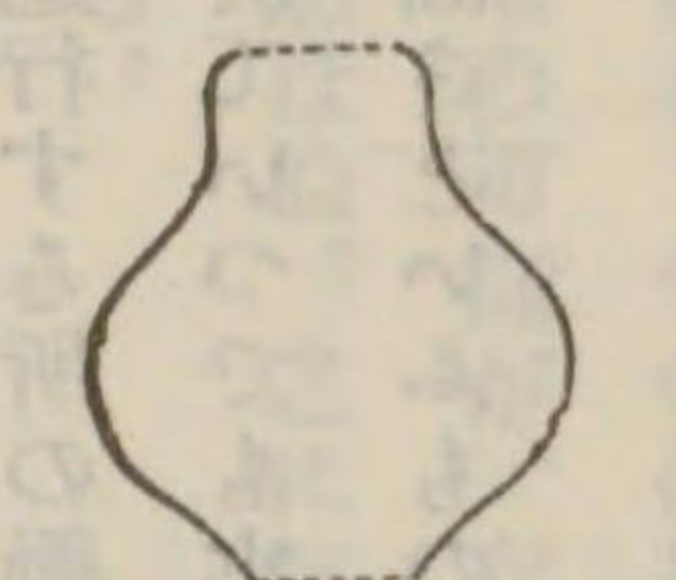
圖四十二百第



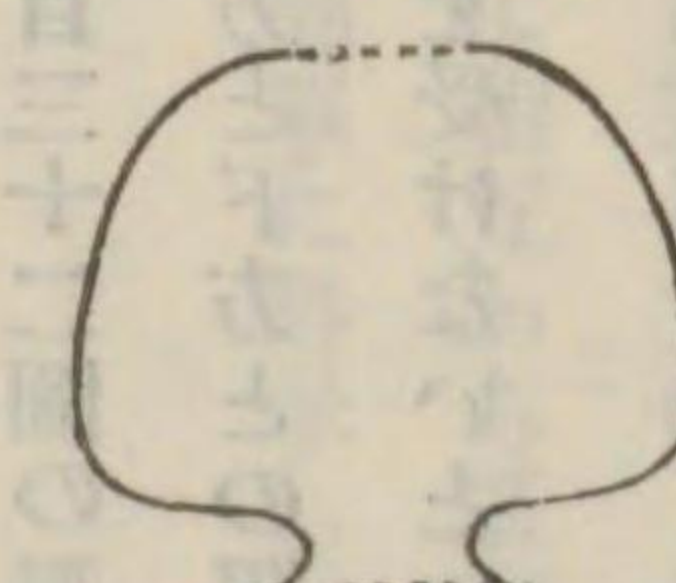
圖五十二百第



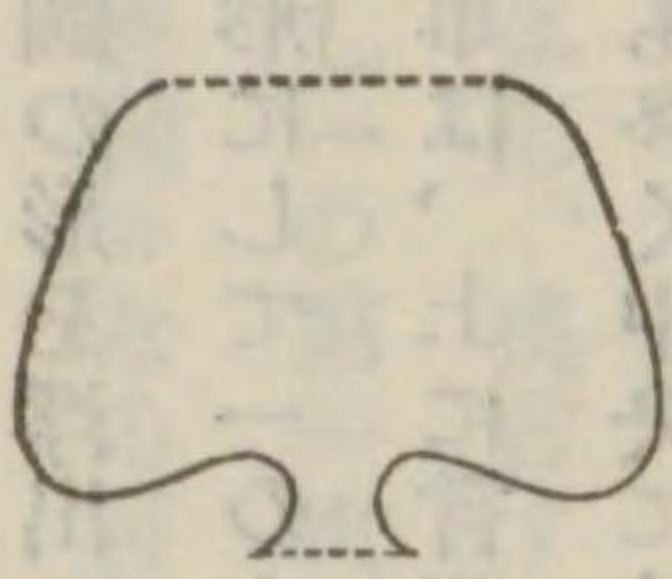
圖六十二百第



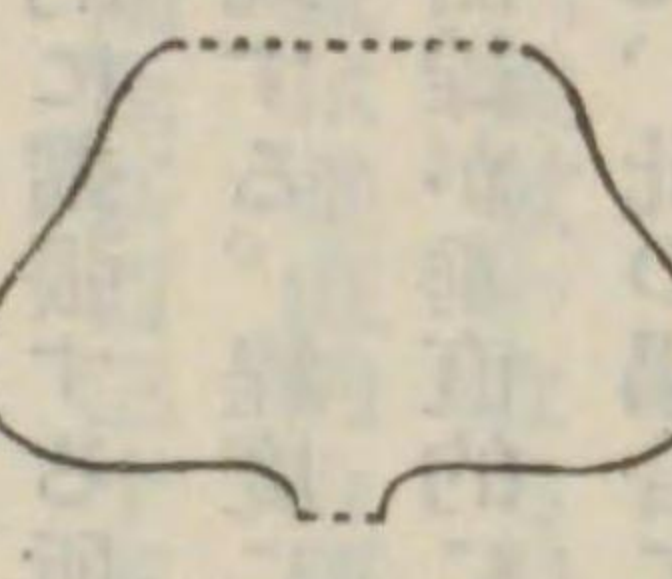
圖七十二百第



圖八十二百第



圖九十二百第



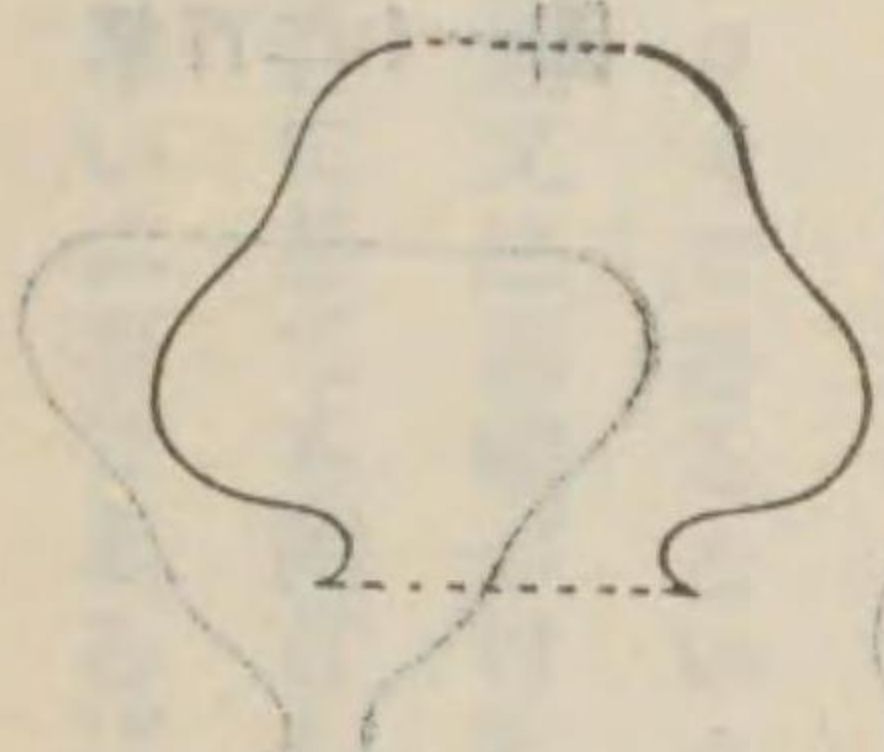
に容易く第七百七圖から作出さるべき新なる形が発生する。

三 波狀剖形的の尖小形

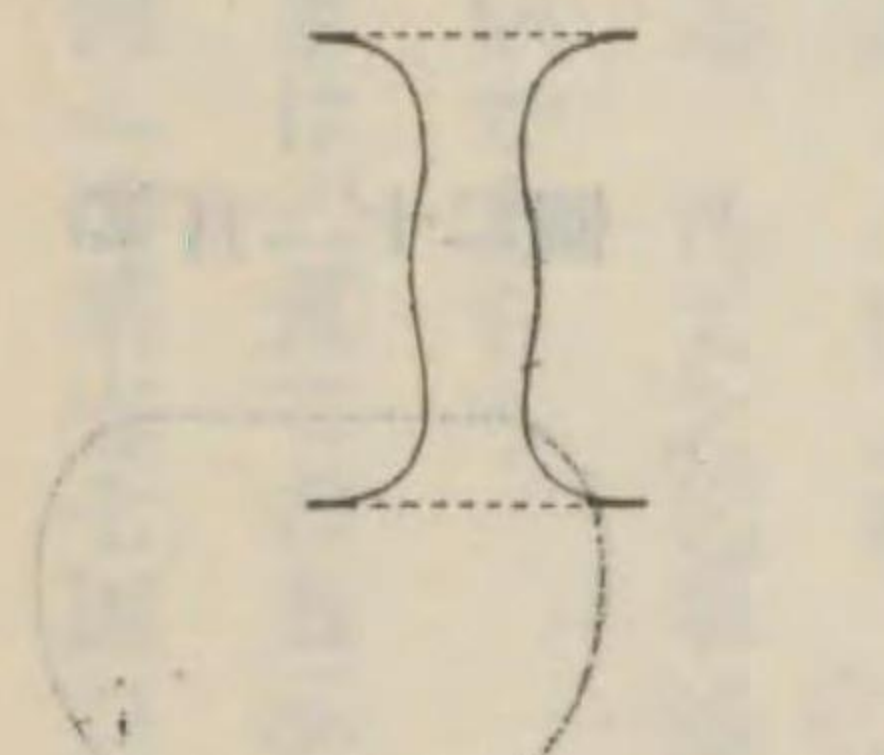
右の如く、尖小された波狀剖形即ち尖小形的の波狀剖形に於て吾人が區別した所の凡ての可能といふものは、

「波狀剖形的尖小形」に於ても、繰返される。吾人は、一の尖小形が水平的に働く所の擴張的働作によつて變形されてある所の凡ての形體をば、此の如く波狀剖形的の尖小形と呼ぶ。此のやうな種類の形の一の可能なる單一なる形をば、第三百三十一圖が表現する。如何にして此の如き形が発生するかは、上述したる事項が解説する。試みに第八十圖の形を浮出し、さうして水平的に擴張する所の力が此の形體中に入り込むと思念せよ。此のやうな力は、尖小形にして一の水平的のものと顯現する。程度に於て、水平的形體に對する水平的力として働く。併しながら此の事は、上に言明したる如く、横面線が垂直的に經過する程度に於て起生する。ところが此の力は、此の事をば最も多く中央に於てなす。此の故に、此の場合には、先第一に脹出作用が起生する。併し此の脹出作用は、之が益々進めば進む程、益々多く全體の横面線を影響し、隨つて益々多く上方と下方とを侵す。今取上げ居る場合に於ては、水平的に展長する力の進行する所の働きは、例へば第三百三十二圖の形、進んでは、第三百三十三圖の形を發生せしむる。同時に此の際に於ていつでも牢記すべきは、上方と下方との限界線、換言すれば、基底と上方の廣さ、並に之と同様に、形體の高さといふものが、何等の變動を受けないといふ事である。

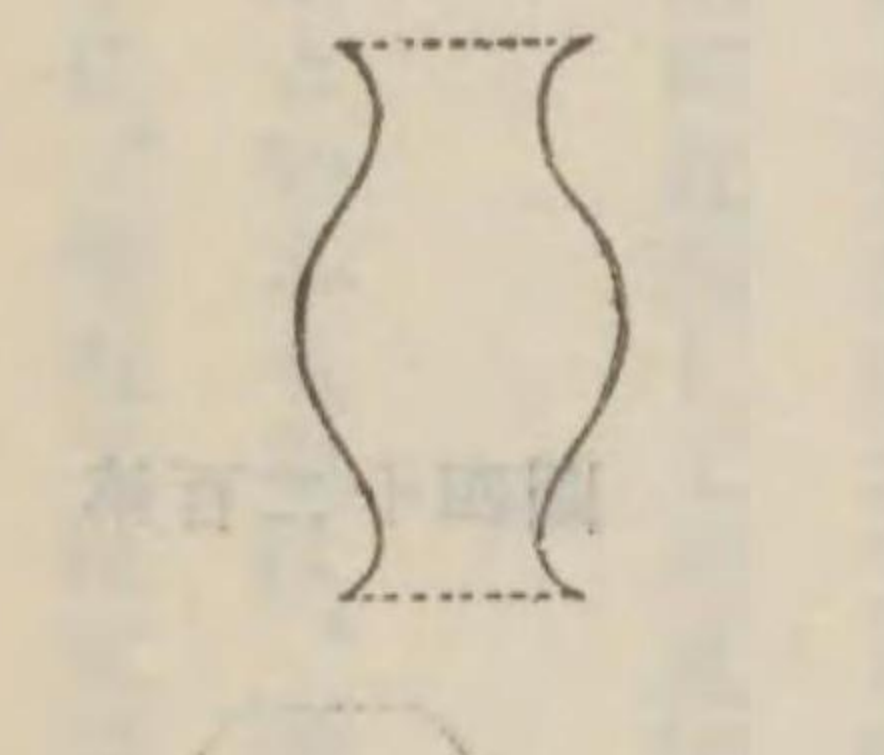
圖十三百第



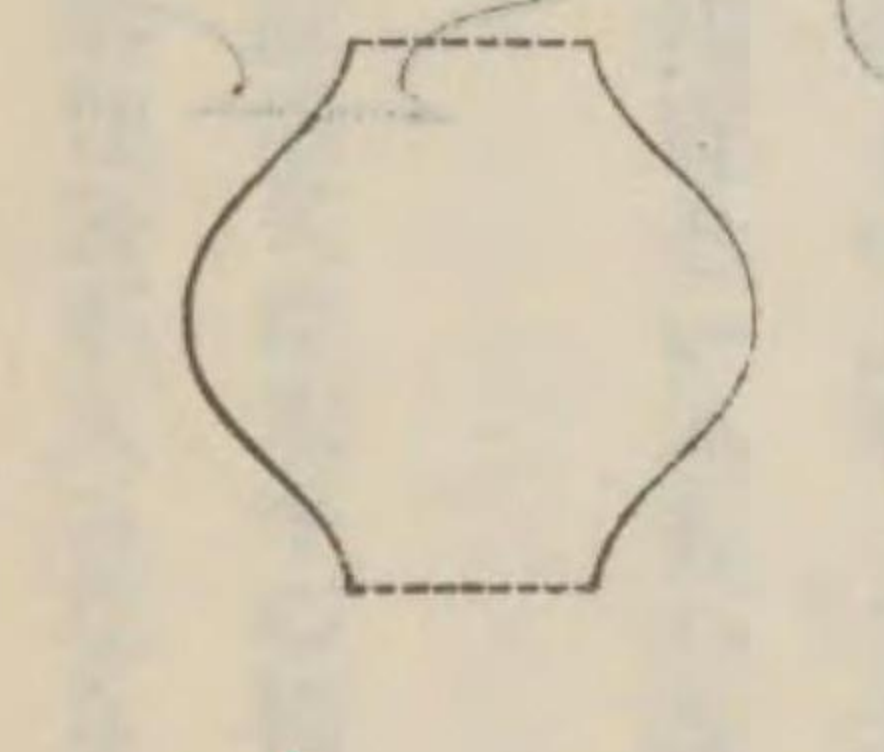
圖一十三百第



圖二十三百第



圖三十三百第

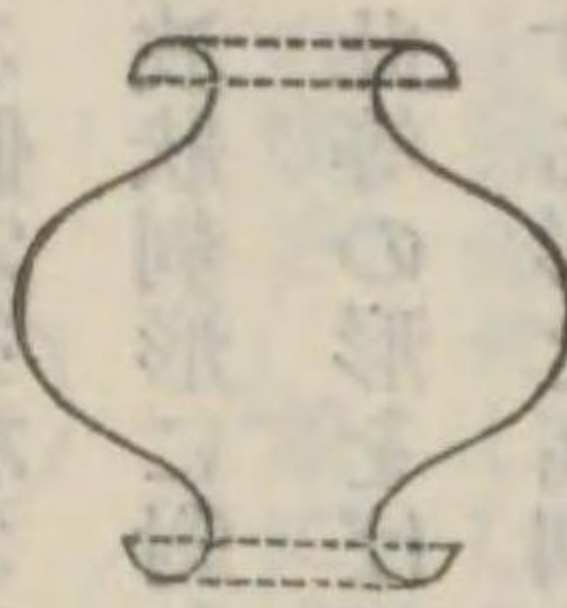


されど水平的に擴張する所の力の此の如き働きに於ては、再び次の事は無關心的にある。それは、如何なる方法に於て、その働きが及ぼさるゝ所の尖小形が発生するかといふ事、換言すれば如何なる特殊の力がその中に働き、さうして之に對しその特殊なる形を附與するかといふ事である。而も此の事は言明しようとする、曰く、吾人は、今此の所でも、再び、上に波狀剖形、次には尖小形、次には尖小形的波狀剖形に於て爲した所の、凡ての異なりたる假定をなさねばならぬ。此の故に、今の波狀剖形的の尖小形に對しては、尖小形並に波狀剖形並に尖小形的波狀剖形に對して成立する所の凡ての可能が、存立し、尙その上に相互から區別されて存立する。併し吾人は、此等の形をば個々に説示しようと思はぬ。之に反し、その差異を簡單に略示し、さうして二三の特殊の性質を有する形を高調する事を以て満足する。

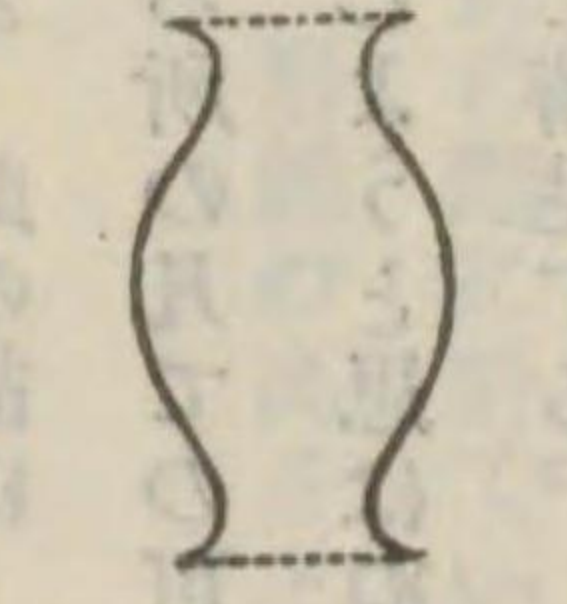
先第一に明瞭する。此の場合に於ても、正規の内方屈曲及び外方屈曲を有する彈力的の形は、次の如き形を對立的に有するといふ事である。即ちその形に於ては、内方運動及び外方運動が何等の同量の内部的反動を喚起せしめないといふ形、換言すれば一方に於ては「柔軟」なる形、さうして他方に於ては「密實」なる形、即ち彈力的の抵抗に對し一の第一次的の垂直的働作、或は垂直的の硬固性抵抗が加はり居る所の形である。尖小形的波狀剖形の此の如き種々なる可能は、第三百三十四圖及び三百三十五圖によつて直觀化される。尙此の外に、一には總方面に同一なる緊張を有する形、二には屈曲抵抗を有する形、三には水平的廣さの變化の可能が有限的の限界を有する所の形との間の反對性が現出する。但し此の第三の假定中には、更に二つの假定が存在する。それは、一には籃狀の波狀剖形を以て發生せしむる所のものであつて、二には籃狀の尖小形を發生せしむる所のものである。

前者は、水平的擴張の能力が有限的に制限されてあるといふ假定、後者は、水平的閉込みの能力が有限的に制限されてあるといふ假定である。或は、同一の言明となるのであるが、前者は、延長抵抗、後者は閉込み抵抗が、それが無限的或は絶對的になるといふ點、而も有限性中に存在する所の點に迄近接するといふ假定である。さうして此の二つの假定をば、吾人は今茲に區別せねばならぬ。換言すれば、先第一の假定をなし、次に第二の假定をなし、さうして第三に兩者を結合せねばならぬ。第一の場合に於ては、第百三十六圖の種類の形が発生し、第二の場合に於ては、第百三十七圖の種類の形、最後に第三の場合に於ては、第百三十八圖の種類の形が発生する。即ち此の第一の場合に於ては、閉込みといふものは、上端及び下端に於て籃狀的である。第二の場合に於ては、出、第三の場合に於ては、圖が一般的に籃狀形的に制限されてある。

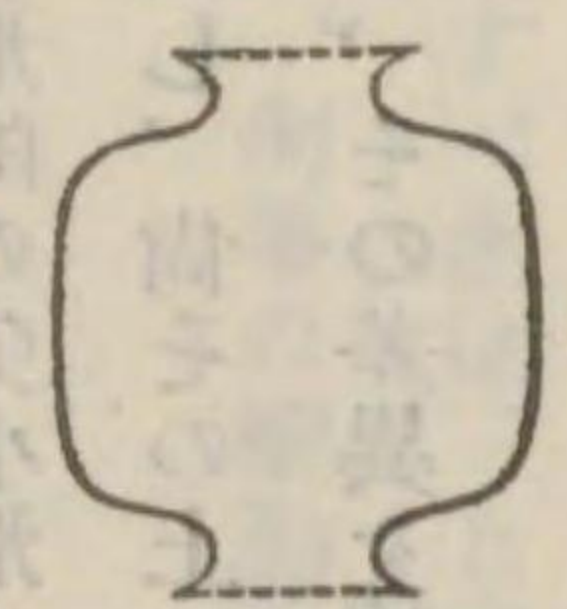
圖四十三百第



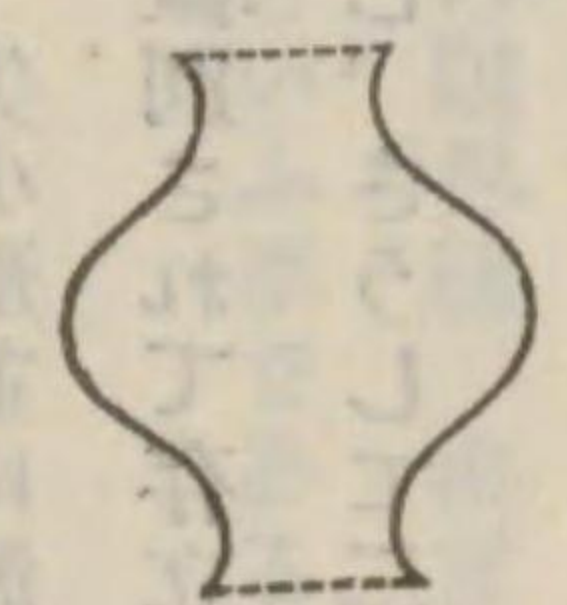
圖五十三百第



圖六十三百第



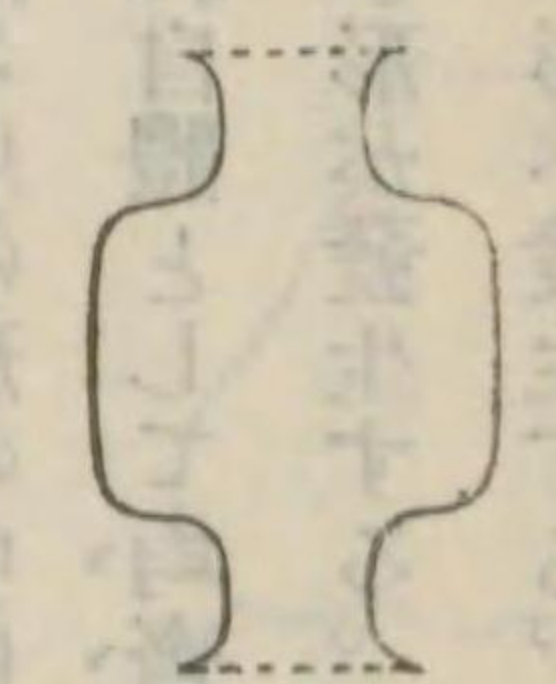
圖七十三百第



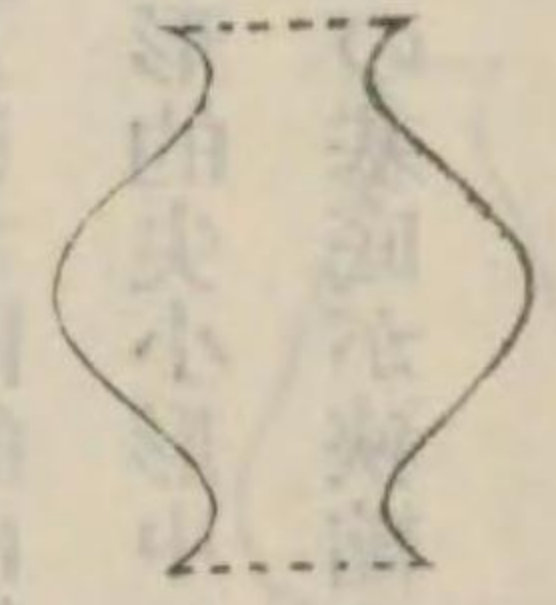
入之に反し、反屈曲堅確性なるものは、その性質上、全形體中に於て、同一なる割合に於て發現する。此の場合には、第百三十九圖の示すが如き形が存立する。斯く述べると共に言明せらるゝのは、尖小形的波狀形に於ては、かの波狀形及び尖小形に於て區別せられさうして圓形、膝狀形、籃狀形といふ名稱に呼ばれた所の可能の三個の數が、五個の數に迄變化されるといふ事である。籃狀形の形體は、吾人が知得せる如く、正しくそれ自身

の中に於て再び三種のものである。

圖八十三百第

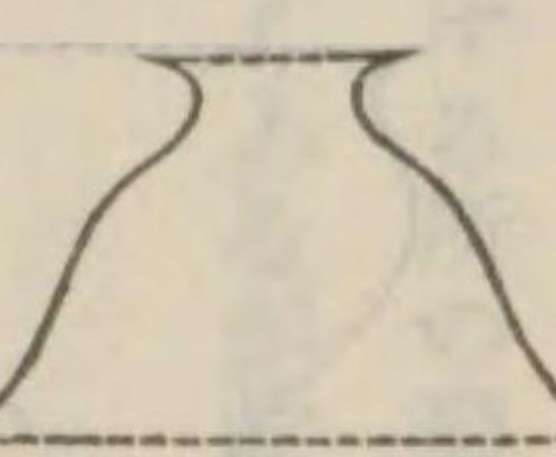


圖九十三百第



の下には、此の場合に於ても、均齊的の形の外に、反動的の擴張又は閉込みの形が発生する。此の如き種類のもので、第百四十圖及び百四十一圖の形がある。

圖十四百第



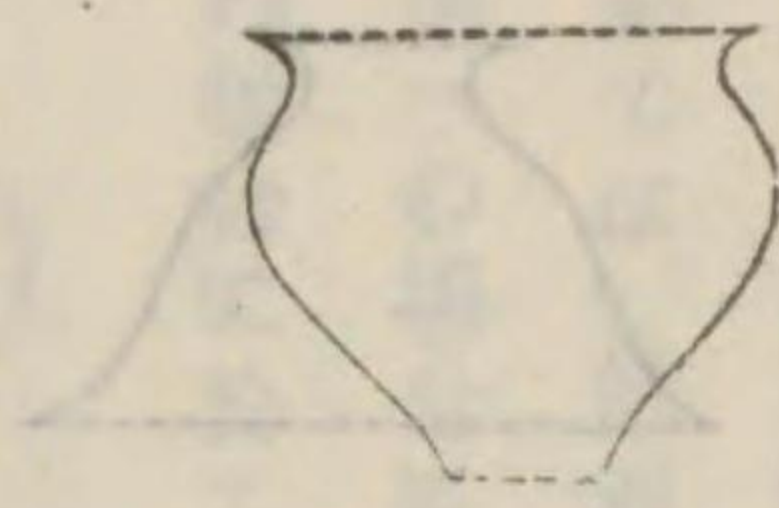
圖一十四百第



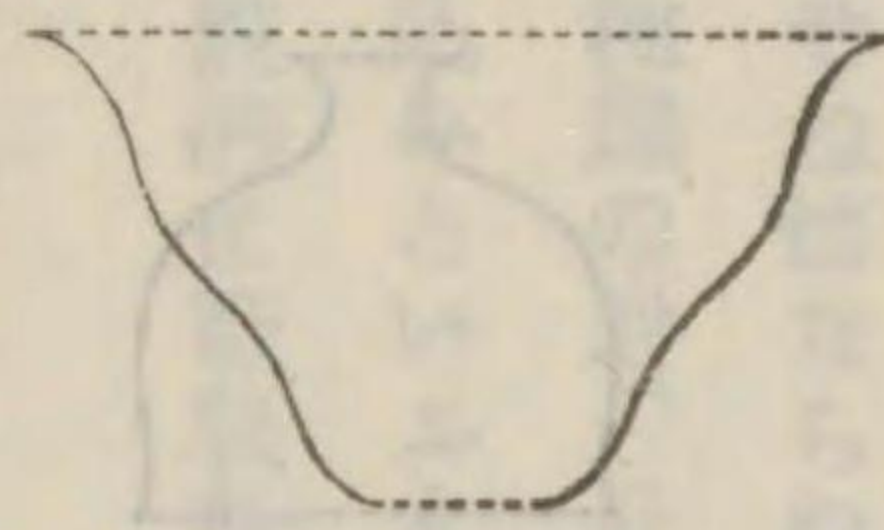
の後種の形に於ては、脹出の最大の廣さが、形體の中央から下方に存在する。之に反し此の第百四十二圖に於ては、かゝる廣さは、形體の上半部中に存在する。若しも基底の狭窄に對する反動的傾向が、尖小的働作の強さに優勝する場合には、第百四十三圖からして百四十四圖が發展する。此の百四十三圖に於ては、吾人は二つの脹出を認める。それは、一は、波狀形形的の尖小形そのものに附屬する所の上方の脹出であつて、二は、その下方の

發端點に迄横面線の外方的送遣、即ち反動的の脹出、或は狹窄に對しての反動である。此等二つの形の中に、二つの脹出が一致して居る所の第百四十四圖の形が存在する。此の如き形と第九十九圖の形との間の原理上の差異に關しては改めて指示する迄もあるまい。

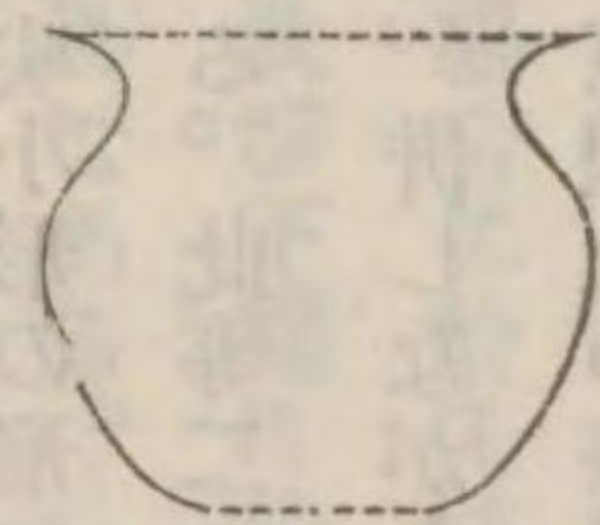
圖二十四百第



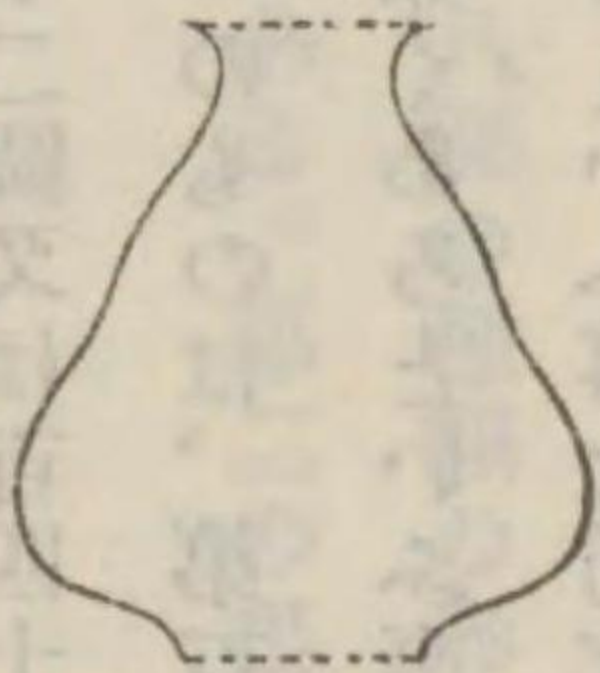
圖三十四百第



圖四十四百第



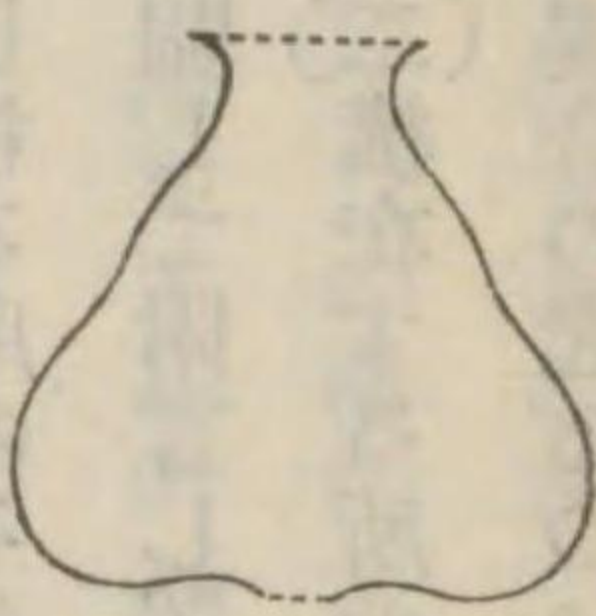
圖五十四百第



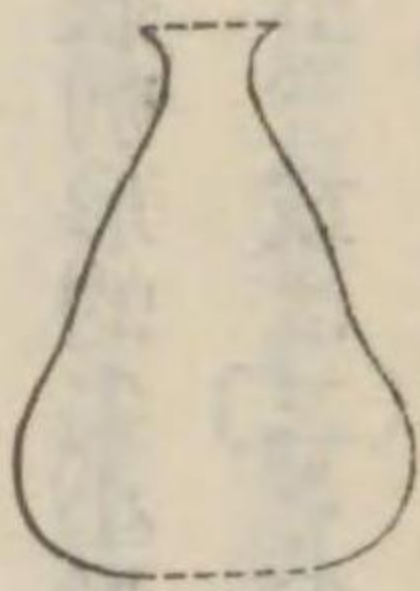
吾人がちやうど今、「狹縮された基底を有する波状列形的の尖小形」と比較をなした所の尖小形なるものは、次のやうなものである。即ち閉込みの漸滅的衝動又は漸滅的の壓迫が働き居る所の形である。そこで、吾人は、今取上げ居る所の形の中に於て此等の動力を共同的に働かせて見よう。例へていふと、先始めに、漸滅的の壓迫が一のそれ自體として均齊なる波状列形的の尖小形中に於て働くを假定する。かゝる場合には、第百四十五圖の示すが如き形が発生する。若しも此の圖の基底が狹縮せらるゝならば、之よりして、例へば第百四十六圖又は百四十七圖の形が発生する。

若しも基底が擴張或は展長せらるゝならば、第百四十八圖の形が発生する。或は漸滅的壓迫がより小なる量で

圖六十四百第



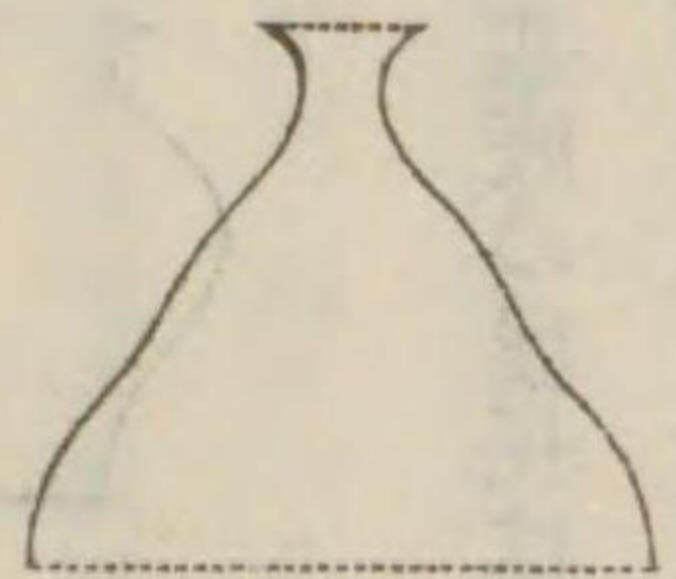
圖七十四百第



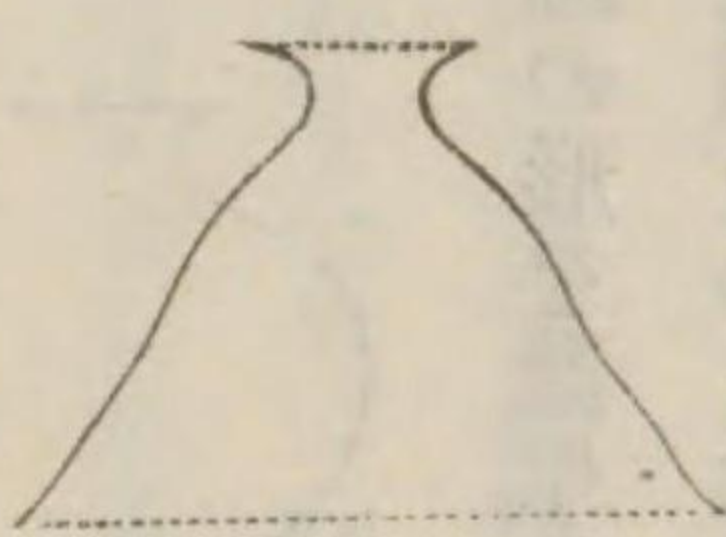
あるに於ては、第百四十九圖の形が発生する。勿論之に於ては、漸滅的の壓迫がより大であればある程、全體といふものゝ重點は、益々多く下方に沈下する。此の際、第百四十七圖及び百四十八圖に於ては、漸滅的

壓迫の働きは、基底の狹窄の反動によつて支持される。尙その外に、此の場合には必然的に、擴張の二つの點が再び發生する。されど之に於ては、上方の擴張は、いつでも唯比較的のものであり、即ち下方の脹出が上方の閉込みに迄移行するの遲緩である。茲に語り居る所の形にして、若しも漸滅的の壓迫がより多く徐々に漸滅するならば、第百五十圖の種類の形に迄移行する。換言すれば、二つの脹出が之に於ても一つに迄合體する。此の如くして發生する所の形は、再び第九十九圖の形と比較され得る。此の形たるや、尖小形の一の形であるが、さり逆正しく斯くあるが故に、今語り居る形とは原理上異なりたるものであるのである。

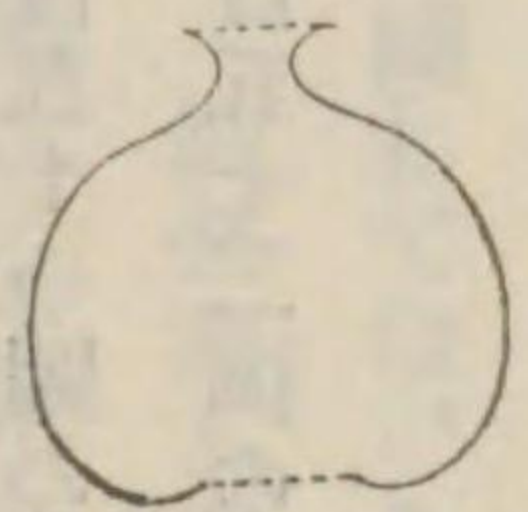
圖八十四百第



圖九十四百第



圖十五百第

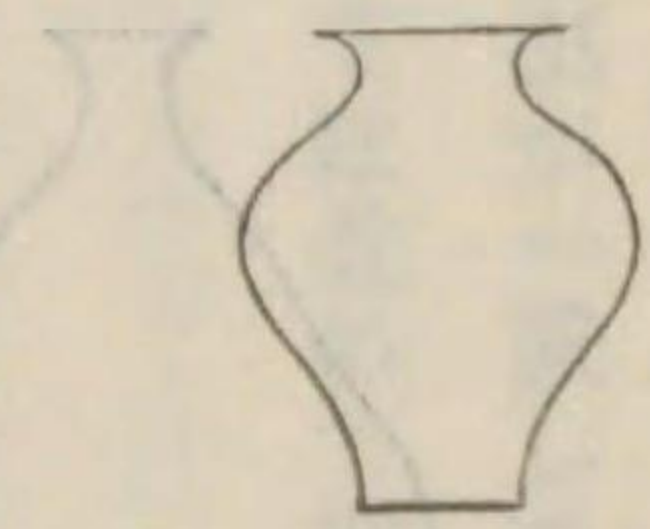


圖一十五百第

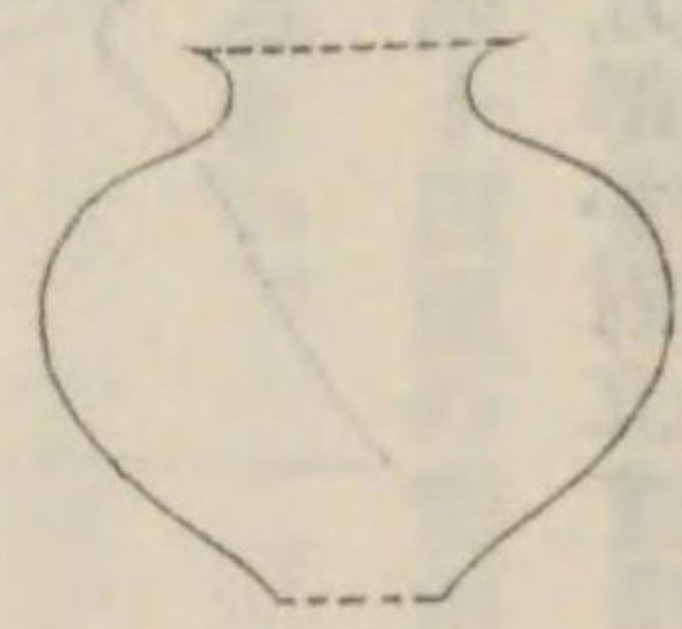


ところが此等の形には、次のやうな形が對立する。即ちそれに於ては、漸滅的の壓迫でなく、之に反し閉込み

圖二十五百第



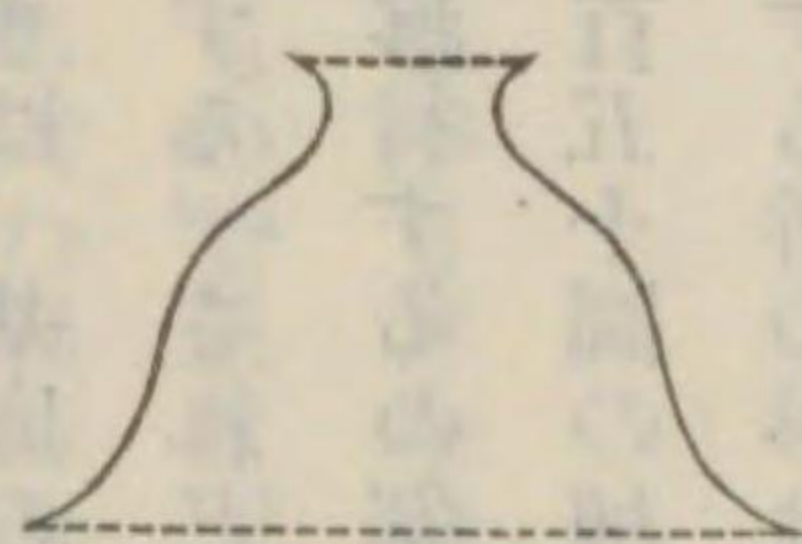
圖三十五百第



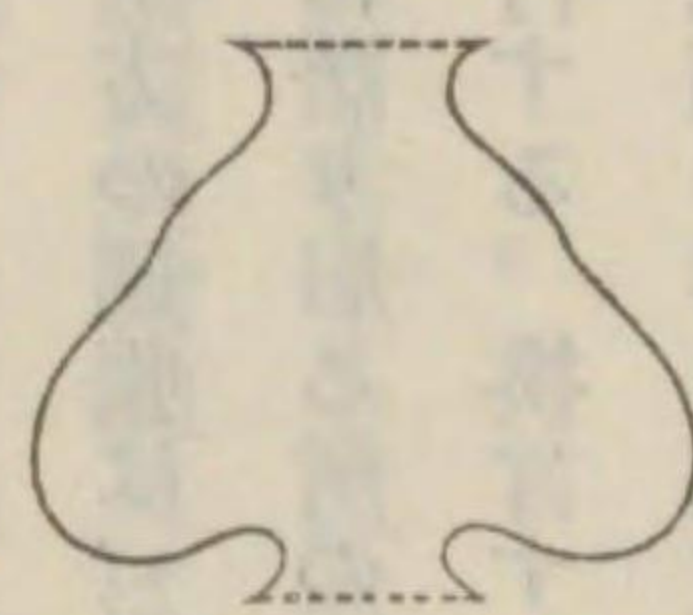
しめ、又基底の展長は第百五十四圖の形を發生せしむる。

凡て此等の形に於ては、第九十九圖の形と比較して、形體の重點といふものは、漸滅的の閉込みにより、上方に迄移動せしめらるべくある。

圖四十五百第



圖五十五百第

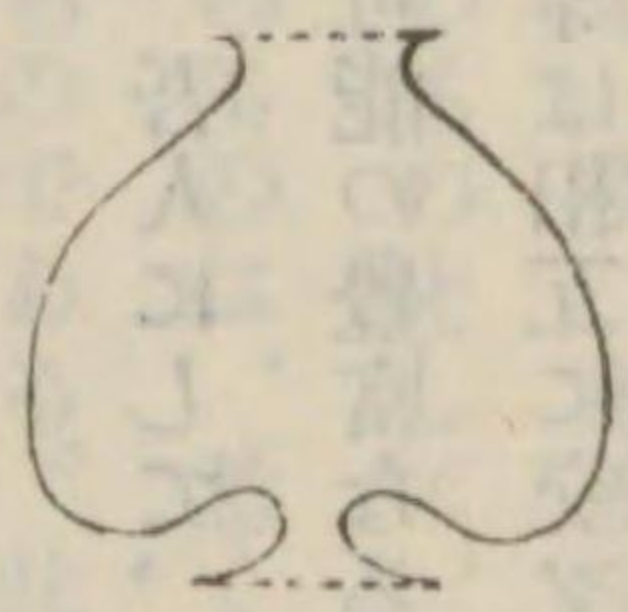


が發生せしむる所のそれとの相互的融合の可能が、特に留意すべくある。

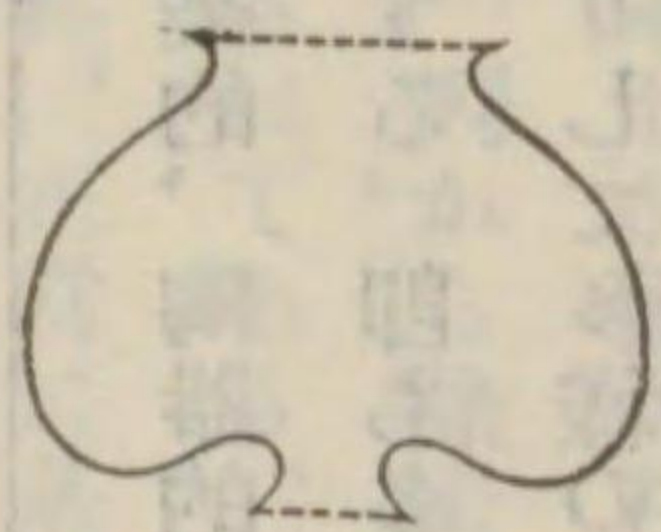
尙之に關して附言し置くべきは、波狀列形的尖小形に於ても、三様の可能が存立するといふ事、並に之は(一)直立的又は(二)横在する所の橢圓的であるか、或は(三)その間に位する所の平均化的性質を有するといふ事である。此の第三の場合の起るのは、吾人がよりて以て波狀列形的の尖小形を發生せしむる所の尖小形が、一の圓形的に限

劃されたものであるか、又は此の如きもの、變形である場合である。之に反し、波狀列形的の尖小形が、第一の直立的又は第二の横在する所の橢圓的の基本形を取得するのは、右のやうな波狀列形が此等の基本形を有する場合である。横在する所の橢圓形を有する單一なる波狀列形的尖小形をば、第百五十九圖が、近接的に表現する。

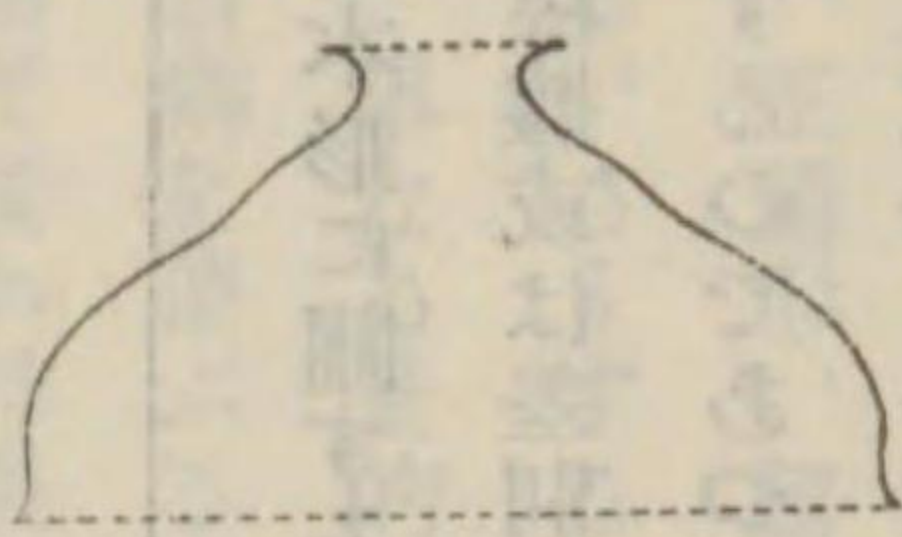
圖六十五百第



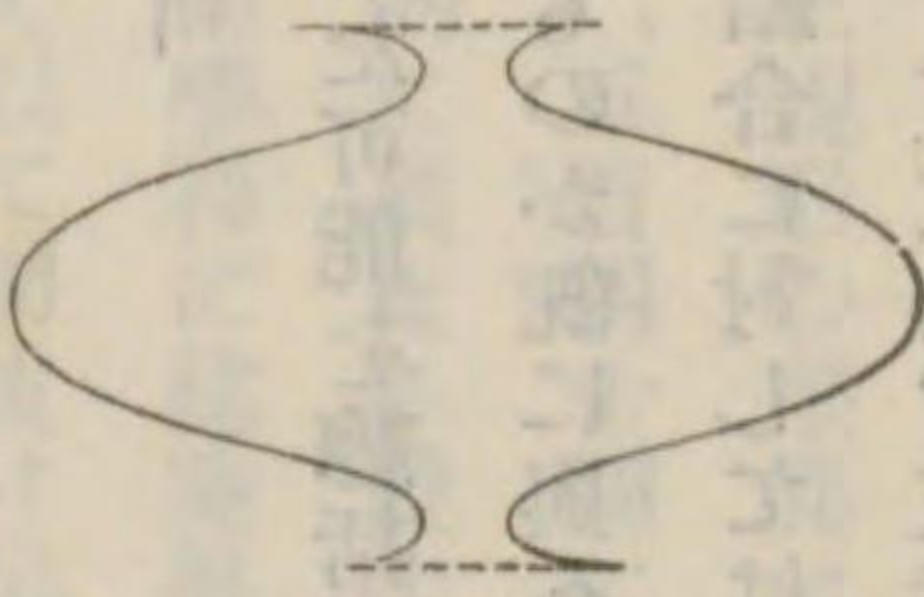
圖七十五百第



圖八十五百第



圖九十五百第



四 「結合された横面線」の利用法、總括

波狀列形的の尖小形、並に尖小形的の波狀列形の利用法に關しては、その自然の發生法からして、次の如き事が歸結される。曰く、凡てのその變形を合せての此等の形は、純然たる波狀列形の如く、一の重壓の抵抗能力上の支持者である事も能きなければ、又上述したる所に基き純然たる尖小形が表現するが如き、垂直的の方向に於ける力強い發出といふものが要求せらるゝ場合に利用さるべくあらぬと。尖小形的の波狀列形なるものは、吾人が知得したる如くに、波狀列形の形に對して加はる所の、尖小といふ自發的動作から、その存在を促がされる。

ところが斯かる働作なるものは、その特定の大きさを有し、さうしてその性質として、上方から来る所の各の壓迫によつて減少せられ、さうして若しも壓迫が増強するならば、最後に全然消滅せしめらるゝのである。此の如き消滅の結果は、形體が純然たる波形剝形に迄變化するといふ方法に於て、己れ自身の中に聚中するといふ事である。さうして波狀剝形的尖小形なるものは、基礎として一の尖小形を有する。併し此の尖小形に於ては、水平的壓迫の働きによつて、尖小形の働作とかゝる働作に對する反動的の水平的の反對的働きの間の内部的緊張が消滅せしめられる。之と共に、全形體は、緊張された垂直的の働作といふ其の性質を喪失する。一言を以てすると、二つの形體は、その性質上、輕易に直立し、力強い作業といふ各の思想を除却する所のものである。此等は正しく斯くあるが故に、特殊なる容器の形であるのである。ケラミック・スプレッセル

最後に、吾人にして、單一なる建築的、陶器的、造具的の基本形に關する以上説述した可能を總括するならば、此の如き可能の豊富なる多様が発生する。即ち多様な分類根據或は差別根據といふものが既に與へられた。けれども此等は相互に交叉する。之よりして多様な結合が発生するのであつて、かゝる結合に對しては、吾人は個々には唯部分的に指示して置いた。此の如き分類根據の劈頭に立つものは、(一)單一なる直立的、波狀剝形、尖小形、波狀剝形的の尖小形、尖小形的の波狀剝形等との間の反對性である。併し此の如き反對性と共に、(二)正規形、超正規形、劣正規形の形、進んでは圓形或は始めの圓形、膝狀形、籃狀形の形體の間の反對性が交叉する。又、(三)基底が自然の均衡状態を表現する所の形と、基底が狹縮又は擴張されてある所の形との間の反對性が交叉す

る。それから、(四)上方に迄漸減する所の自發的の閉込み衝動(甲)を有する形と、漸減的の壓迫(乙)を有する形、此の甲も乙も起生しない所の形、最後に兩者が一緒に働き居る所の形との間の反對性が交叉し、終りに、直立的の楕圓形、横在的の楕圓形、並に兩者の中間に存する所の形との間の反對性が交叉する。凡て此等の反對性の交叉からの可能なる結合の數は、 $5 \times 3 \times 3 \times 3 \times 4 \times 3$ であり、隨つて千六百二十個の基本形が発生する。特別な限界場合と、第二基本形及び第三基本形が稱せらるべくある。正規形、超正規形、劣正規形の差異は、一の純然たる量的のものとして、分類根據の一系列から除去さるべくある。さうすると、右の數は、五百四十個に迄減する。併し此等のものは、悉く原理上區別されてある。即ち此等は、單なる量的でなく、質的に異なる發生條件からして發生するのである。此等は此の故に、正當に基本形といふ名稱を帶ぶる。在來の藝術學特に建築學が、此の如き多くの可能に對し、熟知された僅少な名稱、並に一部分甚だ僅か特徴的なる名稱を以て切抜け居るといふ事は、此の如き科學の現今の状態に對して顯著なる點である。けれども吾人の説述した事實は、之が爲に少しも變動を蒙らないのである。

發售

價目表
第一冊 三三〇八〇
第二冊 三三〇八〇
第三冊 三三〇八〇

同人會館

同人會館
發行所



同人會館
發行所
地址
電話

同人會館
發行所
地址
電話

同人會館
發行所
地址
電話

